厨川白村全集第三巻

文學評論

改造社版

書齋に於ける著者

第三卷目次

象牙の塔を出て

Odi profanum vulgus et arceo;
Favete linguis: carmina non prius
　Audita Musarum sacerdos
　　Virginibus puerisque canto.
　　　—Q. HORATII FLACCI
　　　　CARMINUM LIBER III

われ俗衆を厭ひて遠ざく。
沈黙せよ。詩神の聖僧は、
かつて聴かれざりし歌を
少年少女に歌ふ。
　—ホラティウス「歌集」第三巻

卷頭に

最近一二年間に學業の餘暇を偸んで新聞雜誌のために草した數篇の文と一二の講話とを、書肆が需められるままに、集めてこの一卷としました。スティヴンスンが自分の文集に『少年少女に』（ヴィルギニブス・プエリスクエ）と題したと同じ心もちで、私もまたこの小著を世に公けにするのです。世にいふ學究の著作とは趣を異にしてゐるかも知れません。

『象牙の塔』といふ言葉の意味や出典に就いては、私の舊著『近代文學十講』のうちから左の一節を引いて説明に代へませう。

浪漫派文學の一面には、藝術至上主義とも言ふべき傾向があつた。卽ちすべての藝術は藝術それ自らの爲に存在するもので、決して他の問題と關係しない。世智辛い苦しい現在の生活に對して、全く超然高蹈の態度をとるべきものだと唱へた。醜穢悲慘な此浮世をよそにして別に淸く高くまた樂しき「藝術の宮」——詩人テニソンの歌つたやうな the Palace of Art 或は Sainte-Beuve がヴィニイを評した時にいつた「象牙の塔」tour d'ivoire のなかに、獨り立籠らうといふ所謂「藝術の爲の藝術」art for art's sake が其主張の一面であつた。然るに今や時勢は急變して物質文明の盛んな生存競爭の烈しい世の中になつて、人の心には一時一刻と雖も實人生を離れて悠遊するだけの餘裕がなくなつた。人々は現實生活の壓迫を一層痛ましく感ずるに至つた。人生當面の問題が行住坐臥つねにそ

の腦裏を往來して心を惱ましてゐる。そこで逾に文藝ばかりがいつまでも呑氣な事を言つてゐるわけにも行かず、勢現在生存の問題に緖接な關係を持つ事になつた。眼前焦眉の急に迫つこ人々を惱ましめてゐる社會上宗教上道德上の問題が直に文藝上に取扱はれる程までに、實生活と藝術とは接近した。(本全集第一卷『近代文學十講』)

なほこの書に『象牙の塔を出て』と題した意味に就いては、本書の五四、五五頁、一七四頁、一八二頁をも參照して下さい。

最後の「英語の硏究に就いて」(英文)の講演は、卷頭の『象牙の塔を出て』の第十三節「思想生活」の條に關係あるがために、特にこの一篇を採錄する事にしたのです。著者が外遊中に英語でした講演その他は、他日別に集めて英文の著として上梓したいと思つてゐます。

一九二〇年六月

京都岡崎の書樓に於て　　著　　者

『象牙の塔を出て』目次

象牙の塔を出て

一　自己表現

なぜもつと寛(くつろ)いで飾り氣なく物が言へないのだらう。氣取つて固くなつたり、論理の輕業をやつたり、有りもしない學問を振し廻はして利巧ぶつたりなぞしないで、もつと素直に、もつと無邪氣に率直に、そしてまた自然の儘に物を言つたつて、何も値打が下(さが)るわけではあるまい。

わたくしは日本人のでも西洋人のでも、他人(ひと)の書いた物を讀んで時々そんな事を思ふ。否な自分の書いた物を讀んでさへも折々さう思ふ。なぜこんな物の言ひかたをしたらうかと腹立たしくなる事さへある。今度書く物でも、後になつたら矢張りさう思ふかも知れない。そんな思をしないやうにと心がけて筆を執るのではあるが。

朝から晩まで虚僞と利巧とで固めてゐる俗漢は固より論外だが、自己を僞らないやうにと十分に心がけてゐる者でも、人間といふ動物が着物を纒うてゐる以上、その着物を脫いで素裸になつて見ても、心の臟はまだ骨だの皮だの筋だのの奥の奥の方に在る。それを一々みな剝ぎ取つて、純眞無雜な

生命の火の赤々と燃えてゐる自己その儘を世間へ投げ出す事は眞に難中の難事である。もとより精神病者の中には自分の身體の隱し所を見せようとする肉體暴露狂(エクシビショニスト)と云ふのがあるが、若しおのれの心の生活の暴露狂があるなら、わたくしはそれを一種の藝術的天才だと見ても可(よ)からうと思ふ。

私は此頃學校で人のためにブラウニングの『今ひと語』"One Word More" と云ふ詩を講じて、つく〴〵さういふ事を考へた。以前學生の頃に此作を讀んだ時には餘りそんな事を考へても見なかつたが、惡文を草し駄辯を弄して、多少たりとも世間を相手に物を言ふ事を經驗してから後にあの作を讀んで見ると、色々胸に思ひ當るふし〴〵がある。ブラウニングは、自分の詩集をその最愛の妻であつた女詩人イリザベス・バレットに捧獻(デディケエト)する跋歌として此詩を作つた。その作意はかうだ。誰でも自己といふ者には二つの面がある。ちやうど月のやうに、その片側の面は世界の人に見えて居ても、更に他の方に陰になつた一面がある、その隱れた方の面は、自分が身も心も捧げて愛する戀人にのみ見せらるべきものだ。畫聖ラファエルは世間の人たちに見せるため幾つも聖母の像をゑがいたが、自分の戀女のためには畫筆を棄てて小唄(ソネット)を作つた。ダンテは世の人々に示すべく『神曲』の大作を草したが、戀人の命日には畫筆を執つて天使の姿をゑがいた、と『新生』に書いてある。世間といふものを眼中に置かないで、純眞な隱れた自己の半面をおのが戀人にのみ示さうといふとき、畫聖がわざわざ詩筆を執り、詩聖が特に畫筆をとつて、いつもの自己表現に用ゐ慣れてゐるのとはちがつた他の姉

妹藝術に指を染めてゐる。ブラウニングは、わたくしは繪もかけなければ彫刻も出來ない、他に藝はないから、愛する君に捧げるには矢張り詩歌を以てする、唯それはいつもの詩風とは稍ちがつた作を書いて君に贈る、といふのであつた。

戀人の事はしばらく別問題として、どれほどすぐれた藝術上の天才でも、眞の自己を赤裸々に出してゐるのは意外に少いものである。たとひ意識的にでも無意識的にでも、讀者とか觀客とか評家とかいふ者を全く眼中に置かないで、製作してゐる人は甚だ稀である。何だか相手の顏色を窺つて物を言ふといつたやうな厭な風が、專門の詩人や畫家や小說家には殊に多い。その結果はやがて匠氣となつて、自己表現を生命とする藝術家として最も厭ふべき傾向が出て來る。殊に老巧な作家などには、其人の初期の作物に見られた純眞なうぶな所が段々薄らいで行つて、何だか臭みといつたやうなものが出る。よく私どもが作家の全集などを讀んでゐると、其人の小說よりも尺牘や詩歌の方に却つてよくその『人』が出てゐたり、流行つ兒の畫家の繪よりも、却つて其人の餘技ともいふべき文章の方に別の面白味を見出だしたりするのも、わたくしは皆以上のやうなわけだからだと思つてゐる。

人間が口で語つたり筆で書いたりしてゐる事は、何等かの意味に於て自己告白であり、自己辯護である。だから一方から言へば澤山書き澤山喋舌るほど、それは益々多くの恥曝しをしてゐるわけだ。から考へれば文學者などはよほど正直者のやうに見えるだらうが、實は決してさうではない。最初か

ら自己告白を賣物にし看板にしてゐたバイロンのやうな男は、確かに衒氣滿々たる者であつた。ルソオの懺悔錄といへば日本にも立派に譯されて多數の讀者を得た近代の名著だが、あれだつて果して何處までが純眞なものだか一寸疑はれる。ゲエテの『眞（ヴアルハイト）と詩（デイヒトウング）』に至つては、事實そのものが既に不精確だといふ難がある。そのほか昔の聖オオガスティンでも近代の杜翁（トルストイ）のでも、懺悔錄だからといつて、正直に鵜呑みにするわけには行かない。古往今來最も率直に飾なく自己を表白した者は、獨り詩人バアンズあるのみと言つたカアライルの論も、必ずしも誇張とのみは言はれないだらう。

日本文學に至つては告白錄の類は尙更少いやうだ。明治以後の新しい文學は姑く別問題として、新井白石の『折たく柴の記』の如き、文章こそ巧いが、あれは自己告白でなくて自家廣告である。寧ろ遠く古に遡つて、平安朝才女の日記物の方が此種の文字に富んでゐるだらう。和泉式部や紫式部の日記は誰にでも知られてゐるが、右大將道綱の母の『蜻蛉日記』の如き、英文學で言へばジョオヂ三世の皇后に仕へた女作家フランセス・バアネイのそれに比すべく、東西の才女の日記の雙璧とすべき物だらうが、兩方とも事實の敍述が多くて、內的生活の告白錄としては固より甚だ物足らない感がある。自敍傳の類の如きに至つては、東西ともに告白文學としては詰らない。

二　エッセイ

『筆とれば物書かる。』

むかし大阪尋常中學校——そのころは今の府立第一中學校の事をさう云つた——の生徒時代に日本文法の用例か何かで見たこの何の奇もない文句が、何故だか今でも頭の片隅に残つてゐる。正月の休みに少し暇が出來たといふので、何か書かうと思つて原稿紙に向ふ。ペンをとれば何か書けさうだ。かういふ時にはエッセイの體をとるのが一番可い。

小説や戲曲や詩歌と共に文藝作品の一體としてのエッセイは、議論とか論説とかいふこちたき類の物ではない。況んや參考書といふ他人の書いたものの中から勝手放題に失敬して來て寄せ集めたごく䊮みたやうな論文なぞと思へば、それこそ大間違ひである。

ある人はエッセイを隨筆と譯したが、それも當らない。德川時代の隨筆物などは多くは物識りの手控か衒學者の研究斷片のやうなもので、今の學徒が謂ふアルバイトの小なるものに過ぎなかつた。

冬ならば暖爐のそばの安樂椅子にでも凭れて、夏ならば浴衣がけに苦茗を啜りながら打寬いで、親しい友と心おきなう語り交はす言葉を其儘筆に寫したやうなのがエッセイである。興が向けば肩の凝らない程度の理窟も言はう、皮肉も警句も出るだらう。勝手な氣焰も吐くだらう。ヒュウモアもあればペイソスもある。語る所の題目は天下國家の大事は申すまでもなく、市井の雜事でも書物の批評でも知人の噂でも、さてはまた自分の過去の追憶でも、思ひ浮ぶが儘を四方山の話にして卽興の筆に託

した文章である。

エッセイにとつて何よりも大切な要件は、筆者が自分の個人的人格的の色彩を濃厚に出す事である。その本質から言つて、記述でもなければ說明でもなく議論でもない。報道を主眼とする新聞記事が非人格的に、記者その人の個人的主觀的の調子を避けるのとはちやうど正反對に、エッセイは極端に作者の自我を擴大し誇張して書かれたもので、その興味は全くパアスナル ノオトに在る。或學者は、だから此體を評して詩歌に於ける抒情詩を散文的に行つた物だとも言つた。筆者其人のおもかげが浮き出して居なくては面白くない。自己告白の文學としては此體を取る事が最も便利だ。戲曲や小說のやうに結構とか、作中人物の性格描寫とかに苦勞する必要もなく、さりとて詩歌のやうに藝術的技巧に骨身を碎く事も要らない。僞らざる飾らざる眞の自己を表現するのには、一種の無駄話であり世間話である此エッセイといふ體を選んだ小說家や詩人や批評家が、昔から甚だ多かつたのはこのためだ。西洋ことに英國には、昔から專門のエッセイイストも甚だ多かつたが、ゴオルドスミスやステイヴンソンのには、その詩や小說に劣らないエッセイの傑作がある。近代でも女詩人アリス・メイネル女史のエッセイ集『生の色彩』などに出てゐる諸篇は、殆ど散文詩とも言ひたい美しいもので、如何にも女性らしい纖細と敏感とを遺憾なく現はしてゐる所が非常に好い。わたくしは女史の小唄なぞよりも、散文のエッセイの方を遙かに面白いと思つて讀んだ。

詩人や學者や創作家がエッセイに筆を染めたのは、さきに述べたダンテが繪をかき、ラファエルが詩を作つたやうに、自己の隱れた半面を現はさんがためではなかつたらうか。無雜作な直截簡明な自己表現をするには、この體を用ゐる事が最も都合よいからではなかつたらうか。

近世文學でエッセイの元祖と言へば、人の知るごとく、十六世紀の佛蘭西の懷疑思想家モンテイヌである。うるさい程に古典の引用の多い點は別として、その不得要領な書きかたなどは、たしかに後のエマソンなどのお手本になつたやうだ。このモンテイヌのエッセイがすぐに英國に傳はつて哲人ベイコンのそれとなり、以後最も多く此種の文學に富んでゐる英吉利文學では、先づこのベイコンを以て始祖としてゐる。しかし歐羅巴の古代文學のうちにも此エッセイがなかつたわけではない。たとへばかの名高い『英雄傳』の作者プルタアクの道徳論など、今日から見れば立派なエッセイの體をなしてゐる。

一口にエッセイと云つてもベイコンのやうに、簡潔直截な漢文口調ともいふべき固苦しいのもあれば、またチャアルズ・ラムの『イリア雜筆』二卷にあるやうな、ごく砕けた、ヒュウモアに富んだ、そして情趣ゆたかな感想追憶の漫錄もある。時代によつても違へば人によつても異なつた體がある。日本文學では清少納言の枕草子やや之に近しとすれば、兼好の徒然草に至つては立派なエッセイだと言つて可からう。徳川時代の俳文にも、ほとゝぎす派の寫生文にも、かういふ風の書き方は多かつた。

三　エッセイと新聞雜誌

先づ佛蘭西に起り英國に榮えたエッセイの文學は、ジャアナリズムと密接な關係をなして發達した。十八世紀のアディソン、スティイルの時代は言ふまでもなく、前世紀にラムやハントやハズリットなどのすぐれた作も皆、多くは定期刊行物のために書かれたものであつた。殊に今の英吉利文壇では、苟も文筆に携はる人で、新聞雜誌のためにエッセイを書かない人は殆ど稀だと言つて可い。大の佛蘭西かぶれのヒレァ・ベロック、いつも奇想天外から墜ちる事ばかりを言つて人を驚かしてゐるチェスタトンなどは、實はかういふ文章ばかりで天下を動かしてゐるんだから偉いものだ。ちやうど近代の短篇小說の流行がジャアナリズムの發達と密接に關係してゐると同じく、二欄か三欄で讀切りになる短い文章だと云ふことが、定期刊行物のために便利なのも流行の一原因だ。

ところが日本の新聞雜誌には割合に此種の文字が振はない。近年のでは夏目さんの小品や、杉村楚人冠氏、内田魯庵氏、與謝野夫人のには面白いものがあつたが、その外には餘り記憶に殘る程のものはなかつたやうだ。これは第一書く人の方で、よほど詩才學殖が豐かな上に、人生の色々の現象に對して奇警な銳敏な透察力がなければ、到底エッセイイストとしては成功しないからだ。しかし私は讀者の側にも原因があると思ふ。その一つは眞のエッセイを味はふのには、かの何とかロオマンスと題

する物語を讀むやうに、汽車や電車の中で飛び讀み、走り讀みなどをしては駄目だからである。ちよいと見ると如何にも樂に何でもなくすら／＼と面白く書いてあるやうで、而もかのラムの『イリア雜筆』のやうな逸品になると、言葉からして既にイリザベス朝の古雅な言ひ廻はしを使つたりするばかりでなく、あの文字の裏には美しい『詩』もあり鋭い皮肉もあるのだ。正面から人を罵つてゐるかと思へば、あちらを向いて獨りにや／＼笑つてゐるといつたやうな風もある。作者の思索體驗の世界を、細心な注意深い讀者にのみ暗示するといふやうな書き振だ。不用意ななぐり書きのやうに見せかけて、實は彫心刻骨の苦心をした貴い文字である。ラムだけの頭腦のない吾等凡人がただ卒讀した位で、どうしてああいふ作品の鑑賞が出來るものか。

しかしいくら英國の新聞雜誌の讀者だつて、今日ではラムのやうなすぐれた文字をのみ喜ぶのではない。エッセイも隨分安つぽい物になつてゐる。だから少し頑固な批評家の中には、今日のジャナリズムがエッセイを墮落させたのだと言つて憤慨してゐる人さへある。然らば日本ではこの安つぽいエッセイすらも、讀者によつて歡迎せられないのは何故であらうか。

日本人には第一ヒュウモアといふものの眞價が全く解らないのである。昔から日本の文學には駄洒落やホットはあつても、ヒュウモアらしいものは甚だ少かつた。そこへ行くと、天下國家の大事を論じ、危急存亡の場合、非常に嚴肅な緊張した氣分の時にでも猶且このヒュウモアを忘れず、談判で

も込み入つてむつかしくなつた危機一髪といふ所を、ちよいと此ヒユウモアで切拔けて了ふ。お互に口角沫を飛ばしてゐた奴が直ぐまた破顔微笑してゐると言つたやうな趣はアングロ・サクソン人種の特色で、日本人には全然見られない事である。何か論ずるとでもいへば青いやうな黑いやうな顏をして、左樣然らばか、夫れ然り豈それ然らんやでなければ、言ふ方も偉くないやうな氣持がし、聽く方でも承知して與れない。やれ不謹愼だの不眞面目だのと評するのが、日本人といふ奴の話せない所以である。學問上の術語などを澤山ならべて、解り切つた事まで解らないやうに書いてあると、珍紛漢だから何だか偉い事でも書いてあるのだと合點して喜んで讀む。讀んでゐると自分も何か偉くなつたやうな氣がするのだらう。極めて難解な深邃な思想とか感情とかを、手もなく巧みな暗示の力で呑み込まさうとするエッセイが日本の讀者のお氣に召さないのは、無理もないとでも言はうか。

もう一つの原因は、日本の讀者は新聞雜誌によつて知識を得ようとか學問をしようとかしてゐる事である。これは現代の日本人が學藝や知識に對して、如何に輕薄で淺薄で冷淡であるかを明證してゐるものだと思ふ。學藝は、言ふまでもなく共道の學者の講義を聽くか、さもなくばそれ相應の書籍を精讀しなければ、決して眞の理解の得られるものではない。所謂雜誌學問と稱する薄つぺらな知識などを土臺にして生意氣な口を利いたつて、それは單に識者の笑を招くに過ぎまい。統一ある系統的な組織的の頭腦は、雜誌や新聞によつて得られるものではないからである。

しかし定期刊行物が商品である以上、讀者の要求に迎合しないわけには行かない。そこで日本の雜誌——否な新聞紙の或部分ですらも——は、まるで通信教授の講義錄みたやうな物にならざるを得ないのである。試に近頃澤山出來る雜誌の內容を點檢して見ると、先づ小說と情話と、それから例の論文とか論說とかいふ左樣然らば式の名文と、次いでは此講義錄だ。それだけ除けば尨然たる幾百頁の大册、殘す所は僅かに二十頁か多くは三四十頁なのだから奇妙なものである。普通の英米の評論雜誌には必ずあるべき詩歌だのエッセイだのは、滅多に見當らないのは不思議な位だ。

思はず筆が滑つたが、こんな高慢ちきな事を前置きに書いて、さてこれからわたくしはエッセイを書きますと言へば、白村たるものいくら厚顏しくても、切に讀者に向つて妄語の罪を詫び寬恕を乞はねばならぬ。何となれば眞のエッセイらしいものは、到底私などに書けるわけのものでは無いからだ。

エッセイはその語源に於て佛蘭西語の『試み』essayer である。謂はば筆だめしといふほどの意だらう。子供のとき正月にはよく元旦試筆といふ事をやつた。ことしは申の歲だから物眞似をするのだと言へば甚だ俗だが、わたくしは正月の試筆として、今まで多くの文人や學者のやつたエッセイといふものの、ほんの眞似ごとをしたのだ。何を書くのだか、それは自分にも當てがない。時間がなくなつたり厭になつたりすれば、何時でも切り上げる。

四　缺陷の美

華やかな舞踏會とか、芝居やオペラの夜などに、粧ひを凝らした、笑ひさざめく大勢の女の顏に、ぽつちり附いた黑い點が人の目をひく。いくら西洋にだつて黑子（はくろ）のある人がさう澤山ゐるわけではない。頬紅のかげに黑い點があるかと思ふと、舞踏服で半裸體の頸のあたりにも黑點が見える。あちらにもこちらにも左樣（さう）した女が澤山にゐる。これはまだ日本の女のしない化粧法であるが、昔の女の黛（まゆずみ）のやうに、わざ〳〵黑い物をつけて拵へた人工の黑子（はくろ）だ。名づけてビューティ・スポット（美人のほくろ）と云ふのは氣が利いてゐる。

それはおほかた、くろうとの女か、女優や踊子のする事だらう位に思ふ人もあらうが、ちやんとロオブ・デコルテの禮裝をしたレディ達がやつてゐる。

わざ〳〵美しい女の顏に黑子（はくろ）を拵へるのは、日本で前齒に黑い瑕のあるみそつ齒を、若い女の愛くるしさを增すものとして貴んだのと同じだ。

之を學者ぶつて、對照（コントラスト）の法則の應用されたものだと言つて了へばそれまでだ。白い物のそばに黑を置き、悲劇のなかに喜劇の分子をまじへると、その調子が一層强くなつて引立つ。エフェクトが增すからだと美學者は說明する。悲劇『マクベス』の門番の場はその適例だ。たださへ美しい白皙人種

の皮膚をお白粉や紅で加工して、それに濃い黒色のビュウテイ・スポットをつける。汁粉のなかに一摘みの鹽を入れて、甘味を强くするのと異曲同巧だらう。

渾然として玉の如しなどといふ言葉はあるが、實はいかなる人物を見てもその性格には必ずどこかに缺點がある。そこで缺點の全くない一つの人格を假想し或は理想化して神様と名づけたが、神様といふ奴は人間の仲間には居ないやうだ。それからまた人々の境遇を見ても必ずそこに何等かの缺陷がある。金があれば病身であつたり、達者であれば貧乏である。一方に儲ければ一方に損をしてゐる。もうこれで好いなぞと思つてゐると、まだ好くない事が後から後からと出て來る。人間のする事に瑕の無い事はないので、たとへば非常に愉快な旅行をしたとしても、長い道中には何か一つや二つ失策をするとか、苦しむとか不快な思をするとかいふことが、きつと附き纒ふ。そこで人間はさう云ふ缺陷の無い具足圓滿の境を假想して天國や極樂を拵へて見たが、そんなものは先づこの地上には無い。

眞に人生を愛し享樂して之を味はひ、人間味の底に徹しようとする藝術家にとつては、さういふ色色の缺陷は卽ち一種のビュウテイ・スポットではないか。

性格や境遇や社會には色々の缺陷がある。缺陷のある所には必ず相容れざる二つの力の葛藤や衝突が現はれる。この葛藤この衝突を、縱から横から前から後から見て、之を描いたものが戲曲であり小說である。さう云ふ缺陷がなければ人生は大平無事である代りに、面白味もなければ生き甲斐もない

ものであらう。暗い影があればこそ明るい光が一層引き立つのである。

或種の社會改良論者、或種の道德家、或種の宗教家は厄介な者である。かれらは缺陷を惡み罪惡を呪ふ事だけしきや知らない。缺陷と罪惡とが如何に人生に面白味を與へ、それらにどれ程大きなネセシテイがあるかには氣附いて居ないからである。汁粉に鹽を入れた味はひを解しないのだ。

酸素と水素とで出來た純一無雜な水、そんなものは苟も生命ある活きた自然界には存在して居ない。科學者が試驗管のなかで拵へ上げたやうな水ならば、私たちは飮んで見たくはない。水に甘露のやうな神液のやうな貴い味はひのあるのは、多くの黴菌や不純な物を含有してゐるからではないか。缺陷や罪惡の美を知らない連中は、無理な算段をしてまで私たちに蒸溜水のごとき無味淡々なる飮料ばかりを押賣りしようとする。そして人生から味はひといふものを奪ひ去らうとするのだ。呪ふべきかな、惡むべきかな彼等。

急速に發達する新しい都會には刑事上の事件が一番多いと聞く。そこには跳躍せる生命の力が强く烈しく動いてゐるからだ。わたくしたちは天下泰平な死の都に眠らんよりは、矢張り罪の都に生きて動いてゐたい。月に叢雲、花に風があればこそ、月にも花にも趣がある。その叢雲を嘆く心、風を傷むこゝろ、そこから人生の興味も湧けば『詩』も生れるのである。『花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは』と喝破し、

男女の情もひとへにあひ見るをば言ふものかは。あはで止みにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲井を思ひやり、淺茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとは云はめ。

（徒然草」第百三十七段）

と云つた兼好法師といふ坊主は、存外話せる男であつた。

つとめて罪悪や缺陷には觸れまい、それをそつと避けて通らうと云ふ消極主義や禁慾主義や保守思想などが、人間の生き方として極めて卑怯な臆病な、そして詰らない態度であるのはこれがためだ。風邪を引くからつて戸外に出ようとしない半病人のやうな一生は、誰しも送りたくないではないか。途中で失策つたり苦しんだりするからこそ旅は面白いのだ。不如意である所に人生といふ長旅の興味がある。人間は缺陷に滿ちた永久の未成品だからこそ好いのである。あの小つぽけに纒りのついた賢らな人間なぞを見ると、わたくしたちは却つて反感をさへ持つ事がある。天衣無縫よりは襤褸切の方がどれ位面白いか知れない。

五　詩人ブラウニング

爾らのうち誰かこの姦淫したる婦に石を投ずる事を得る者ありやと言つた基督は、生きた本當の人間を見つめてゐた詩人であつた、藝術家であつた。そして百代の師たるべき大なる思想家であつた。

女教員が私通したからつて直ぐに教育界が墮落でもしたやうに騒ぎ立てた、あのさかしらな僞善者などよりは、ずつと優れた偉い人であつた。

人間は生き物だ、生きてゐるからこそ不完全であり、缺陷がある。完全といふ所へ來れば既う生命は亡くなつてゐる。創造の進化を説いた現代の哲學者も之を言ひ、詩人ブラウニングもいくたびか此意味を繰返し歌つた。

善と惡とは相對的の言葉だ。惡があるから善があるのだ。缺陷あるが故に發達がある、惡あればこそ善は貴いのだ。善と惡との衝突がなくて、どうして進化があらうぞ、向上があらうぞ。『現在の生活が吾々の終局なのか或はまた這ふか攀ぢるか人間の足を試す出發點なのか。見たところ玆には色々の障礙がある。低きより高きに跳び、躓く石を却つて階段にしようといふ人には、罪惡や障礙は恐るるに足らない』（ブラウニング作『環と書』第十卷法王篇、四〇七行以下）暗黑あるが故に光明あり、夜あるが故に晝がある。惡あつてこそ始めて善があるのだ。破壞なくして建設はないわけだ。現在の缺陷や不完全はさう云ふ意味に於て確かに人生の光榮である、とかう云ふ風にブラウニングは考へた。いつも人生の事實を靜的に見ないで動的に見ようと云ふ人、流動無礙の生命現象に信を失はない勇猛精進の人が、當に到達すべき結論は即ちこれではなからうか。

光が強ければ強いほど、その影は益々暗い。美しい顔のビユウテイ・スポットは淡墨では可けな

い、漆よりも黒からねばならぬ。人の性は善にも强いから惡にも强いのだ。その善惡明暗の境を過ぎて、吾々の生命は不斷に休みなく進轉してゐるのである。

おれは罪を犯さないから好い、誘惑には近寄らないのだ。さういふ事を言つていつも消極の態度にばかり安んじてゐるやうな人は、ブラウニングに言はせると、惡人よりももつと詰らない下等な人間である。また東洋にも西洋にも、足るを知れと敎へる人は多いが、足るを知つた時、また其人が眞に滿足した時は、生命の泉はすでに枯れ果てたのである。現在の缺陷と不完全に安んじないで、不斷にあこがるる心、求むる心あつてこそ人生に意味はあるのだ。『フロレンスの古畫』の作にジョットオを詠じて、『完全の域に到れるものには滅亡あるのみ』といひ、樂人『アプト・フオグラア』を歌うては、『地には破片の弧あり、全き圓は天上に』といひ、文藝復興期の學者を詠じては、『現在を犬に與へよ、人には永劫を』といつたブラウニングは、英國近代の詩人のうち最も男性的な壯快な人生觀を懷いた人であつた。彼と同時代の詩人で神樣のやうに崇められてゐたテニソンなどが、とくの昔に忘れられてゐる今日、ブラウニングの作品が、その辭句の甚だしく晦澁難解であるにも拘はらず、日に益々多くの崇拜者を得てゐるのは、一個の勇猛な理想主義者として戰鬪者の態度が、飛躍せる今人の心を動かすからだ。

うつかりブラウニングなぞを引つぱり出して筆は妙な所に脫線したが、要するに現在には缺陷があ

るからそれを何んとかしようと燥る所に、生活の意義はあるのだ。あだなりと知りつつもなほ求むる心、苦しくても痛ましくてもこれがなければ人生は無意味である。缺陷の難有味もそこに在る。名所見物の旅をしても、名所は存外つまらないかも知れぬ、そこへ行きつくまでの道程に旅行の眞味はあるのだ。戀をしても苦しい思ひをしたり涙を流したりする中途に意味があるので、結婚といふ所まで來て了へば、それは既う戀愛の墳墓だとさへ言つた人がある。與謝野夫人の新歌集『火の鳥』にいふ、

うす靑き悲みまでも取り入れてゆたかになりし戀の色どり。

人間の身の苦しやと思ふ時おつる涙の甘き味ひ。

ユウゴオに言はせると、人間と云ふ者は皆五十年か六十年の死刑の執行猶豫を受けてゐる、その執行猶豫の期間が吾々の一生なのである。一休禪師が、門松は冥途の旅の一里塚だと心細い事を言つたが、その一里塚を一つ〳〵通つて行く過程そのものに、生の興味があるのではないか。

藝術なぞもさうだ。完成した藝術にはあらがない代りに生命がない、死あるのみだ。型に嵌まつて動きが取れなくなつてゐるからだ。根本的改造の要求はここから起る。鴈治郎の藝なぞを見ると巧いには巧いと思ふ。しかし既うあれはあれ切りのもので、行き詰つてゐる事は誰の目にも附くではないか。硯友社以來の明治小說が自然主義によつて苦もなく取つて代られたのは、尾崎紅葉の作品が既う完璧に達してゐたからである。

文藝に於ける古典派と浪漫派との差、アカデミイ風と近代風との違ひも、共にこの缺陷の美といふ事から考へて見ると面白い。

希臘羅馬の藝術をお手本にしてゐた古典派には絶對美の理想があつた。その作品は整齊均衡を失はない、きちんと整つた一絲亂るることなき完璧を求めたのである。冷やかな理知で情熱を抑へ、藝術上の規範や法則を重んじた瑕のない作品であつた。それに反對して起つた浪漫派の文藝は、一切の法則や權威を認めない自由な奔放な藝術である。古典派の立場からいへば、それは形も何も、まるで整つてゐない瑕だらけな取亂した藝術品である。浪漫派の親玉であつたシェイクスピアの戯曲といふものは希臘の古典劇とは正反對に、形の歪んだ崩れた作品である。『解放』の藝術が當然行き着く先はここに在るので、缺陷が多いだけそれだけ生命の力はより強く現はされる、そこに描かれた自然や人生は一きは鮮やかに躍動してゐる。

無瑕な、形の整つた水晶よりは、瑕だらけの金剛石を求めようとするのが浪漫派である。光の強いのが好いのだ。ビュウティ・スポットどころの騒ぎではない、痘痕でも痣でも盲目でも偏目でも何でも好いから、生命感の溢れてゐるやうな生き生きとした力のある顔が欲しいといふのである。

ところが此浪漫派を更に一歩進めた近代派の文藝となると、瑕そのもの、缺陷そのものを貴しとして、そいつを賣物にしようといふのだから徹底してゐる。アカデミイ風の人たちが厭な顏をするのも無理はない。

惚れて見れば痘痕も靨だ。痘痕を痘痕として見てゐる間は、まだ心から惚れ込んでゐない證據だ。眞に人生を愛し人間味の底に徹しようとする近代人にとつては、その醜穢な暗黑面にも罪惡にも、美があり詩が見出される。昔の古典派の人たちが、美とか善とか云ふ局部的な部分的なものを理想として、醜とか惡とかいふものに面をそむけてゐたのよりは、遙かに深く徹底した意味に於て、人生の缺陷そのものに心を惹かれるからだ。生命感そのものを、現實感そのものを、根柢とした前世紀後半以後の近代文藝は、遂に玆まで來なければ滿足しないのであつた。

だから自然派は醜猥な性慾の事實を無遠慮にかいた。罪と惡と醜とを讃美して、新しき戰慄を文藝の上に創始した『惡の華』の詩人ボオドレエルは、惡魔派の頭領に祭り上げられた。たしかフレデリック・ハリソンであつたらう。ロダン翁のバルザックの像を見て『汚穢の崇拜』だと嘲つた。後期印象派の繪でも見せたら何と言つたらうか。

石に刷毛をかけて綺麗に掃除をしてゐる西洋人に庭石の妙味は解るまい。變挺に歪みくねつた、そしてきたない苔を大事にかけてゐる日本人でなければ、本當の庭石の面白味を味ふ事は出來ない。社

會の缺陷や人間の罪惡は卽ちこの汚い苔の妙味ではないか。

料理の通といふ者は皆臭い物を喰ふものである。臭い物に舌鼓が打てるやうにならなければ、日本料理でも西洋料理でも、本當には味はへて居ないのだらう。

日本から西洋へ密輸入をする時に、その品物を澤庵桶の底に入れて置く不正漢があつたさうだ。西洋の稅關吏はあの澤庵の異臭には鼻を蔽うて辟易し、底の方は檢査しないからである。糠味噌や澤庵漬の香の味はへない者が日本料理を論じたつて始まらない。また西洋人も臭い物を色々と喰ふ。カギアァだつこ大抵の日本人は參つて了ふ。黴だらけの、見るから穢いロックフォルなどといふ乾酪(チィズ)に舌鼓を打つやうでなければ、共に西洋料理を語る資格はあるまいと思ふ。

文藝家は生きた人間味の大通である。罪惡や缺陷のないやうな臭い物が味はへるやうでなければ、共に人間を語るに足らない。そこいらの役人だの教育家だの坊主だのと云ふ連中は、もう少し修業をしてからでなければ、文藝の作品なぞに口を出す資格のない者だと心得るが可い。

七　利巧もの

わたくしの乘つてゐた汽車は隨分ひどく込み合つてゐた。數人の無作法な乘客が席を讓らうともしないために、立往生をしてゐる人もあつた。それは暑い八月の日中であつた。

私の隣には避暑地からの歸りらしい極めて品の好い老人夫婦がゐた。汽車が或大きい驛に着くと、老人はそこで下車しようとして、可なり重さうな鞄を取つて立ち上がつた。車窓の外を見ると行儀のわるい群衆が押合ひへし合ひして、此箱に乘らうとして入口に近く犇めいてゐる。

老人は窓枠に鞄を置いたままでしきりに赤帽を呼ばうとしてゐたその時、入口に押し寄せてゐる群衆の後の方にゐた三十恰好の洋服の男が、つか〳〵と車窓に歩み寄つて老人の手から荷物を受取らうとした。わたくしは出迎の人かと思つて見てゐると、老人は一面識なき此男に荷物を渡すことを躊躇してゐるらしい。すばやく其洋服の男は彼方(かなた)に見えた赤帽を左手で麾きつつ、右手で自分の冠つてゐる麥稈帽を取り、猿臂を延ばしてそれを今まで老人の居た座席に置いた、老人は赤帽を呼んで吳れた其男に一拜して、夫婦はやがて車外に去つた。

車内は今新しく我勝ちにと乘り込んで來た多數の乘客のため動搖と混亂の最中だが、座席はとても足らない。降りた人は五六人だが這入つて來たのは二三十人もあつたらうか。

すると、やがてゞの洋服の三十男が後から悠々と這入つて來た。私の隣の、もと老人のゐた座席には早く既に麥稈帽だけがちやんと置いてあるので、いくら混雜でも皆が其麥稈帽に敬意を表して、ここだけは空席になつてゐる。三十男は落ち着き拂つて其麥稈帽を自分の頭上に載せ、同伴してゐる二人の藝者をそこへ坐らせた。『へえ、おほきに』とか何とか言つて腰を卸した藝者の髮油の異臭がぷん

と私の鼻を突いた。
足を踏んだり踏まれたり、押したり押されたりして、命がけで這入つて來た連中は皆立往生だ。
つまらない事を書くと思ふ讀者もあらうが、人間の世界はいつもこれだ。汽車や電車の中ぐらゐ巧く出來た社會の縮圖はないと思ふ。
奮鬪した揚句、立往生の憂目を見てゐる人たちは、禮儀を知らないとか亂暴だとか、散々非難を受けるかも知れない。もし誤つて其際に人でも傷けようものなら、法律といふ機械に引懸つて罪に問はれるだらう。洋服の三十男はその反對だ。悠揚迫らざる紳士的態度とも見えよう。また老人を助けてやつた感心な男だとも言へよう。そして藝者からは親切な旦那だと有難がられるだらう。帽子を車窓から投げ込む事は、法律だの規則だのといふものには毫も牴觸してゐない。かくの如くにして彼は巧みにその唾棄すべき利己心を滿足させた。なるほど利巧者である。
わたくしはいつもかう云ふ利巧者に對して强い反感を抱かずには居られない。
勞働問題だ社會問題だと言つて正面からひた押しに押してゐると、どこか其邊に政治屋とか資本家とかの古つぼけた麥稈帽が轉がつて居やしないか。
いつも私はさう思ふ。出刀庖丁を振り廻はしたり、泥棒を働いたりして罪に陷れられる者は實は無邪氣なそして愛すべき善人である。少くとも純眞な人間である。ずつと惡い奴、本當に憎むべき奴は

大臣となり富豪となり重役となり、甚だしきに至つては理解なき『世間』といふものから名望家を以て目せられてゐるのがあるではないか。イブセンが『社會の柱』に描いたベルニックのやうな人物は、日本の社會にはざらに有る。しかもベルニックのやうに罪を群衆の前に告白した者が一人でもあるだらうか。彼等は牢屋には這入らずに金殿玉樓に意張つてゐる。これは人々の賢愚や力量の差から生ずるなどと思へば大間違ひだ。運不運の差ばかりでもない。實は人間の社會に大きな缺陷があり、大きな穴があいてゐるからである。

棺を蓋うて事定まるなぞといふのは噓だ。判斷する者が人間であつたり、世間であつたりする間は矢張り駄目である。昔の宗敎信者の口吻を用ゐて言へば、最後の審判の日に神の法廷へ出て見なければ何がわかるものか。

眞に吾々の徹底的な本質的な第一義的生活を、完全に律し得るやうな道德や法律や制度や宗敎は、人類の文化發達の今日の程度では、まだ出來てゐないのである、或は永久に出來ないのかも知れない。いづれ當座凌ぎの間に合せ物で胡魔化してゐるのが今の人間生活だ。勞資關係、治安警察法、陪審制度、婦人問題、そんなもの位をせゝつて見た位で何になるものか。も一遍神樣に手數をかけて、人間その者からして改造して貰はない以上、とても物にはなるまい。

それでさへも、否なそれだから人生は面白いのである、意味があるのだ。吾々には生き甲斐がある

のだ。思想生活や藝術活動の根源も亦ここから出てゐる。再び云はう、缺陷の美を見よ。

八　馬鹿もの

好人物、正直者、さういふ立派な言葉を、愚物、無能者といふ甚だしい輕蔑の意味で使つてゐる國語は恐らく日本語だけだらう。私たちは之を恥とすべきだらうか、誇とすべきだらうか。ちやうど「ホオム」とか「ゼントルマン」とかいふ言葉が英語だけにしきや無いやうに、そしてアングロ・サクソン人種がそれを誇としてゐるやうに。

思へば今の日本は恐ろしい國である。前回に言つたやうに、汽車に乘る時は古びた麥稈帽でも轉がして置くやうでないと、吾々のやうに貧乏をしたり、他人から侮られたり、またひどいのになると牢屋に投り込まれたりする者がある。禍ひの世に禍の國に生れ落ちたものかなと思ふ。

どちらを見てもいやに利巧な奴ばかりだ。日本が今日一番必要とする人物は、策士でもない、敏腕家でもない、物識りでもない。そんなのは腐る程ある。一番欲しいのは、それこそ生一本の熱烈な、底の知れない馬鹿者である。若しディオゲネスをして今の日本に在らしめたらば、晝日中に大きな懷中電燈でもともして、さういふ馬鹿者を搜し廻はつたらう。

わざ〳〵王宮を去り妻子を棄ててまで檀特山に這入つた釋迦は、大いなる馬鹿者であつた。イスカ

リオテのユダに賣られて、飼犬に手を噛まれるやうな目に遇つた揚句は磔刑(はりつけ)になつた基督も、隨分大きな馬鹿であつた。しかしかう云ふ馬鹿の大ものは、日本ばかりではない、今の世界なぞにとても居やしない。よしんば居たところで、手も足も出ないだらう。郷黨から、あれは變り者だ偏人だ氣狂だ位の尊稱を受けて、おとなしく引込むだけのことだらう。しかしせめてはカアライルかイブセンか、或はトルストイ位の程度の馬鹿は居て欲しいと思ふ。否なその半分位の馬鹿でも好いから二三人も居れば、今の日本は立派に改造されるだらう、ずつと好い國になるだらうと思ふ。

馬鹿と謂ふこころは、利害の打算を足蹴にかけて、僞らざる飾らざる自己の本心によつて動く人である。妥協して置いたり胡魔化して濟ましたりする事の出來ない人を云ふのである。本質的に徹底的に第一義的に物を考へて、それを自分の生活に實現し得る人である。炎々として燃える烈火の如き内部生命の焰にいつも新しい薪を加へて、自我の充實を怠らない人である。利巧者の目から見れば間拔けとも見えよう、我儘とも考へられよう。驚くべき融通の利かない變な奴だと思はれる位はまだしも、auto-da-fé の火で燒殺されたり、ニイチェのやうに瘋狂院に打ち込まれたりする。それは彼等が改造の人であり、反抗の人であり、先覺の人であつたからだ。人類のために戰ふプロミイシュウスであつたからだ。危險極まる惡黨だと見えたからだ。因襲や偶像の前に七重の膝を八重に折るだけの智慧がなかつたからだ。常識といふ下らないものを超越してゐたからだ。人が右と云へば左と云ふ、

東を指せば西に向く、本當に始末に終へなかつたからだ。そこがまた豫言者の豫言者たる所以であり、大思想家の大思想家たる所以であつた。そして實にまた大いなる馬鹿者の大いなる馬鹿者たる所以であつた。

さう云ふ大きい馬鹿者では會社員は勤まるまい。商賣をしたらば損ばかりするだらう。役人なぞ半日だつて勤まるものか。頑冥殆ど度し難き今日の教育家たる事は全然不可能だ。しかし考へて見ると、世界はいつもさう云ふ大きい馬鹿者の馬鹿力のみによつて改造せられて行く。人類が今日ここまで進んで來たのは、さういふ多くの馬鹿の大ものが命がけで働いて吳れたからであつた。貴き大きい馬鹿者よ。文化發達の歷史を繙く者は誰しも皆、衷心からこれらの馬鹿者に深い感謝を捧げねばならぬ。

また更に思ふ。デモクラティックの時代は決して天才や英雄や豫言者の時代ではない。今は群集の時代である。多衆の時代である。むかし少數の、或は一人の大きい人物のした仕事を、百人千人萬人が集まつて爲る時代である。わたくしどもは徒らに今のやうな時代に、釋迦や基督の如きずば拔けた大きい馬鹿の出現を翹望して居たつて始まらない。自分たちが銘々みな、せめてはあの千分の一か萬分の一位の馬鹿になる心懸けをしなければならぬ。それは本當に自分が自分で深く物を考へて見ることである。本當に書物らしい書物を讀み、本當に學問らしい學問をして、力一杯馬鹿になる修業をすることである。それでなければ今の日本のやうな國は救はれない。

わたくしは自分でかう書きながらも、また他人からは勿體なくも立派に馬鹿として輕蔑せられ、愚物としての待遇を受けて居ながらも、凡物の悲しさ、自分にはまだだいぶ利巧な分子が殘つてゐるらしく思ふ。さういふ分子を垢か痂でも落すやうにこそぎ取りむしり去つて、是からは滿身の力を込めてたとひ小さい馬鹿でも好いから、馬鹿になる工夫をして見たい。それでなければこんな詰らない時代にこんな詰らない國に、徒らに生を貪つてゐることが無意義なると思ふ。

九　今の日本

『馬鹿を行つてゐる馬鹿者に出喰はすよりは、寧ろ子を盜まれた牝熊に出遇へ』。これは舊約の箴言の句である。日本の昔の英雄も馬鹿ほど恐ろしい者は無いと言つた。世間には馬鹿力と云ふ俗語さへあるではないか。

ちよと小手先の利く、技巧にすぐれた小器用な人間、こそ〳〵する鼠のやうな重寶な男、素早く上官の顏色でも窺つて事務の『腕』とやらのある男、さういふ者には兎角內的生活の充實がない、深い反省もなければ思索もない。上辷りで上調子で淺薄で、腰もなく腹もなく頭もない、まるで人間の影みたやうだ。底光りもせず底力もないのだから、固より英雄をして色を失はしむる程の馬鹿力なぞが出よう筈がない。いつもふら〳〵であり、ぐら〳〵であり、ひよろ〳〵である。誰かが若し現代の日

本人を評して、此ぐら／＼でありぐら／＼である事を指摘した時に、わたくしたちには果してそれを否定する資格があるだらうか、心細い事だと思ふ。

近頃の日本は特に此ぐら／＼ひよろ／＼が酷い。嘗て米が少し高いと言つては騒いだ。しかし其頃より僅か一二年經つた今日、騒動の頃よりは二十錢も三十錢も高くなつてゐるに拘はらず、吾々の物質生活の根本である食料品の價格は全國民が注意を集注する大問題にはなつてゐない。或者はけろりと忘れたやうな顏さへしてゐる。次には勞働問題といふのが出た。西洋ではずつと以前の十九世紀にやつてゐたやうに、多くの工場が一齊に騒ぎ立てた。しかも勞働組合一つ滿足に出來もしないうちに、この問題も既うおほかた下火のやうだ。デモクラシイと云ふ言葉が警語のやうに津々浦々まで響いたのは、つい此あひだであつた。しかし肝腎の普通選擧の問題だつて、前途は矢張り心細いではないか。彼も一時これも一時、まるで裏店の女房のヒステリのやうなこの現象を目して、熱し易いが冷め易いのだなぞと云ふ陳腐平凡の語を以て、聞いた風な批評をする者があるならば、それは全然誤つてゐる。『熱し易いが』と云ふが、最近四五十年來、戰爭の場合を除いて眞の文化生活のために一度だつて日本人が本當に熱したことがあるだらうか。眞に熱すると云ふ事は、花火線香のやうにぱち／＼と行つて見ることではないのである。つまり上調子であり、上辷りであるからだ。ちよいと目先が利くだけに徹底する所までは行けないのだ。中ぶらりで微温で妥協的で胡魔化しであるのはこのためだ。

言を換へて云へば眞の馬鹿が居ないからだ、間抜けや偏人が少いからだ。

しかしこれはまた都人と田舍者との差だとも考へられる。東京の人と東北人とを、或は京阪の所謂上方者と九州人とを比較しても解るやうに、都人の輕快敏捷の一面には厭ふべき浮薄の傾向が見られる。田舍者には鈍重迂愚の短所はあつても、そこには狂熱性もあり、執着力もあり、徹底性もある。お伽噺の兎と龜との比較のやうだ。

内的生命の躍進と充實との結果である思想活動や實行運動は、だから極端に文化の進んだ民族から出るか、若し然らずんば極端に野性を帶びた田舍者の國民から出る。兩極端はいつも等しい。(但し野蠻人は別問題だ。まだ自分で物を考へるだけの力のない子供と同然なのだから論外に置く。)そこでいま世界の文明國に就いて見ると、都人の氣風や性格を最も立派に發揮してゐる者は、今も猶羅甸文明の正系を傳へてゐる佛蘭西人だ。だから佛蘭西大革命以來、あの國人はいつも世界の新思潮新傾向の主動者となり指導者となることを得た。巴里の風俗などを見て淫靡だの頽廢的だのなぞと批評してゐる連中には、實際何も解つて居やしないのである。

ところがこれとは全く正反對に、文明國中最も多く野性を帶びた田舍者と言へば、果してどの國だらうか。

十　露西亞

それは言ふまでもなく露西亞である。地理的には歐洲の片隅にあり、歴史的には眞の文化を有して以來僅かに百年に過ぎない。スラアヴ人種は確かに文明世界の田夫野人である。この田舍者が西歐諸國の思潮に啓發せられ誘導せられて、如何にも田舍者の田舍者らしい、そしてまた如何にも馬鹿者の馬鹿者らしい特色を發輝して、そこに多くのドストエフスキイを産み、多くのトルストイを産んだのであつた。

わたくしには露西亞語は一文字も讀めない。わづかに不完全な佛譯や英譯によつて前世紀の有名な戲曲や、小説を少しばかり目を通した位だから、露西亞を論ずる資格なぞは無論ありはしない。專門の商賣にしてゐる文學でさへ、露西亞最近の作物なぞはまるで知らないのである。また新聞の外國電報を見てゐると、何でも過激派とかいふ妙な名前の派の話が出てゐるが、少しも當てにならないやうな、そしてすべてが斷片的な報道ばかりで何が何だかまるで解らない。露西亞人の今日考へたり爲たりして居る事が果して善いのか惡いのか、正當なのか不正當なのか、一個の學究としても薩張り判斷も何も仕樣がない。現にボルシェギキといふ言葉は、英語で書いた或本の中に More 卽ち『なほ多き』を意味すとあつたやうに記憶するが、日本語は何故(なぜ)それを過激派と譯するものか、その理由からして私には呑み込めない。まさか何か爲にする所あつて誤譯曲譯を振り廻はす亂暴ものもあるまいと思ふから、何の事やら解らぬ。ボルシェギキに對してメンシェギキ（少數派）があり、これは民主的

社會主義の穩和派だと聞いてゐるが、其邊の事情も詳しくは知らない。しかし若し多數黨と云ふ文字を過激派と譯するのが正當であるならば、日本でも一つ多數黨を過激派と呼んで見たら如何だ。近頃支那では日本の譯語を澤山使つてゐるが、ボルシェギキだけは過激派といふ不思議な譯語を用ゐずに、正直にその儘音譯してゐるさうだ。

わたくしのやうに長の年月外國語の研究などをしてゐる者には、こんな詰らない言葉の解釋が酷く氣になるのだが、それはさておき、露西亞ばかりは眞に合點の行かない國である。英米の雜誌などを讀んでゐても、露西亞の事に關する記事や論文だけは見當が附かない。先日も或英國の評論雜誌を讀んでゐると、過激派の事を論じた二篇の文が並んで出てゐる。そしてその前のと後のとは、まるで正反對の事が論じてあつた。これでは眞相のわからう筈がない。

しかし玆に唯一つ私が知つてゐる正確なる事實がある。それは世界の强國と稱して威張つてゐる國が、不思議にもこの露西亞人の思想と活動とを酷く恐れてゐるといふ事實である。金もなければ武力もなくなつた露西亞人を恐れてゐるといふこの不可解不可思議の事實である。なかには自分の國は世界一だと言はぬばかりの大言壯語を吐く或國の如きは、露西亞と聞いただけでもぶる〳〵慄ひ上つて蒼くなつてゐるではないか。ただ露西亞の前世紀の思想や藝術から推測して見て、何でもこれはまた田舍者がその特有の野性を發揮し、馬鹿者の馬鹿々々しさと馬鹿力とを遺憾なく發揮してゐるの

ではなからうかと思ふ。ただ惜しむらくはその內容や實際は、早くも聰明慧敏なる一部の日本の論者が推斷してゐるやうに、さぞかし近代文明發達の進路を外れた邪道にはまり畜生道に陷つてゐるのだらう。苟も忠君愛國の民の口にだもすべきものではないのかも知れない。その邊の消息は私のやうに迂遠な村夫子には全く分らない。

わたくしは政治の事を知らない。しかしながらあの國が、音樂にグリンカやルウビンスタイン兄弟や、チャイコウスキイの如き天才を產み、文學にトゥルゲニエフやゴルキイやアルツィバシェフを出して、一時は全世界の藝術界を動かした所以が、この田舍者の馬鹿力であつた事だけは十分に斷言し得ると信じてゐる。

十一　田紳の日本よ

都人と田舍者と、さう考へて見ると今日の日本人などは固より後者に近い。近いには近いが、純然たる田舍者ではない。とにかく德川文明の後を承けて、更にまた半世紀間、西洋文明の皮相の感化をも受けたのだ。そして近頃は世界大戰のお蔭で、少しばかり國富をも增した。田舍者の少し開けて來た、謂はば田紳とも言ひたい氣分の者である。百姓が都會に出て來て相場か株に手を出し、五萬か十萬の端金(はした)でも儲けて好い氣になつてるといつた風がある。都人の高雅もなければ、また純なる田舍

者の熱性や馬鹿力も無い。中身は依然として古臭く泥臭い田舍者でありながら、口先や服裝だけは頻りに先進國の眞似をしようとする。朝に夕に時代錯誤の喜劇を演じながら、當人だけは得意揚々たるその有様が如何にも慘ではないか。おゝ田紳の日本よ。白縮緬か何かの兵兒帶にだらりと垂らした金鎖、まだ泥の香の拔けない節くれだつた指に光る實印彫の金の指環、さういふ物が最も雄辯にお前の現在の生活を語つてゐる。

おゝ田紳の日本よ。田紳の特色は凡てが中途半端で胡魔化しで、木に竹を繼いだやうな所に在る。馬鹿なやうで馬鹿でなく、利巧なやうで利巧でもなく、氣が利いてゐて間が拔けてゐる。まるで洋服に下駄を穿かせたやうな生活をする者が田紳である。

おゝ田紳の日本よ。わたくしはお前に向つて新思想や新藝術を語るのはまだまだ早いと思ふ。語つて聞かせれば、口先だけはクロポトキンとかラッセルとかマルクスとかいふ西洋人の名前なども覺えるだらう。小ざかしく生意氣な口の利きやうもするだらう。しかし腹の中ではいつまでもお前は偶像を禮拜してゐる。お前の心は何としても因襲を離れ得ない。お前はタブウを忘れようともしないのだらう。懷の奧の方には黴の生えた親ゆづりの淀屋橋の煙草入を忍ばせながら、人前だけは埃及の金口など燻らして見せたつて誰が驚くものか。

おゝ田紳の日本よ、お前が思想や宗敎や藝術を解しないからつて憤慨する者の方が間違つてゐるか

も知れない。下等な政治運動をやつて代議士にでも成れたらば先づ過分の光榮だと思ふ。しかしお前のやうであつては、政治だつて本當の政治は矢張り駄目だらうではないか。うつかり世界五大强國の一つに數へられて、如何にも田紳らしい誇を見せたのは好いが、或種の問題では忽ち男を下げて未開國と同列に扱はれた。お前がまだ世界の文化生活の仲間入りの出來ない事を、立派に白狀してゐたではないか。巧みに忠君愛國を口にする者どもが、それを國辱だとも思はないのが不思議である。

そこで私はお前に忠告しよう。まさか死んで生れ變れとは言はないが、せめて思ひ切つて田舍者の昔に歸れ。そして小利巧に立ち廻はる事などを一切止して、ぢつと根本的に徹底的に本質的に自分を反省し物を考へ直して見るが可い。そして考へた事を田舍者らしい馬鹿者の馬鹿力を出して、自己の生活の上に實現しようと努めなくては駄目だ。株も相場も金の指環も皆々叩き捨てて了へ。

お〻田紳の日本よ。お前に若しそれも出來ないとあらば、更に敎へよう。子供の昔に歸れ。自ら謙虛の心を持して、八十の手習ひだと思つて師に學べ。本當の學問をして、英佛の如き先輩の步んだ道を示して貰ふが好い。雜誌學問の生學問をしないで、熱心に本氣になつて勉强せよ。そして外來思想が何だとかかんだとか、解りもしないうちから生意氣な口を利くやうな眞似は斷然止めるが可い。

お〻田紳の日本よ。それでなければお前は救はれない、お前の生活改造は覺束ない。旣う先が見えてゐる。

書いてゐるうちに、うつかり筆が辷つて大變な勢になつて了つた。讀み返しては我ながらに苦笑を禁じ得ないが、此筆法ではエッセイといふ文學を四角八面の論文だと心得たり、村學究と言へば朝から晩まで三段論法ばかり振り廻はしてゐる者だと心得てゐる連中には、さぞ讀みづらいことであらう。更に私は調子を變へて、まだ書き足して見たい事がある。

十二 生命力

日本人は西洋人に較べると影が薄い。內的生命の火の熱度が足りないからだ。ちやうど安物の木炭と上等の石炭と程の差がある。する事なす事、すべてが不徹底で微溫で中ぶらりんであるのはこのためだ。何でも、ちよと要領は得るが深さもなければ力もなく、耐久力もなければ持久性もない。淡として水の如しとでも言ふのか。

五年でも十年でも使へる鐵製の肉叉(フォオク)を使はないで、三度々々新しいのに代へるをよしとした杉箸なぞを使ふ所が日本流だ。手巾(はんかち)の代りに紙、硝子戸の代りに紙障子と云ふ流儀で、すべての物に耐久性がない。日本品の粗製濫造は必ずしも商業道德の問題のみではなく、邦人の此特性が然らしむる所であらう。

西洋で日本人を見ると愛想が盡きる。必ずしも皮膚の白色と黃色との差のみを言ふのではない。或

獨逸人が評して schmutzig Gelb と言つたやうに、全く泥色をして血の氣が淡いのだから堪らぬ。脊は低く足は短く、いやに鼠のやうにこそ〳〵はするが、その擧止動作に力もなく重みも無い。男子ですらこれだから、日本婦人なぞと來たら眞に慘(みじめ)な者で、まるで女の影か人形が步いてゐるやうだ。また男女ともに日本人には西洋人に見るやうな活き〳〵した豐かな表情の美がない。生きてるんだか死んでるんだか分らない所は、蠟細工の假面でも見るやうだ。これは昔から武士道なぞといふものが、喜怒哀樂色に現はさずなぞと云ふ抑制的で消極的な下らない訓練をしたのにも因るだらうが、潑溂たる生氣の内に燃ゆる事乏しきをも證してゐる。

歐洲戰爭はあの通りの人命と財帑を費して、一方が片方を打ちのめし叩き伏せ、英語に所謂 to the knock-out といふ所まで戰つた。如何にも毒々しい徹底性がある。殊に戰後、佛蘭西の獨逸に對する態度なぞを見ると特に此感が著しい。然るに日露戰爭に於ける日本は素早く火蓋を切つて、敏捷にぱちぱちと行(や)りはしても、あとは一二年で濟ます。戰は中途半端だ。懸軍長驅、敵の牙城を突くどころか、敵の玄關口にさへも屆かない奉天あたりで切り上げてゐる。單に國力が續かないのみではなく、小利巧なだけに目先が利いて大抵の所で見切りを附けて引上げる。世界戰爭のやうな馬鹿げた眞似は何としても出來ない所が日本人である。敵を生殺しにし半殺しにして置く態度だから、露西亞が若し今日のやうな狀態にならなかつたらば、今頃はまた第二の日露戰爭を繰返して居たかも知れない。

戰爭のやうな野蠻行爲は如何でも善しとして、吾々は精神生活社會生活に於て、何等かの問題にぶつつかつた時、矢張りそれを半殺しにし生殺しで濟まして置く。徹底的の解決に打込むだけの生命力が根本に於て缺けてゐるのである。

日本人は歷史を擔ぎ廻はつて威張らうとするが、日本には昔から本當の宗教が無いではないか。眞の哲學も無いではないか。その宗教らしきもの、その哲學らしきものは、支那人や印度人から得た佛教や儒教の外來思想に過ぎない。實は借物であり燒直しである。人生の大問題に正面からぶつつかつて、徹底的に解決の努力をするだけの生命力なく、馬鹿力もなく、小利巧にまた小手先器用に、生殺し半殺しで濟まさうとする國民に、どうして世界を動かす大思想が生まれようぞ、哲學があらうぞ、宗教があらうぞ。そしてまた人類永遠の幸福を作るべき大發明大發見が出來ようぞ。

今や世界の改造期に當つて、日本人はまたもやこの生殺し半殺し主義を繰返さうとするのであるか。眞面目にならず本氣にならず、妥協と胡魔化しとで濟まさうとするのであるか。

十三　思想生活

窒扶斯菌が人體を侵す、すると其人の肉體の生活力が此邪魔物にぶつつかつて戰ふ。戰ふ所に熱を發する。だから生活力の强い人ほど此熱が高くて、その結果、體質の强健な者が却つて多く命を取ら

れる。本當か嘘かは知らないが、わたくしはいつかそんな話を聞いた。そして面白いと思つた。

生命力の旺盛な人が或『問題』にぶつつかる。問題は卽ち生の躍進の途上に横たはれる邪魔物である。生命力がこの邪魔物と衝突する所に發する熱が卽ち『思想』である。生命力の強い人は此思想のために、磔刑（はりつけ）にされたり火刑（ひあぶり）にあつて命を棄てた例が甚だ多い。そして此思想が更に火花を散らし、或は美しい花を咲かせる所に文學は生れ、藝術は育てられる。

生命力の貧弱な者には、だから、深い思想生活はない。思想の深くない所に大きい文學や大きい藝術が如何して生れよう。わづか一分か二分の土を盛つた植木鉢に、大きい美しい花の咲かう筈が無いではないか。

去年の晩秋の或夕ぐれ、岡崎公園に帝展の作品を見ての歸り、わたくしの書齋を訪れた或友人がさう言つた『今の日本に出來る最高の藝術が、唯あれだけ位の物かと思ふと情（なさけ）なくなる。』

わたくしは答へた『いくら情なくつても、植木鉢に土が足らないんだから仕方がない。そして多く深く培はうとする者は誰も居ないのではないか。たとひ居たつて、そんな馬鹿者を相手にしないといふのが、今の日本人の生活ではないか。上つ走りの利巧者ばかりが多くて。』

大人（おとな）しく數學や哲學の先生をさへして居れば濟むものを、餘計な事を考へたり喋舌（しやべ）つたりして、戰時中、牢屋に投り込まれたバアトランド・ラッセルも、利巧者の目から見れば餘り利巧な男ではないか

も知れない。しかしその近著『改造の根本義』は既に日本にも傳へられて居る通り、たしかに面白い本である。ラッセルは人間のする事すべてを衝動で說明しようといふ、驚くべき簡單な論法で行つた。逍に英吉利の思想家だけあつて、廻はりくどい事を言はない所が痛快だ。

『吾々の活動の或ものは、もしこれが無ければ存在しないものを創作する事に向けられ、他の一半は既に存在せるものを獲得し或は保持する事に向けられる。創作衝動の代表的なものは藝術家のそれであり、所有の衝動の代表的なものは財產のそれである。だから創作衝動が最も大切な役目をなし、所有衝動が最も小さくなつてゐる生活が最上の生活である。』(ラッセル著『改造の根本義』二三四頁)

ラッセルの口吻を用ゐて言ふと、日本人なぞは衝動性が萎縮してゐるのだ。そしてその弱い衝動性がまた最も多く財產といふ所有衝動の方に働き、創作衝動の代表たる藝術活動なぞは旣う脈が上りかけてゐる。ラッセルに言はせるとこれは最惡の生活で、それが卽ち田紳の田紳たる所以だ。

單に文學や藝術ばかりではない、今日では政治や外交も、昔のやうに事務や駈引でないといふ所まで進んだのが世界の大勢だ。勞働問題は工場法などでは解決が附かず、國際聯盟は外交文書の往復だけでは濟まなくなつてゐる。文化生活の一切の活動は、思想生活そのものを土臺にしてゐるからだ。日露戰爭前後までの日本の外交を拙だと言つて非難したのは、其時々の日本の新聞紙ばかりで、私達は屢次外國の批評家が以前の日本外交の巧妙を稱讃してゐるのを見た。さうだ、巧妙であつたのは駈

引であり、敏捷であつたのは事務に過ぎなかつたからだ。例の小利巧者の小手先の器用が可なり効を奏してゐたからだ。今度の講和會議に於ける失敗を見て、日本人が宣傳運動に拙だつたからだと評した人もあるが、思想の無い者が何を宣傳するのであるか、宣傳しようにも宣傳する思想が無いのではないか。言ふべきだけの腹もなければ頭もない者が、口だけもぐ〳〵させて見たつて始まらないではないか。

公衆の前に長廣舌を弄するなぞは惡徳だ、と心得たのが日本の習慣であつた。すべてを四疊半裡で胡魔化す事には、驚くべき手腕とかいふものを有つてゐる。集會で議決するといふのは表面だけの話で、實は少數の陰謀者がちやんと密室裡で拵へ上げた膳立てに過ぎない。何しろ幾百年來『口は禍の門』だと心得て生活して來た日本人である。專制政治のもとに言論の自由を奪はれながら、幾世紀間少しもそれを苦痛だと思はなかつた不思議な人種である。その結果として第一に日本語そのものからして、公開演說の言葉としてはまるで發達してゐない。この點では世界で最も多く民權自由を重んじたアングロ・サクソン人種の國語が一番發達してゐる。ゼントルマンを養成しようと云ふ昔風の劍橋、牛津なぞの大學が、最も大切な訓練として行つたものは討論であつた。日本では思想發表のための演說や文章を、主要な課目として取扱つた學校が、過去にも現在にも一つだつてあるだらうか。今日ですら餘り演說會なぞで喋舌ると、敎師のお覺えが芽出度くないとさへいふではないか。物は必要のな

い所に發達はしない。日本語が演說に適せず日本に雄辯家が少いのは、その必要が無かつたからだ。英語なぞに較べると此點は實に恥かしいと思ふ。(本卷附錄英語講演『英語の研究』參照)

日本語そのものが既に此點で改造を要するのである。其日本語を使つてゐる日本人が、巴里の眞中なぞへ行つて外國語で宣傳運動を遣れと言つたつて、それは遣れと言ふ者の方が無理かも知れない。

思想は財布と反對で、外へ出せば出すほど中味は豐富になる。發表しないでゐると源泉が涸渇して了ふのだ。この點から見ても、日本人の思想生活は貧弱ならざるを得ないではないか。

日本人が本當の意味での讀書をしないことも、思想生活の貧弱な一原因だらう。讀書は物識りになる爲なぞと思つてるやうな事では迚も駄目だ。なぜ文學書のやうな無用の書を多く讀まないのか。

十四　改造と國民性

事なかれ主義の德川三百年の政策のために、日本人は骨拔き鰌になつて了つた。小利巧な者がます小利巧になつて、馬鹿者の存在を許さない國が出來た。筆さきだけの技巧に優れた者が藝術界に覇を稱したり、演說一つ遣者に行れない者が政黨に幅を利かす不思議な立憲國が出來て了つた。

わたくしは德川政策のためだと言つた。なぜかなれば、戰國時代なぞのことを考へて見ると日本人はもつと煮え切つてゐたからだ、もつと徹底的で、胡魔化しではなかつたからだ。

しかし概括的に言へば、日本人には何と言つても內生活の熱が足らない。これは昨日今日のことではないのかも知れぬ。それは和歌俳句を中心とし、簡單な物語類を主要作物としてゐる日本文學が、明らかに之を證してゐるではないか。わたくしは嘗て東京大學の芳賀教授が、我が國民性として樂天洒落、淡白瀟洒、纖麗纖巧等を說かれたのを讀んで、如何にもと思つた。（芳賀教授著『國民性十論』自一一七頁至一八二頁參照）。過去と現在の日本人は、確かにさういふ特性を有つてゐる。さういふ日本人のうちから、今いくら騷いだつて、急にトルストイやニイチェやイブセンは出ない。況や沙翁やダンテやミルトンが出るものか。

世間には、これは國民性だから仕方が無いと云ふ論者がある。一種の宿命論者のやうに、仕方がないと言つて了へば、それこそ仕方がないのである。絕對に動かしがたき不變の國民性といふやうなものが果して有るか無いかは別問題として、さう云ふ國民性そのものに大改造を加ふべく努力することが、新時代に生きる者の任務である。改造々々と叫びつつ、ただ社會問題だ、婦人問題だ、何とか問題だと騷いで見たつて、それは寧ろ本末顚倒ではないか。國民性そのものを改造しないで、吾々の生活改造が出來るだらうか。

わたくしはもつと多く讀めと言ふ、もつと多く働けと言ふ、もつと多く喋舌れと言ふ、もつと多く美味い物を喰へと言ふ。そしてもつと〳〵馬鹿になつて深く考へ込めと言ふ。さういふ事が先づ生活

改造の第一歩であらねばならぬ。根本を培はずして何が出來ようぞ。

わたくしは今更こんな陳腐平凡な說を列べ立てることを、恥づかしいとも殘念だとも思つてゐる。わたくしは決して得意になつて之を書いてゐるのではない。

憶ふ、千八百六十年の春、ジョン・ラスキンはその不朽の大著『近代畫家論』の筆を擱いた。千八百四十三年はじめてその第一卷の稿を起してから十七年、この時にはたしか第五卷が出來あがつたのであつた。その十七年間には『建築の七つの燈』も書いた、『ヹニスの石』も書いた、『ラファエル前派』を論じて當時の新藝術のためにも氣を吐いた。その他公にした議論や講演は無數であつた。かれが不斷の努力は遂に酬いられて、その頃藝術批評家としてのラスキンの名聲は英國の騷壇に重きをなしてゐた。それはラスキンが年四十歲の春である。

突如として彼は目を轉じた。しばらく『藝術の宮』を離れ『象牙の塔』を出て、社會問題と經濟問題を論じ、先づ最初にコオンヒル雜誌に四篇のエッセイを揭げた。それが『此後至者にも』の名著である。このあひだ私の友人石田憲次君が忠實にそれを譯して、同じく石田君の筆に成つたカアライルの『過去と現在』と共に既に世に行はれてゐる。

ラスキンは此四篇の文に於て當時の風潮に反抗して、富の如何なるものであるかを說いた。靈の生活を說いて富と人生との關係を示さうとした。ラスキンは藝術の民主化、社會化といふ事を考へ、

社會が無理解であり醜惡である時に、ただ獨り藝術を語る事の無意味なるを感じて、此四篇を草した。しかし世間は相手にしなかつた。俗衆はあらゆる嘲罵を以て之に酬い、本屋は遂に續稿の出版をすら斷つた。以後かれが勞働問題のために書いた色々の著書と共に、當時の俗衆からラスキンは遂に『危險なる革新論者(デーンジャラス・インノヹイタア)』といふ頗る有難からざる名稱をすらも受けねばならなかつた。

しかしラスキンの經濟說には千古の卓見があつた、永久の眞理が含まれてゐた。これは經濟問題に對して全く何等の素養も理解も無い私なぞがいふよりも、英國現代の經濟學者として一方の雄を稱してゐる、ホブソン氏の研究『社會改良家としてのラスキン』の書によつて知られんことを私は讀者に勸める。私もこの正月は四十歳になつた。近世の英國で最大の思想家の一人であつたラスキンが『此後(このゝち)至者(のもの)にも』を書いた共四十歳である。しかし生來の鈍根と不勉强とで私にはろくな仕事は一つも出來ない。ラスキンのやうな立派な文章も書けなければ、あんな大きな頭で自然と人生を觀照する力もない。矢張り一個の村夫子に過ぎない。幸ひ身の程は知つてゐるから、矢張り文藝の研究といふ小天地にいつまでも燻つてゐる積りである。積りではあるが、それでも今の日本の社會を見て居ると時々腹立たしくなる。こんなことで果して何時(いつ)になつたら大きい文學や藝術が生れるだらうかと思ふ。もつと根本が好くならなければ迚も駄目だ、と柄にもない憤慨をするのもそのためだ。私なぞが『象牙の塔』からいくら飛び出して見たつて知れたものだとは百も承知してゐながら、思想を危險物扱ひにし

たり、演劇を河原乞食の遊戯だと心得たり、保守頑冥の舊思想を脱し得なかつたりする連中を見ると、全く腹の底から腹が立つ。ラスキンなどの百分の一、千分の一、否な萬分の一の事も出來ないことは知りつつも、ちよと『象牙の塔』から首だけ出して、こんな物も書いて見たくなるのである。

十五　詩三篇

わたくしは理窟なぞを列べたくない、それよりは詩を語らう。

詩三篇、みなブラウニングの作だ。その根柢になつてゐる中心思想は同一のもので、この詩聖の剛健にして勇猛な、そしてまた極めて壯快な人生觀がその中に現はれてゐる。

『青春と藝術』"Youth and Art" には、女の音樂家と男の彫塑家とが青春の時代、心ひそかに戀しながら互に狐疑し逡巡して相思の情を打明けずに終つた末路の慘を語る。語るは女、若かりし昔を憶うて男に向つて怨ずる言葉である。

まだ修業中の若い彫刻家が獨り製作をしてゐると、道路を隔てて向うの家には女の歌とピアノが聞える。窓越しに女の姿はちら〳〵と見えるが、まだ女には會はない。それが不思議にもこの寂しい青年の心を唆るのであつた。女の方でも、男が若しこちらへ花でも投げて呉れたらば、目で答へることが出來たものをと思つた。春が來ても二人の心は寂しかつた。女は前年の秋にこの倫敦へ來て、これ

から大に樂壇に名を成さうと修業の最中であつた。

纒綿の情を語らずに二人が躊躇してゐる間に歲月は經つた。男は伊太利へ美術修業に行つたが、のち大に名聲を揚げて王立美術院の一員に列せられ、授爵の榮をさへ荷ふ程になつた。

女もまた後には一かどの音樂家となつて交際社會に持囃されたが、其間に或る侯爵が想を懸けて、女の躊躇するのを無理やりに結婚して了つた。

この侯爵夫人と、今は聲名一代に高き彫刻家とは、交際場裡で顏を合はした。その時女は處女のやうに恥ぢらつた。

世間はこの二人の藝術を巧いと云つて褒めた。しかし二人の生活は充實してゐなかつた。嘆いても深くはなかつた、笑つても腹の底からは笑へなかつた。彼等の生活は繼ぎ剝ぎであり、斷れぎれであつた。

Each life's unfulfilled, you see;
It hangs still, patchy and scrappy.
——*Youth and Art.* XVI.

彼等ふたりの藝術には、だから力が缺けてゐた。何か足らないものがあつた。斷行すべきを斷行しなかつたからだ。奮つて往けば鬼神も避くべきを、彼等は往かずに終つたからだ。今となつて靑春の

其機はとこしへに失はれた。

また羅馬古詩人の句を取つてブラウニングが『神はしか思ひ給はじ』"Dis Aliter Visum"と題した詩篇にも、同じ意味がある。それは怒れる女が昔の戀人を責むる言葉である。十年の昔ちやうど今宵のやうに濱邊で二人は會した。女は若かつたが、男はずつと年を取つてゐただけに思慮分別といふ餘計なものを持つてゐた。一たびは結婚を求めようとしながら、男は色々の事を考へて躊躇をした。女がまだ世間知らずであるとか、自分とは年の差が多すぎるから未來が案じられるとか、下らない取越苦勞をして、結婚を斷行するの勇が男の方に無かつた。話はそれ切りになつて了つた。十年後の今日、男はなほも獨身でゐてバレエの踊子に關係してゐる。女の方は愛のない結婚をして今は既に人妻である。男の方の思慮分別、さういふものがあつたばかりに、この兩人の生活が永久に破壞されたばかりか、實は今連れ添ふ四人の魂はそのために滅ぼされてゐる。男はそれで思慮分別をした積りであらうが、『神はしか思ひ給はじ』、と詩聖は表題にその意を示したのである。

この二篇の詩を誦する人は、直ちにまた作者ブラウニングその人の傳記の一異彩を想ひ起すであらう。

さすがに詩人ブラウニングは達人であつた、信念の人であつた。自分の生活を立派に眞面目に藝術化するだけの力があつた。いつも人としての生活と藝術家としての生活とを二重にしては居なかつ

た。かれの生涯の歴史には、いはゆる自己分裂と云ふやうな慘な影を殘さなかつたからだ。はじめ女詩人イリザベス・バレットと相思の仲であつたが、イリザベスの父は二人の結婚を許さなかつた。そこで二人は勝手に結婚式を擧げて佛蘭西から伊太利へと驅落して了つた。たとひこの病弱な女詩人は良人よりも短命であつたとはいへ、ブラウニング夫妻の伊太利に於ける十六年間の結婚生活は、この上もなく樂しい幸福なものであつた。三たび妻を代へる不幸に遇つたミルトンと對照して、古今の文藝史上の佳話として傳へられる程の幸福なものであつた。夫妻二詩人の詩集を繙き、またふたりの戀ぶみを集めた『書翰集』二卷を繙けば、この結婚生活の幸福が雄々しいブラウニングの人生觀に基づいてゐる事に、誰しも氣附くであらう。煮え切らない取越苦勞や思慮分別をしてゐるやうな利巧者に、あの驅落はとても出來ない藝當であつた。

さきに擧げた二つの詩篇よりももつと痛快にもつと大膽に、如何にも思ひ切つたブラウニングの人生に對する態度を見るべきものは『立像と胸像』"The Statue and the Bust" の一篇である。宗教詩人として思想家としてのブラウニングを論ずるとき、道學者風の評家が時々解釋に苦しむのは即ちこの一篇である。

話は三百幾年の昔に歸る。伊太利フロレンスの名家リッカルディ家に新夫人が迎へられた。高樓の東の窓、侍女にかしづかれて廣場を見下してゐたのは新夫人である。ふと見ると、ゆるやか

に馬をうたせて行く白馬銀鞍の貴公子が目に附いた。
『あの氣高い馬上の殿御はどなた』、と顔赧らめた新夫人が訊く。『ファアディナンド大公様』、と聲をひそめて侍女が答へる。
道を行く大公の方でも不審顔に窓を見上げて、彼女は誰ぞと訊いた。『このたび輿入あつたリッカルディ家の奥方』、と供の者が答へる。
戀人の目を以て大公が窓を見上げた時、ふと目ざめた人のやうに新夫人の目も輝いた。――夫人の『過去』は眠であつた。その生は此時より始まつた。愛に輝く目と目が見かはされた其刹那から、女は始めて生きたのだ。
その日の晩、新婚の饗宴が開かれて、大公も席に列した。花やかな新夫婦の近づくのを大公は見た。その一瞬、大公と新婦とは顔を合はした。その頃の宮廷の禮として、大公は臣下であるリッカルディ家の新夫人に接吻(キス)を賜はつた。
それはほんの瞬時であつた。其間に二人が言葉を交はしたとは思はれないが、さき程から頭をうな垂れてゐた新郎だけは、何か一こと耳に挿んだやうに思つた。
その夜、新婦新郎が寢室の燈のかげに相對したとき、男は言ひ渡した。死ぬまで家の外へは一歩たりとも出てはならぬ。ただ僧院で記録を司どる人のやうに、東の窓から浮世を見おろす事だけは許し

て置かうと。
『殿が仰せの儘に』と口では答へたが、新夫人の胸には別の答があつた。此惡魔と、また二夜と添寢をするものか。夕の祈の鐘が鳴る前にここを飛び出して了はう、お小姓姿に身を扮せば逃げ出すに譯はない。――しかし明日は可けない（さう思つた時、女の眼は曇つた）。折角父上も來て居られることだ。父上のためにもう一日を延ばさう。唯の一日だけである。大公のお通りになるのは明日も確かに見られよう。

床の上でさう思つて女は寢返りをして眠つて了つた。誰でもさうだ。事を決して置いて、明日はと言つて眠て了ふ。この新夫人もそれであつた。

その夜大公の方でも考へた、たとひ幸福の此盃が靈と肉とに如何に高價からうが廉からうが、ぐいとばかりにそれを飲み干さで濟まさうやと。あくる日、殿中に出仕の新郎を召して、ベトラヤに在る自分の下屋敷に新夫人を請じて新婚の樂しい日を送つては如何にと勸めた。新郎は體よく斷つた。身に餘る光榮とは存ずれど、南國生れの妻には北の山風が身の毒とあつて、醫師は外出を禁じた由を答へて置いた。

大公も强ひてとは言はれず、其儘に話を切つたが、さらば今晩でも非常手段を斷行して、あの新夫人を誘ひ出さうと心の中では思つた。然し待て、今晩は止さう。佛蘭西からの使節を迎へねばならぬ

から差支へる。仕方がない、一日延ばさう。そして彼處を通つて窓の姿を見上げるだけで一日は我慢しよう、さう考へた。

如何にも、其日また廣場を通つて窓を見上げた時、愛に輝く大公の眼ざしを、――心で與へる接吻のその口もとを、窓の女は見逃さなかつた。

明日は明日はと言つて、かうして躊躇つてゐると、一日が一週となり、一週が一月になり、一月が一年に延びる。煮え切らないで狐疑し逡巡しつつ月日は過ぎ行く。愛の熱も冷めよう、老境は身に迫らう。まあ／＼と言つて胡魔化しの月日を送り年を迎へてゐる。生活の新境はいつまで經つても拓かれない。囚はれたる身は東の窓の格子の蔭から戀人を眺め、廣場を行く大公は相も變らず窓の女を見上げて其日々々を、明日は明日はと言つて過して行く。不徹底な胡魔化しと妥協とで、世間體を繕ふ幾年かはかくの如くにして過ぎた。

夫人は或日、自分の髮に幾すぢかの銀髮を見とめた。そして『青春』の去るを知つた。頰は痩せこけて、額には皺があつた。今まで言葉もなく鏡に對してゐた夫人は、急にロビアの陶工を呼んで自分の胸像を造れと命じた。そして若き日の名殘の面影をとどむべく此胸像を、ちやうど廣場を通る戀人を見おろす位置に置かせたのであつた。

大公もまた嘆じた、『青春の――自分の夢は消えて行く。その記銘を殘して置かう』。そしてボロオ

ニヤの名工を呼んで、自分の馬上の姿を黄銅の立像に造らせていつも通る廣場に置かせた。
この二人の『立像と胸像』とは地上に殘つてゐるが、ふたりは地下にあつて、今や神の最後の審判を待つてゐることだらう。今日(けふ)は明日(あす)はといつて『努めんと欲する懶惰』の其日々々を送り、遂に人生の一大事を決行し得なかつた彼等ふたりを、神は嘉し給ふまじ、と詩人ブラウニングは言つてゐる。
詩人は言ふ『かう言つて咎める人があらう。延ばして居たからこそ好かつたのだ、それを行れば罪惡になるではないか』と。この敬虔な宗教詩人は、決して人妻との道ならぬ戀を奬めてゐるのでない。ただ人生は試練である。其試練は善を以て行ふ事が出來ると同じく、惡を以て行ふ事も出來る。勝負事をするのに何も貨幣を賭けるには及ばない。數取りを張つてでも可いから、眞劍に本氣になつて行るのが本當の勝負だ。たとひ目的が罪惡であるにもせよ、だらけた胡魔化しの生活を送る事は、人生の第一義を誤るものだ。衝動の生命、躍進の生命、それを外にして人生に何の意味があるか。
『立像と胸像』の作者は此意を述べて、更に最後に、古詩人ホラティウスの歌集にある名句を以て結んだ。曰く『他人事(ひとごと)ではないぞ』De te fabula !
西洋の書物には屢出る此名高い警めの言葉は、マルクスの『資本論』の中にも在つて、日本の飜譯

者によつて誤譯されたものである。

十六　尙早論

ブラウニングは道德上のアナアキズムを敎へたのでも何でもない。人生には、世間なみの形式道德や法律家の理窟で拵へた法則よりも、もつと大きい、もつと深い、而してもつと高い道德があり法則がある。そこに眞の生きた人生があり、生きた宗敎があり生きた道德がある。さういふ第一義的生活に到達するまでは、吾々は矢張り事務家であり、賢母良妻であり、學問研究職人であり、相場師であり道學先生である。そして『人間』ではないのである。その本當の『人間』を摑まうとするところに文藝の意義があり、藝術家の使命が在る。

おつと、またしても文藝の方へ筆が辷つた。さういふ事を今書く積りではなかつた。

ブラウニングは惡でも好いから、行らうと思ふならば行れと言つた。煮え切らないで思慮分別をして狐疑し逡巡して、胡魔化しの微溫的な其日々々を送る事を何よりも大なる罪惡だとした。ところが世間には尙早論者といふのがある。日本には殊に多い特產物である。普通選擧は結構だがまだ早いといふ、勞働組合も贊成だが今の日本の勞働者にはまだ早いといふ。婦人參政も惡くはないが今の日本婦人には早過ぎるといふ。問題が起る每にこの尙早論者といふ利巧者が邪魔を入れる。何でも急がず

にといふ、まあ〳〵と抑へる。天下は頗る太平かも知れないが、さういふいぢけた妥協や姑息の態度では、生活改造が開いて呆れるではないか。

ブラウニングは惡でも好いから行れと言つた。また昔からの諺も善は急げと敎へてゐる。然るに尙早論者は、善にも急ぐなといふのである。明日は明後日は、明年は、十年の後には、さういつて遂に殘すぢの銀髮を明鏡のかげに見出したリッカルディ家の夫人の轍を履まうとするのである。自分だけが履むのならば御勝手だが、他人まで履まさうといふのだから堪らない。

水泳は好い、しかし年の行かない者には危い、まだ早いまだ早いを繰返して、何時まで疊の上で水練をして居たつて泳ぎの出來る日はあるまい。何故水に投り込んで溺れさせないのだ。溺れた經驗のない者に泳ぎが出來るだらうか。淺い所でぺちや〳〵と、事なかれ主義をやつてゐて、それで泳がうといふのは馬鹿な利巧者のする事である。水泳に關して私の親が尙早論者であつたばかりに、頭の禿げる今に至るまで、私は泳ぎを知らない。そのうち足を一本切り取つたから、私といふ者はもう永遠に泳ぎの興味を知らずに終るのである。

溺れなければ泳がれない。壁に衝突つて見なければ、出口は見付からない。暗中に靜思默坐してゐる事は安全第一かも知れないが、それでは何時まで經つても光明の世界には出られないではないか。徹底的に誤つた人でなければ徹底的に悟る事も出來ない。日本でも昔から高僧とか大德とか言はれた

人のうちには、烈しい道樂者があつた。修業中私生兒まで拵へた聖オオガスティンにして始めて、あのやうな宗教的經驗をする事が出來たのではないか。

無鐵砲に、ぶつかつて碎けろといふのは田舍者式馬鹿者式であつて、利巧な日本人の多くが爲すを欲せざる所である。いつ如何なる場合にも此國では尙早論が多數を制するのはその結果である。

內に燃ゆる生命の火の熱が弱く影が薄く、創作衝動の力の乏しい日本人は、動かうにも進まうにも生命力が足らないのである。微溫で姑息で常識的で、其日々々を胡魔化す手際は、たしかに事務家風の思慮分別とも見えるだらう。それで天下は頗る泰平無事ではあらうが、それにしても、あの聞き飽くほど聞かされた改造を叫ぶの聲は空洞の音なのか、はたまた他國人の口眞似か。

俗に、窮すれば通ずと云ふ。動かうにも進まうにも生命力の足らない者は、窮するところまでも行かない代り、通じもしないのだ。因襲と姑息とで固めて安全第一の道を取つてゐるのだから堪らぬ。たまに動かう進まうとする者が出ると、皆が寄つて掛つて危險思想家だの、外來思想の宣傳者だのと、色々のけちをつけて叩き潰さうとする。いくらひよろ〱ぐら〱の連中でも、これが多勢に無勢なのだから適はない。よほど根氣の強い馬鹿でも出ないと續かなくなる。面白い國である。

政府を官僚的だなぞと聞いた風な事をいふが、日本は民衆そのものが既に官僚的なのではないか。實際今日の文明國のうち、日本のブルジョアぐらゐ官僚的なブルジョアは他に例が無い、と私は斷言

して憚らない。

生命の泉の干乾びた者が早く老いるのは當り前だが、日本ほど老人の幅を利かす國はまたとあるまい。教育界などには二十歳臺の老人が決して珍らしくないのは事實だ。會社員になつて資本家の走狗になると、學校を出てまだ間もない男がもう老練になり老猾になり老巧になつてゐるから驚く。樹木が先づ梢から枯れ始めるやうに、日本人も亦頭の方から老い込んで行く。ブラウニングのやうに七十七歳にもなつて『至上善（スンムム・ボヌム）』の歌に少女の接吻を讃美したり、こないだ死んだ佛蘭西のルノアアルのやうに、よぼ〳〵の老人になつてあの通りわか〳〵しいみづ〳〵した繪をかいて居たら、日本では何と言はれるだらう。『よい年をしやがつて』といふ日本人の常套語を耳にする毎に、わたくしは常（いつ）もかういふ七十歳八十歳の青年の貴さを想ひ浮べざるを得ない。『まだお若い〳〵』と言つて『若い』と言ふ言葉に、甚だしい侮蔑の意をさへ寓するのが日本人である。是も國粹の一つか。

觀照享樂の生活

一　三面記事

日ごとに新聞の社會面を賑はしてゐる切つたはつつたの慘話は言ふまでもない、物識り顔の人たちがまたしても痴情の果かなぞと嘲つて濟ます男女關係から、詐欺泥棒の小事故に至るまで、多くの人人はそれを愚にもつかぬ暇つぶしだと思つて讀んでゐる。しかし若し私どもがこれら事實の表面から更に一歩深く突込んで、それを人間生活上の意義ある現象として考へ、思索觀照の對境として見るならば、そこには人をして戰慄せしめ驚嘆せしめ憤激せしめるに足る、多くの問題の暗示がある事に氣附くだらう。若しもソフォクリイズや沙翁やゲエテやイブセンが用ゐたあのやうな絶大の表現力を借り來るならば、この市井の雜事の一つ〳〵が皆悉く藝術上の大作となつて、自然と人生との前に大なる明鏡を揭げることになるのだ。陳腐なデモクラシイ論などを聞くよりも以上に、更に多く、またより深く私どもを啓發し反省せしめるものが、此三面記事のうちに特に屢次見出される。そこには枯淡の學理でもなく、道徳說でもなく、また法律の解釋でもない生きた儘の、ちよと突けば血の滲み出るや

うな『人間』そのものが動いてゐる。『現代』や『社會』が赤裸々に暴露されてゐる。動もすれば人間の自由意志や道徳性をさへ壓迫し蹂躙し去らんとする『運命』の恐ろしき姿さへ、まざ〳〵とそこに現はれて私たちを威嚇してゐるではないか。

ところが普通の三面記事とちがつてそれらよりは少し強く、また比較的眞面目らしい態度で世人が注目する事件もある。例へば某女優の自殺とか、或文士が妻子を棄てて他の婦人と同棲したとか、貴族の娘が運轉手とイロオプしたとか、さういふ話になると、かの尋常茶飯の事として雲煙過眼視されてゐる一般の三面記事とは稍趣を異にした眞面目な世評にのぼる事さへある。しかしこれらとても單に問題の當事者が、平素社會との關係に於て世の注意を惹き易き地位に在つたがために過ぎない。世人の之に對する態度が極めて輕浮で、從つて批評そのものも例の因襲道德とか利害問題とか法律上の小理窟などから割り出した、內容の甚だしく空疎貧弱なるものである點に於て變りは無い。

昔は悲劇の主人公は、王侯將相の如き外的表面的の意味で普通以上の人であるとか、或は英雄美人の如く個人として拔群の力ある者とかでなければならぬやうに考へられた。しかし近代に於てイブセンが此謬見を一掃してからは、裏店の女房も大名のお姫樣も、同じ內部生活を營む一個の人間として一樣に取扱はれるに至つた。價値顚倒や平等觀の大きい新しい見かたから云へば、カイゼルの末路も山師の失敗も、根本義に於て無差別と見て差支はない。其人の地位や名聲などによつて批評の態度を

異にしてゐるのは、事それ自らが既に批評者の不眞面目なるを證してゐるのは言ふまでもない。

かういふ場合に引合に出す事は故人に對して甚だしく禮を失する嫌はあるが、明治大正にわたつて常に文壇の一方に雄視してゐた某氏が、學校の講壇を去り妻子と離れて某女優と共に身を劇界に投じた時、世人の之に對する批評の態度が如何なるものであつたかは今なほ私どもの記憶に新なるところだ。私は氏の生前ただ僅かに一面識あつたのみだから、個人としての氏に就いて多く知るところはない。ただ所謂文士肌とはちがつて身を持すること極めて謹嚴なる紳士であつたことは耳にしてゐた。またその識見に於ても學殖に於ても文章に於ても、確かに當代得易からざる才人であつた事はその述作によつて天下萬衆の認むるところであつた　殊に氏の明敏なる理知を以てして若し世の俗衆のなすが如く利害得失の打算などによつてのみ動くものであつたならば、決してあのやうな行動には出でなかつたであらう。わざ〳〵形式道德を蹂躙して衆愚の反感を招く事をも敢へてしなかつたであらう。而も歳四十にして人生の行路に行詰つた氏は、痛烈なる苦悶懊惱を重ねて遂に自らの行かんとする所に獨往邁進した。思ひ切つて自我の建設と生活改造とに向つて驀進したあの眞摯なる努力を見て、道樂者が藝者に引つかかつたと同一視してゐた者が、一ぱし物識り顏の人たちにも多かつたで はないか。あの時の氏の內的生活の波瀾動搖に同情と理解とを持つた批評を、私は不幸にして世の識者と稱する人たちから多く聞くことを得なかつた。

すべてかくの如き場合に、人は何故(なぜ)生きた人間が生きた人間を見る目で見ることが出來ないのであるか。囚はれたぎごちない因襲道德や、或は冷やかなまた不自然な堅苦しい小理窟なぞを持出さずに、もつと素直にもつと正直に、自己と對象との間に人としての生命の共感を見出すことが出來ないのであるか。善惡正邪の彼岸に立つて今少しく高い今少しく大きい眼で、虛心坦懷に人生の事實を徹底的に觀照する事が、自己の生活內容を豐富ならしむる唯一最大の道だとは氣附かないのであるのか。

二　觀照とは

動的生命の脈の上りかけた老人にあらざる限り、人の一言一行には絕えず跳躍し奔騰し流動して止まない生命の力が籠つてゐる。若し人間が論理や利害や道德でのみ動かされてゐるものならば、人生には煩悶もなく苦惱もなくて天下は頗る泰平であらう。その代りまた月の世界か何かのやうに、熱もなければ水氣もないひつ乾びた單調な『死』の領域と化して、わたくしどもは折角人間に生れながら生き甲斐もない五十年の生を送らねばならぬ。深くも味はへば味はふほど新味の盡きない複雜紛糾した此人生に意味のあるのは、何としても道學先生や理窟屋なぞの思ひ通りに行かない所があるからだ。人生のあらゆる姿態を味はひ、製作のうちに此動的生命の核心を捉へようとする事、それが文藝の發足點である。

人間は如何にも道徳的存在（モラル・ビイング）であり、また合理的存在（ラシヨナル・ビイング）でもある。然しそれが決して全部だとは言へまい。生命力の奔逸するところ、時には道徳の埒外にも飛び出せば、理知の命ずるところにも反く。利害の關係を尻目に掛けて生命の奔騰に身を躍らす事もあらう。そこに眞の生きた人間味が現はれる。この人間味を捉へようとする時、換言すればありの儘の大きい人生を摑み之を味はうとする時、わたくしどもは最早道徳とか理窟とか法則とか利害とか常識とか云ふ局部的な眼鏡を使つては居られなくなる。それでは人生の全圓を見ることが出來ないからだ。健全と不健全と、善と惡と、理と非と、これら一切の價値判斷を超越し脱却して、純眞なる自己の生命力そのものを以て、自己以外の萬象に對するだけの眞摯なる態度がなくてはならぬ。それは即ち一切を理解し一切に同情せんとする努力であらねばならぬ。何者かに囚はれて固くなつてゐるやうで、どうしてこの深い／＼人間味の底に徹する事が出來ようぞ。

　昔から多くの天才が人生の全圓を見ようとした時、そのどん底に希臘の悲劇作者は『運命』を見出した。沙翁は『性格』を見出した。イブセンは『社會』の缺陷を見出した。前世紀のロマンティシストは『情熱』を見出した。自然主義の作家は『性慾』を見出した。一方に『神』を見出した彌兒敦（ミルトン）があれば、他方には『惡魔』を見出したバイロンがあつた。ユウゴオが『愛』を見出せば、ボオドレエルは『惡の華』を讃美した。作家の個性と時代思潮の相異によつて、色々の作家は色々のものを見出

したのである。そして此色々のものは理窟でも行かなければ道德でも行かない、人生の本質的な事實であつた、矛盾と缺陷に滿ちた人生のすがたであつた。そこには淸新强烈な生命力そのものが現れてゐるのだ。三面記事の裏にも大詩篇大戲曲の底にも、同じやうにかういふ力は動いてゐる。

英吉利のマシユウ・アアノルドは、評家としても詩人としても、すぐれた天分を有つた人であつた。しかし今日からその述作を見れば、クラシック風の詩篇は兎に角、評論の方はさほど偉いものとも思はれない。ただ此男は非常に文句を拵へる事が巧みであつた。色々の巧い文句を自分で考へ出して自分で隨所に之を繰返し利用し、遂に人口に膾炙せしめた手際は偉いものである。その中に詩を論じて『人生の批評』と言つた言葉がある。また希臘のソフォクリイズを詠じて『人生を凝視してその全圓を見た』と述べたのも名高い。今では文界の通語となつてゐるこれらの文句のうちに、讀者は私が上來述べたやうな意味を見出されるであらう。

三面記事でも何でも人生のすべての現象に對するとき、いつも利害關係ばかりを土臺にして見る人がある。名づけて市井の俗輩といふ。また法律といふ道具の萬能を信じてゐる人たちも多い。公等は先づ去つてゴルスワアジイの戲曲『正義(ジヤスティス)』をでも繙き給へ。生きた人間の上に機械の如く法律が働きかける時、そこに如何なる慘狀を呈するかが解るだらう。若しそれかの白髯を撫し皺面を歪めて咄々吃々として道を說ける人々に向つては、生ける道德に流動進化のある事をも考へて貰ひたい。世間に

事ある毎に、何かといへば懐に持合はせの一種の尺を當てがつて見る。それにうまく嵌まらないものは無雑作に排斥するといつたやうな、輕佻浮薄な態度からして先づ改める必要があらう。殊にまた其ものさしが天保錢時代その儘の物でなければよいのだが。

繰返して言ふ。善惡正邪利害得失の彼岸に立つて人生の全圓を味はひ、一切の人事に興味を失はざらんとする者は、文藝家の觀照生活である。そはやがて惡を咎めず邪を憎まず、すべてを包容せんとする神の御心である、聖者の愛である。何等の成心を抱かずして流動無礙の生命の共感によつて、人間その者に温かき同情と深き理解とを失はざらんとする點に於て、文藝家は廣い意味での、ヒユウマニストである。道學先生の夢想だも及ばざる大なるモラリストである。この深い人間味、この大きい道德、それを離れて眞の文藝は存在しない。文藝が存在しないばかりか、眞に意義あり内容ある生活も成立し得ないのである。

熱意を傾けて人生を愛する者は、深く之を知らうとする、味はうとする。その盃の底の最後の一しづくまでも飲み干し味はひ盡くさうとする。恐るべきも惡むべきも憂ふべきも醜きも、それがすべて大なる人生の事實である以上、これに面をそむけて尻込みをするやうな卑怯な態度は取つて居られなくなる。わたくしどもは固より賢人でもあり善人でもありたい。しかしまた思ひ切つて馬鹿にもなり惡魔にもならなければ、一切を觀照してその眞味に徹する事は望み難い。掬めども掬めども盡きせ

ぬ深い生命の泉は竟に味はれずに了るだらう。
　オセロが嫉妬のために妻のデズデモオナを殺した、自分も死んだ。沙翁は之に向つて何等の價値判斷をも下してゐない。ノラといふ女が夫ヘルマアの家を飛び出した。イブセンは之に何等の道德的批判をも下さなかつた。唯大なる此事實を見よと言つて公衆に示した。法則や道德を盾に取つて健全とか不健全とか、正とか邪とかかれこれ言ふよりも先に、先づ一個の人間として此生きた人生の事實に面して心を動かされない者があらうか。換言すれば自分の心胸に皷動してゐる生命の波動に新しい震動を感じない者があるだらうか。その力に感じその力に動かされるといふ事、それによつて眞の人間味に徹する事が出來るのではないか。正しいか正しくないか、理か非か、善か惡か、それを理知や法則に照らして考へるよりも前に、先づ率直に眞率に自分の心胸を開いて其現象を受入れる。たとへば一家族みな流行感冒に罹つて遂に兩親は死し、二人の孤兒が病床に泣いてゐる、それを見て正邪善惡の批判を何人も下し得ないと同じやうに、ただ恐るべき人生の事實として、すべてを感ずるといふ態度が、人情のある人間の人間らしき態度ではないか。毫も價値判斷に煩はされない點に於ては、科學者の研究的態度も文藝家の觀照も、大差なき域に達し得るものだと私は信じてゐる。
　春は花咲き秋には紅葉する。それが善いか惡いかは別問題だ。金が儲かるか儲からないかも問ふところではない。ただその花を味はひ紅葉を眺むる事によつて之を感ずる事、そこに人間としての藝術

生活が在る。功利思想に煩はされ善惡の批判に心を奪はれる時、眞の文藝は絶滅する。文學は勸善懲惡や貯金の奬勵には使はれない。飽くまでも人生の表現であるからだ。生きた事實を生きた儘に描き、我をも人をも動かす生命の力がその根柢となつてゐるからだ。

三　享樂主義

人間として營むべき藝術生活には二つの面がある。第一に自然人生一切の現象に對して、先づ眞摯な態度で之を理解しようとする。わたくしが上來述べた觀照（或は思索）とは即ちかかる努力に名づけた言葉である。しかしまた之を更に一歩進めて言ふと、第二には、理解したものを更に味はひまた之を鑑賞すると云ふ態度にもなる。自分の官能を鋭くし感性を鋭ならしめ、生命の力を豐かにしてすべてを自分の生活内容のなかに受入れようとする。『我』といふものの中に溶かし込んで、それを血にもし肉にもしようと云ふ態度、これを名づけて假に享樂主義と言つて置く。

享樂主義の語を用ゐるとき、私には此言葉に附纒ふ一つの追憶がある。

古い話だ、既う早くも十年を過ぎた。そのころ私の直ぐ近所に住まつてゐられた或先輩が訪ねて來られての話の序に、ディレッタンティズムといふ言葉の譯語に就いて語り合つた事がある。鑑賞主義としようかと思ふと其人は言つて居られた。語源から考へて私は享樂主義としてはと話してゐた。それ

から間もなく其先輩が新聞の續き物に書かれた自傳小說體の作に、後の方の譯語を用ゐられた。それが此言葉の文壇にあらはれた最初である。

その後この享樂主義の名は世間で色々に濫用せられ、多くの場合、淺薄な不眞面目な快樂主義と誤解せられてゐる。畢竟享樂といふ文字が不可かつたからだ。鑑賞主義とした方が誤解を避け易かつたのだらう。今でもわたくしは餘計な事を言つたものだと思つて後悔してゐる。その先輩は既に故人となられた。

何々イズムなどといふのは、固より或思想傾向とか生活態度とかに假に名づけた貼札のやうなもの、名前それ自らに深い意味があるのでも何でもない。しかしその名前あるがためにまた色々の議論が起り、其名が示す內容も亦色々に解釋される。ちやうど自然主義と言へば世間の惡戲者が之を獸慾萬能思想と解したり、デモクラシイを民主主義、民本主義と譯せば危險思想か何かのやうに思ふと同じく、享樂主義と云ふ譯語も、最初この言葉を思付いた私自らの考とはだいぶ距離の遠いものになつて了つた。固より鑑賞主義といふ譯語を考へてゐられた其先輩の解釋が如何なるものであつたかは別問題として、とにかく鑑賞主義の方が比較的解り易い穩當な文字であつたかも知れない。

眞に人生を愛しその全圓を味はうて之を鑑賞しようといふ享樂主義は、春の花野に浮かれる胡蝶のやうに、ただ歡樂を求め樂慾を追うて、これからかれへと渡つて行くやうな浮薄の態度ではない。普

通エピキュリアニズムと呼ばれる思想、卽ち文藝上に於ては、かの古代希臘に戀と酒とを讃美した詩人アナクレオン以來の快樂主義とも全く趣を異にしたものである。近代で言へばオスカア・ワイルドが『ドオリアン・グレイ』（その第二章及び第十一章など）に用ゐた新快樂主義（ニウ・ヒイドニズム）、或は他の評家が之を目して名づけた耽美主義（イイスセティシズム）などの意味する内容よりは、遙かに大きく遙かに深い眞率にして眞面目な生活態度を言ふのである。元來ワイルドのあいふ思想や態度はもと／＼ペイタアから出たものであるが、ワイルドに至つてはその作品といひまた彼の實生活といひ、ペイタアに比すれば遙かに淺薄で氣障（きざ）で不眞面目で上調子な感があつた。

ペイタアはその論集『文藝復興研究（ルネッサンス）』の名高い跋文に、

『色さま／＼な戲曲的な人生に、脈搏の限られた數のみが吾々に與へられてゐる。如何にせばその脈搏の間に見得べきあらゆるものを、最もすぐれた官能によつてその間に見盡くす事が出來ようか。また如何にせば吾々は刹那から刹那へと最も速く移り、而も生命力の最大部分が最も純な力に、なつて統一される焦點に常に身を置く事が出來ようか。いつもこの硬い、寶玉のやうな焰を以て燃え、この歡喜を持續すること、これこそ人生に於ける成功である。』

と述べたのは、確かに私の言ふ享樂主義の一面を道破し得たものである。しかしペイタアはここで『ディレッタンティズム』と云ふやうな言葉は勿論使つてゐない。此跋文がはしなくも當時の英國文壇

や思想界の注目を惹き、或一派からは手嚴しい攻撃が出たので、ペイタァは後更に快樂主義者メリアス』と題して自分の內生活を自傳體の小說風に書き、世の非難に答へた。紀元二世紀のころ、羅馬の思潮混亂時代に生れた一青年メリアスが思想生活の徑路を描き、長じて遂に昔キレエネの哲人アリスティッパスが說いた快樂主義の信者となり、のち基督敎會の感化を受けて一種の殉教者として身を終るまでの物語になつてゐる。此書の第九章『新キレエネ思想』を敍した一節に、

『いかにもかういふ愉快な活動は、かの所謂快樂說の理想となり得るものかも知れない。しかし當時メリアスが經過してゐた思索に對して、快樂說だといふ非難は毫も當つてゐない。彼の期するところは快樂ではない、生の充實である。その充實に導くものとしての「透觀（インサイト）」である。すぐれた、力ある、さまぐ\の經驗、その中には貴き苦惱もあれば悲哀もある。アピュリイアスの物語にあるやうな戀、眞摯熱烈な道德生活もある。卽ち手短に言へば、人生の如何なる形に現はれようとも、苟もヒロオイックな、情熱のある、理想的なものから、彼の「新キレエネ思想」は價値の標準を取つたのだ。』（同書百五十二頁）

さきの跋文を公にして以來、快樂主義者の惡名に惱まされてゐたペイタァの此言葉には、狷疏といつたやうな語氣が見える。しかし彼の態度が飽くまでも眞率で嚴肅で、ただ刹那々々のかげに歡樂を追うて走るやうな人でもなく、肉慾に耽り物質にのみ溺れてゐた sybarite の亞流でもなかつた事は、推

斷せられると思ふ。

四　人生の享樂

或思想に名づけたイズムの貼札は、思へば便利なやうでまた不便なものである。最初私が享樂主義といふ言葉を考へ出す源(もと)になつた洋語のディレッタンティズムにしてからが既に、私の述べた意味に於ては甚だ都合の惡い文字である。

西洋の文學者が此言葉をどんな風に解してゐたかを一寸思ひ出して見る。ロオヱルの名高い文集『背卷のうちに』の第二に、ディレッタンティズムは懷疑思想と雙兒(ふたご)の姉妹(きやうだい)だと言つた所がある。なるほど固定した法則に信を置かず、之によつて律しられる事を喜ばないといふ態度から見れば、それは懷疑思想の色彩を帶びてゐる。しかしこれは考へ方によつてはごく詰らない事にもなれば、また生活態度として非常に立派な事にもなる。之を解して、流動變化の生命の大浪を、勇ましくも又雄々しくも乘り切らうとする態度だと見れば、そこに懷疑的傾向の免れ難きを思ふと共に、私は大きい人生そのものの肯定者として當然取るべき態度は、必ずかくの如き色彩を帶びるものではないかとも思ふ。

西洋で此言葉に對する最も普通な解釋は、文學や美術を愛し、人生に對しては袖手傍觀の態度を取つて、自分では何もしないでごろ〳〵してゐる癖に、他人(ひと)の事はかれこれ言ふといつたやうな、極めて無

性な微温い、そして或意味から言へば利巧な生活態度を言ふのである。徒らに歌や俳句をひねくり廻はし、書畫骨董をいぢくる風流人と相距ること遠からざるものだ。カアライルが例の一本調子で激烈に痛快に時勢を罵倒し批評した名著『過去と現在』(勞働問題や社會問題の喧しい此頃、京都に於ける私の或友人の筆に成る此書の完譯が、近ごろ出版せられたのは喜ばしいことだ)の第三卷第三章以下に批評してゐるのは、卽ちかういふ意味のディレッタンティズムである。古來日本文學史上には此類の享樂家が殊に多かつた。また少し趣は違ふが、西洋の批評家がアナトオル・フランスのやうな文人を評してディレッタントだと言ふ時なぞも、確かに此意味があると思ふ。

かくの如き態度に對しては今更私が言を弄するの必要もあるまい。藝術生活は斷じて圍碁謠曲と同列の娛樂でもなければ、俗に言ふ所謂『趣味』と稱すべきものでもない。眞劍な純一無雜の生活だ。俗物から見れば滑稽とも馬鹿正直とも見える程に、生眞面目な、そして熱烈な生活である。ふざけた洒落氣分の弛緩した生活ではないからだ。

わたくしは既う名前や貼札なぞに拘泥してはゐられない、洋語のディレッタンティズムだらうが、漢字を當て嵌めた享樂主義だらうが、そんな事はどうでも好い。ここに觀照享樂の生活と言つた意味の根柢には、人生に對する燃ゆるが如き熱愛があり、生活現象の一切を肯定する勇猛心がある事を見なければならぬ。

昔からかういふ立派な充實した生活を送つた偉人は甚だ多かつた。文藝上の天才は多く人生そのものを完全に享樂しようとした努力の人であつた。袖手傍觀の風流人や遊蕩兒などに如何にして人生の眞味が解らうぞ。大なる藝術家にはその實行生活の上にも、凡俗が企及すべからざる特異の力が現はれてゐた。『眞と詩』とに生きたゲエテの如きは、最も大なる人生の享樂者であつたらう。彌兒敦(ミルトン)の政治的生涯を見ても此感がある。又フランク・ハリス氏の斬新にして大膽なる論斷から推せば、人としての沙翁の實生活にも此感がある。國を去つて流竄の身となつたダンテは勿論だ。英吉利を足蹴にかけて飛出したバイロンにも、藤原氏の專横を憤つた『ドン・ジュアン』のやうな業平にも、同じ意味の實生活があつたらう。若しそれ藝術と生活との距離が甚だしく近接してゐる近代に於て、かくの如き例を考へ出せば殆ど無限にあるだらう。彼等は單に藝術の境に身を置き、流の岸に立てる傍觀者として行雲流水をながめてゐるには、餘りに強く餘りに深く人生を愛した。身を躍らして、脚下に逆捲く人生の奔流に飛び込み、心ゆくばかりそれを味はひ、それを享樂しようとしたのだ。かうなると今度は既う自己そのものに對しても、恰も傍觀者が爲す如き鋭い觀照の視線を放射するに至つて、そこに深い自己反省が生ずるのだ。北歐の作家などには特にかうした態度が著しいやうに思ふ。

文學を不健全な風流か暇仕事だとでも思つてる人たちは、今度の大戰爭に歐洲の作家が如何なる働をしたか、ごく手近なところを考へて見ても解るだらう。最近三四年、彼等は藝術的作品として殆ど

偉大なる何物をも殘してゐない。それはみな筆を以て劒に代へてゐたからである。舊獨逸の軍國主義によつて外的にその生活の根柢が危くせられようとした時、彼等の多くは起つて民心鼓舞のために或はプロパガンダのために筆を執つた。英國の作家は平素から政治や社會の問題に關係が深いから勿論の事だが、白耳義のマアテルリンクでもヱルハアレンでも今度は皆さうであつた。殊に後者の最後の作『戰の赤きつばさ』(レ・ゼル・ルウジユ・ド・ラ・ゲル)の如きは、此詩人の故國が獨兵の鐵蹄に蹂躙せられた時の悲憤の絶叫であつた。佛蘭西ではポオル・フォオルの美しいバラッドがいつしか愛國の悲壯調と變り、フエルナン・グレエグの詩集『悲みの王冠』(ラ・クロヌ・ドウルウルウズ)となり、その他アンリ・バタイユでもポオル・クロオデルでも、舊派の人でも新派の人でも、皆擧つて祖國のために叫んだ。佛蘭西を頽廢(デカダンス)の國のやうに思ひ、氣早くもその文化の末路を弔せんとしてゐた獨逸心醉論者などは、これら文藝の作品に現はれた生命力の顯現を見て、佛蘭西が得た最後の戰勝の必ずしも故なきにあらざるを知るだらう。

私は上に筆を以て劍に代へたと言つたが、それをまた文字通りにやつた文學者も今度の大戰中には甚だ多かつた。英國のルウパト・ブルッグがダアダネルズの征途に斃れ、佛蘭西新詩壇の第一人者であつたシャルル・ペギイがマルヌの大戰に戰死した如き例は、その最も著しきもの。又これは日本の新聞紙上にも屢報ぜられて讀者の記憶に今猶新なる事だらうが、伊太利のダンヌンチオが飛行機上に負傷した話を聞いて人々は何と感じたであらう。溫室の中で蒸されるやうな、濃厚な頽廢的色彩を帶

ぴた此作家の小説を、ただ一概に不健全だなぞと嘲つてゐた人たちは、藝術生活の根柢にある嚴肅な悲壯な生命活動とか努力とかいふ事を少しは考へて貰ひたい。ダンヌンチオは如何なる意味に於ても、現存の最も派手やかなるロマンティシストであり享樂主義者である。眞に人生を熱愛し享樂する者でなくして、如何してあのやうな行動が出來るだらうか。

五　藝術生活

觀照享樂を根柢とした藝術生活は、一切を感じ味はゝうとする生活である。自分と對象との間にいつも純眞な生命の共感を見出して、すべての事物を生かした儘に見ようとする態度だ。美學で云ふ感情移入(アインフユウル・ング)の學說も、畢竟この心境を指したものだらう。

理屈でもない、法則でもない、自分の生命そのものを以て端的に自然人生の事象を見ようとする。そこに感興も生ずれば面白味も出る。所謂物心一如の境に入つて、自分がその對境と一つになつて了ふ。自分そのものを對境のなかに移入すると共に、對境そのものをも自分の中に溶かし込む。彼我の境を絶し去つて眞に渾融冥合したる心境を言ふのである。さういふ態度で物を見るとき、自然界の一草一木も新聞紙の三面記事も皆、無限を暗示し、人生の祕奥を語れる意義ある實在として見られるのだ。詩人ブレイクの歌の言葉を借りて言へば『一粒の砂にも世界を見、一輪の野花にも天を見、掌中

に無限を捉へ、一瞬に永劫を捉ふ(1)るものは卽ちこの藝術生活である。（本書九一頁參照）
わたくしは此論を進めて行つて、一切の文藝を廣義の象徵主義として說きたいのであるが、今そんな面倒な議論を茲に擔ぎ出さうとは思はない。教室の講義のやうなものを持出して、折角興味を以て讀んで居られる讀者を惱ますのは心なきわざである事を思つて、私は更に右に述べただけのことを、も少し平たく言ひ換へて見よう。

　近頃のやうに匆忙繁劇な日常生活を送つてゐる人は、ただ事物の表面をだけかすつて行く。ぢつと考へたり味はつたりしてゐるだけの生命力の餘裕がないからだ。目では見ても心の底には映して見ない。耳には聞いてゐても胸には屆いてゐない。無性で、上辷りで眞に人生を愛し之を味はうとする生活が無くならうとしてゐる。そこで何かの事にぶつつかると、有りあはせの法則とか、誰でも思ひ附くやうな理窟や常識などで判斷して、それで濟まして置く。言ひ換へると、其事象と自分といふものとを引き離して了つて、少しもそれを自分の體驗の世界に取入れようとしない。人生五十年、大車輪になつて働いてはゐても、これでは全く一種の醉生夢死ではないか。

　わたくしは極めて卑近な譬喩を以て之を言はう。食物は如何にも人體の榮養のために取るものだ。しかしそれが果して食物の食物たる意義の全部であらうか。若し蛋白質がいくら、澱粉がいくら、それで何百カロリの熱を發するが故に之を食ふといふだけならば、食物は日々勞働し運轉して妻子を養

つてゐる一種の機械に注す油に過ぎない。しかし人間が人間であつて機械にあらざる以上は、食物を感ずること、即ち味はふといふところへ來て始めて、完全にそれを食べたといふ眞意義を生ずるのである。ただもういらいらせかせかと辨當飯を頬張るやうな食べ方をしてゐては、腹だけは膨れても食物は少しも自分の生活内容とはなつて居ない、所謂『身に附かない』のである。わたくしは人生を味はふ藝術生活即ち觀照享樂と云ふ事を顧みない程忙しい今人の生活を目して、この辨當腹だと言ふのである。

私は更にこの下品な譬喩を一歩進めて言はう。最も完全に最も深く食物を享樂せんがためには、なるべく其人の味覺を鋭くし健康を盛にしなければならぬ。あれは善いこれは惡い、不消化物は嚴禁だ、醫者が定めた食品の外は無闇に食つては大變だなぞと言つてゐる半病人に、何を食はしたつて本當の味が如何して解るだらう。また味覺が鋭敏であれば、他人の味はひ得ない味をも見出し得る事は言ふまでもなからう。道徳や法則に囚はれず、またなるべく自己の感性を鋭くして、他人が不味いと思ふ物にでも新しい味を見出し得る人生の享樂家は、即ちこの味覺の鋭い健康の人である。眞に食物を愛すると同じやうに、人生そのものを愛する人だと思ふ。

人生を愛するといふ言葉を私が用ゐる時、讀者の或人は、文學者に厭生家や憎人者の多い事を指摘せられるだらう。しかし眞に愛する者でなければ、惡む事も厭ふ事も出來ないのである。所謂可愛

さ餘つて憎さが百倍、憎は卽ち愛の一變態に過ぎないからである。浮世三分五厘で人生を胡麻化して行つたり、冷々淡々恰も路傍の人を見るが如き態度を以て人生のすべての現象に臨む人、或はただ外部の要求にのみ動かされて機械のやうに働いてゐる上辷りの人たちに、如何して厭生があらうぞ、憎人があらうぞ。

近頃は少し學問をした人などが、よく科學的だとか研究的態度だとかいふ。如何にもそれは立派な貴い事である。しかし研究とは知らうとする努力であつて、享樂とはおのづから別問題だ。勿論知るといふ事が味はふといふ事を助ける場合は甚だ多い。しかし知識としては何事をも知らない子供の方が、却つて大人の味はひ得ない色々のものを面白がつて、そこに感興を見出してゐる。詩人ワアズワ、スがいつも自分の幼時の自然美感を追懷してゐたのは、卽ち此意味からであつた。同時にまたこれとは全く正反對に、十分知つて居りながら毫もそれを味はふ事をしない人たちがある。例へば世故に長け人情に通じた人たちのうちには、少しも人生を味はつてゐない人が甚だ多い。また深く事物を研究して知つてゐる學者の中には全く其事物を味はふ能力を缺いてゐる人さへ尠くない。畢竟知識として存立して、まだその對象を味得し感得し享樂する心境に達してゐないからである。それをおのれの生活内容の中に溶かし込み、其對象に自分の生命を吹込んで、生かして觀照したものではないからである。きのふけふ滿都の子女を醉はしてゐるあの櫻の花を見て之を研究した科學者は、花は樹木の生殖

機關だと言ふ。蕊や花粉の作用を知識として知る事は、成程如何にも貴い有難い事だ。しかし爛熳たる萬朶の櫻に對して唯この研究的態度だけに終始してゐるやうでは、果して花を見るだけの甲斐があるだらうか。寧ろ花の何たるやを知らずして花に醉へる田夫野人の方が、人間としては本當の生き方をしたものだ。山櫻に對して『敷島の大和心を人問はば』といふ常識にも理窟にも全く合はない事を言つた男の方が、眞に人生を生きようとした態度である。それを何ぞや、『朝日ににほふ生殖器』と觀なければ、眞でないと頑張る科學者こそ、まことに氣の毒なものだと思ふ。(文藝上でいふ眞と、科學者のいふ眞との關係に就いては、後段『藝術の表現』の講演に一端を述べた。)

ブラウニングの詩の言葉を借りて言へば、味はふといふ事は生きるといふ事だ。知るといふ事には"to taste life" といふ意味が含まれてはゐない。固より深く味はんがためには深く知らねばならぬ。私たちは味はんがためにこそ知らうとするのだ。

小說を讀んだり芝居を見たりするのは、洒落でもなければ娛樂でもない。それを俗輩が洒落にして見たり娛樂にして了つたりするから、不健全ともなれば有害ともなるのである。天才の異常なる表現力を借り來つて、私達の鈍眼には見えない自然人生の姿を生きた儘に見せて貰ひ、それを味はうとするからこそ、文藝の作品に重大なる生活上の意義を生ずるのである。所謂無用の書が有用にもなるのである。

思へば思ふほど、近來の日本人の生活は藝術とは緣遠いものである。五十年來急に慌てて先進文明國の外部だけを模倣し、それに追付かうとして全力を用ゐ盡くしたため、すべてが浮足だつて上調子になつた。深みも無ければ奥行もない。ぢつと物を考へたり味はつたりしてゐるだけの餘裕がないのだ。米が高いと言つては騷ぐ、普通選擧だと言つてはわめき立てる。そらデモクラシイだ、そら勞働問題だ、人種差別撤廢だ、何だ彼だと矢鱈に狂ひ廻るところは、まるでヒステリの女みたやうだ。そして彼も一時、是も一時、しみじみと落着いて物を考へる思想生活といふものが根柢に無いのだから、何の事はない、すべてが空騷ぎである。黄色い聲で發作的に叫びはするが、その聲の底には力がない。强味もなければ深みも無い。空洞の音だ。さういふ充實しない生活からは、決して大きい藝術は生れ出でない。

人はよく米國人の生活を評して殺風景だといふ、淺薄な樂天主義だといふ。如何にもさうだらう。しかし米人には黄金がある、宗教がある。日本人にはなにがあるか。日本には米人ほどの金もなければ宗教の力もない。物質的にも精神的にも日本人の方が米人のよりは、その生活が更に一層貧弱で内容空乏だ。米國人は兎に角あれだけの國力を以て、今日あらゆる方面に於て全世界を米國化(アメリカナイズ)してゐるではないか。文學に於ても、最近の米國は旣に英吉利文學の傳統を脫せんとして、ヴッチェル・リンジイを生み、ロバアト・フロストを出し、エドガア・リイ・マスタアズの新聲に、さすが頑固な英吉

利文壇の批評家をさへも驚かしてゐるではないか。顧みて日本は如何だ。演劇は全く行詰つて了つて新しい道は今にまだ見附からない。詩歌に至つては殆ど滅亡だ、全く文壇から影を潜めて了つた。文藝批評と言へば短評か一口評に『ふつくりした描寫』だの『温い柔い筆つき』だのと、まるで綿入れか座蒲團の品評みたやうな紋切形である。それもその筈、近頃は眞面目に長たらしい文藝評論なぞを書いたつて、普通選擧論や勞働問題論のやうには誰も注意して讀みはしない。かくて文壇はただ僅かに小説——それもただ數人の短篇のみの作家によつて辛うじて餘喘を保つてゐるといふ有樣だ。何といふ心細い事だらう。

宗教は坊さんと言ふ專門家の仕事ではない。各人に宗教生活があらねばならぬ。また政治が政治家といふ專門家の仕事である間は、眞の民衆政治（デモクラシイ）は發達しない。各人が政治問題に興味を有つやうに成らなければとても駄目だ。それと同じく文藝も決して文藝家の專門仕事ではなく、各人各個の藝術生活が無ければ、眞に大きな民衆藝術は生れて來ない。各人にもまた民衆全體にも、その根本に立派な充實した內生活があれば、そこからは宗教信念も生れよう、政治も革新されよう。そして偉大なる新興藝術も亦そこから起つて、民衆と時代との文化に光榮の王冠を加へることだらう。日本人はかかる意味に於て、いま少しく自己の生活を反省し、之に改造を加へる必要があるではないか。

(1) To see a world in a grain of sand,

And a heaven in a wild flower,

Hold infinity in the palm of your hand,

And eternity in an hour.

——*Blake, Auguries of Innocence.*

靈より肉へ、肉より靈へ

一

日本人の生活には到底他の文明國に見られない、色々の不思議な變挺な現象がある。世に居候といふものがある。何等の理由もなく權利もなくして他人の家の物を喰ひつぶし、のらくらして寄食してゐる『食客』と稱するものだ。また『小姑鬼千匹』といふ語がある。妻にとつてその最愛の良人(をつと)の姉妹は、千匹の鬼にも相當する忌まはしい惡むべき者ださうだ。これも英米には極めて稀な現象だ。また教育界には學校騷動と云ふ珍現象が絶間なく起る。生徒がその師に對して同盟して反抗するといふ恐ろしい事である。

かういふ現象は表面から見れば千差萬別で、各みな異なれる原因に基づくやうに見えるが、その根本を探つて見ると、實は唯一つの缺陷に基因してゐるのである。わたくしはこの缺陷を、極めて通俗平易な日常生活の現象から歸納して指摘したいと思ふ。

西洋、ことに英米人の生活と吾々日本人のそれとを較べると、その根本に於て、靈と肉と、精神と

物質と、溫情主義と權利義務と、感情生活と合理思想と、道德思想と科學思想と、家族主義と個人主義と、さういふ二つのものの關係に於て全く正反對の方向を取つてゐる。我は甲より乙に赴かんとし、彼は乙より甲に向つて進んで行く。日本人にして若し眞面目に生活改造の問題を解決しようとするならば、何よりも先づ第一に此關係を考へて、そこに出發點を置き根柢を据ゑねばならぬ。

日本で日本風の旅館に泊ることは、私たちにとつては確かに不愉快な事の一つである。もつと極端にいふと、景色の美しい此國で、そして樂しかるべき筈の旅行をしながら、私たちに不愉快な感じを起させる最大の原因たるものは卽ち宿屋である。旅館と客との誤れる關係である。詳しく言へば旅館と客との關係が、純然たる物質主義、算盤勘定の合理的基礎の上に立つてゐない事である。

西洋のホテルに飛び込めば、先づ日本の帳場格子に相當すべきオフィスに行く。一晩幾圓の室で、一人床、浴場附き、何々と此方の望むやうな部屋を註文すればそれで濟む。番頭がじろじろ人の服裝や人相を見たり、甚だしきに至つては知人の紹介がなければ泊めないと言ふとか、敝衣破帽の客で多額の茶代も出しさうにないのは隅つこの穢い部屋に通すといふやうな不都合は斷じてない。旅館と宿泊者との關係が純然たる、そして露骨な賣買關係であり算盤勘定であるから、豫め帳場で契約を定めればそれ以上の面倒が掛らないのである。そして出立の時はまた帳場に行つて勘定書を取つてそれだけの金錢を支拂へば濟む。洗濯代も料理代も酒代も何もかも明細に書き附けられてゐる。茶代といふ

愚劣なものは、絶對に鐚一文と雖も受取りもしなければ拂ひもしない。
それならばホテルの者は宿泊客に對して冷々淡々、恰も路傍の人を遇する如きものかといへば、決してさうではない。また各室を壁で仕切り、戸に錠を卸して置く構造は如何にも個人主義的だから、客と客との間にも親しみがなく、止宿してゐる事が不愉快かといふに、さうでもない。これと反對に日本の旅館の各室は襖障子の仕切りだけで、如何にも全體が家族的融和的なるが如き構造でありながら、實はあの襖障子が、鐵筋コンクリイト壁よりも嚴しい冷やかな仕切りになつてゐる。そして皆の泊り客が集まつて、親しく四方山の話でも爲ようといふ廣間の設備さへして無い。たまに廊下などで他の宿泊者と落ち合つても『人を見たらば泥棒と思へ』と言はぬばかりの顏をしてお互に睨み合ふだけだ。西洋のやうに宿屋のロッビイで、見ず知らずの旅の人たちが睦まじく語り合ふといふやうな溫かみは少しも見られない。個人主義から出發して、それが徹底したその結果は溫情的になるのが西洋のホテルである。忙しさうな番頭や支配人までが、閑暇(ひま)な時には出て來て客と無駄話もする。珍らしく日本人でも泊つてゐるのを見れば、たれかれが來て突飛な奇問や愚問を發しては談笑すると云つた風。長逗留をして親しくなれば、一緒に酒場(バア)へ行つて盃を擧げるなぞといふ友愛關係が出來、溫情が湧き情愛が生れる。この友愛、この溫情、この情愛は純然たる算盤勘定と、露骨なる賣買貸借の契約關係を基礎とし根柢として、それから發生したものに他ならないのである。

日本の旅館では、何だか親類か知人の家にでも泊り込むやうに、最初から金錢の事などは問題にして居ないといふ風を粧うてゐる。茶代といふ一種の贈物を拂ふとその返禮に、手拭はまだ好しとして、土地の名産と稱する大きな漬物樽や菓子箱を出發の間際に客に吳れる。主人や番頭が出て來て、眞の溫情も友愛もない紋切形の挨拶といふものを述べる。その關係は友人關係であるかの如く、贈答關係であるかの如く、飽くまで待遇懇切を標榜するかの如くにして、實は帳場でこつそり算盤を彈いてそれから割出したものだ。その友愛、その懇切、その溫情には少しの溫みもなければ旨味もない。だから不愉快なのである。

西洋のホテルのは物質から湧いた精神である、物から出た心である、殺風景な權利義務の關係から湧き出でた溫情である。日本の旅館の場合はまさにその正反對を行つたもので、狼に羊の皮を被せてゐるのである。

二

日本では師弟の關係といふ事が非常に八釜しい。七尺去つて師の影を踏むとか踏まないとか言ふ。師たる者に師たるべきだけの學殖がなく見識がなくても、弟子となればそれに反抗はおろか、尊敬をさへ强要せられるのである。ことに金錢上の關係などは、師弟間に於ては絕對に超越したものだと見

做されてゐる。それならば、日本に於ける師弟關係は果して情愛が深いか、教師が學生に對すること英米に於けるよりも親切で、學生が教師に對すること英米に於けるよりも從順だと言へるだらうか、教育界の眼前の事實は果して何を語つてゐるか、かの學校騷動といふが如き忌まはしき現象は、英米その他の文明國の學校には殆ど見られない最も醜惡なる事實ではないか。

米國の如き國では、教師が生徒を教へる事をビズネスだと見てゐる。例の舊弊な日本風の考へ方から見れば、これは極めて殺風景であり亂暴なやうだが、實はビズネスに相違ないのである。生徒は金錢を支拂つて、教師はそれに對して教育を施す、その物質關係に於て立派なビズネスである。神聖な純粹の靈的關係でも何でもない。その證據に授業料を納めない生徒は除名したり、教師は勞働の報酬として俸給を受けて衣食してゐるではないか。しかし人間の本性が畜生でない以上、よき教を授けて貰ひ、自分の知能を啓發して貰へば、おのづからそこに感謝の念も湧けば、尊敬の心も出來る。教師の方でもまた月給問題以外の、算盤勘定以外の愛情が自分の生徒に對して自然に生ぜざるを得ないのが人情だ。今日の日本の學校のやうに、教師の頭腦が生徒のよりも却つて遲れてゐたり、學問素養品性に缺點があるといふやうな事が無い限りは、必ずや師弟間には溫情敬愛の靈的關係が湧き出でる筈だ。教師の物質的待遇をよくして良教師を置けば、飽くまでビズネスと云ふ算盤勘定に基礎を据ゑて、而もそこから眞の師弟の情愛が湧く。無能な教師に金を拂ふ必要もなければ理由もないといふビ

ズネス本位の米國の學校に於て、私は確かに日本に於けるよりも遥かに美しき、遥に貴き師弟關係を見て羨ましと思つた。殊に大學生と教授との關係が、教室以外一歩を出づれば親密な友人關係のやうなのを見て言ふべからざる快感を覺えたのは、獨り私のみではなからう。英米の學校は自由主義だから學校騷動が起らないのだなぞといふのは、一顧に値しない淺薄な觀察である。

また英米は個人主義だから親子の情が薄い。日本は家族主義だから親子の情が深いと言ふ人がある。これも眞赤な嘘だ。

米國では暑中休暇になると立派な富豪――即ち資本家の子弟が、電車の車掌をやつたり、農村へ行つて仕事をしたりして勞働者になつてゐるのが珍らしくない。これは一方から言へば、日本の書生が親の脛を嚙りながら旦那風を吹かしたり、安居徒食を喜んだりする悪風とは正反對に、貧富上下の別なく誰もが皆勞働、ことに筋肉勞働の神聖を十分に理解してゐるのに因る事は勿論であるが、その主なる原因が個人主義にある事は言ふまでもない。日本は『子供の天國』だと言はれる通り（從つてまた、『母の地獄』だが）嬰兒の時代からして親が餘りに世話を燒き過ぎる。だからいつまで經つても子供に獨立心がなく、丁年以上に達してさへ親の脛を嚙ることを平氣だとしてゐる。他人に向つては相當に大きな口を利く靑年が、自分の母親などに金をねだる場合には、全く個人としての自覺も何も無い甘つ垂れ小僧同然であるといふ滑稽な矛盾を演つてゐる。日本の高等程度の學生が、暑中休暇の

數ケ月、十分に時間の餘裕を有しながら、親の金を使つて賣女の尻を追廻はしてゐる間に、米國富豪の子弟がたとひ幾分たりとも、自分の額の汗で自分の學資を稼がうと努力すること、この一事にも米國々運の急速な進步の素因が那邊に在るかの一端が窺はれるではないか。

談は少しく岐路に入つたが、親子お互の間に個人としての十分な立場が確立してゐるのだから、米人なぞは親が子の家に逗留してゐても下宿代を拂ふ。子が手元不自由になつたから、お父さん此古本を一冊買取つて下さいと言ふ。かういふ事實は日本人の目から一寸見れば、甚だしく殺風景であり不人情である、沒義道である。ところがさういふ堅固な徹底した物的基礎の上には、ちやうど豐饒な肥土から美しい花が咲き出でるやうに、羨ましきばかり樂しく溫かな美しい親子の情愛が芽ぐみ發育して行く。頑冥な親爺が孝行を子供に强要したり、壓迫によつて服從や報恩を强制してゐる國では迚も見られないやうな孝行者もあれば、子煩惱の親たちもある。最初からして靈的に精神的に——道德的に、そして明確な權利義務や物質的個人的基礎の上に立たずしては到底得られないやうな深い母子の情もそこから發生する。人間ではないか、親子ではないか。物的基礎が堅固でさへあれば、打ち遣つて置いても溫情は湧く。

親子、兄弟、夫婦、さういふ凡ての家族關係に於て、英米の個人主義國は意外にも日本よりは遙かに圓滿であり溫情的である。夫婦間には財産や權利の個人主義的確認あるがために、夫婦間の情は日

本に於けるよりも遙かに深い。わたくしはかういふ例の最も著しきものとして、日本に於ける姑と嫁との關係を指摘したい。

清少納言の『枕草子』に、仲の惡いものの一つに姑と嫁とを擧げてゐるところを見れば、遠い平安朝の昔から大正の今日に至るまで、これは日本の家族生活の一大弱點だと見える。この珍奇な現象は、英米の個人主義國に於ては殆ど絕對に見られない事だと言つて差支ない。息子が結婚すれば母親は新しく一人の娘を得たやうに可愛がる。嫁の方でもわが最愛の夫君を生み育てた母親だと思へば、そこに無理な壓迫や强制が無い限り、滾々たる愛情の泉がおのづからにして双方の間に湧き出でねばならぬ。最初からお互に個人としての權利を尊重して、そこから出發してゐるのだから、兩方から侵し合ふ餘地が無いのである。今日日本の主婦があらゆる點に於て進歩しないのは、獨り夫たる男子の罪ばかりでなく、姑と嫁との忌まはしき反目嫉視が一大原因である事を思うて、わたくしは特に之を例證として擧げたのだ。日本の普通の家庭に於て、姑の前に出た嫁は確かに一種の下婢ではないか。德富氏の『不如歸』の英譯を讀んで、純然たる西洋の中世の女のやうな浪子といふ女主人公を見て米國人は、あれは低能者か狂人かと言つてゐる。あの小說の意味は解らないと感ずるのも無理はない。

わたくしの幼兒が米國婦人の經營してゐる幼稚園に通つてゐる。降誕祭の贈物に、これはお父さんにといつて紙を五六枚とぢた手帳を、また別にこれは母さまにといつて厚紙で拵へた絲卷きを持つて

歸つて來る。西洋では贈物は必ず個人々々へ一人宛に贈るのである。亭主に世話になつた禮に細君へ半襟の贈物をしたつて、それは無意味である。亭主と細君との所有の間には確然たる區別があるからだ。殊にまた親から贈物を受けた幼兒をして、さながら一人前の個人であるかの如く、幼稚園での自分の製作品を以てその返禮をさせるといふ習慣も良い事である。子供の時代からして此心掛で育てられてこそ、個人として自覺ある人間が出來るのである。

三

西洋人が洋袴(ズボン)の衣嚢(ポケット)などに裸で貨幣を入れてがちや／＼させてゐる。あれは特に多く英米人の爲ることで、大陸諸國の人の殆ど爲ない事である。日本人の私どもには何だか甚だしく下品な殺風景な事のやうな氣がする。日本人は金錢といふ極端に物質的なものに對して、一種の偏見を有つてゐるからだ。例の精神から物質へ、靈から肉へと逆に行かうとするからである。

師匠の所に謝金を持つて行くのにも、醫者に診察料を拂ふのにも、畫家に畫料を拂ふのにも、奉書で包んで水引をかけて、まだそれでも精神的にならないからと言つて、熨斗と云ふ裝飾を加へる。まだ足らないと思つたものか、今度は盆に載せて袱紗で包んで、お辭儀までする。厄介であり糞面倒であり、物質と勞力との浪費である事はしばらく別問題として、これが日本人の生活に於ける、精神的

要素を以て物質的要素を胡魔化さうとする惡風の一端である。現に奉書包の裏には、金何圓と麗々しく極めて殺風景な文字が書かれてゐるのは、現實暴露の滑稽ではないか。前に述べた宿屋の勘定や茶代の場合と同樣に、靈から卽ち精神から出發してゐると見せかけて、實は肉に落ち着き物質に歸着して行くのである。

月謝でも診察料でも謝料でも、それは勞働に對する純然たる報酬ではないか。俸給や賃銀の支拂と全く同樣に、裸でも餘り失禮だとあらば、狀袋に入れて支拂つて少しも差支なき性質のものである。甚だしきに至つては、中味である月謝や診察料や書料を不當な少額にして置きながら、それを立派な奉書の紙や偉大なる水引を以て胡魔化し去らうとするところに、日本人の生活の不安定があり、缺陷があり、淺薄さがある。

純情から出た贈答品でない物を、贈答品であるかの如くに粧うて金錢の支拂を行ふ。受ける方には、不當の少額であつた場合、之に抗議を申出でる權利はあつても、その權利を振廻はさせないだけの水引や熨斗といふ避雷針が附けられてゐる。いくら精神的であるかの如くに胡魔化して見せても、その根本たる物的基礎が明確鞏固でないのだから、少しも徹底し充實して居ない。

英米人の行き方は金錢を義務として支拂ひ權利として受けるのだから、拂ふに水引熨斗の必要もなければ、受けるに遠慮も要らない。さうした上で、西洋人だつて『寸志だから』といふ挨拶もすれば、

受ける方でも『有難う』といふ禮を述べる。合理的な基礎の上に立つた情趣だから、そこに眞の温かみがある。いかにも紳士らしい態度だ。

日本の旅館の茶代廢止が何時まで經つても勵行せられないのは、日本人の生活にこの靈肉顚倒の缺陥があるからだ。英米の料理屋旅館等の給仕への心付けは、先づ支拂金額の十分の一を標準として、それ以上支拂ふものは或場合に嗤笑をすら招いてゐる。一泊か二泊した宿屋の茶代に數百金を投じて得意がる馬鹿もなければ、それを受けて心から感服し崇拜する沒分曉漢もすくないのが英米式である。いつでも權利義務の關係を超越した賄賂式の金錢授受をするのが日本流である。

四

わたくしはかういふくだ〳〵しい多くの例證を省いて、結論を急がう。

禮儀と云ふ精神的行爲を重んずる事は、人間として固より大切だ。しかし其禮儀が合理的に物質的に内容的に充實してゐない場合には、虚禮として排せられるのはまだ忍ぶべしとしても、對者に甚だしい不快を與へ反感を抱かしむる場合さへ起るではないか。

米人などは衣嚢（ポケット）から一握の貨幣を掴み出して、それを對者の面前に裸で差出し、はいこれは月謝ですといふ。かくの如きはまた餘りに禮儀を顧みず、唯物主義に徹底した一例として不愉快であるには

相違ないが、かの避雷針たるべき水引熨斗よりはまだ無邪氣であるだけに好い所がある。

日本人は何事にも先づ最初からして唯心的に精神的に人情主義や理想主義から出發して、合理的物的基礎なしに仁義を說き忠孝を敎へ、禮を重んじ信を尊ばうとする。若し昔のやうにそれでどこまでも徹底し得られるものならば、これほど結構な事はないのであるが、武士は喰はねど高楊子の封建時代が遠い過去に葬られて、今日のやうな經濟組織社會組織のもとに在つては、かくの如き靈から肉へといふ逆な行き方は全然不可能になつて了つた。不可能にはなつても矢張り何時までも改めず、肉から靈へ、物的から人情へ、權利義務から情愛へといふ合理的な自然な行路を取らうとしないのだから、日本人の生活には缺陷があり、內容が充實しない。今日では自らその矛盾不統一に悶へてゐる有樣である。

德川時代の稗史院本にあるやうに、昔の遊女は多くの男に肉は賣つても、心の貞操は一人の男にのみ捧げた。その貞操觀念は純然たる唯心的のものであつたのだ。昔はそれほどまでに精神と物質、靈と肉とを切り離して考へ得たのであるが、さういふ事が今日の如き時勢に於て果して可能であるだらうか。今でも泥棒をしたり不品行をしたりする者があると、老人とか道學先生とかは先づ第一に、その者の『心得』が惡いからだと咎める。しかし『心得』なぞといふものが果して獨立し得るだらうか。着るに衣なく食ふに食なき時、生存權と生存慾望とのためには、いくら『心得』のよい者であつても

隣人の物を盜むに至るのは怪しむに足らない。『心得』の如何を問ふ前に、何故にその者の物質生活を改善しようとしないのであるか。その者をして泥棒を働かしむる物的原因を取り除かうとしないのか。いくら働いても〳〵喰ふに困る人間の出來るやうな、社會組織そのものの缺陥に就いて考へて見ようとしないのであるか。

肉體あつての精神である、物あつての心である。若し之を顚倒して、肉體のない精神があり物のない心がありとすれば、それは腹もなく腰もなく足もない幽靈が出來るわけだ。日本人が何事にも深く徹底し得ず、底力がなく、ひよろ〳〵であり、ぐら〳〵であるのは、實は此幽靈生活を營んでゐるからだ。

現實主義に徹底すれば、そのどん底からは理想主義が湧き出でる。唯物論で奥の奥まで押し通して行けば、そこには必ず唯心論の光が現はれる。世界の思想史は明らかに此事實を證明してゐる。日本人はこのどちらにも徹底し得ない中ぶらりんであるから、その生活はいつもぐらついて居て、昔の印度人のやうに唯心的にも成れず、さりとて今日の米人のやうに唯物的にも成れない。さう云ふ國から、どうして世界を動かす大思想大文明が生れるだらうか。

佛蘭西革命以後の十九世紀の歐洲は、物質文明で行詰つてゐたのだ。權利關係で押し通せるだけ押して、もう一歩も動けなくなつてゐた。人としては個人主義、國としては國民主義(ナショナリズム)で徹底して了つ

た。自然科學の萬能力をも極端まで發揮させて了つた。さうして世紀末にいたつて、もうそれで十分に徹底し行詰つて了つた。そこで遂に最近二十年、思想界の方では、理想主義精神主義神祕主義が産まれ、共存同聚(ソリダリテ)の社會思想さへも行はれるに至つたのだ。また實際界に於ては、あの十九世紀以來の行詰つた權利關係を打破すべく、そこに世界戰爭といふ大悲劇が演ぜられた。卽ち國と國との關係がお互の權利主張で行詰つてゐた奴が、今度は方向を轉換して、國際關係を情愛主義道德主義の靈的信仰や理想主義で行かうとして、無理無體に國際聯盟といふ苦しい策を案じ出した。國際聯盟の力が眞に國と國との關係を、完全に道德といふ精神的基礎の上に置く事に成功するの日は前途なほ遼遠ではあらうが、とにかく講和條約の上に定められた國際聯盟の規約は、肉よりして今や靈に赴かんとし、權利思想を基礎として平和主義道德思想に向つて進まうとする世界改造の方向と意義とを語るものに他ならないのである。

　時代の思潮をいつも最も敏く最も鮮やかに反映する文藝の上から見れば、かういふ傾向は更に一層顯著に現はれてゐる。かの唯物主義、科學萬能思想の所産であつた自然主義、現實主義の文藝は約三四十年前に一大變轉期に會した。そして前世紀の末葉に近く精神主義、神祕思想、人道主義の新しい理想主義の文藝が、さきに行詰つた唯物觀現實觀の上に建てられた。文藝史上に謂ふところの象徴派、或はまた廣く新浪漫主義(ニオ・ロマンテイシズム)と呼ばれる傾向は、物質と理知とに行詰つた後に起つた『靈の覺醒(レヱイユ・ド・ラアム)』に

他ならなかつた。またイブセン一流の問題文藝が顯れて、マアテルリンクとなりシングとなりイエイツとなりロスタンとなり、ホフマンスタアルやシュニツラアを出すに至つたのも、思潮の同じ變遷を語るものであつた。

しかし以上は十九世紀以後だけの話だ。古今を通じて概括的に言へば、西洋人の生活の方が東洋人のよりは、昔からずつと、より多く物質的であつた、より多く肉的であつた。より多く合理的であり、自然科學的であつた事は爭はれない事實だ。さうしてさういふ基礎の上に、彼等は道德を置き宗教を信じ哲學を考へようとした。肉より靈に向つて進んだのだから、西洋文明の方が東洋文明よりもより自然に、より強く、その發達は遂に最後の勝利を制して今日の世界文化の大勢を造つた。そして靈より肉に赴かんとする幽靈生活の東洋文明を壓倒して了つた。

五

右に述べたやうな見地から、この事を勞働問題に適用めて考へて見よう。靈と肉と、溫情主義と權利思想と二つのものの關係に於て、勞働問題に就いても亦同じ事が言はれ得る。

このあひだ日本を代表して米國へ行つた勞働使節の一行が歸つて來た。そのなかで資本家代表である武藤某といふ人の談話が、新聞紙上に傳へられた。わたくしはそれを讀んで、これは全く東西文明

の本質上の相異を理解し得ない人の言だと思つた。自己の便宜や利益のためにかかる結論を持出したのならばいざ知らず、一つの獨立の見解として之を見るならば、一を知つて二を知らざる者の觀察に過ぎないと私は思つた。大阪の二三の大新聞が傳へたその談話のうちに、下の如き一節があつた。

『勞働組合に加入してゐる米國勞働者は約三割に過ぎませんよ。殊にその傾向は日本と全然逆に向つて居ますので、日本の方は權利思想に向つてるに反し、米國では近來個人主義から家族主義、卽ち溫情主義が大流行ですよ。しかも行き屆いたものです。組合は一向に振ひませぬ。日本の資本家連も同盟して之から溫情主義奬勵をやる必要がありませう。』

さうだ、米國人は今肉より靈に赴かんとしてゐる。個人主義より家族主義へ、權利主義より溫情主義へ移らうとしてゐるのは或程度に於て事實であらう。しかしそれは肉に行詰つた結果だ。個人主義權利主義を押し通せる極度の點まで持つて行つて、その基礎の上に建てた溫情主義である。卽ちわたくしが上に述べた米人の親子夫婦の愛情であり、師弟關係であり、旅館の待遇である。今個人主義の土臺もなく權利思想の根柢もなき者に向つて溫情主義に行けと說くのは、烏に向つて鵜の眞似をせよと迫る者である。肥つてゐるものが瘠せる藥を飮むからといつて、瘠せた者に向つても瘠せる藥を飮めと勸める醫者があるだらうか。ふら〳〵であり、ぐら〳〵である、靈より肉への幽靈生活をしてゐる日本の社會に向つてなほ溫情主義を說くが如きは、その幽靈生活をして益々多く幽靈生活たら

しめんとするものではないか。武藤某氏はなほ言を添へて、『學者も少しは米國へ行つて見て來るがよからう』と言つたさうだが、私は自分が未熟なためかも知れないが、自ら米國へ行つて見てそんな奇怪至極な結論には到達しないのであつた。(因に言ふ、米國に於て勞働組合に加入してゐる者が比較的に少いのは、勞働者の大多數が純然たるアングロ・サクソン系の米國人でなくして、獨逸種その他移住勞働者であるといふ事實に基づいてゐる。これは世界人種の寄合世帶である米國特有の事情に基因するもので、他國が參考とすべき事柄ではない。北米人と、他國からの移住勞働者とが米國到る處に水と油との關係にある事は、現にカリフォオニア州に於ける日本移民と米人との關係の如き極端な例を見てもわかるではないか。日本に於ける日本の勞働者は言ふまでもなく九分九厘まで純粹の日本人である。此點に於ても米國の事情は日本に於て全く參考にならないと思ふ。)

英米人は世界で最も多く現實的で物質的で、權利義務の思想の發達した國民である。今はもうその現實主義が十分に徹底したために、そこから精神主義溫情主義が湧き出でようとしてゐるのだ。だから最近に於ては英米の勞働問題社會主義の思想は、獨佛伊その他の國の社會主義とちがつて、著しく人道的藝術的宗教的色彩を帶びてゐる。甚だしきに至つては昔のラスキン、カアライル、モリス等の頃の基督教社會主義の復活だとさへ思はれるのがある。詩人ヰリアム・モリスの藝術的社會主義が今また急に時人の注意を喚起し、さきに『近代のユウトピア』を書いた現英小說壇の老將ヱルズが『見

えざる王、神』を著はすに至つたのは、皆這般の消息を語るものではないか。（全集第四卷『歐洲戰亂と海外文學』參照）しかしこれは西洋のうちでも特に英米での話だ。建國以來ずつと權利主義物質主義で押し通して來たアングロ・サクソン人種のみに限ることで、他の諸國ではまだ〳〵物質主義、自然科學的社會主義の基礎工事に忙殺せられてゐる最中である。

既に科學的であり物質的である事に徹底して了つて、今では空想的藝術的人道的にさへ成らうとするやうな國の人たちには、日本人が今更のやうに『科學的社會主義の父』であるマルクスの所說――約四十年も前に此世を去つた彼の著書を讀むのを見て、噴飯を禁じ得ないかも知れない。しかしマルクスが古くても新しくても構はない。日本人は先づ唯物史觀に傾聽し、徹底した物質主義の洗禮を受けねばならぬ。その根柢を築き上げてからでなければ、大きい理想主義、深い精神生活には到達し得られないからだ。砂の上に大厦高樓は築かれないではないか。

我が國で夫婦間の情愛が西洋人に及ばないのも、師弟間に溫情が乏しいのも、勞資關係が主從の如くなるのも、宿屋の茶代廢止が出來ないのも、歸するところは皆一つだ。合理的生活の根柢なく、物質主義權利思想に徹底せず、いつまでも肉を離れた靈の生活を希求して、淺薄脆弱な舊弊な理想主義に囚はれてゐるからである。

人間として最も立派な生活は、事新しく言ふまでもなく靈と肉と、內容と外形との間に渾然たる調

和あり融合ある生活である。肉に徹底せず物質に行詰らず、内容に充實のない日本人には、大きい深いそして廣い精神生活がない。精神生活が大きく深くそして廣くないから、哲學もなく宗教もなく、道徳も頽れ藝術も衰へる。如何なる問題に衝突つても之に對する態度が輕浮で、深さもなければ強さもなく、十分に煮え切る事の出來ないのは幽靈生活の特徴である。最後に私は再び繰返さう、日本人の生活改造は、先づ肉より靈へといふ根本の問題に就いて、徹底的に考へ直さなければ駄目だ。

藝術の表現

（この一篇は大正八年の秋、橋村青嵐雨畫伯の個人展覽會が大阪市の中央公會堂に開かれた時、催された藝術講演會に於ける講演筆記である。）

大阪に於ては殆ど今まで例を聞かない純藝術のための會合に、わざ〳〵御來聽下さる方々のことですから、今晩私の申述べませうと思ふ事柄位は、或は釋迦に說法かも知れません、勿論御贊成下さるだらうといふことを豫期してお話するのです。

世間の人は繪を見ましても、また文章を見ましても、あんな繪は實際にありはしないといふことをよく申します。昔から繪空事(ゑそらごと)といふ言葉が出來て居ります、卽ち繪は嘘を描くものだといふやうに相場が極つて居る。卽ちあんな長い手はありはしない、あの花は瓣が六つの筈であるがあれは八つに描いてあるから嘘だ、といふやうな事を申して畫を批評する人があります。これは藝術の何たるかを了解しない世間普通の素人(しろうと)に一番よくあることで、つまり藝術と云ふものは嘘を描くものだといふのです。藝術家の中にもさういふことを思つて居る人があるらしいが、科學萬能を信じてゐる人たちがよく、さういふ事を言ふ。或植物學者が展覽會の繪を見まして、一々片端からあの木の葉は彼處が間違つ

て居る、此方の花の蕋はあれは本當でないといふやうなことを言つて批評して居つたのを見たことがありますが、これはまた御苦勞千萬な餘計な詮議だてだと思ひました。これに就いて有名な話は佛蘭西のロダンの傳記の中にもかういふ話があります。或南米の金持がロダンに彫刻を依賴して肖像を造つて貰つた。所がちつとも似て居ないと言つてロダンにそれを返してしまつたといふ話がある。ロダンは言ふまでもなく世界の近代の大藝術家である。其人の作つた作品が全くの素人の眼には、實物に似て居らぬからといつて落第してしまつた。かういふことは何を語つて居るのでせう。若し只外面的に或事象を寫すといふことが藝術の本意であるならば、安物の寫眞の引伸しを使つて置けば宜い。藝術家が自分の心血を注いだ風景畫よりは、地圖と寫眞を置いた方がずつとよいわけです。人の顏を見て其恰好を似せて描くと云ふことは、安つぽい畫の書生にでも出來ることである。そんな事は堂々たる大藝術家の手腕を俟たないでも出來るのです。若し眞の藝術家に向つて似せて描いて下さいと言つて注文したならば、實物の形を似せる位の繪ならばお易い御用だと言ふでせう。その代り自己の本心、自分の技倆や藝術的良心に訴へてお斷りする、寫眞屋の下働き見たやうなことはしないといふに違ひない。そこでそれなら藝術はやはり嘘を書くのか、文章でも或は繪でも、あれは皆出鱈目を書くのかといふお尋ねが出るかも知れませんが、藝術は飽くまで眞を描くに相違ない。ちよつと繪の事は私が口先きや手眞似で云ふ譯には行きませぬが、文章のことに就いて申しますと、櫻花爛漫たるを見

てあれは雲か霞かといふやうなことを申します。さうして實際雲見たいな或は遠山霞見たやうなものを描いて、萬朶の櫻の咲亂れて居るところだといつて居る、確かに噓だ。所が顯微鏡で櫻の花を調べたものよりも、『花の雲』の方が本當の感じ、本當の眞を現はして居る。一々櫻の瓣を描いたよりも、吾々には雲か霞か、パッと淡墨でも流して置いてくれる方が眞である、誰にも眞である。例へば人相書でも、あの人の鼻はかうずつと上から降りて來て前の方へ何吋つき出して居るといふことを記述するよりは、彼人の鼻は尺八に似て居ると言つた方が藝術的表現を與へて居る。尺八のやうなといふ、文章で申しますれば一の simile（シミリイ） を使つてあるために、その眞が活きて現はれて居る。支那人といふものは非常に誇張の上手なものである。兵隊が一萬も居らうものなら百萬の大軍と言つて了ふ。だから支那の軍記物などには實にこれがうまく行つて居る。つまり噓ですな。法螺は噓の一種ですが、白髮三千丈と言つて人を馬鹿にして居る。三千丈はおろか一尺もありはしない。所が三千丈といふことを聞くと、如何にも長く垂れた白髮のやうな氣分が出る。あれは眞赤な噓ですな。三千丈は……眞白な噓かも知れない。噓であるかも知れないが、それが十分に或意味の眞を私どもに傳へて居る。

そこで私は詭辯を弄するやうでありますが、眞に二種あるとかう申す外ないと思ふ。即ち第一の烏口や定規を使つて描いたやうなもの、寫眞に寫すところの眞、あれはわれわれの理知の方面或は客觀

的或はサイエンスなぞから見た考へ方で、即ち一遍私どもの頭の中で理窟をこねて判斷して見る或は解剖して見る。例へば彼處に花のやうな物がある。それをわれわれが、ちよいと見た刹那の印象でもなければ感情でもなく、あの花は何だ、櫻か何だといつて研究して見る。即ち言を換へて言へば其物を分析し解剖して見て、始めてわれわれはその科學的の眞を摑み得るのです。即ちわれわれの理知作用を主にして表現する。終には蟲眼鏡或は顯微鏡を使つて、どんな美しい物をでも汚い物にして了つて見なければ氣が濟まぬ。それでなければ眞でない、藝術家は嘘八百を言ふものだと言つて了ふ。あゝいふ人々はつまり一方にばかり頭が働くのであるが、つまりさういふ意味の眞を名付けて、科學的眞とでも申して置きませうか。即ちわれわれの直覺でもつて感じたところの眞でなしに、一遍其物を殺してさうして解剖して、頭の中でぐる〱と廻はして見て理窟をこねる。例へば水といふものは、行く川の流とか甘露のやうな水とか言へば、誰の頭にでも端的に初から藝術的にぱつと現はれる。ところが科學者は水といふものを H_2O と解剖して、それでなければ眞でない、そんな甘露のやうな水などはありやしない、その中には黴菌が澤山居るに違ひないと言ふ。極度に科學的精神に支配された頭になると、どうしてもそれでなければ承知出來ないのです。それから先程申しました白髪三千丈式の眞を名付けて私は藝術上の眞だと申します。即ち眞 true であるといふ點に於ては前者と肩を並べて少しも劣らぬ、嘘だと言はれたら告訴して然るべき性質のものである。決して嘘は言つてゐない、

飽くまでも眞である、卽ち白髮三千丈といふのは白髮何尺何寸といふのと同じだけ眞である。これは私どもの感じ卽ち吾々の直感作用に訴へるのであつて、三段論法流の理窟や解剖や分析の作用によらないで、端的にわれわれの腦裡に眞を閃めかすといふことによつて表現としての眞といふ意味があるのです。理窟など言つたらもう打ち壞しです。下手な歌詠みは理窟や說明を言つてそれで歌になつて居る積りで居るが、あれは本當に藝術にならないぬだといふものです。われわれの直感の作用或は感じです、感情でも宜しい、それが端的に白髮三千丈と言つたり、あの人の鼻は尺八のやうだと言はれて、ぴかりとわれわれの頭の中に何物をか閃めかすことが出來れば、それは表現としての眞を立派に寫して居るのである。

然らばこれをするにはどういふ作用で出來るかといへば、これはわれわれの頭に向つて一の刺戟卽ち暗示を與へるのであります。其刺戟や暗示でちよいと突かれたならば、此方の頭にあるところの何物かがパッと燃燒する。その燃える刹那に、此方の頭の中に作家が持つて居るものと同じ物が起つて、そこに所謂共鳴といふことが出來る。然るに世には變な片輪が居つて何遍此方で火を點けても感じない先生がある。これは仕方がない。併し普通の人間ならば何處かに血が通つて居たり、何處かに涙があつたりするものです。さういふ場合に上手な刺戟若くは暗示を與へれば必ず燃え付く、其時に藝術の鑑賞といふことが始めて成立つ譯です。此刺戟は繪の場合には色や形を以てしますし、文學は

言葉を以てするのです。音樂は音を以てしまするし、その選擇は人々の自由で、色々の藝術が使ふ道具は違ひます。つまり道具です。だから或時は誇張なんといふ一の戰術を使ふ。あれはつまり藝術家の戰術の一つです。一寸か五分しかないものを三千丈と言ふのは藝術家の素晴しい戰法です。さういふ戰法はどの藝術にもあります。そこで此戰法をどういふ工合に應用するかと申しますと、つまり讀者が平生持つて居りまするところの科學的眞に向つて働く頭をちよつと引込めさせる。引込ました其刹那に、一方の直感の作用をぐつと頭を出させるやうに仕向ける。言ひ換へて見れば其作品に對して居る間だけ、暫く科學的論理的の眞を受容れるやうな、顯微鏡で覗いたり物差で測つて見たりする性質を、ちよつと抑へ付ける位の腕前が作家に必要なのである。つまり文學者若くは畫家は讀者や鑑賞家を自分の擒にするだけの手腕が必要なのです。つまりこの暗示といふものは催眠術の場合とおなじで、下手な催眠術には誰も罹らぬ、下手な藝術家、技巧のまだ熟しない藝術家の作品には催眠術の暗示の力がない。一生懸命に催眠術をかけて居るのに相手は一向罹らぬ、罹らぬ筈です、それは其人に到らぬところがあるからです。だから作品が藝術として失敗する場合は二つしかない。即ちこの暗示によつて催眠術をかけてしまつて、讀者若くは繪を見る人を作家の方へぐつと引付けてしまつて、先程申したやうな科學上の眞を受容れる頭を暫く止めさせるだけの力のない場合、即ち作家の力の足らない場合。然らざる場合に於ては、今度は味はふ者の方が惡い、いつまで經つても理窟とか若くは推

論解剖分析の作用をどうしても逃れることが出來ない、計算尺を放すことの出來ない人たちである。此點では近代の人間は昔の人間に較べると、ずつと質が惡くなつて來た。そこで科學萬能の思想が一時世の中を支配した時分に、極端な自然主義或は寫實主義の藝術が起るやうになつた。これはその必要から來たのである。けれどもかう云ふ人間、卽ち暗示のうまい大天才がいくら巧く掛けてもびくともせぬやうな、科學上の眞をのみ强く受容れる頭をもつて居る先生に遭つては敵はぬから、所謂緣なき衆生は度し難しで、これは藝術の圈外へ追ひやるより外仕方がない。かういふやからを名づけて俗物といふのであります。で作家が、見る人や讀む人を擒にすることの出來ないのは何かと申せば、今申したやうに擒にする力が足りない場合と、相手がそれを受容れることの出來ない場合との二つである。先程から大きな聲を出して妙なことを言つて居ると皆さんはお考へになるかも知れませんが、それでは寫眞ですな、寫眞師や人相書や、或は寒暖計何度になる、今日は暑いな……といふことは今日は言へませんが、寒暖計とか水銀とか云ふ道具を使つて解剖分析して華氏九十度、攝氏何度と表はすけれども、それはまづ先に頭の中にさういふ寒暖計といふ知識を以て、頭の中でぐる〳〵つと一廻はりさせなければ呑込めない、けれども蕪村の句に、

　　犢鼻褌(ふんどし)に團扇さしたる亭主哉

素ツ裸體になつた亭主が犢鼻褌一つになつて團扇を差して居ると言へば、その儘で土用ごろの暑さ

の眞が浮き出てゐる。然らば兩方の差は何處にあるか、卽ち科學的の眞と、表現としての眞との間の差は何處にあるかといふことを考へて戴きたい。科學としての眞の場合は、描かれてゐる眞が死んで居る、生命をもつて居ない、殺されて居るといふことである。解剖し分析される刹那、其物は生命を失つて了ふ。藝術上の表現としての眞の場合は活きて居る、描かれたものに生命が賦與されて活躍して居るといふ點である。卽ち表現として藝術の生命はそこにあるのです。水を分析して H O といふ刹那に水は死んで了ふ。けれども行く川の流とか甘露のやうな水とか、或は他にもつと巧い言葉で言ひ現はされますならば、そのとき活きて居る特殊の水が端的に自分の頭に浮ぶ。言ひ換へて見れば前の者は殺しに寫す、然るに表現としての眞は活かして寫すのであります。卽ち活かさんがための技巧であります。技巧といふ事は何も女が白粉を塗るやうに外面的な細工をするのでも何でもない、其物を活かすといふ技巧です。技巧が陳腐になつてしまつたり或は型に嵌つたりすると、刺戟の力卽ち暗示力を失つて了ふ。彼奴またやつて居るな、と誰も相手にしなくなります。さうなるともう表現としては全然失敗で、暗示力がない。誰もそんな催眠術には罹らなくなるからです。

　それでこの活かして寫すといふことは何によつて出來るか。何處からさういふ生命を捉へて來るか。例へば此處に瓶なら瓶がある。それを油繪でうまく書く時は、その靜物は活きて居る。活きて居ないのは藝術的表現ぢやない。これをどうして活かすかといへば、作家の有つて居る生命の內容を通

じて表現するのである。作者の有つて居る生命の內容卽ち生命力といふものが描かれた物に乘移つて居なければ藝術的表現にはならないのです。さうでなければ、科學者の謂ふ所の寒暖計何度、H_2O などの仲間になつて了ふ。だから同じ山を畫いても同じ水を畫いても、藝術家の寫すものに二つと同じものは出來ない筈です。それは其作家の有つて居る生命の內容といふものが、人銘々顏の違ふ通りに違ふからであります。科學者の見た眞の場合を外面的に描寫するならば、やはり impersonal になる、非個人的になるのであります。科學者の見る場合のやうな物差で計つたら、一尺の物は誰が計つたつて一尺です。ちつとも個性は出て居ない。科學者の傳へる眞は、作家の生命といふものがそれに乘移つて居りませぬから、誰がやつても同じ一尺。その一尺の物をば一尺五寸といへばそれは間違つて居る、氣がどうかして居るのです。之を死物として外面的に描寫するならば、イムパアスナルであつて殆ど之に差(ちがひ)がないのです。作者の生命といふのは、言ひ換へて見れば其人の持つて居るところの個性であり人格であるのです。もう一つこれを詳しく申しますと、其人の內的經驗の總量であるといつたら宜いでせう。其人が此世に生れてから、いろ〳〵感じたり聞いたり行つたりした一切の體驗の總量が集まつたもの、其人の有つて居る特別の生命、これを名づけて人格とか個性とか言つて置けば宜いのです。だからして烏口や定規を使つて出來た職人風の繪には人格の力が出てゐない。科學的表現と同じ物です。機械で寫した寫眞も同然です。寫眞が藝術品にならないといふのは、それは機械

といふイムパアスナルな物を通して寫されるからである。血の通つて居る人間が感動して見たところの物其物が現はれて居ないからである。だから寫實主義とか理想主義とか色々いひますが、つまりそれが藝術品である以上は五十歩百歩の差である。その時代々々によつて科學的の眞でないと承知しないといふ人が多くなると、仕方がないから文學者の方でもちつとその氣味にかぶれて科學的態度に妥協して來る。そこでつまり作家の有つて居る個人の生命といふものをその作品の上に乘移らせるのですが、獨逸の美學者は『感情移入（アインフユウルング）』といふ言葉でこれを說明して居ります。例へばかういふ物（水注を指し）一つあつても、其物に作家自らの有つて居る感情といふものを流し込んで寫す、其時に始めて藝術的になる。だから或人は櫻の花を見て雲か霞かといふやうなことを申し、或人は全く違つた現はし方をしませう。そこがつまり作家の作品として感情の出るところ。それで俗な奴は俗な書を描きますが、さういふ人と作品との間にはいつでも同じ分子があるのはそのためであります。書といふものは東洋では立派な藝術になつて居りますが、あれは西洋の文字ではうまく個性が現はれませぬ、けれども日本の字は其人の氣象を書くといふことを申しまして、和漢の書は立派に其人の個性の表現があり、生命が現はれて居りますからあれで立派な美術になるのであります。ところが西洋の文字見たやうに機械的な定まつた形のものでは、少しも藝術にならないのです。

そこで藝術といふものは眞の個性を表現し、自然人生のすがたを捉へて、それを作品の上に活かし

て寫して行くといふことになる。藝術が他の一切の人間の活動と違つて居る點は、藝術は純然たる個人的の活動である。外の事は無闇に個人的にやられては困る。政治でも商賣でも何でも無闇に個人的では困るのですが、しかし藝術ばかりは極度の個人的活動です。つまり其人自身の生命卽ち個性を其物に賦與する。そこで他人の模倣をしたり人の拵へたやうな型に嵌つたりすると、生命といふものを打ち壞してしまふから、さういふ作品は藝術として物にならない。何よりも先づ自己を本位として自分といふものを僞らないでその儘に出す。先程齋藤（畫家齋藤與里氏）さんのお話のやうに、自由に自己を出すといふこと、これが何よりも藝術家にとつては大事なことで、これを忘れた時或は金錢のために或は世間の評判を顧慮して描く時には、其畫家は壁塗りの職人と同じことになる。何處までも自己の生命をその儘に現はして行く、それでなければ藝術にはならない。作者の有つて居る此個性、言ひ換へて見れば其人の生命といふものと、見たり味はつたりする方の人の生命との間に、何處か双方に共通の點があつて、それが互に響應して始めて鑑賞が成立する。これは巧いとか面白いとか云ふ快感が生ずるのです。

そこで私は今度開かれた個人展覽會の意義もさういふところに在ると思ふ。この點は先程齋藤さんのお話に詳しくあつたやうですから、詳しく申しませぬが、政府といふやうなものが人を集めて來て審査をさせて發表の機關にするといふやうな、個性を何等かの意味に於て縛る方法は詰らない方法で

あつて、眞の藝術としては意味を成さないことです。私はよく宅へ來る客とかういふ惡口を言つたことがあります。自分の宅で話した惡口を公會の席へ持出すのは少々滑稽ですが、文展だの帝展だのは要するに女郎の張見世みたやうなものです。諸君のうち女に惚れた經驗のある方は御存知でありませうが、藝術の鑑賞は女に惚れるのと全く同じです、そのものと自分との間に何處かぴつたりうまが合ふ。うまとは何ぞや、誰にも分りませぬ。けれども、そのものの感情と生命に本當に共鳴が出來るやうに、所謂催眠術にかゝるやうなこと、それが本當に惚れたのです。張見世の展覽會では美人も居るしすべたも居るし、いろ〳〵な者を集めた美人投票みたやうなことをやる。そしてこれは一等だあれは二等だ、特選だ並選だといふやうなことをやつても、それは眞に惚れる惚れないの問題とは沒交渉です。もし吉原の張見世が風俗壞亂であるならば、國家がやつて居る展覽會も藝術壞亂であると言つて差支ないでせう。この意味に於て作家が若し眞に自分の個性を尊重するならば、あんな處に作品を出さずに、自分の絵は自分獨り勝手に見せたら宜いでせう。若し理想的に徹底的に言ふならば、藝術はそこまで行かなければ本當ではないのです。若し列べる所が無ければ自分の家の玄關でも屋根の上でも構はない。一體先刻も申しました通り、審査員が自分の標準でいろ〳〵一等二等などの段を付けたり何かするのは、作家を愚にするやり方であります。またわれわれ鑑賞する者の方から見ましても、あれは美人投票で一等當選の美人だと言はれても一向有難くない、ははんそんなものかなといふ

までの事です。それよりはすべたでも宜いから一生つれ添はうといふ、この本當に惚れた心持にならなければ藝術といふものは眞に鑑賞されて居ないのです。つまり個性の中に何處か此方を引付け共鳴するあるものが在る。言ひ換へればつまり氣合ひですな。要するに男女間の惚れたはれたと同じ關係に於てわれわれが藝術に對するのでなければ駄目です。さうでなければ要するに張見世の素見に過ぎません。今度橋村、青嵐兩君の作品の個人展覽會が開かれたと云ふことは、而もそれが在來は藝術に極めて緣の遠かつた大阪の地に於て開かれたといふことは、私はかういふ意味に於て非常に愉快な事だと思ふのです。それで自分の所感を述べるために此處へ出て參りましたが、今晩直ぐにまた汽車で京都へ歸る必要がありますために、話をごく簡單に致しました。

遊戯論

（國展の機關雜誌『制作』のために）

一

『制作』の初號から獨逸のシルレルの『美的教育を論ずる書』が引續き譯載せられてゐる。わたくしはそれから思ひ付いて、この遊戯の問題に就いて管見を述べる事にした。

われわれが實際生活に身を投じてゐる間は、物質と精神との兩方から拘束を受けて、常に二者の爭の中に身を置いてゐる。ところがわれわれには生命力（ダス・ユウバアフリユシゲ・レエベン）の餘裕があつて、其力によつて、もつと完全な調和を得た自由な天地を求めようとする。卽ち官能と理性、義務と意向とがうまく調和された別天地を求める。それが遊戯だ。その遊戯衝動から藝術は起るので、遊戯は卽ち實生活を超越した假象の世界である。かくの如き境地を名づけて『美の精神（シエーネ・ゼーン）』と呼ぶ。さういふのがシルレルのあの尺牘十四、十五あたりに述べた要旨であつたかと記憶してゐる。

カントも亦同じやうに考へて或斷片録の中に、勞働に對して藝術を遊戯と見た說があるさうだが、

わたくしはよく知らない。ところがそれよりずつと後になつて、このシルレルの遊戲說をもつと科學的に說いたものは、ハアバアト・スペンサァの心理學（第九篇第九章、審美感情）であつた。

人間でも動物でも精力に餘剩があると、それを自分の意の儘に外に出さうとする。それが摸擬的行爲（シミュレエテッド・アクション）となつて遊戲が起る。われわれは日常必要な仕事にその精力を用ゐ慣れてゐるが故に、餘力があれば僅かの刺戟にでも直ぐ應じて、その精力を働かさうとする。さういふ場合の働きは實際的行爲でなくして、行爲の摸擬となるものだ。卽ち『力を自然に働かす事の無い場合には、眞の行爲（リアル・アクションズ）の代りに摸擬の行爲をしてでもその力を發しようとする。さういふ風な人爲的な力の働きが遊戲である』と、スペンサァは說いた。

人間にとつては、自分の生命力を適度に外に放射することが一番愉快なので、その反對に、力を少しも外に發せず之を用ゐないと云ふ事が最大の苦痛なのだ。最も重い刑罰は、だから暗室に人を監禁して一切の刺戟を去り、絕對に生命力を用ゐさせないやうにする事で、詩人バイロンが『シイヨンの囚人』に描いたやうな狀態に身を置く事である。苦役に服せしめられる方が遙かに樂なのである。長い航海の船の甲板で、髯づらの大の男が子供でもしないやうな遊をするのも、そのほか壁の樂書も、風流人の庭せせりも先づかういふ風にして說明は出來る。

二

然るに以上の如き遊戯說とは趣を異にした更に新しい解釋を下した者は、前世紀末に瑞西バゼル大學のグロオス教授が公にした所說であつた。

教授が『動物の遊戯』一八九六年）『人間の遊戯』、（一八九九年）の二書に言つた說は、在來のと全く異なつた下のごとき解釋であつた。

遊戯は實際的活動の後に來る反響ではなく、寧ろその前に來るべき準備たるべきものだ。即ち遊戯は從來考へられてゐたよりも、生活上に於けるずつと重大な必要な嚴肅な一要素だと見るのである。即ち人や動物が幼い時に種々の遊戯をするのは後年に必要なるべき肉體上精神上の活動を本能的に行るのだ。單に自分が以前やつた活動のおさらへではなく、將來の活動の準備として其實習訓練をするのだ。それは誰もが命じなくても、人間や動物の本能が爲せるのだ。即ち女の兒が人形を抱いたりおんぶしたりするのは、スペンサア等の言ふやうに、習慣的の摸擬行爲では決してない。今まで幾百代の母から傳へられた本能性が、將來育兒の豫備行爲として爲せるのである。猫の兒が玉をとるのも、子供が間がな隙がな喧嘩をするのも、未來の生存競爭の準備に他ならない。たからグロオスに言はせると、人間でも動物でも若いから遊ぶのではない、遊ぶから若いのだ。そこには未來があるからだ。

たとへば原始時代の人や野蠻人などが多勢集まつて、歌つては踊り踊つては歌ふ。あれは決して單なる遊戲衝動から發したものではなく、敵と戰ふときの團體運動の操練であり、豫備的の實習であると見るのが後者の解釋である。

三

遊戲に關する以上の二説は、之を藝術との關係に於て見るとき、私どもには色々の問題を暗示する。藝術が與へる快感卽ち遊戲としての快樂、或は藝術の實用的功利的方面にも聯關して、極めて興味ある問題となるのだ。

今日では普通に、シルレルの遊戲説は後のグロオス教授の所説によつて破られたと考へられてゐる。しかしわたくしは藝術といふものの人間生活上の意義から考へて、上述の二説は兩立し得べきのみならず、この二説を併せて始めて遊戲としての藝術の眞意義をも説明し得るのではないかとさへ思ふ。

職業とか勞働とか實際生活とかいふもの以上に、われわれには皆生命力の餘裕を以て營む生活がある。老人や大人に較べると青年や小兒の方が、旺盛にして潑溂たる生氣に富んでゐるだけ、それだけまたこの力の餘裕も大きい。その餘裕を以てわれわれは更に現在よりも、もつと自由な、もつと調和を得た、もつと美しい、より良き生活を創造しようとするところに、向上もあれば進歩もある。單に

藝術ばかりではなく、一般に思想生活は皆すべて此意味に於て嚴肅なる遊戯である。そはやがてグロオスの所謂實生活の準備的階段であるとも見る事が出來る。

元來勞働と遊戯との間には、事それ自らの本質上の差があるわけではない。たとへば同じく畫をかく事も、ピアノを彈く事も、それを行（や）る人の周圍の事情や其人の態度によつて、遊戯となる場合もあれば、また職業勞働となる場合もある。汗水たらして植木の世話をすることも、植木屋にとつては勞働であり仕事であらうが、金持の隱居にとつては結構な遊戯である。

然らば勞働と遊戯との差は、シルレルの言を借りて言ふならば、前者の場合にはその勞作者の意向（ナイグング）と義務（プリヒト）とがうまく調和して居ないし、後者の場合には兩方が都合よく一致してゐるといふだけのちがひである。換言すれば、前者の方では自己その者から發する要求のために勞作するのではないが、後者は自己のために自己の生命力を働かして、そこに滿足を得てゐるのである。だから遊戯とは自己内心の要求に驅られて、自己を外に表現せんとする勞作だと言へるだらうと思ふ。人間が自由に自己を表現し、適度に自分の生命力を外に發することには無限の快感が伴ふ。然らざる場合には必ず苦痛があつて、それは遊戯とは言へない事になる。この遊戯のあるところに創造創作の生活が出來る。

生活問題が簡易に解決され、社會的關係が今日の如く複雑でなかつた原始時代、――でなくても、或は古代に於ても、職業的勞働と遊戯的勞作との間にはさまで儼然たる區別はなかつたのだ。みな自

己から發した内的要求のために快く動くことが出來たのである。何等の外的要求に迫られずして自己滿足のために忠實に眞率に、眞面目に、嚴肅なる遊戯的氣分で動いてゐたのだ。祭壇にひざまづいて神託を受け、祭政一致の『まつりごと』をするときにも、彼等は『神あそび』と稱して樂を奏した。面をかぶつて舞踊をした。美しい歌の言葉をも捧げたのである。今日の所謂政治家や職業的僧侶のする事を、彼等は『あそび』として行つてゐたのであつた。

要するに遊戯とは、純一無雜なる自己内心の要求から出た活動である。周圍や外界の覊絆に煩はされず、金錢とか義務とか道德とかいふ社會的關係からの强制束縛を超越して、純眞なる自我の生活を建設し創造することである。シルレルがあの尺牘の第十五に『人間が言葉の完全な意味に於て人間である場合にのみ遊び、又彼の遊ぶ場合にのみ完全に人間である』と言つた有名な言葉の眞意義は、かかる點にあるのだと見て可い。この意味に於てまた、世に遊戯とか道樂とかいふことぐらゐ貴い事は無いと私は思つてゐる。

人生の一切の現象は生命力の顯現である。そのなかで最も多く最も烈しく、自己といふ個人の生命力の現はれ出でるものは藝術上の制作である。外界から迫る他の一切の要求——義理とか道德とか法則とか因襲とかいふ外的要求を超脫して、眞に純然たる自己表現を行るとき、それは死身になつて行る最も嚴肅な遊戯である。さういふ藝術家には、グロオスの言つたやうな若々しさもあれば、大きい

未來もある。藝術家が世間の批評を憚つたり金錢の問題を考へたりして制作をするとき、それは既に『嚴肅なる遊戲』ではなくして職人の仕事になつてゐる。素絹にのぞみ彩毫を揮つて、そこに自然人生を活躍せしめんとする畫家が、變じて染物屋の細工人となり、左官の手間取となり果てる時である。

一口に遊戲と言つてもその範圍や種類は甚だ多い。ふざけた洒落氣分の遊戲即ち俗に娯樂なぞと言ふ類のものは、前記のスペンサアが言つた單なる摸擬的行爲で、實際的活動の後に來る反響だとも見られよう。しかし眞の自己表現である嚴肅なる遊戲はその藝術たると實業たると政治たると學藝たるとを問はず、所謂『道樂』の域に這入つて了つたもので、これあるがために個人としても人類としても、未來もあれば向上もあり進轉もある。それをグロオスのやうに解釋して豫備的行爲と見做すとすれば、前述の二つの遊戲說は必ずしも、相容れざる衝突せるものと見る理由はあるまいと思ふ。

勞働問題を描ける文學

一　問題文藝

現實生活の深い根柢の上に建てられた近代の文藝は、その一面に於て純然たる文明批評であり社會批評である。嘗てさういふ傾向の第一人者であつたイブセンによつて起された、所謂問題劇は言ふまでもなく、また傾向小說、社會小說などの名目によつて呼ばれる多くの作品も、みな直接に或は間接に近代生活の難問題を捉へて題材とした。その最も甚だしきものに至つては、思ひ切つて純藝術の境域をさへ蹈み越えてゐる。或作者は既に一種の宣傳者（プロパガンディスト）と化し、群衆を向うに廻はして頻りに大聲疾呼してゐる感さへあるのは、文學を以て今もなほ俳茶の讌と同じき一種の風流韵事なりと心得てゐる人を驚殺するに足るものがある。現存の作家に就いて言へば、英國のショオ、ゴルスワアジイ、ヱルズ、また佛蘭西のブリュウの如き、この最も著しき者だ。

昨年あたり一時は流行のやうになつてゐた民本主義（デモクラシイ）の論議に續いて、今度は勞働問題が一世の視聽を聳てるに至つた。資本家對勞働者の衝突は、日本でこそ昨今の問題だが、歐洲の社會では前世紀以

來の最大難問であり、從つてまた文藝家の中には早くから之を主題として取扱つたものがあつた。いまかういふ類の小說や戲曲の特徵を考へて見ると、先づ(1)個人の性格や心理を寫すほかに、多數者の群衆心理を描いたものがある。殊に戲曲の場合などは登場人物の數が無闇に多い。これらの點は題材の性質そのものが然らしむる結果だ。昔から劇などに群衆を用ゐる場合はあつた。しかしそれはゲエテの『エグモント』や沙翁の『ジュリアス・シイザア』に於けるやうに、或個人が群衆を代表し、全體が個人の心理の法則で動いてゐるのであつた。個人心理と働きかたを異にしてゐる群衆心理そのものを舞臺に出す事は、近代劇のうちでも特に此勞働問題を主題とした作に成功したのがある。次にまた(2)多數者の騷擾などを描けば、勢ひ場面が賑やかでセンセイショナルな、メロドラマ風の物が出來あがる。(3)描寫の態度から言へば、近代作家の常として現實をその儘に描いて、此資本勞働の問題にも全く何等の解決を與へようとはせず、その悲慘な實際を描き、問題を提示して讀者自らをしてこの近代社會の一大缺陷に就いて深く反省し思索せしめようとする行きかただ。(4)また結構から言へば、資本家勞働者の衝突事件のなかに男女の戀や家庭内の悲劇慘話を織り込ませて、作全體のエフェクトを強く深からしめるやうな仕組みが普通だ。これは決して所謂小說風の作り事、拵へ物でなく、實際に勞働運動のかげにはいつも何等かの意味で女性の力が働いてゐるからだ。(5)そして此種の作中には必ず資本家側に保守頑冥度すべからざる老人が居て、そこに新舊思想の烈しい衝突が現はされ

てゐる。日本でも近頃この問題を捉へた作物がだいぶ出たが、なかでも佳作の一つだと思はれた久米正雄氏の『三浦製絲場主』（中央公論八月號）の如き、矢張り右に述べた最後の二つの點などは、西洋の近代文藝にあらはれたものと異曲同巧であつた。

二　英吉利文學

近頃同盟罷工問題が世を騒がすにつけ、西歐文藝の如何なる作物にこれが描かれてゐるかを、私は二三の人々から訊かれた。それから思ひついて、今全く議論や理窟を抜きにしてこれらの諸作を紹介して見ようと思ふ。本來製造工業の盛んなため、一番早くから産業革命の難問題にぶつかつて居た英吉利では、詩人や小説家で此問題を取扱つた人が、大陸諸國に於けるよりもずつと早くから現はれてゐた。元來が英文學の特色として、佛蘭西文學のやうに純藝術の色彩が濃厚でなく、いつの時代にも、宗教上政治上社會上の實際問題と文學とが緊密の關係を保つてゐる事も、此原因の一つであつたらう。

最初かの勞働者の主張擁護のために普通選擧を叫んだチャアティスト一派の運動に關聯して、前世紀の中頃から既に論壇ではカアライルの『過去と現在』『チャアティズム』『後日評論（ラター・デイ・パンフレット）』出で、ラスキンも亦藝術批評の筆を抛つて、勞働者に與へた書翰集 "Fors Clavigera" や、『此後至者にも（こののちのもの）』などを

公にした。詩壇に於ても、自ら勞働者であつた詩人ゼラルド・マッセイや、『幼兒の嘆き』に少年勞働者のために同情の涙を灑いだブラウニング夫人の諸作が出たのも、この十九世紀中頃からであつた。

しかし純然たる創作の方面で最も早く此勞働問題を描いた名作は、チャアルズ・キングズレイの小說、『酵母』"Yeast"(一八四八年)と『オオルトン・ロック』"Alton Locke"(一八五〇年)とであつた。もとより當時の社會改造說は、後年に勢力を得たマルクス一流の物質論ではなく、道德宗教の思想を根柢とした舊式のもので、キングズレイがこの二大作品に於て宣傳しようとしたのも、矢張り當時の英吉利に勢力のあつた基督教社會主義に外ならなかつた。即ちモリスやカアライル等の思想系統に屬する形而上的のものであつた。

食料品の暴騰、賃銀の低廉、勞働時間の延長、就業難、さういふ色々の原因のために當時の英吉利の勞働者は非常な苦境に陷つて、地主資本家に對する一般の反抗氣分が白熱的になつてゐた。この不安な社會狀態は、千八百四十八年更に對岸の佛蘭西に起つた第二革命によつて一層の氣勢を高めたのであつた。キングズレイのこの二つの作は勞働階級の窮狀を精細に描いて、先づ正義人道に訴へたものであつた。即ちその根本思想に於て既に今日の唯物的な社會主義とはよほど立場を異にしてゐたと共に、文藝の作品としても亦表現に於て、なほ舊時代の浪漫的の色彩の甚だ濃いものであつた。殊に

『酵母（イイスト）』の方は荒廢した田園の生活を描き、地方農民の窮狀を寫したもので、主人公のランスロットといふ青年が獵に出掛けて行つて、怪我をして或寺院の門前で美しい長者の娘に救はれる、そして二人が戀に落ちると云ふやうな場面は、行きつまつた今人の生活を土臺にしてゐる現代文學とは、甚だしく懸け離れたものだ。そしてまた一方にはかういふ浪漫的の趣味と共に、あまりに露骨に社會改造の主張を作中に織り込まうとしてゐるため、そこに甚だしい不調和や不自然がある。所謂『問題』小說の缺點を遺憾なく暴露したもので、藝術品として失敗の作であるのみならず、主義宣傳のためにも力が弱いやうに思はれる。今日から考へれば、この作が當時非常な好評を得たことは、全くその時の焦眉の問題を取扱つたがために、一時的に時人の視聽を聳てたに過ぎないものである。

之に較べると『オオルトン・ロック』の方はすべての點に於て遙かにすぐれた作だ。此方は農民生活でなく、倫敦の勞働階級の境遇を寫し、貧民窟の生活を細叙したもので、前者よりはずつと實寫的であり、また小說としても成功してゐる。裁縫店の職工オオルトン・ロックの自叙傳として書かれてゐる。その生ひ立ちから、或書堂で見そめた大學幹事の令孃との戀を叙し、口に筆に勞働運動の宣傳に狂奔した揚句、官憲からは或地方に起つた暴動の煽動者と睨まれて三年の禁錮に處せられる。遂に社會改造の大業は基督にしてはじめて之を成し得べきを覺り、一方また失戀の結果、遂に周圍の事情に餘儀なくされて米國のテクサスに移住しようとする。やがて目的地に上陸しようとする前、船中に病

を得て死ぬまでの悲慘な生涯の記錄である。純粹の小說といふよりは、矢張り宣傳に重きを置いた事が隨分露骨に出てゐるが、それでも作者は平氣で『娛樂のためにのみ私の小說を讀む人は、此一章をお飛ばしなさい』（第十章）などとやつてゐる。

三　近代文學、特に小說

然しキングズレイなぞよりも、ずつと吾々に近い新しい時代の文學で、勞働對資本の問題を取扱つた小說界の大作を考へて見ると、先づ第一に擧げらるべきものは、佛蘭西のゾラの『芽月』“Germinal”（一八八五年）であらう。單にゾラ一代の最大傑作であるのみならず、歐洲の勞働社會にこれほど廣く讀まれた小說は他に無いと言はれてゐる。作者自ら熱心に研究し觀察して得た事實を土臺として、炭坑勞働者の悲慘などん底生活を寫し、職工側の首魁ランティエが、橫暴な資本家の抑壓に反抗する慘劇を、精緻を極めた例の自然派の筆法で描いたものだ。抗夫の醜穢にして殘忍な、殆ど人間と思はれないやうな生活を寫したあたりは、日本でならば早速發賣禁止を免れないものだ。或人が此作を評して、ダンテ『神曲』地獄界の物凄さを近代化したものだと言つたのは面白い言葉だ。同じ作者の『勞働』“Travail”（一九〇一年）も矢張り資本主義の暴虐、專橫な富豪の家庭生活の亂脈を寫し、一方に之と競爭してリュク・フロモンといふ男が、資本勞働の本當の提携で拵へ上げた工場の隆運をゑがき、

この二つの明白な對照によつて、作者自らの社會改造の理想が後者に在る事を示したものだ。（ゾラは或一部の批評家が誤信してゐるやうな純客觀描寫のみの作家ではなく、後には大きい理想主義が背後にあつたことは、此小說などにも現はれてゐる。）

英吉利文學の方では、ゾラの『芽月（ジェルミナル）』と殆ど同じ頃に出たもので、單に小說としては話の筋が變化に富み場面の賑やかなのは、ギッシングの『平民』"Demos; a Story of English Socialism"（一八八六年）である。貧家の育ちに似あはず上品で、氣立てのやさしいエマといふ女があつた。勤儉な物固い家庭に人となつた社會主義者のリチャアド・ミュティマァがこの女と婚約をした。ところが此社會主義者が叔父の遺產相續をして鐵工所の事業に取掛つた。それがうまく行つて所謂成金になる。職工の爲をはかつて清潔な長屋を建てたり、購買組合や無料講演會などをつくる。ところがさうなると、おのづから成金氣質が出て、以前婚約のあつたエマを見棄てて、他の良家の娘と結婚する。が、不幸にして此結婚生活はやがて悲境に陷り、財產も失（な）くして了ふ。ミュティマァは代議士候補に立つにも社會黨からは出ずに他の黨派から出る。さういふ色々の事から人氣も落ち、或時ハイドパアクで暴徒の襲擊をうけて命からがら逃げ出した。難を避けるべく或家に飛び込むと、偶然その家の一室はエマの住居であつた。暴徒の樣子を見ようと思つて、ふと彼はその窓から首を出した。その時、折惡しく飛んで來た石でひどく頭部を傷けられ、かつて己れが無情（つれな）くも棄てたエマの心こめた介抱をう

けて、彼は最後の息を引取るといふのが、此長篇の荒筋である。

いつも好んで貧乏生活を題目としたギッシングには、かかる勞働問題ではなしに、單に職人工女などの實際を寫實的に書いたもの、例へば "Thyrza" の如き類の作は他にもある。また西洋近代の小說で勞働者の生活、貧富懸隔の問題などを材料に取つた作（たとへば米國工業の中心地、市俄古を背景とし勞働者の慘狀をゑがき、一時は英米兩國の讀書界を風靡したアプトン・シンクレイアの『ジャングル』の如き類）は無限にあるが、單にこの勞働對資本の衝突問題に觸れた作だけでも、十や二十ではなからう。なかでも英國の William Tirebuck の作 "Miss Grace of All Souls," 米國の或匿名作家の筆に成つた "The Breadwinners," また Mary Foote 女史の „Coeur d'Alène," 紐育の料理屋の給仕人（エイタアズ）の同盟罷業を骨子にした Francis R. Stockton の "The Hundredth Man" など、いづれも同盟罷工をゑがいて最も成功した通俗小說として知られてゐる。

四　同盟罷工を描ける戲曲

次に戲曲の方で同盟罷工を主題とした作品中最も有名なものは、ハウプトマンの傑作、シレジアの勞働者の激烈な反抗をかいた『織匠（ディ・ヱエベル）』で、當時獨逸の官憲が上場を禁止したものだ。これは從來いくたびか獨逸文學の專門家によつて我が國に紹介せられたものだから、玆に說くまでもなからう。ビ

エルンソンの『人力以上』は、その前篇だけを嘗て森鷗外氏が譯されて『新一幕物』に收められてゐると記憶するが、あの後篇の方は、前篇の牧師サング程ではないが、矢張り理想家であるその息子と娘とを中心として、資本家ホルガァに對する職工の反抗運動を主題としてゐる。また英吉利文學では、サウアビイの"Rutherfold and Son"も罷工を背景にした劇であり、ジョン・オスワルド・フランシスの"Change"も同樣。又ジョオヂ・ムウアの"The Strike at Arlingford"は、詩人であり社會主義者であるJohn Reidといふ男が、同盟休業さわぎに戀の葛藤と金錢問題との板挾みになつた結果、遂に失敗して毒を仰ぐに至る悲劇だ。作品としてはビエルンソンのよりは劣つてゐる。これらのほか、一時米國の人氣作者であつたチャアルズ・クラインの"The Daughters of Men"西班牙の現存作家フランコス・ロドリゲズの"El Pan del Pobre,"(貧者の麵麭)、デイセンタの作"Juan Joss"丁抹のヒアルマア・ベルグストレムの"Lynggaard & Co."佛蘭西のブリュウの"Les Bienfaiteurs"(慈善者)など枚擧に遑なき程であるが、劇として最もすぐれた作でハウプトマンの『織匠』と比肩すべきものは、英國現代の最大の劇作家ゴルスワアジイの『爭闘』(ストライフ)である。

『爭闘』はトレナアサ錫器會社の同盟罷工をかいたもので、社長のジョン・アントニィと言ふのは專横で剛情で、貪婪飽くを知らざる男だ。職工の罷工すでに六ケ月に及んで、彼等の妻子が飢に泣いてゐるのを冷やかに見ながら、頑として一分一厘と雖も讓歩しようとしない。之と對抗してゐる勞働者

側の首領は、また激烈な革命主義者であるディヸッド・ロバッだ。劇はこの極端に利害の相反した——しかもその徹底的な態度に於ては兩者の間に一點相通ずる所ある、二つの人物を中心として展開する。この二つの力の中間に立つものは、既に双方の衝突のために疲弊し困憊したストライキの職工と、勞働組合の役員とである。一方に倫敦の方から重役連が來て會議を開けば、職工の方でも別に集會を開いて妥協案を講じてゐる。ちやうどその矢先にロバツの妻が飢餓と寒氣とのために死んで了つた。それを聞いた職工等のうち、以前から既に心中ひそかに矯激なロバツの主張に不贊成であつた一部の者が急に勢力を得た。遂に或條件のもとに妥協していよ〳〵復業するといふ事に決し、此決議を齎して職工側は重役たちを訪ねる。すると一方また重役連の方でも既に會議を開いてゐて、その結果あの頑冥な社長アントニイは飽くまで妥協に反對して辭職してしまつたあとであつた。

もと〳〵衝突の中心人物であつた双方の大將はかうして倒れて了つた。第三幕の最後のところで、かの徒らに自分の妻をまで犧牲にして奮闘し、最後には皆の者から背かれて了つてロバツと、また重役連から裏切られた社長アントニイと二人は相對して、各自分たちの此運命の皮肉を顧み、お互に同情する。

作者ゴルスワアジイは、此作によつて資本勞働の衝突の無益なるを示さうとした事は言ふまでもないが、それと同時にまた資本主義の現狀に於ては、罷工さわぎの避くべからざる事をも十分に考へさ

せようとした。問題に對して何等の解決を與へないで、双方に十分言はせるだけの事を言はせ、行らせるだけの事をやらせて、この問題を現實社會の一現象として提示し暴露した。苟も人生の問題を考へる人ならばこの大きな社會問題に對して無頓着では居られないやうに、吾々の眼前にまざ〳〵とそれを見せて吳れたところに、此戲曲が英國社會劇の最大作たる意義が存する。多くの批評家はゴルスワアジイの此作にハウプトマンの影響があると言ふが、かの『織匠』に見えるやうな煽動的な點はこの『爭鬪』の方には毫も無い。それだけまた落着いた思想劇としては、ゴルスワアジイの作の方が一步進んでゐるのではないかと私は思ふ。最後のアイロニカルな場面は、近代の現實主義の文藝の常としてわざと人生の皮肉を描いたもので、『織匠』の結末にも矢張りかうした一種のアイロニイが現はされてゐた。

　ゴルスワアジイの戲曲はありの儘、自然の儘に現代の社會を描いた。ショオのやうに思想宣傳のために對話や人物を無理した所が少しもない、ロバツが勞働者集會の席で資本家を痛罵する言葉も、社長アントニイが資本家の萬能を說いて一步も讓らない演說も、兩方相對してこの極端に正反對なる利害關係の上に立つ徹底的非妥協的な二人の性格を躍如たらしめてゐる。また社長アントニイの娘が、ロバツの妻の死せんとするに際して慈善を施して之を救はうとすると、父アントニイが言ふ言葉、『お前はお孃さんの手で、現代の難病がなほせると思つてゐるかい』 'You think with

your gloved hands you can cure the troubles of the century." なども、慈善や溫情主義に對する痛快な諷罵である。

或者は算盤の上から、或者は感情から、或者は理窟から、血眼になつて騷ぎ立ててゐる勞働問題も、大きい人生の批評家から見れば、そこに滑稽もあれば人情もあり、むくつけき髯男の怒鳴つてゐる蔭には、かよわき女性の笑ひや涙が見られる。冷やかな溫情主義のお隣には却つて熱のある純理論が叫ばれたりする、色々の矛盾がある。高いところ大きい所から達觀し觀照すれば、今人の社會的生活や個人的生活は果して何と見えるだらうか。それを文藝の作品は明鏡裡の影を捉ふる如くに、鮮かにまざ／＼と吾等に示して吳れるのだ。當面の問題解決を文藝に求めんとするが如きは、畢竟俗人の俗見に過ぎない。

文學者と政治家

（此一篇は『文藝家と爲政家との接觸を如何に見るか』と言ふ
早稻田文學社の問に答へたものである。）

かつて風流宰相が小說家を招いて一夕の宴を張つたからとて、それはただ一寸變つておつな遊び方をしたと言ふだけで、日本の文學者と政治家との間に、眞面目な深い意味での接觸もなく理解もない事はいまなほ舊の如く、昔の戲作者時代と何等異るところは無い。

文學を以て一片の風流韻事と心得ることは日本人傳來の迷妄である。若し文學も政治も、共に民衆の深い嚴肅な內的生活に根ざした活動であるならば、二者の間にはもつと〱眞面目な接觸があるべき事は、事新しく言ふまでもなからう。殊に近代のやうに文學がわれわれの現實生活を立脚點として存立してゐる時代に、文學者と政治家とが全然沒交涉であるといふ現象は、明らかに日本人の思想生活の一缺陷を示してゐたものかとも思はれる。若し果してこの頃になつて人々が、二者の接近と相互の理解とに就いて考へるに至つたとすれば、それは民本主義の思想などと共に、一般日本人が思想生活の上に新しい發足點を見出した一現象として喜ぶべき事だらう。政治が單なる上辷りの駈引や利害

の打算に終始せず、文學がまた浮薄な遊蕩三昧や洒落風流の所産でなくなる時期が早く來ればよい、とわたくしはそれをのみ願つてゐる。

今日では思想生活に根柢を据ゑてゐない政治家が、如何にみじめな者であるかは、最近歐洲大戰の前後にわたつて世人に示された大きな事實であつた。民心の歸向を察し大勢を理解して百年の計をたてる程の人ならば、文學を以て風俗壞亂治安妨害の無用物と考へたり、或は世の風教のためとか勸善懲惡の道具とか見做したりするやうな、幼稚な無理解な人であるべき筈がない。いま巴里で世界改造の任に當つてゐる英佛米の政治家三人を見ても、みな文學者としての仕事もしてゐれば經歷もある。キルソンの論集 "Mere Literature and Other Essays" には、彼が單なる政治財政の學者でない他の一面が窺はれる。英國の外相バルフォアが新思想家としてベルグソンの哲學に批評を加へ、文筆の人として優に一家をなしてゐる事は言ふまでもない。佛蘭西のクレマンソオは新聞記者としての閱歷のほかに、立派な小說家として皮肉な社會觀察を "Le Grand Pan" などの作に示してゐたではないか。この作は新しく英譯せられて英米の讀書界の注意を惹いてゐるとさへ聞いた。

政治家にして文學を弄ぶ人は少しも珍しくない。一種の道樂として、役所や議會から歸つて晩に義太夫か謠曲でも呻るやうな洒落氣分で、文學書を讀むやうな人を私は玆に事々しく言ふのではない。其政治家が一方にまた文學者であつて、根柢には兩方に共通なる嚴肅な思想生活のある人を指摘しよ

うとするのである。わたくしはベカンズフィイルド伯の政治小説『コンタリニ・フレミング』や『ヸヸアン・グレイ』などに大きな藝術的意義があるとは思つてゐない。またよくかういふ話の引合に出るグラッドストンのホオマァいぢりでも、專門家の目から見れば決して偉いものではなかつたのだ。明治の最も浪漫的な政治家伊藤公が漢詩を風流として樂しみ、旅の船中にもトルストイの小說を繙いてゐたといふ話を耳にしたが、それが果して公の政治的生涯にどれ程の色彩を添へてゐたかをわたくしは知らない。勿論周圍の時勢が異なれるからとはいへ、今日のクレマンソオやヰルスンやバルフォアの如き例と比較しては、ディズレイリや虞翁や藤公の文學癖は、さほどに重大な嚴肅な意義があつたものとは考へられないのである。單にその人個人としての教養や人格の上に幾分の光彩を添へ、ゆかしさを增したといふ位の程度のものだと思ふ。

政治家が全く文藝を——廣い意味で思想問題を理解しないといふ事は、その人の政治的活動の上にもどこかに缺陷があつて、不眞面目で上調子でその日逃れである事を語るものではなからうか。思想家たる一面を具へてゐない政治家が、特に現代に於ては大きな仕事をする事の出來ないのは、民衆の自覺と覺醒の結果として當然な事だと思ふ。

政治家と思想生活との關係に就いては、本誌三月號の卷頭に金子筑水氏が論ぜられたところに私は十分の同意と敬意を表して、また蛇足を添へようとは思はない。だから玆には更に文學者の方から見

て、二三の思ひ付いた事を附け加へよう。

民本主義の政治の本元である英國では、昔から文學者が政治と非常に密接な關係を有つてゐた。遠い時代に溯つて、チョオサァは既に宮廷の政務に參した謂はば外交官のやうな人であつた。降つてイリザベス朝の如きは政界と文學界との距離が最も近く、サア・フイリップ・シドニイの如き著しき例は言ふまでもないとして、沙翁ですら、あの歷史劇は女王朝の政治問題を離れては研究すべからざるものである。次いでミルトンの時代となれば、政治と宗教と文學とは三つ巴となつて、入り亂れた紛糾錯綜した關係になつてゐる。十八世紀から佛蘭西革命以後となれば、政界と文壇とが益々接近してゐる事は世人の知られる通りだ。これは英人の特性が何事にも實際生活の問題を離れないといふことに基因してゐると共に、また一方、その國の政治が民本主義を基礎として發達して來た事にも職由するだらうと思ふ。

近代となつて現實主義の文藝が起つてからは、文學者は直接に政治問題を藝術化してこれを作品に取扱つてゐる。イブセンの問題劇の流を汲んだブリュウでもゴルスワアジイでも、ショオでも、皆その最も極端な露骨なものである。最近歐洲の大戰に臨んで英佛の文學者が如何に烈しく血眼になつて政治問題に狂奔したかは、われわれ日本人の想像以上であつた。また僅か最近一世紀位の歷史しきや有たない露西亞文學にも、ロマノフ王家の惡政に對する文學者の公憤が基となつてゐること、或はま

た最も純藝術的な佛蘭西文學の史上に、かの自然主義の開祖たるゾラがドレエフュウス大尉の事件に於ける活動を、われわれは何と解釋すべきであらうか。雪月花の和歌俳句や、八文字屋本ばかりを文學と心得てゐる人たちの目には、かういふ現象が何と映ずるだらうか。

獨り純藝術の境に悠遊し、象牙の塔にかくれて超然高踏の態度を執る事を、私は必ずしも貴しとしないのではない。現代の如き時勢に於ても、戰亂騷擾の巷をよそにして遠くピレニイズの山中にかくれ、風月を友とせる佛蘭西新詩壇の驍將フランシス・ジャムの如き詩人あるを見て、わたくしはそれを偉なりとし敬すべしとなすに躊躇しない。然し現代の藝術家にとつては足が飽くまでも確かに地を踏みしめて、實生活といふ根柢を忘れない事が何よりも肝腎だ。さながら聳然として天に冲せる喬木の如くに、一方には高く聳えて美しく花咲くと共に、根はまた廣く深く地中に喰ひ入つて實生活に大きく擴がらねばならぬ。かくてこそ文藝は眞に『人生の批評』としての任務を果し得るのである。ただ地を離れて飛ぶ風船玉のやうであつては心細いと思ふ。必ずしも政治や社會上の『問題』を直接にその作品に取扱ふ必要はあるまい。唯これらの問題に對しても一隻眼を有し、それを批判し理解するだけの用意は人生の批評家として文學者の等閑視すべからざる所である。

眞に統一あり根柢ある國民生活を建設し、眞の文化主義人文主義の上に我が民族生活を改造するためには、政治家と文學者とが双方から互に歩み寄つて、二者の間にもつと意義ある密接な關係を生ず

る日が必ず來なければならぬ、と私は信ずる。

藝術としての漫畫

一　藝術に對する無理解

長いあひだ武士道だの軍閥跋扈だの、或はまた功利の學などにのみ煩はされて來た日本には、今日でもまだ藝術に對して十分な理解や同情を持つてゐる人は甚だ尠い。殊に或方面の人たちが或種の藝術に對する場合などは、全然無理解、無同情であるばかりでなく、それに對して輕侮の態度をとり、甚だしきに至つては憎惡の念をさへ抱いてゐるのは、傍から見てゐると殆ど滑稽な場合がある。わたくしは一例として教育界の事を言はう。この社會は軍閥と同じやうに最も多く沒分曉な人間が巣を喰つてゐる所だが、かれ等は下らぬ事をつかまへて國粹保存を唱へ、お國自慢の種にして居ながら、純粹の日本音樂をさへ理解しようとする者の尠いのは不思議ではないか。單純な日本音樂のなかでは一番深みのある、三味線のわかる教育家が百人中に一人でもあるだらうか。祖先の遺したものといへば愚にもつかぬものまで有難がつて、日本固有だとか國粹だとか言つて騷ぐ連中が、德川三百年の日本文化が産み出した歌澤や長唄や常盤津や淸元の面白味も知らないで、西洋のオルガンのぶう〳〵いふ

音を唯一の音樂だと心得てゐる學校の先生たちも氣の毒な者ではないか。三味線の音〆が解らないのはまだ恕すべしとしても、さらば演劇に對する今の日本の所謂教育家と稱する者の態度は、あれは何のざまだ。頑冥度しがたき校長や教師自らが、解らないから見物しないのは御勝手だとしても、生徒の觀劇をさへも妨げんとし、演劇に類した一切の催しを學校で嚴禁してゐるのは、例のつまらぬ因襲に囚はれてゐるといふ以外に、理論から言つても實際から言つても、如何なる論據があつてさういふ事が出來るのであるか。固陋の偏見に囚はれた今の教育家は、藝術と教育との關係、美的情操の涵養、感情教育などに就いては、嘗てひとたびと雖も考慮を費した事がないではないか。考慮を費して而もなほ且學校に演劇を絕對禁止すべき理由ありといふならば、それを承り度い。わたくしは文藝の研究者として、學問上から何時でもそんな愚論に對しては駁撃を加ふるに躊躇しない。

若しまた弊害の一面をのみ見て之を禁ずといふならば、野球の如き立派な運動遊戲に於てすらも、精神的には勝負事に伴ふ弊害もあり、具體的には時間と精力の消耗から生ずる學業不進步の惡影響も無いとは言へない。弊害は獨り演劇に限つたわけではないのである。要するに頑愚な教育家をして正直なところを白狀せしむれば、彼等は演劇そのものが如何なる藝術的本質を有つてゐるかを知らないで、ただ河原乞食の遊戲だと見て居た在來のありふれた因襲觀念に囚はれてゐるといふに過ぎないのだ。それ以外には何等の理由も根據もないのである。苟も世界の文明國といはれる國で、日本のや

うに演劇を蔑視してゐる國が果して世界のどこかにあるだらうか。米國の中學にでも大學にでも、祝日などには必ず男女青年學生の假裝演技が見られる。米國學藝の中心と目されてゐるハアバアド大學は、その構内に立派な大學所屬の劇場を有つてゐる。英國の演劇は、昔を尋ぬれば大學から起つて發達したものである。獨逸前皇帝のやうな男でさへ、演劇には特に宮廷の保護を與へてゐたではないか。佛蘭西は言ふまでもなく堂々たる國立劇場を有つてゐる國だ。英國は他の政治家や學者や軍人に對する場合と同様に、俳優に向つても同じく國家としての榮爵を授けてゐるではないか。(爵位そのものが下らないといふ事は別問題として。)さう云ふ事實が一國の文化教養の上に果して如何なる意味を有つてゐるか、また民衆藝術としての演劇は如何なる性質のものか、自ら教育家なぞと威張つてゐる連中は少しくこれらの點を考へて見るが好い。考へてもなほ解らないといふならば、教へてやつても好い。

二 漫畫式の表現

こんな事を書く積りではなかつた。わたくしは本題の漫畫に就いて述べねばならぬ。

教育家が演劇や日本音樂に對して無理解であると同様に、一般の日本人は一種の藝術としての漫畫に對しても全く理解を缺き、之を蔑視してゐるかのやうに見える。

日本で一般に漫畫と云はれてゐる物は範圍が甚だ廣い。時事問題に對する諷刺畫卽ち cartoon もあれば、普通にポンチ繪と稱せられる caricature の類も多い。然しその種類の如何に拘はらず、漫畫の本質は、內に嚴肅なる『人生の批評』を寓して、外に笑ひを粧ふところにある。その眞意は悲哀であり諷罵であり憤慨でありながら、表現の上に綽々たる餘裕を存して、滑稽と嘲笑とによつてその眞意を傳へんとするものである。これが手段としては極端なる誇張法 exaggeration を用ゐたり、またことさらに奇怪警拔 the grotesque の特色を大ならしめたものである。

たとへば或人物とか事件とかを捉へて之を描くに當つて、その特徴だけを誇大して他の一切を省略するならば、言語を以てしても或は畫筆を以てしても、同じくそこには必ず漫畫が出來あがらねばならぬ。眉の釣上がつた三角頭のびりけんを描いて故寺內伯としたのは、その容貌の或著しき二三の特徵をのみ強調して描かれるからである。此誇張には必ず滑稽を伴ふもので、文學の場合でいへば、夏目漱石氏の小說『坊ツちやん』の如きでも、或は又之とはよほど趣を異にしたディッケンズの滑稽小說『ピクヰック・ペイパァズ』の如きでも、皆畫筆に代ふるに言語を以てした漫畫的の文學作品に他ならないのである。元來文學の上には滑稽諷刺の作品に此種の物は古來甚だ多いので、希臘のアリストファネスの喜劇からして既に明らかに今日の漫畫を演劇で行つたものだと見る事が出來るのである。卽ちペリクリイズ時代の雅典の政界の時事問題を諷刺したものが、この喜劇の祖であつたのだ。

大いなる笑ひの蔭には大いなる悲しみがある。大に泣く人でなければ大に笑ふ事も出來ない。だから滑稽をゑがく作者や畫家には甚だしい苦悶憂愁の人があり、世を憤り生を呪ふやうな人が昔から尠くない。『吾輩は猫である』を書き、『坊ッちやん』を草した頃の漱石氏は極めて沈欝な神經衰弱風の人であつた。此點では英國十八世紀のスヰフトなぞも矢張り同じ傾向から出たのであつた。笑ひのかげに涙があり、義憤あり公憤あつて、そして鋭敏な深刻痛烈な人生に對する觀照がなければ、漫畫といふ藝術には成功し得られないのである。滑稽はその鋭き觀照の鋭鋒を包める外皮に過ぎないからだ。漫畫風の作品を見てただ笑つて濟ますやうな人は、本當の藝術に何等の理解なき人たちであらう。だから眞面目な、深く物を考へ込むやうな人が最も多く漫畫を好むといふ事實は、矛盾であるやうで實は矛盾でも何でもない。世界で一番眞面目腐つた、大きい聲でも笑はないやうな、そして極めて着實な實際的な人種は誰かといへば、アングロ・サクソンである。そのアングロ・サクソン位に滑稽な漫畫を好む國民は他に無いので、英國の藝術から若しこの『漫畫趣味』を除けば、その生命の一半は失はれると言つても、あながち過言ではあるまい。

三　藝術史上の漫畫

漫畫（カリカチユウル）といふ言葉は元來伊太利に起源があるのだが、英國では先づ十七世紀頃から用ゐられてゐる。

しかも漫畫そのものの起源は古代埃及の藝術にすらも、二三の戲畫の殘存せるものあるを傳へられてゐる位だから、山岳と共に古いものであらう。希臘羅馬時代の壁畫彫刻の類にも今日の漫畫趣味のものの多かつた事は、西洋の美術史を繙いた人の何人も知るところである。

下つて中世に入つては宗教上の問題に聯關して、此『漫畫趣味』は益々盛んになつた。僧院の壁畫や建築裝飾の類に最も多く現はれてゐる外に、中世傳說の最も有名なものの一つである『ライネケ・フクス』の如きは、明らかに當時の獨逸國狀を諷刺した一篇の漫畫文學であつた。又中世傳說の『惡魔』は、言ふまでもなくいつも皮肉諷刺の代表者である。『死(デス)』(生ける骸骨の形に現はれてゐる)の如きも皆、中世藝術が遺した漫畫趣味である。かの十五世紀のホルバインの名畫『髑髏舞』に至つては、即ち此『死』が地上のあらゆる人々を威嚇せる絕大の力を描いて、悽愴險奇の限りを盡くし、古今の藝術史上に漫畫の一新紀元を開いた大作であつた。かくして文藝復興期(ルネッサンス)以後歐洲各國の藝術には、諷戒戲笑の漫畫趣味、惡魔趣味がその重要なる一部分を成すに至つたのだ。

近代に至つて、十八世紀は恐らく藝術上に於ける漫畫趣味の全盛期だと言ふべきだらう。殊に英吉利では、小說の方面でスヰフトやスモレットや或はフィイルディングなどが、殆ど卑猥とか粗野とかいふ言葉で批評せられる文字を以て時代を譏誚した頃の事である。また當時はヲルポオルやピットの政治が盛んに漫畫家に絕好の題材を供給した時代で、十八世紀の英國は、文藝に於て諷刺(サタイヤ)の文字に富

める如く、繪畫史上に於てもまた漫畫時代を以て目せらるべき多くの作品を遺した。

この英國十八世紀の漫畫の巨擘は、言ふまでもなくヰリアム・ホガアス(一六九七――一七六四年)である。近世の最大畫家としてホガアスの地位は今更ここに說くまでもないが、彼は政治上の時事問題を描く事にはあまり得意ではなかつた。それよりは廣い意味の人生の批評家として、當時の社會風俗人情を滑稽化して多くの不朽の名作を殘した。

畫壇の奇才ホガアスの作で一番名高いのは、傑作『當世風の結婚』"Marriage à la Mode" の六枚續き、今ではたしか英國國立畫堂の珍藏である。まだ十八世紀の事だから色彩が面白いと云ふのでもなければ、デッサンに妙味があるのでもない。その特色は時代の風俗に對する痛烈なる皮肉である、諷刺である。漫畫の生命ともいふべき諷罵的暗示 satirical suggestiveness である。はいから貴族が結婚してから、夫婦ともに放蕩生活をして財産を失ひ健康を損じ、女房が不義を働いてゐる現場に亭主が飛び込んで、姦夫のために逆に亭主が刺し殺される。女の方は毒を仰いで死ぬといふ顚末を描いたものである。その他、ホガアスが女郞や道樂者の一生を描いた續き物にも不朽の大作がある。隨分思ひ切つて卑猥なのもあり殘忍と見ゆるのもあるが、着想の警拔と寫實の筆法とは、滑稽味と相俟つて漫畫史上に一新時期を劃したものである。

十八世紀より十九世紀にわたつて、政治的諷刺畫は益々勢力を加へた。當時の歷史を研究する人々

にとつては、史家の厳正な椽大の筆によるよりも、これら漫畫家の作品を通して時代の眞相がよりよく知られるために、永久の生命を有つてゐる作品も尠くない。なかでもジョオヂ・クルックシャンクの戯畫には政界時事の諷刺と共に、ホガアス風の風俗畫も多く、眞に前世紀繪畫史上の一大異彩たるを失はない。わたくしは古版のディッケンズ全集に此クルックシャンクやリイチの繪の這入つたのを所藏してゐるが、ディッケンズの滑稽小說の挿畫としては、畫は文を說き文は畫を解いて妙趣盡し難きものがある。

千八百四十年には、漫畫諷刺を專品にした定期刊行物として世界的に有名な"Punch"が出來て、英國の第一流の漫畫家は殆どみなこの誌上に健筆を揮つてゐたことは世人の知るところ、日本語にさへもいつしか『ポンチ畫』と云ふ言葉が傳へられた位であるから、詳しく言ふまでもなからう。前世紀に漫畫家として世界的名聲を博したフィル・メイの如きも、矢張り此『パンチ』に筆を執つたものであつた。

眞面目くさい英人ぐらゐ熱心に漫畫を喜ぶものは他にないが、佛蘭西の方でも前世紀のオノレ・ドオミエの作品の如きは、痛快にして深刻骨を刺すが如き滑稽味を以て全歐に名を轟かした。彼は國王ルイ・フィリップを得意の戯畫で痛烈にやつつけたために罪を得て、囹圄の人となつた位の力を持つてゐた。

四　現代の漫畫

巴里のオペラ・コミク座が標語としてかかげてゐる羅甸語の句がある。それは 'Castigat ridendo mores'『笑ひをもて世態を叱正す』と言ふのだ。この言葉は喜劇や諷刺文學に適用せられると共に、亦最もよく漫畫の本質をも示したものである。時代や民族の特色が極めて鮮やかに漫畫によつて示されるばかりでなく、辯難攻擊のためにも、大新聞が堂々たる筆陣を張つての攻擊よりは、巧妙な二三の漫畫の方が遙かに有力な場合さへも往々にして見られる。

わたくしは最近のこの好適例としてルイス・レイメエカアスの作品に就いて少しく語らう。

十八世紀ごろから漫畫にはすぐれた天才を出してゐた和蘭は、最近の世界大戰に一大天才を產み出して世界の耳目を驚動した。和蘭は今度の大戰に終まで中立の儘で終つたが、此一大漫畫家レイメエカアスの辛辣なる獨帝攻擊の諷刺畫を出したことによつて、聯合國に萬軍の援を與へたとさへも言はれてゐる。言語の宣傳は飜譯によらなければ他國人には解しられないが、繪畫ならばどこの外國人にでも、また如何なる無教育者にでも理解し得られるために、獨逸皇帝の軍國主義を完膚なきまで痛快に攻擊した彼の漫畫は、最も有効な宣傳(プロパガンダ)として世界各國到る處に人心を動かす偉力を發揮してゐた。

レイメエカアスは世界大戰の初期までは殆ど世に知られない一青年畫家であつたが、開戰の頃に海牙(ヘエグ)の『電報通信(テレグラフ)』といふ新聞に、はじめて獨帝を痛撃した漫畫を揭げ、一躍して世界的名聲を博した。和蘭では、彼の作畫は自國の中立を危くするといつて隨分攻撃をうけたが、同時に聯合側の諸國に於ける賞讃はまた非常なものであつた。殊に英國の倫敦などでは、彼の作品のため特に展覽會を開いて反獨熱を皷吹し『眞理と人道とのために戰へる此漫畫家』に、英佛米の諸國は擧つて熱烈なる讃辭を捧げたのであつた。わたくし自らも其頃米國に居て、立派な裝釘をした彼の漫畫集の大冊を擴げながら、米人の友と相語つて痛快を叫んだことを今に記憶してゐる。

レイメエカアスの作畫には凝つた意匠があるのではなく、寧ろ簡單な繪である。それは極端に省筆法を用ゐて、ここぞといふ急所にだけ滿身の力をこめて、殘虐なる軍國主義に向つて痛撃を加へたのである。しかもどこかに皮肉な微笑を湛へて、獨帝の蠻勇を茶化してゐるやうな所が面白い。その熱とその嚴肅味とその皮肉とが絡み合つて、彼の作品の偉力を成してゐるのである。佛蘭西あたりの批評家に言はせると、レイメエカアスの技巧(テクニイク)は近代の多くの英佛漫畫界の巨匠に及ばざる事遠きものがあるが、彼の戲曲的境地(ドラマテイク・シテユエイシヨン)を摑む技倆に至つては、遂に何人の追隨をも許さざる獨特のものだと認めてゐる。

米人が滑稽諷刺の漫畫を喜ぶことの甚だしいのは、それが日刊新聞の主要な呼び物であるのを見て

も知られる。特に此方面の新派を代表する漫畫家としては、紐育トリビュウン紙のボオドマン・ロビンソン氏の如き、いま米國漫畫界最大の人氣者の一人であらう。

佛蘭西でも漫畫は非常な勢力を有つてゐるために、フィガロ新聞のフォラン氏の時事漫畫の如きは、今日既に不朽の作物と見做されてゐる位だ。また新聞畫家としてではなしに、有名な漫畫家にはアンドレ・ルウヱイルがある。奇拔で人の意表に出でるといふ點では眞に痛快を極めたもので、如何なる政治家も美人も名優も一たび彼の毒筆にかかつたが最後三文の値打もない。かかれた當人も思はず苦笑を禁じ得ないであらう。殊に婦人を描くに當つて殆ど殘忍と言ひたいほど鋭い解剖の筆を揮うて、之を醜化しなければ承知しないといふその態度も面白い。嘗て或有名な文豪の夫人を此筆法でゑがいて、遂に法廷に訴へられたといふ珍談さへ傳へられてゐる。丁抹の評家ブランデスはルウヱイルの作畫を評して『野獸がその獲物を弄ぶやうに、さんぐに鋭い爪にかけ牙にかけて殘忍な描きかたをするのだ』と言つたのは確かに適評である。殊に或一人の女優を、色々な位置や姿勢から見て三十五枚の作に描きわけた手際なぞは、よほど精緻な觀察と達者な筆とが無くては出來ない仕事かと思はれる。或ものは奔放に或ものは精細に、また非常に細い線を使ふかと思へば、日本の毛筆を使つて墨くろぐろと太い粗い線で書きなぐつたやうなのもある。そして一線一劃に、ことごとく生命の流が溢れてゐるやうな所が他人の企及しがたき點であらう。

なほこのルウヸイルに就いて、及び英國のマクス・ビアボオムの漫畫に就いては、拙著『小泉先生そのほか』の中にその作品の複寫を添へて稍詳しく紹介した事があるから、こゝには省略する事とした。

五　漫畫の鑑賞

前にも述べたやうに漫畫の藝術的特徴は『グロテスク』の一語に盡きる。獨逸の美學者リップスは此語を説明して、誇張、醜化、怪奇、畸形化によつて滑稽の效果を得ようとするものだと言つた。そしてこの『グロテスク』が諷戒嘲罵攻擊の眞意を有するとき、それは文章でも、演劇でも、繪畫でも、彫刻でも、皆悉く漫畫趣味の作品となつて、モリエエルの喜劇となり、日本のにはか狂言となり、諷刺小説となり、パロデイとなり、德川時代の川柳となり、葛飾北齋の漫畫となつて、文藝上には非常に大きな範圍にわたるのである。

しかしこれは吾々が日常言語の上にも常に用ゐてゐる表現法なので、例へば錢入を蝦蟇口と言つたり、禿頭を藥鑵とか電氣燈とか言ふ場合は、畫筆の代りに言語を以てした漫畫を平氣で使つてゐるのである。これらの語は譬喩(メタフオア)の表現としては、藝術的に誇張せられ畸形化せられて、或場合には甚だしい嘲罵の意をも寓してゐるからである。蝦蟇口の如きに至つては、今日すでに餘りに聞き慣れたために吾々はそれを普通の名詞として使用しながら、毫も奇拔(グロテスク)の感に打たれる事なきに至つたものだ。學

者が、言語は『化石した詩』であると言ふ意味も玆に在る。

このあひだ京都に瀆職事件といふのがあつた。その時に檢事が糺問の折、色々の人を『豚箱』に入れたといつて人權蹂躪だとか何だとか喧しい話があつた。どんな箱であつたかは知らないが、あの『豚箱』といふ言葉は誰が使ひ始めたのか、よほど巧い表現を用ゐたもので、これは字義通りの豚を入れる箱でも何でもなく、漫畫風の誇張と醜化とを用ゐた藝術的表現に他ならぬのであつた。しかも漫畫的である此一語が、天下の同情と注意とを喚ぶために、百人の辯護士の長廣舌よりも遙かに有力であつた事は、讀者の記憶に今なほ新なるところであらう。

西洋には『人間は笑ふ動物である』といふ名高い文句があるが、日本人は笑を理解する點に於て遠く西人に及ばざるものがある。日本の文學や美術に於ける滑稽の分子が、西洋のとは比較にならぬほど貧弱であるのは何よりの證據ではないか。滑稽といへば、みな駄洒落か巫山戲半分のものぐらゐに思つてゐる人が、今日なほ立派な教育ある知識階級の人にさへ尠くない。嚴肅なる滑稽、感情に訴ふる滑稽、さういふ意味のものを立派な藝術として一般人士が鑑賞し得るまでには、なほ多くの歳月を要するであらう。これは武士道とやらが動もすれば人間の感情の自然の儘の發達を矯めんとし、不自然な抑壓的、束縛的の教育主義を重んじた事も慥かにその一原因であらう。四角四面な小むづかしい文句でも列べてあれば、愚にもつかぬ屁理窟に感心してゐる男が、如何に奇警な巧妙な漫畫的表現に

接しても少しも心を動かさないといふが如きは、明らかに畸形教育の生み出した片輪者である。英吉利人が、滑稽（ヒュウモア）を解しない者はゼントルマンの資格なきものとして、共に語るに足らずとしてゐるその意味は、邦人の遂に理解し得ざるところであらう。感情教育、藝術教育を疎外した結果は、いつも眞の教養（カルチウア）の足らないこんな野暮くさい人間ばかりを製造するのである。

新聞雜誌の發達に伴うて、日本にも近頃は多くの漫畫家が輩出した。殊に議會の開期中などは、色色の面白い作が日刊新聞の紙面を賑はしてゐる。かの一國の選良とかいはれる人たちの立派な名論を讀むよりは、わたくしはさういふ漫畫から却つて遙かに多くの興味と益とを得てゐる。しかし何時まで經つても固陋で頑冥で、笑ひを巫山戲か酒落とのみ一途に思ひ込んでゐるやうな人たちには、たとひ今の日本にドオミエが出てもフィル・メイが居ても、それは豚に與へる眞珠に過ぎないだらう。

現代文學の主潮

一

今より五十年前、北歐の劇聖はその最大の知己であつたブランデスに書を寄せて、いつもながらの激越の調をもて時勢に對する憤慨と呪咀との聲を洩らした。曰く、

『國家は個人の禍である。普魯西の國力は如何にして得られたか、政治的地理的形體のもとに個人を沈淪せしめたからだ。……人をして先づ精神的關係が、統一を得るに至る唯一の道なるを知らしめよ。かくてこそ自由の要素は起るであらう。』

イブセンが此文句を書いてから半世紀、世界戰爭と言ふ鐵火の洗禮を受けて普魯西の國家主義は滅び、露西亞の專制政治は崩壞し、偶像破壞、民本自由の近世的大思想は、千九百十九年の芽出度き新春に於て遂に『平和』と共に最後の勝利を占めた。かかる意味に於て歐洲の戰亂は世界的なる思想革命の戰爭であつた。世界は近世最大の劇作家イブセンの頭腦よりは、少くとも五十年だけは後れてゐ

たのであつた。

また更に思ふ、今次の戰亂は、前世紀以來の科學萬能の唯物思想が行詰まつた最後に現はれた、現實暴露の悲劇であつたのだ。然るに文藝に於ては、此物質主義を代表してゐた自然主義は、とくの昔に葬られて、十九世紀末に近く旣に業に一大轉廻をなして、理想主義或は象徵神祕の新思想が高唱せられてゐた。『科學の破産』を叫ぶ聲にすら旣う人は驚かされなかつた程に、思潮は早くもその方向を轉じてゐた。政治上に於て米國のキルソンの理想主義が世界の注意を促すよりも二十年三十年以前に於て、文藝上には旣に、自然主義を葬れる理想主義人道主義或は神祕主義がその主潮を爲してゐた。醒むる事遲き一般の俗衆に先んじて、詩人や藝術家は大戰以前、すでに二十世紀の劈頭からしてこの新しい道を歩んでゐたのであつた。

世の中には不思議な人間もあるものだ。文學は政治などよりも十年二十年はおろか、時には五十年百年も先に進んで行くと言つて聞かすと、怪訝な顏をしてゐる。東西古今の文明史が示すこの最も明白なる事實に對してすら、そんな事はあるまい、それは文學者の法螺だなぞと言つて、全然理解を缺いてゐる男もある。

新しい思想や傾向はいつも時運の大勢に促されて、どこからともなく動き出でる。その初めに當つては殆ど何等の纏まつたものでもなければ、また合理的形式をも具へてゐない。ただ茫漠とした捕捉

すべからざる、而も驚くべき偉大なる力を有する一種の氣分である、情調である、心持である。區々たる小刀細工を以てしては之を抑制し禁壓するに由なき、そして行くべき所まで行かなければ止まない奔流激湍の如き突進力である。之を跳躍せる生命の顯現と見るも可からう。過去に慊らずして之を破壞し、更に新しき或ものにあこがれて、求めてやまざる不安焦燥の思がかういふ氣分の根本をなしてゐる。そして逸早くもこの氣分、この心持を捉へ、之を直感し、之を表現し、反映するものが即ち文藝である。謂はば一種の精神的冒險（スピリテユアル・アドベンチユア）だ。

詩人藝術家の鋭敏なる感性（センシビリテイ）は、さながらイイオリアンの琴のやうに、いづくからともなく吹きくる風に觸れて神來の妙音を奏（かな）でる。いまだ時代の意識に上らざる或ものを捉へ來つて、早くも之に新しき表現を與へるのである。昔の羅馬人が豫言者を意味する Vates の語を轉用して、これを詩人の義に用ゐたのには深い意味があつたのだ。

二

私は歐洲の文學が世界戰亂のために直接の影響を受けて、今更また新しい道へ踏み出さうとする事は斷じて無いと信じてゐる。戰前に於て早くも既に一歩踏み込んでゐた神祕思想や理想主義人道主義の道に向つて、更に新しき力を加へて進んで行くだけの事だらうと思ふ。一般の俗衆が肉に溺れてゐ

た間に、詩人や藝術家は戰前早くも既に靈界の深淵を探らうとしてゐたからだ。現實に執して他を顧みる遑なかつた物質萬能の自然主義を葬り去つて、足は確と現實の地を踏みしめながら、彼等先驅者の眼は既に高く理想の境に及んでゐたからだ。

前世紀末以來歐洲の文壇に高く響いてゐたのは、物質主義の繋縛を離れんとする『心靈解放』の聲であつた。戰後の文學をして更に一層この主潮の力を增さしめ、その理想主義に一段の加速度を與ふべきものは、今次の戰亂が世上一般の人心に及ぼした影響だらうかと思ふ。

このたびの大戰亂は、現代文明が有する一切の破壞力を用ゐて演じた悲劇であつた。あらゆる虛僞と迷妄とを拂ひ除けて、人をして本然の自我に歸らしむる絕好の機會を造つたものであつた。五十年八十年の長い間の物質的努力が築き上げた多くの物を破壞して、歐洲人をしてその功利唯物主義の空の空なるを覺らしめた。ちやうど人は死の間際とか、或は烈しい悲哀や苦患に身を曝す時、いつもは浮き立つてゐる心も沈み、眞面目に人生を考へたり自己を省察したりすると同じく、大きな擾亂や戰役の後には落着いた、そして眞面目な態度で、生の問題を考へて見ようと云ふ傾向が一般の人心に兆すのが常である。昔の古い例は擧げずとも、佛蘭西革命の後より自然主義勃興時代に至るまでの歐洲の民心には、明らかにかくの如き傾向が現はれたのであつた。今度の戰亂の間にも既に多くの人は、宗教上に新信仰の興るべきを豫言し、或は宗教的精神の復活を高唱してゐた。エチ・ジ・ヱルズ氏の

『ブリトリング氏の洞觀』『見えざる王、神』の如き諸作が甚だしく時人の注目を促し、また一方には神祕思想の傾向益々著しく、はてはオリヴア・ロッヂ氏やコナン・ドイル氏などの幽明交信の說にさへ、耳を傾ける人の益々多きを加ふる有樣となつた。

私が旣に或他の機會に於て述べた如く、戰亂の間に歐洲文壇は實に秋風落莫たる感があつた。個々の作品に就いて見ても、不朽に傳ふべき大なる藝術品は極めて稀であつた。しかしかくの如く一時全くその進運を阻止せられてゐた文學は、戰後更に以上言ふが如き民心の新傾向と相呼應して、戰前からの新理想主義に更に一段の精彩を加ふるものがあらうかと豫期せられる。

三

日本は戰爭に參加したとはいふものの、この大戰亂の苦患は殆ど嘗めてゐない。却つて之を思ひもかけぬ好機會にして少しばかりの金を儲けて喜んだ人が多かつた位のものだ。從つて今次の戰爭が日本將來の文學に何等かの新傾向を與へ、或は助成することは固より考へられない。かの民本主義の思想の如き、戰爭の直接の影響としてわが國一般の思想界に甚大な影響を與へたものではあつたが、文壇の方ではあのやうな思想は旣う十年も昔、自然主義の盛んであつた頃に多くの人々によつて宣傳せられてゐた古臭いものであつた。それが此戰爭を機會として一般民衆の注意を惹くに至つたまでのも

ので、日本の文學は夙くの昔に、ちやんと民本化（デモクラタイズ）せられた民衆藝術の性質を帶びてゐたのである。此點に於て文壇はたしかに、政治界などよりも十年や五年位は先んじて居たのであつた。

しかし私は戰爭の直接の影響と言ふやうな事を外にして、日本の文壇の現在及び將來に就いて、二三の感じた事がある。

或時代の文學には必ず二つの潮流が見られる。本流となり主潮となつてゐる方の傾向に對して、別に逆流（カウンタカレント）となり潛流（アンダカレント）となつて動いてゐる流がある。これは個人銘々の生活に於ても同樣で、一方に現實の中心に突入し肉薄し、その核心に到達しようといふ力が强ければ强いほど、他の一方にはまた之と反對に、現實生活を超越し、それを逃避しようとする要求が盛んに起る。兩者は一見矛盾し背馳せるものの如くで、しかも常に共立同存してゐる事は文藝史の研究者に取つて極めて興味ある現象だ。私は、假に之を名づけて一を文藝の求心的傾向といひ、他を遠心的傾向といつて可いと思ふ。一つの時代にこの一方が主潮本流である間に他は逆流或は潛流として存在し、次の時代に入つて潛流はやがて本流主潮となつて之に代るのである。

東西の文藝史に屢見られるこの現象を、我が國近時の文壇に移して考へると、かの自然主義全盛期とも言はるべき時に、他の一方には全く之と正反對の傾向を有つた夏目漱石氏（殊にその初期の作品）一派の藝術が起り、つとめて現實生活の核心に肉薄せんとする文壇の主潮とは全く正反對に、餘裕低

徊の趣味を皷吹し、現實生活に對する遠心的逃避的傾向が現はれてゐた事は、そこに深い意味があつたのである。卽ち次に來るべき時代に於ては、この潜流と目せらるべきものが遂に本流となつて現はれ、如何にも現實生活を超越した逃避的遠心的の文學が、遂に近時文壇の本流となつた觀がある。

近ごろ出る新作家の物を讀んで見ると、如何にも現實生活には緣の遠いものが多い。一時は文壇の套語であつた『觸れる』などといふ事は、全く忘れて了つたかのやうだ。自然主義の特色であつた肉的生活の描寫はすたれて、これが更に一歩深く進んで心理描寫の精緻な解剖となつてゐる事は認められるが、作者の態度はいかにも現實生活に對して極めて呑氣な超越的遠心的のものである事が感じられる。一々の作家や作品の名は擧げずとも、これは平素新刊の小說などに注意してゐる人の等しく認める所ではないかと思ふ。私はかくの如き傾向を以て決して不可なりとするものではない。寧ろせつぱ詰つた自然主義時代の現實的傾向に次いで來るべき當然の推移であり反動であると見做してゐる。ただ此を以て彼に比すれば、その變遷があまりに速かに一方の極端より他の極端に走り、文壇に於ける昨是今非の變化の急激なるを見て、今更のやうに驚かされるばかりだ。

われら日本人の生活を西人のそれに比すると、如何にも熱と力とに乏しい。すべてが微溫でまた不徹底である。自然主義の現實的傾向も、西洋のほどに猛烈な徹底的のものではなかつただけに、次いで起り來つた傾向も、熱の乏しい高踏的享樂的態度のもので、更にも一つ深く突込んで幽玄な神祕思

想の境地まで踏み込まうなぞといふ事は、殆ど豫期せられ難いのである。深く〳〵肉のどん底に溺れたものにして、はじめて靈に生きる事が出來るからだ。

この問題と關聯して更に思ひ浮ばれるのは、日本の近頃の文壇が益々民衆の思想生活と距離の遠くなつて行く事である。換言すれば文明批評、社會批評として眞に一世を指導し嚮導すべき、文藝本來の任務を果さうとしてゐない事である。是非の論はさて措き、此點はかの自然主義全盛期の方が寧ろ態度に於て眞面目であつたのではないかとさへ疑はれる。英佛の文學は古往今來、いつも社會上政治上の問題と密接に關係してゐる事は言ふまでもなく、露獨の近代文學に至つては、最も露骨にこれらの問題を取扱つたものが多く、なかにはそのため眞の藝術的價値を損つたものさへある。ロマノフ王家の惡政なくんば、トゥルゲニエフもトルストイもドストイエフスキイも、あの大作は遺さなかつたであらう。戰後に於て西洋の文學は益々ヒューマニスティクに、また廣い意味でいふ道德的にも宗教的にも『人生の批評』として社會との密接なる關係を增大して行くだらうが、日本の文壇は依然として文化の指導者たり批評家たる事を肯じないのであらうか。安價にして淺薄なる享樂的逃避的傾向にいつまでも安住することであらうか。(大正八年一月)

藝術より社會改造へ

（ヰリアム・モリスの研究）

No artist appreciated better than he the interdependence of art, ideas and affairs. And above all, Morris knew better than anybody else that Morris the artist, the poet, the craftsman, was Morris the Socialist; and that conversely, Morris the Socialist was Morris the artist, the poet, the craftsman,——Holbrook Jackson, All Manner of Folk. p. 159.

一　日本に於けるモリス

今からいへば前世紀の末、かなり既う古い話だ、その以前から長らく我が國における新思潮の先驅者として鼓吹者として、思想界の一方に重きをなしてゐた雜誌『國民の友』（民友社發行）の誌上に、ヰリアム・モリスの事が紹介せられた事があつた。いま確かには覺えないが、あの雜誌の海外思潮といつたやうな六號活字の一欄に、多分それは其頃モリスが死んだために書かれた外國雜誌の論文の飜譯であつたかと記憶する。何をいふにも既う二十二三年も前のことだ、私が中學生で何もわからず讀めもしない癖に、頻りにまだ見ぬ異邦の文藝にあこがれてゐた頃、モリスの裝飾美術と詩歌と社會主

義との事を、この『國民の友』によつてはじめて知つた、そしてさう云ふ作物を味はつて見たいなどと考へた。今なほおぼろげな記憶に殘つてゐるあの六號活字のモリス論は、近代の英國におけるこの最も注目すべき思想家、またラファエル前派の藝術家であつたモリスの名が、わが文壇に傳へられた恐らく最初のものであつたかと思はれる。

私の知れる限りでは、それ以後わが國で見られたモリス論としては、明治四十五年二月號と三月號との『美術新報』誌上に、工藝圖案家富本憲吉氏が十數個の寫眞版にモリスの圖案を模寫して、裝飾美術家としてのモリスの半面を紹介せられた事があつた。その時わたくしも富本氏の紹介から思ひ附いて、同じ明治四十五年の『東亞の光』六月號に『詩人としてのモリス』を稍詳しく論じた。爾來今日に至る八九年間に英國ではモリスの二十四卷の全集が倫敦のロングマンズ社から出版せられ、思想家として藝術家としての彼に關する多くの研究や批評が出た。詩人ドリンクヲオタアや、またクラットン・ブロックなどの筆になつて今廣く世に行はれる數種の評傳は勿論、さきに戰爭中ガリポリで客死したディクソン・スコットの遺稿『文豪評論(メン・ノヴ・レタアズ)』中の最後の一篇であるモリス論の如きをも、新しく一卷の書冊中に見るやうになつたのは、つい二三年前の事である。

近頃わが國の論壇に社會改造論が喧しくなつてから、室伏高信氏、井箆節三氏、小泉信三氏等によつてギルド社會主義の先覺としてのモリスが紹介せられ、また彼が新社會觀を物語に寓した『無可有

郷だより』"News from Nowhere"（1891）の邦譯も出來たやうだ。わたくしは此機會に於て更に舊稿を刪訂して、モリスをしてあの社會主義を唱導するに至らしめた根源ともいふべき、その文藝上の事業に就いて簡單に述べて見たい。

二　象牙の塔を去るまで

青春の時代から壯年期を過ぎて歳四十といふ所に來ると、人の一生は一大轉機（グランド・クライマクテリク）に際會する。日本では俗に四十二歳を男子の厄年だとか言ふが、實は生理的にも精神的にもこの年ごろで人間が自分の生活の改造に達するのであらう。むかし孔子は四十にして惑はずとか言つたさうだが、それはよほどお芽出度い男か薄野呂かの事だらうと思ふ。青春の情熱時代や、生氣旺盛の壯年期の去らうとする時、四十といふ年ごろで人は靜かに自分の過去將來を思うて、そこで始めて落着いた冷やかな自己省察を試みようとする。自分をもまた自分の周圍をも、すべてを批評的の態度で觀ようとする。その時かれの内生活には動搖があり不滿があつて、烈しい焦燥不安も亦之に伴うて起るのである。古往今來多くの天才や哲人は、四十にして始めて眞に人生の行路に深くも踏込んで惑つたのである。その際、思想生活にも實生活にも、思ひ切つて自己革命を行つた人は昔から甚だ多い。手近な例を言へば、故夏目漱石氏が學徒の生活を敝履の如く棄て、はじめて創作家として世に出でたのも此年輩に於

てであつた。また島村抱月氏がこれも亦講壇を去つて身を劇界に投じ、衆愚の毀譽褒貶を尻目にかけて、自己の生活そのものを藝術化しようとする雄々しい態度に出たのも、矢張り此年ごろではなかつたか『初老』と言はれる四十歳ごろに、もう生命の脈の上りかけた證據には四十肥りとやらででつぷりふくれて、納まり返つてるやうな愚物は固より論外である。

近代英國の文藝史上に最もすぐれた二人の思想家が、共に四十歳の頃に於て同じ方面に向つて生活の轉換をしてゐるのを見る事は興味ある事實である。それは社會改造論者として世と戰つたラスキンとヰリアム・モリスとであつた。

自分と自分の周圍とに對して、かかる思想家や藝術家が鋭い批評のまなこを向けるとき、そして生活の根本的改造の難問にぶつかる時、彼等は果して如何なる態度を執るだらうか。自ら詩美の鄉を去り『象牙の塔』の美しい世界を出て了つて、俗衆と共に衆愚と共に手に手を執つて踊り狂ふことは、彼等の斷じて爲すを欲せざるところ、また爲すに忍びざるところである。そこで彼等の執る態度は、俗衆を超越し逃避した超然たる高踏的生活に向ふか、然らずんば俗衆と社會とに向つて激烈なる挑戰的態度に出でるかの二途あるのみである。低徊趣味に逃れた漱石氏は寧ろ前者の消極的態度に近かつた。女優松井氏と共に劇壇に身を投じて因襲道德に反抗した抱月氏は、思ひ切つて積極的な戰鬪者(ファイタア)の態度に出でたものだらう。ラスキンとモリスとが藝術の批評と創作とを棄て、年四十にして世と戰つ

たのは、言ふまでもなく後者の積極的態度に出たものであつた。ふたりの態度は共に派手やかに目ざましく、また雄々しくも勇ましかつた。之を目して十九世紀後半の英國文藝史を飾れる二大壯觀だと言つても、あながち過言ではあるまい。

ラスキンが四十歳にして純藝術の批評から勞働問題、社會批評に目を轉じた事は曩に述べた（本全集本卷『象牙の塔を出て』項目十四參照。）青年期から壯年期にかけては、詩文の創作と裝飾圖案の製作とに身を委ね、藝術至上主義の生活を續けてケルムスコットとの美しい莊園で靜かに『象牙の塔』に隱れてゐたモリスが、千八百七十七年の頃から社會主義を提唱して俗衆と戰ひ、二十世紀の社會改造說の先覺となつた事もまた、ラスキンと殆ど同一の軌道を行つたものであつた。否な彼が自認せる如く、モリスは寧ろ此點に於てラスキンに敎へられたのであつた。

三　社會觀と藝術觀

西洋の或大膽なる批評家は、近代文藝の主潮は社會主義であると論斷した。見やうによつては確かにさういふ事も言へると思ふ。前世紀初期の浪漫派時代に於て既に英吉利の抒情詩人シェリイの如き極端な革新思想家を出したが、それ以後の文學で、露西亞のトゥルゲニエフでも杜伯（トルストイ）でも、また佛蘭西のユゴオでもゾラでも、みなその時々の社會に對しては痛烈な不滿の聲を洩らしたものであつた。

表現の樣式をこそ異にしたれ、その根本思想に於て當時の文學者は矢張りマルクスやエンゲルスやバクウニンと同じ考へ方をしてゐたので、それがまた多くの作品の基調をなしてゐる事も疑はれない事實である。しかし此社會主義的色彩が最も濃厚に文藝上に現はれ、作家もまた强く意識的に社會改造のために努力するに至つたのは、先づ千八百八十年代以後に於ける新時代の現象である。

この時代に入つては文藝家の社會觀は、單に虐げられたる弱者の强者に對する盲目的な反抗ではなかつた。もはや漠然たる空想や憧憬ではなく、彼等は旣に辿るべき理路を見出し、確乎たる目標を見つめてゐた。當時のアナトオル・フランスも、マアテルリンクもゴルキイもキイランドも、またハウプトマンも、ジョヴンニ・ベルガも、皆かかる意味に於て眞に『人生のための藝術家』であつた。

此現象は特に英國最近の文藝史の上に著しい。わたくしが曩に『英國思想界の今昔』を論じた時に述べた如く(私の前著『小泉先生そのほか』(本全集第四卷)參照)。この八十年代以後はギクトオリア朝後期の思想變轉期に入つてゐた。卽ちそれ以前の妥協調和的の思想が頽れて英國が急進時代に入らうとした時、今まで貴族富豪萬能であつた英國の社會に動搖を來し初めた時であつた。殊に千八百八十五年は英國の產業界が大恐慌に襲はれて、賃銀低落と失業問題とに惱まされ、勞働問題が急に盛んになつた時である。——私はいつも近時の日本の社會や思想界の動搖が、甚だしく前世紀末葉の英國に似てゐるやうに思ふのである。——前段に述べたギッシングの小說『平民(デモス)』の出たのは卽ち此翌年であ

つた。（本全集本卷『勞働問題を描ける文學』參照）

この世紀末の英國文壇に現はれて最も著しく活動した社會改造論者は、即ちバアナド・シヨオとヰリアム・モリスとであつた。シヨオがその頃に書いた小説も、後に出た多くの戲曲も、その中心思想は社會主義に他ならなかつた。彼がマルクスの資本論に刺戟せられ、またオリギアや、また甞て我が國に來遊して日本政府の好遇を受けたエツブ等と共に、フエビアン協會を組織したのは即ち此時であつた。歐洲現存の最大戲曲家の一人としてのシヨオの作品を研究するには、先づ社會主義の思想家としてのシヨオを知らねばならぬ。しかし私は今この事を論じようとするのではない。

さりながら當時の英國文壇に於ける社會主義の第一人者は、何といつても矢張りモリスであつた。

四十歳の頃まで、即ち彼の前半生に於て、モリスは純然たる藝術至上主義の人であり、また一種の夢想家（ドリイマア）であり浪漫主義者（ロマンチシスト）であつた。しかし彼はまた他の一面に於て活動の人であり努力の人であつたが故に、現實生活に對する執着も亦甚だ强かつた。詩歌と裝飾美術の製作に全力を傾到しながらも、眼は既に周圍の社會を離れてゐなかつた。後年かれが唱道した社會主義も、畢竟は多年その抱持してゐた藝術上の理想を實現したいといふ熱意が根柢をなしたので、遂に自ら統率するに至つた社會民主黨も、當時に於ては實際的方面よりは寧ろ思想界に及ぼした影響の方が遙かに大きかつたのである。

モリスは元來富豪の家に生れた人で、若い時から俗にいふ所謂凝り屋であつた。はじめ結婚して新家庭をつくつた時、色々の道具や裝飾品を買ひ集めるのに、坊間に賣つてゐる品物といへば實に俗惡極まる實用一遍のものばかりで、自分の趣味を滿足せしめるものとては一つもなかつた。さういふところから彼は深く感ずるところあつて後年遂にモリス商會を起し、自分で裝飾圖案の製作に從事するに至つたのだと言はれてゐる、壁紙(フォルペイパア)とか窓掛とか刺繡瓦模樣とか、また書籍の印刷裝釘などの工藝の方で、モリスの主義はつまり近代の營利主義卽ちコンマアシァリズムに反抗し、藝術趣味を本位にした品物を造ることであつた。近代の機械工場はすべての工藝品を俗了し俗化して、昔は翫賞本位であつたものまでが今では實用本位となり、珍らしく貴きを喜んだものが今日では廉價に數さへ多く供給せらるればよいといふ風になつた。昔は手細工に心血を注いで造つたものを、今は無造作に大きな工場が一時に多數を造り出すのだから、その製品には生命もなければ趣味もない。たださへ餘裕なく享樂氣分のない、切り詰めた醜劣俗惡な近代生活は、かうして益々『詩』を遠ざかつて無味枯淡なものに化して行く外はない。これは生れつき詩情ゆたかな人にとつては、とても堪へ得られない事であつた。上品で風韻の高い圖案や模樣を拵へたり、純粹な美しい色合を出すためには時間と勞力とを構はず、値段に頓着しない本當の工藝美術の自由な製作をモリスが思ひ立つたのは、全くかういふ俗惡な機械文明、功利唯物の風潮に反抗せんがためであつた。石炭の煤煙に汚れはてたヰクトオリア朝晚

期の英吉利に、美しい浪漫的な藝術の花を咲かせ、その影響は更にまた大陸諸國に及んで、現代歐洲一般の美術趣味に一大革新を促したのは實にモリスの偉功であつた。これを思ふと、『藝術なき工藝は野蠻にして、工藝なき人生こそ罪惡なれ』 "Industry without art is barbarity: life without industry is guilt" と言つた彼自らの言葉にも深い意味が見出されるのである。

また之を勞働者の方から考へて見ると、今日の機械萬能主義、資本主義のもとに在つては勞働生活に「生の喜び(ジョイ・オヴ・ライフ)」といふものが全く缺けてゐる。勞働者に自由な自己表現の餘地が少しもないからだ。創造創作の自由から來る歡喜、換言すれば藝術生活がないために人間が自ら機械に化けて、機械と資本との頤使に甘んずる奴隷とならなければ生存し難いといふ不幸な狀態に在る。否な此不幸は單に無産者勞働階級ばかりでなく、富める者もまた殺風景な粗惡な製品の外には、之を求めようにも得る道がないのだ。彼等も亦資本を投じて面白くもない粗製濫造の品物を得る外には、徒らに物質上の富を增してゐるといふだけである。

かくの如き慘めな不幸な生活を改造すべく、先づ今日の社會組織の缺陷に目を着けたのがラスキンであり、又その啓發を受けて更に百尺竿頭一歩を進めた者がモリスであつた。ラスキンが中世建築を論じた名著『ヱニスの石』(殊に『ゴシックの性質』と題した一章)に說いた主張、卽ち藝術は人が仕事に對する喜びの表現 "the expression of man's joy in his work" に外ならぬといふ說を、モリス

は工藝家としてこれを實際社會に持出したのである。かくして勞働を、否な生活そのものをも藝術化するためには、矢張り中世のやうに人々が樂しんで自由に、製作創造の喜びを享樂し得る社會を造らねばならぬと考へた。强制と抑壓とを免れて、勞働者の自由と個性の表現を重んずる組織を、彼はその社會改造論の根本義としたのであつた。彼は云つた、『すべての仕事はこれをするだけの値打がある。仕事をすれば何の報酬は無くとも、爲すといふだけで快樂である』。かれ自らはかく信じ、かく行つてゐた人であつた。また彼がコンミュニズムの理想郷を描いた小說『無何有郷だより』の第十五章に、主人公ハモンドが『よき仕事に對しても報酬は無いのか』と訊かれた時に答へた言葉が面白い。

"'Plenty of reward,' said he, 'the reward of creation. The wages which God gets, as people might have said time agone. If you are going to ask to be paid for the pleasure of creation, which is what excellence in work means, the next thing we shall hear of will be a bill sent in for the begetting of children."

——*News from Nowhere*, p. 101.

藝術家としてモリスは、ラスキンと同じく最初から熱心な中世の愛慕者である。わけて十三四世紀ごろの社會は彼が想像に描いた樂園であり、また詩美の理想境であつた。當時のルウアンや牛津(オックスフォード)の如き町は、今日の工業都市のやうな醜穢なものでなく、各その業を樂しむ工人の手によつて建てら

れたものであつた。一寸した製品にも勞働者の歡喜が現はれてゐるために、趣味と興味が伴つた、雅致風韻があつた。

元來この中世尊崇の風、卽ち Mediaevalism は當時の英國の文藝界に新氣運を鼓吹してゐたラファエル前派、殊にロゼッティ等の藝術の根柢をなしてゐたので、モリスがまだ牛津大學に學んでゐた頃から、此派の畫家バアン・ジョオンズ等と傾蓋の交を結び、共に深く中世藝術の研究に耽つてゐたのである。しかしロゼッティ等の中世主義は、矢張り日本で一時唱へられた江戶趣味復活の論と同じく、高踏的な純藝術本位のものであり、またラスキンのは餘りに極端に中世心醉の傾向があつた。しかしモリスの主張やロゼッティ等のを更に實際化し社會化し、またその南歐趣味を去つて英國化し、更にラスキンをもつと近代化したものであつた。しかしながらモリスの腦裏を往來してゐたものは、矢張り煤煙天日を蔽ふ近代の倫敦ではなく、十四世紀のチョオサァ時代の都、『淸きテムズの流、綠の園生を圍みて、ささやかに白う淸かりし倫敦』に外ならなかつた。現に彼が社會改造の理想を一編の夢物語に托した散文の著『無何有鄕だより』には、人が皆中世建築を喜び、中世の着物を纏うてゐる美鄕をゑがいたのであつた。

『象牙の塔』を出てから後のモリスが、社會運動の機關雜誌『公益(コンモンホイル)』に筆を執り、また the Social Democratic Party の創立者たる矯激の論客ハインドマンと事を共にし、後また去つて自ら the So-

cialist League を組織して、彼の後半生に於て社會改造のために雄々しくも健鬪したのは、要するに彼の藝術觀がその基礎になつてゐたのだ。

今人の生活の最大缺陷は現代の資本主義、營利主義に基づいてゐる。むかし修道院で勞働をした坊さんたちは『勞働は祈禱だ』Laborare est orare と考へて、カアライルが言つたやうに、靴一足造るにも敬虔な宗教的の心持で働いた。また『勞働それ自らが歡樂である』Labor est voluptas とも古人は言つた。その製品は製作者の自由な生命の所產であつたからだ。かくて現代人の生活に失はれた『生の喜び（ジョイ・オヴ・ライフ）』を取り返すには、先づ資本主義萬能の社會を根本的に改造しなければならぬ。モリスは此見地から出發したのであつた。

かれはいつも自己の信念と希望とに生きてゐた人であつた。雜誌『公益（コンモンキイル）』に掲げた詩篇に、かれは題して "The Pilgrims of Hope" と言つたが（此詩の一部は、後段說くべき詩集『途上吟』に收められてゐる）、モリス自らは卽ちいつも『希望の巡禮者』であつた。その晩期の作中の一篇に『無可有鄕だより』に描いたのと同じ理想の社會を歌うて、

For then, laugh not, but listen to this strange tale of mine,
All folk that are in England shall be better lodged than swine

Then a man shall work and bethink him, and rejoice in the deeds of his hand,
Nor yet come home in the even too faint and weary to stand.

Men in that time a-coming shall work and have no fear
For to-morrow's lack of earning and the hunger-wolf anear.

I tell you this for a wonder, that no man then shall be glad
Of his fellow's fall and mishap to snatch at the work he had.

For that which the worker winneth shall then be his indeed,
Nor shall half be reaped for nothing by him that sowed no seed.

O strange new wonderful justice! But for whom shall we gather the gain?
For ourselves and for each of our fellows, and no hand shall labour in vain

Then all Mine and all Thine shall be Ours, and no more shall any man crave
For riches that serve for nothing but to fetter a friend for a slave.

——The Day is Coming.
(Poems by the Way. p. 125)

と言ひ、最後に

Come, join in the only battle wherein no man can fail,
Where whoso fadeth and dieth, yet his deed shall still prevail.

Ah! Come, cast off all fooling, for this, at least, we know:
That the Dawn and the Day is coming, and forth the Banners go.

——Ibid.

と言へる鼓舞激勵の語は、これやがて彼自らが世と戰へる行進曲であつた。
かれは理想主義の藝術を以て自己の全的生活を統一してゐた。その不斷の勇猛精進の努力は單に詩歌に於てのみならず、家具の製作にも書籍の印刷にも窓硝子の裝飾にも、はたまた晩年の社會運動にも現はれて、その多方面な生涯を一貫せる根本力は、藝術生活が根柢をなしてゐた。

かれは前半生に於ては無論のこと、晩年いかに社會運動に忙しい時に於てでも詩筆を棄てず、創作にまた古詩の飜譯にその多方面な才藻を發揮した。そして英語の存在する限り不朽不滅なるべき、多くの文藝上の作品を世に遺した。

四　詩人としてモリス

モリスの處女作は "D.fence of Guenevere and Other Poems" といふので、この詩集の出たのは千八百五十八年即ちモリス二十四歳の時であつた。これが即ちロゼッティを以て領袖とせるラファエル前派のゴシック趣味の詩歌が、騷壇にあらはれた先鋒であつたので、何を言つても奇古幽聳な中世趣味のことだから、俄に一般世人を動かすには至らなかつたが、はやくも既に當時の藝苑に隱然たる感化を與へた事だけは疑はれない。現にセインツベリイ教授の如きは、テニソンの初作がギクトオリア朝詩歌の第一期を劃する如く、モリスのこの詩集はその第二期を始めたものだとさへ論じてゐる。此詩集のうち、先づ最初の四篇は材をアアサア王の傳説に取つたものであるが、これをテニスンの『王(アイ)の歌(ディルズ)』に較べると、同じく王妃ギニギアを歌ひガラハッドを敍するにも、兩者はよほど趣を異にしてゐる。第一テニソンの方にあるやうな道學先生風の思想もなければ、ギクトオリア朝の英國趣味といふものが見られない。モリスのは全くむかしの自由なマロリイ式で行つたもので、中世羅馬教の趣味

をその儘に傳へ、情熱の盛んなところ、筆致の簡勁素朴な點がその特色をなしてゐる。なほまたこの詩集のなかの他の篇に就いていふと、先づ英國の古史、或は中世の物語に題材を取つた作の他、モリス獨創の詩題を歌つたものには、實に何とも言へない幽婉な、神祕的夢幻的な作が多い。そしてさういふところになると、米國のポオの感化さへ著しく現はれてゐるので、やはり佛蘭西のボオドレエルや、それから後の神祕派象徴派の詩人などと同じ源から出てゐるものといふ感じのする作がある。試に今さういふ作から短い句を引用して見よう。言葉そのものは極めて簡單なのだから、別に譯しておく必要も無からう。

"I sit on a purple bed,
Outside, the wall is red,
Thereby the apple hangs,
And the wasp, caught by the fangs,
Dies in the autumn night,
And the bat flits till light,
And the love-crazed knight,
Kisses the long, wet grass.

—Golden Wings.

"Between the trees a large moon, the wind blows
Not loud but as a cow begins to low."

"Quiet groans
That swell not the little bones
Of my bosom."

—Rapunsel,

この次に出來た詩篇は『ジェイソンの生涯と死』"Life and Death of Jason" といふので、やはり夢幻的な作ではあるが、さきの處女作とはだいぶ趣を異にして、此方はよほど流麗明快な詩風である。ホオマァ以前の希臘古傳說を材料にした無慮一萬行十七篇にわたる長篇の敍事詩である。今その荒筋を摘んで言ふと、まづ筆をジェイソンの幼時に起し、それから長ずるに及んで澤山の勇士を率ゐて『アルゴオ』の早船を艤し、遠く東の方コルキスの國を指して黃金(ゴオルドン)の羊毛(フリイス)を求めんがために、萬里遠征の途に上ぼるところが書いてある。途中多くの冒險をして萬難を排して遂に日ざす東方亞細亞の國に達すると、そこの王は厚くジェイソンを遇し、饗宴を設けて彼を迎へた、その時うつくしき王女のメディアは始めてジェイソンを見たのであるが、それからといふもの、忍ぶに餘る相思の情は早く

も二人を結んだ。ところが王は姫を通してから言はしめた。君もしわが有する黄金の羊毛を得んと欲せば先づ命を賭せよ。卽ち先づ二頭の大牛に軛し、それを役して地を耕し、そこに惡の種なる龍蛇の齒を蒔け。やがて甲胄に身を固めたる猛卒この種より生ずべければ、君これを殺しておのれの命を全うするを得ばかの羊毛を得さすべし、と言つた。ところがジェイソンはメディア姫の魔法の助によつて遂にかの羊毛を得たが、さてそれから二人は相携へてひそかにコルキスの國を逃れ出で、歸航の途上はまた幾多の險難を冒して遂に故國に歸り着いた。それから十年ほどの間は琴瑟相和して事もなかつたのであるが、ここに遂に悲劇のもととなる大事件が起つた。それは外でもない、ジェイソンがこのメディアを捨てて更に外の女――卽ちグラウシ姫に懸想したのである。メディアは怒に狂ひ、例の魔法を使つて先づ戀の仇である此姫を殺し、剩さへ自分の二人の兒をも殺して、みづからは龍車に駕して遂にアセンズをさして立ち去つた。獨り殘されたジェイソンはそれからといふもの全く鬱憂にとざされて深い悲しみのうちに世を去つた。これが卽ち一篇の梗概である。この話は既にホオマアにあはれ、のちピンダア、オギッド、ユウリピディイス、セネカなどの詩人の作をはじめ、後には佛蘭西のコルネイユの名作の如きによつて廣く世に知られたものであるが、モリスが巧みに此古代說話の人物を活かして、その豐麗なる敍述によつて之を現代の舞臺に活躍せしめた妙味は、決して他に求むべからざるものがある。殊に風景を敍し動作を寫すのに色彩の美があつて、一幅の名畫に對するやうな

心地のするところが多い。殊にジェイソンが船出の光景を敍したるもの、コルキス王の宮殿を敍したる一節、或はジェイソン遂に黄金の羊毛を得て歸路に就くあたり、それから結末の方に近い悲壯な幾章などは確かに近代英詩の最も秀抜なものであらう。詩律はすべて五脚對聯の體を使つて、しかも少しも單調の弊のないのはまた一世の讃稱を博した所以である。

此ジェイソンの歌ではじめて多數の讀者を得たモリスは、之に次いで直ちにまた彼が一代の傑作たる『地上樂園』“The Earthly Paradise”四卷を公にして、ここに彼が詩壇に於ける地位はながく動かすべからざるものとなつた。この中に歌はれた物語の數はすべて二十四篇、うち十二篇を古典文學にとり、他の一半は中世傳說から得たものである。全體の趣向をいふと、むかし北歐の或人々その國に惡疫の多いのを避けて、西海のかなたに在りと傳へられた不老不死の仙鄕『地上樂園』を尋ねようとて、幾年かの間波路はるかにさまようた。が、樂園は遂に達しられないのみか、途上幾多の冒險のため一行の人數も減じ、困憊疲勞のありさま眞にあはれに、遂にとある古き都城に着いた。これは遠い昔、希臘から逐はれた人々が建てたもので、一行はここに普通（なみ）ならぬ歡待をうけて一年の間、月ごとに二度の饗宴に美酒佳肴をつらね、主客互に古代の物語を爲て聞かせるといふ。これが卽ち『地上樂園』の仕組である。だから此作のなかには、北歐の古傳說は佛蘭西系統の中世傳說、獨逸晩期の說話と相交はり『ニィベルンゲン・リイド』『エッダ』『ゲスタ・ロマノオルム』などから出た詩題は、また

一方に於て『アルセスティスの戀』『キュウピッドとサイキイ』『アタランタ』などの希臘神話を交へ、北歐は希臘と、古代は中世と互に對照映發して、さながら初花染の色のまばゆきに、秋の紅葉の沈みがちな色を合はせたと言つたやうな趣がある。卷中の二十四篇皆とりどりに面白味があつて、俄に優劣の批判は下し難いが、セインツベリイ教授の如きは "The Lovers of Gudrun"(これは北歐傳説から取つたあはれ深い物語で、ロゼッティも特にこれを愛讀したさうである。)の一篇を壓卷だとしてゐる。が、私自身で一番よいと思つてゐるのは、題材をシャアレマン傳説に取つた "Ogier the Dane" の物語(第八月の條にある)で、これは一度アヴロンの島の仙郷に行つてゐた勇士オジイアが再び人界へ歸つてからの話、例の中世物語にありがちな女王との戀仲と武勇の事蹟とを美しく歌つたものである。勇士が出征の朝、かなたで女王が歌ふ別離の曲などは、纏綿の情思を沈痛の調に托して言ふにいはれぬ趣がある。これらを一々引用して詳しく紹介したいと思つたが、今は紙幅が許さないから略しておく。

モリスの詩篇として最も有名なのは先づ以上述べた二つであるが、なほ彼が文藝上の貢獻として特に著しいものは北歐傳説の研究であつた。彼は自分で二度までもアイスランドへ出掛けてその古說(サガ)を調べたのである。元來かの『エッダ』の卷に集成された北歐傳説は、十八世紀末に浪漫的(ロマンティク)趣味の起つた頃から、漸次英文學に著大の感化を與へ、最初先づパアシイ、スコット等の述作にあらはれて以來、飜譯や解說の書物も隨分澤山出た。そしてこの北歐傳説の特徴といへば、それが遺憾なく原始時代の北

方民族の氣質を現はしたといふ點にあるので、話の中に出てくる人物は皆剛勇精悍の氣たけく、單に男子ばかりでなく、女子も多くは鐵石のやうな心をもつて義に厚く情に富んでゐる。愛憎の念あくまでも強く特に復仇雪辱の心盛んに、そのためには恩愛の契をすらも顧みず、眞に秋霜烈日といつたやうな氣慨のあるところは、何だか我國の鎌倉時代の武人に髣髴たるものがある。おもへばアイスランドは不毛磽确の地、雪山高く北海のかなたに聳え、湧きたぎる硫黄の泉ものすごく、四時おほかたは暗瞑の霧にとざされた一孤島、地はおのづから人を化して上に言つたやうな民族性をつくつたのだ、それがまた一方には詩情ゆたかな此民族の本性と合して、あの奇峭の美に富んだ傳說ともなつたのである。カアライルも嘗てから云つた『凡ての異教神話における如く、北歐神話の根本もまた自然界の神性をみとむるに在る。これは換言すれば、四圍の世界に働いてゐる神祕不可解の力と、人心との眞摯な交渉に外ならないので、北歐神話のすぐれた所は全く此點にある。古代希臘に見るやうな優雅なところは無い代り、熱誠眞摯といふ特徵がよくその缺を補つてゐる』(『英雄崇拜論』)と。十九世紀浪漫派の諸詩人が此傳說の美に醉うて題材をここに求めた者の多かつたのは怪しむに足らない。さてモリスの此研究の結果として現はれたものは敍事詩"Sigurd the Volsung"(一八七六)の飜譯四卷であつた。固より讀詩界はさきに『地上樂園』を迎へた時ほどの讚美を捧げなかつたが、この一篇の譯こそ、英詩にあらはれた北歐文學の所産として最も不朽の作たる事を失はないものである。

モリスが北歐研究の結果は、なほこの外に古詩『ベイオウルフ』(一八九七)の飜譯となり、また晩年の作に屬する散文詩や物語の類にもあらはれた。その文體は十五世紀頃の古文を模し、マロリイの散文に見るやうな奇古の體を學び、用語の如きもことさらに北歐語原のものを選んだ。なかには隨分奇拔なのがあつて *cheaping-stead* (market town), *song-craft* (poetry)) *wood-abiders* (foresters) といふやうな例はたしかに純正語(ピュウリスト)の論者からは非難の出たものであらうが、これもとにかく浪漫的な一種の趣味を傳へる上に効果のあつた事だけは疑はれないと思ふ。むかし獨逸民族が北歐の森林に漂浪してその殺伐精悍な特質を發揮した時代を寫し、衣服調度の微をすら逸せずしてその光景を活寫した妙味は、先づスコットの歷史小說を除いて、他にモリスと比肩するに足るものはなからう。慓悍な武人が天神地祇を拜して戰陣に赴く光景や、或は謳歌宴舞のただなかに麗人の紅淚を點出しなどして、巧みに讀者の心を過去の美しい世界に拉し去るところは、たしかにスコットもモリスも異曲同工だと言つて可からうと思ふ。

『ジェイソンの生涯』の歌をよみ、殊にまた『地上樂園』の名著を繙いた者は、作者モリスが、疑もなく詩祖チョオサアの『キャンタベリイ物語』に偉大な感化を蒙つた事を認めるであらう。モリスの簡潔明快な敍述を見ると、その天稟の詩才が既にチョオサアに近い事がわかるのみならず、その趣向に於て題材に於てその用語に於て、また希臘羅馬の古典の物語をとつて全く之を中世化した點から言つて

も、かれが如何にチョオサアに學ぶところ多かつたかが知られる。

わたくしは此事を語るとき、かれ自らが經營してゐたケルムスコット出版所(プレス)から出たチョオサアの詩卷を想ひ起さざるを得ない。モリス自ら活字から裝釘から總べてに數奇を凝らし、その古雅な製本印刷にモリスの意匠圖案の才を遺憾なく發揮したものである。近代藝苑の一巨匠が、その尊崇せる古詩人の作を出版せんとて苦心に苦心を重ね、あの風韻の高い一卷が出來たのだと思ふだけでも、私なぞはそこに言ふに言はれぬ貴さを感ずるのである。

モリスは自ら『地上樂園』卷頭の序詞に言つてるやうな "the idle singer of an empty day" でもなく、また 'Dreamer of dreams, born out of my due time,' でもなかつた。彼が夢幻空想の詩境に生きてゐた他の一面には、また雄々しい努力の生活があつた事は上に述べた通りだが、それは彼の最後の詩集である『途上吟』"Poems by the Way" (一八九一年出版) に最もよく現はれてゐる。

この一卷は彼の初期の創作時代から、社會運動に身を投じた晩期に至るまでの短篇のうちから五十篇を採つたもので、作の年代から言つても、また題目から言つても種々雑多な作品を集めてゐる。その中で勞働問題社會運動に關する詩篇は、彼が實際の運動に奔走してゐる間に成つたもので、その藝術的價値の如何はしばらく別問題として、社會主義の詩人としてのモリスを知らうとする人々には、興味のあるものであらう。中でも "The Voice of Toil" "All for the Cause" "The Day is Comi-

ng" "The Message of the March Wind" の如きはモリスの作中、あからさまに社會問題を取扱つたものとして特筆せらるべきものだ。

五　研究書目

モリスの藝術觀社會觀に就いても、今少し詳しく書きたいと思つてゐる矢先に、痼疾の胃病に襲はれ、前週から床に就いて筆を執る事が全く不可能になつた。せめて今坐右にあるモリスに關する參考書をでも紹介して、好學の士の參考に供しよう。

モリス全集は息女 May Morris の編纂でその序文を附したる

Collected Works. 24 vols. (Longmans, Green & Co.)

が標準になるのだが、詩篇散文の諸作みな同じくロングマンズ社の出版で、各種の裝釘のが分冊でも得られる。

傳記で最も正確で詳しく、そして他の多くの傳記者も皆材料をこれから得たのは

The Life of William Morris. By J. W. Mackail. 2 vols.

これは挿畫裝釘の差によつて三種の版(エデイシヨン)がある。彼の社會運動の事は第二卷の方に詳しく書かれてゐる。

評傳としてはマクミラン社の文豪評傳（メン・オヴ・レタアズ）中に、現代の詩人アルフレッド・ノイズの筆になつた百五十頁ばかりの簡單なのが最も要を得てゐる。彼の社會改造論の事は此書の第八章に出てゐる。

William Morris. By Alfred Noyes. (Macmillan's English Men of Letters)

また「家庭大學文庫」（ホオム・ユニヴアシティ・ライブラリ）のなかに

William Morris: His Work and Influence. By A. Clutton-Brock. (London, Williams and Norgate)

これは既に室伏氏が雜誌『批評』に於て引用せられたから略する。裝飾藝術以外の方面のモリスを知るには最も手ごろな好著である。

しかし思想家藝術家としてモリスを知るには、マアティン・セッカアから出してゐる近代文豪評傳の叢書の一卷、

William Morris, a Critical Study. By John Drinkwater. (London, Martin Secker)

が好い。著者ドリンクヲオタア氏はいま英國新詩壇の第一人者であるのみならず、批評の方面にも好著がある。現に此人の評論集 " Prose Papers " （Elkin Mathews 出版）の中にもモリス論が出てゐる。

なほモリスの社會主義だけを論じたものは、例のマルクス論の著によつて既に廣く日本に知られて

ゐるスパアゴ氏の書物がある。

The Socialism of W. Morris. By John Spargo. (Westwood, Mass. The Ariel Press.)

このほか

W. Morris, a Study in Personality. By Arthur Compton-Rickett. With an Introduction by Cunninghame-Graham. (Herbert Jenkins)

此書は普通の傳記とは趣を異にし、寧ろ人として藝術家としてのモリス全體を活寫する事に努めたもので、『人物』「詩人』『工藝家』『散文作家』『社會改造論者』の五篇に分けて、各方面から明快に論述した好著である。

また評壇の新人を以て知られる Hollbrook Jackson の『モリス傳』も單行本として廣く知られてゐる。

W. Morris, His Writings, & His Public Life. By Aymer Vallance. (Bell & Sons, 1897)

これは今わたくしの手許にないが、非常に挿畵が多かつたやうに記憶してゐる。

なほモノグラフィクのものでなしに、モリスを論じ或は記述したものには、

Clough, Arnold, Rossetti, & Morris; a Study. By Stopford A. Brooke (London; Sir Isaac Pitman & Sons.)

Men of Letters. By Dixon Scott. (Hodder and Stoughton.)

Memorials of Edward Burne-Jones. By Lady Burne-Jones.

All Manner of Folk. By H. Jackson (Grant Richards.)

Views and Reviews. By Henry James. (Boston : The Ball Pub. Co.)

Twelve Types. By G. K. Chesterton.

Corrected Impressions. By George Saintsbury.

Adventures among Books. By Andrew Lang.

Shelburne Essays, 7th Series. By Paul Elmer More.

その他、雑誌に現はれた評論の類などは玆に省略することにした。日本の思想界の注意が、マルクシズムから更に進んでモリスの藝術的社會主義に向はうとする時、何等かの參考にもとて私は病床で此研究書目を作つて見た。（大正九年五月）

（補　遺）

William Morris and the Early Days of Socialist Movement. By. J. Bruce Glassier. With an Introduction by May Morris, and two portraits. (Longmans, Green & Co.)

ON THE STUDY OF ENGLISH.

Address given at the interscholastic English Meeting held on October 4th, 1919, under the joint auspices of the Osaka Higher Commercial School and the Osaka Asahi Shimbun.

Mr. Chairman, Ladies and Gentlemen:

I esteem it a favour to have been asked to speak before such a large and earnest audience as I see before me this evening, in a foreign language in which all of you are so deeply interested and which I have been studying from my childhood and teaching for many years. On an occasion like this it is hardly necessary to dwell on the desirability of encouraging young students in the study of English as one of the most important means of promoting the commercial or economic relations between Japan and our friendly English-speaking nations on both sides of the Atlantic, as was already mentioned in the advertisement of this meeting. But from a purely idealistic or literary point of view I should avail myself of this opportunity of calling your attention to some of the reasons for the importance we attach to the study of the English language in this country. For

about a week I have been so ill that I have not been able to prepare any properly systematized lecture; what I am going to give is just a few disconnected remarks which happened to flash through my head when I was invited to give a talk here.

Everything human in the world, after having risen from necessity of circumstances, has undergone further changes and modifications to meet the need of the people of successive generations. The development of the national language is no exception to the rule. English is the language of the people of democracy and liberty, who have enjoyed freedom of speech more than any other nations of the world and developed their language so as to meet this neccessity of their inner life. The Anglo-Saxons, after untiring efforts lasting many centuries, have made their mother-tongue *par excellence* the language for oration, most splendid in the world. In striking contrast with this, the Japanese language has no oratorical literature worthy of the name in its long history covering more than a score of centuries. Having lain under the despotism of the feudal government, our ancestors entirely neglected to improve our language in that direction.

As I wrote a few years ago in the Asahi Shimbun, spoken Japanese of today still remains a language not of publicity, but of privacy, good only for a namby-pamby chat in a boudoir or a tête-à-tête of old-fashioned politicians in a four-mat-and-half conclave. It has, indeed, delicacy and beauty of nuance as well as flowing smoothness of sound, not

at all comparable with the "hissing" of English; but it has no such splendid power and lucidity as we find in modern English when it is spoken before a great audience.

Read or hear the speeches given by the Japanese politicians of the present day, and compare them with those of Premier Lloyd-George, or President Wilson, Mr. Bryan or even other and lesser stars of oratory in England or America, and you will realize how poor and feeble are the speeches delivered by the Japanese speakers, not only in their contents but also in their expression or the formal elements of their speech. This is no doubt partly due to the fact that the Japanese language is very flaccid and weak as a language for public speaking, having been the tongue of a people who have enjoyed no freedom of speech under a hideous absolutism for many centuries, and who even to-day try to keep their lips sealed up as far as possible, believing in the old silly saying "From the mouth comes that which is evil," *Kuchi wa wazawai no mon*, which is only a one-sided truth. Shall we be satisfied with the present condition of our mother-tongue when we are so rapidly becoming democratized?

Language study is not merely a matter of the vocal organs, as some advocates of the so-called "practical" English in this country are very apt to believe, but it must be the study of the real spirit or of the ideals of the people who speak the language. Study English elocution and you will be able to appreciate to the full the true spirit of a "Nation

subtle and sinewy to discourse" which has enjoyed for long "the liberty to know, to utter, and to argue freely according to conscience," as the great author of the Areopagitica, John Milton, wrote nearly three hundred years ago.

I venture to say it is one of the most serious duties of the present generation to inspire with a new spirit or genius the Japanese language, the greatest treasure we are proud to have inherited from our fathers, and to leave it to posterity enlivened and enriched with new foreign elements of eloquence, that we may have our Burke and our Webster in future Japanese literature, just as our remote ancestors modified and remoulded our beloved tongue by introducing new elements from the classical Chinese language and literature, whose influence gave rise to the elegant letters of the subsequent ages.

Now there is another point to which I should like to call your attention in this connection. The thorough study of any foreign language naturally leads to the study of and liking for its literatnre, which is absolutely necessary for the understanding and appreciation of the peoples' real life, spiritual as well as material. I think I can safely assert that nothing can give a clearer perspective of the inner life of a nation than its literature. It was the late John Morley who said that literature is an expression of the best thought of the people, but I should say, going a step further, that literature is the truest and sincerest expression of the ideals of a nation. Politicians may sometimes be time-servers, merchants

and businessmen may do anything to meet their practical purposes, but poets are always themselves, or true to themselves, because they must be sincere before everything in order to be great poets; no insincere man can write true poetry.

When I think of the truth of the famous saying, *Tout comprendre, c'est tout pardonner*,— To understand everything is to pardon everything,— and when I recall many occasions of international friction in history, which, in the majority of cases, were caused by the mere lack of mutual understanding, I must here emphatically call your attention to the great importance of studying literature for promoting a friendly international relation.

Study the inner life of a people, and you will begin to thoroughly like them. I do not know any American or European who has studied Japanese literature, and yet does not like the people who has produced it. I do not know any Japanese who has studied Milton, Shelley and Browning, or Whittier, Emerson and Whitman, that does not admire the great ideals of the English-speaking peoples.

In order that this assertion of the importance of studying literature for perfect international understanding may not be looked upon as a mere dreamer's phantasy, let me cite in this connection a few remarkable facts from recent diplomatic history. In England it was a remarkable feature in the literary world for the twenty years preceding the outbreak of the Great War that Continental literature was freely introduced to her reading public.

It was in this period that hundreds and hundreds of critical works and translation of the modern literature of France, Russia, Italy, Spain and Scandinavia appeared in English. You know that the English people in the age of Queen Victoria was well-known as a people who, with their traditional complacency, cared least for the language and literature outside their own; but from about the beginning of the present century, they began eagerly to read the literature of Continental Europe. When we find this new literary tendency in England exactly coinciding with King Edward's breaking away from the traditional diplomatic policy of so-called "glorious isolation", to initiate his policy of *entente cordiale*, who can deny the close relation between the appreciation of literature and the friendly diplomatic relations which culminated in the triple *entente* at the beginning of the Great War? During the wartime a prominent English journal went so far as to suggest a new term the "literary alliance", which means nothing other than the perfect mutual understanding of two nations by each studying the other's literature. Mr. Edmund Gosse, one of the greatest living writers, used the term literary *entente* to designate the close alliance of England and France.

Again, in this connection, you will be reminded of the friendly relations between France and Russia before the war, a connection which was founded not only on the closely-related financial circumstances of the two countries, but on their mutual understanding through

iterature. In the latter part of the Nineteenth Century, you know, Russian literature was introduced into France by such an eminent diplomat-author as the Vicomte de Vogüé, followed by many others, and it was very widely read by French readers. On the other hand, it is no exaggeration to say that the genius of Russian literature in the last century was practically developed by the powerful influence of such French authors as Flaubert, Maupassant and Zola.

I do not wish to bore you any longer by enumerating a long list of such examples, as I suppose every reader of diplomatic history will find a great many similar instances even more convincing and more conclusive than those which I have pointed out.

Now let me mention by way of illustration some mistaken ideas of the moral life of the Japanese people, very common among the English-speaking peoples, which will be easily corrected or eradicated by their reading of Japanese literature. It is a common belief in England and America that Bushido is still governing the inner life of the New Japan. It is very true that Bushido remains even in the present time as a sentiment among the older people of this country, but if they make any study of contemporary Japanese literature, which is the truest portrayal of the modernized Japan, they will easily find that Bushido is nothing more than a bit of out-of-date bric-à-brac in the eyes of the younger generation who have been educated on entirely different principles.

Another misconception, very common in England and America, is that the Japanese are a bellicose and aggressive people. To correct this mistaken idea, nothing is better than to recommend them the reading of the best Japanese dramas, novels and poetry of the age of the Tokugawa, which were nothing other than the outcome of the absolute peace enjoyed by the Japanese people for three hundred years. The study of Tokugawa literature will fully convince the English-speaking public that no nation can produce such literature that did not enjoy a three-century-long stretch of absolute peace. This stretch of absolute peace lasting three hundred years has no parallel in the history of any nation in the world, and will they still think any warlike people can truly enjoy such a long period of utter quiet to create 'things of beauty'?

To return to my subject. It is true that English literature is studied in this country and is not such a sealed treasury as Japanese literature is to the English reading public; but if you make it the sole end of your study of English merely to be skillful in the thrust and parry of every day conversation or to be good at commercial correspondence, entirely neglecting the study of literature, the perfect mutual understanding between us and the English-speaking natinos will be beyond our reasonable expectation for ever. In order to understand the real Britain or the real America, you need not go far across the ocean to visit London or New York or Chicago, but stay here and read in the cozy corner of your

study or by the firesids some of the best and greatest works of British or American authors. Read Chaucer and Milton, read Ruskin and Carlyle, read Emerson and Hawthorne, and you will find that the Anglo-Saxon is no nation of 'shop-keepers,' that there is the forcible undercurrent of idealism running through th.ir materialistic civilization, and you will get the correct idea of what is their true spirit of democracy and liberty, what is the foundation of their moral life, and what does the present Anglo-Saxon superiority in the world consist in. This kind of study may appear to some of you very unpractical; but please remember that nothing can be more practical than the unpractical in all matters concerning our moral and intellectual life.

十字街頭を往く

序

東せんか西せんか、北せんか南せんか。進んで新しきに就くべきか、退いて古きに安んずべきか。靈の教ふる道に就かんか、肉の求むる所に赴かんか。左顧右眄しつつ十字街頭にさまよへるものこそ現代人の心である。“To be or not to be, that is the question.” われ年四十を越えてなほ人生の行路に迷ふ。我が身もまたみづから十字街頭に立つものか。しばらく象牙の塔を出で書窓を去つて、騷擾の巷に立ちて思ふ所を述べよう。すべてこれらの意味を寓して、この漫筆に題するに『十字街頭』の文字を以てした。

人としての生活と藝術と、それは今まで二つの街道であつた。兩方が相會して一つの廣場(スクエア)に合する點に立つて、我は考へて見る。平素我が親しむ英文學で、シェリイ、バイロンでも、スキンバアンでも、またメレディス、ハアディでも、社會改造の理想をもつた文明批評家であつた。象牙の塔にのみは居なかつた。この點が佛文學などとはちがふ。モリスは實に文字通り街頭に出て議論をした。人はいふ、現代の思想界は行詰つて居ると。然し少しも行詰つては居ない。ただ十字街頭に立つてゐるのみだ。道はいくつでもある。

『十字街頭を往く』目次

惡魔の宗教

"Divinity of hell !"

——Shakespeare, *Othello* II. iii. 362.

一

神の宗教がある如くに惡魔の宗教がある。そして神と惡魔との中間に人間が在る。西洋の中世傳說では、人間はしば〳〵自分の魂を惡魔に賣附けてゐるが、いつの世にも知識や戀愛や眞理や財物を惡魔に捧げてゐる人間は甚だ多い。しかしそれらは、人間が自分のものを惡魔に提供したり賣附けたりしてゐるのだから、まだ罪が淺い。彼等がいつのまにか神樣の物をまで持出して、惡魔の手に渡すに至つては眞に沙汰の限りである。いま宗教についてそんな事實は無いと言へるだらうか。もと〳〵神の使徒たるべき宗教家が、いつの間にか惡魔の傳道者になり、神の宗教を惡魔の宗教にしたりしてゐる事實は無からうか。神の御手にあつた筈の慈悲の教が、いつしか大魔王の毒手に握られた劍と變つて居はしないだらうか。わたくしは先づ神殿のなかに惡魔を見出だした話から始めよう。

二

二三年前の夏、はじめて私は東北地方へ行つた。講演といふ野暮用のために引きづり出されて、『奥の細道』とは似ても似つかぬ殺風景な旅をした。仙臺、石の卷あたりをうろつく時、案内の人がわたくしを松島の瑞巖寺とかへ連れて行つて吳れた。凡ての名所見物をうるさがる私にとつては、それが仙臺侯の菩提所であらうが何であらうが更に用事はないので、ちよと門の所まで行つて覗いて見た。私はそこで見てはならない惡魔的なる或物を見た。恐ろしとも不快とも反感とも何とも言ひやうのない心持になつて、私は忽ちにして面をそむけて去つた。掃き清められた此禪寺の庭の松かげに、半點の俗塵をもとめぬ此淨域に何事ぞ、戰利品の大砲が一つ、砲口をこなたに向けて据ゑ附けられてゐた。法燈長しへにゆらめく祭壇のかげに、錆び刀よりも錆びた人殺しの道具が飾られてゐる。墨染の衣(ころも)と算盤とを、また經文と春畫とを同一の場所に見出したよりも私は不快に思つた。

しかし不快に思つたのは私の方が間違つてゐたのかも知れない。經典と武器、宗敎と征服とは、歴史上の事實としては實は兄弟分なのである、ごく仲のよい隣同志なのである。それはちやうど寺院の法要と銀行通帳とが、說敎僧と婦女姦淫とが附き物であると同じく。

『神は偉大なり』といふ旗じるしを掲げて、右手に劍、左手に經典(コオラン)を高くかかげつつ戰場に現はれた者は、敎祖マホメットばかりではない。南無妙法蓮華經といふ神聖な文字が朝鮮征伐の清正の旗を飾

り、また天上の靈光に現はれたといふ十字の記號に、『この旗じるしにて汝は勝つ』In Hoc Signo Vinces といふ神の啓示を標語として、軍を進ませた者はコンスタンティン大帝であつた。もと〳〵人間の腹の中では、神と惡魔とは同居してゐる。詩人ブレイクの口吻を用ゐて言ふと、『天國と地獄との結婚』から生れた子供が人間なのだから、その腹の中では、神は惡魔によつて立ち、惡魔は神によつて養はれる。二つのものはお互に利用したり利用されたりしてゐるのだ。そこでこの人間性の半面である神性が今では宗教信仰となつて現はれ、他の半面にある獸性惡魔性が征服慾勝利慾また爭鬪本能となつてゐるのに不思議はない。そしてこの二つの者の野合の結果、經文と武器とは實は極めて仲の好いことを示す多くの恥づべき事實を人類の歴史に暴露してゐる。憲法といふものが信教の自由を認めて置かないと、信仰の相違のためには刄物三昧に及び、戰爭や喧嘩までもやり兼ねないのが、末法濁世の淺ましさだ。十字軍をはじめとして歐洲の歴史に絕間なきほど多かつた宗教戰爭は、食物の奪即ち領土主權の爭と、宗教宣傳との緊密な關係あるがために行はれた慘劇であつた。かつて三百年のむかし、切支丹の教徒に向つて、歐洲史に見るのと同じ殘忍なる迫害を加へて、同胞の中から多く殉教者を出したものは日本人である。明治になつてからも、田舍に基督教會の建物が出來ると、それに石を打つつけてゐた者どもの心理をおもへ。その潜在意識のかげには果して何があつたか。

日本人の宗教信念とその偶像禮拜心とを、少くとも過去の時代に於ては完全に支配し得た神社佛閣

に、血で汚れた錆刀や大砲などの戰利品を麗々と飾らせた日本の政治家と軍閥とは、極めて聰明にして巧智な、そして深謀遠慮ある者であつた。かれらはマホメットよりも清正よりも、またコンスタンティン大帝よりも遙かに巧妙なる煽動家であり、また野蠻なる戰鬪者であつた。今から十數年前、かくの如き巧妙なる方法によつて軍閥と民心とを永久につなぎ合はさうとした某々宰相の如き、もし彼等をして封建時代に生を享けしめば、智勇兼備の名將はおろか、幕府三百年の覇業を創める位は、恐らく朝飯前であつたらう。かれらは經典と武器とが、法衣と算盤とのごとく、また過去帳と春畫との如く極めて仲の好いものであることを、ちやんと心得てゐたからである。

三

いま改造の難行道を歩みつつある世界人心の不安動搖は、唯わづかに三つの差別あるに基づく。詳しく言へば、この三つの差別あるがために生ずる反抗鬪爭を、何とかして解決すべく世界を擧げて努力してゐるのだ。先づ第一には民族(或は國家)の別より生ずる反爭。第二には兩性の差別より生ずる反爭、第三には階級の差別に基づく鬪爭。そしてこの三つの爭鬪のいづれに於ても、寺院敎會の既成宗敎は屢强者のために利用せられ得べき究竟の武器であることを、過去現在の事實が明らかに證明してゐる。否な單に人間の肉體を征服する大砲よりも毒瓦斯よりも、既成宗敎は屢精神的征服のための武器として、更に一層恐るべき精鋭强大なる惡魔の威力を發揮し得たのだ。甚だしきに至つては、

劍や鐵砲が全く用をなさないやうな鬪爭に於てすらも、寺院敎會の宗敎のみは征服者のために最も都合よき武器であつた實例が極めて多い。

第一民族鬪爭のために、宗敎が進軍の先頭に押し立て行く旗じるしとなり、手先であつた例の極めて多い事は既に上に述べた。いふまでもなく宗敎信仰は人々の創造生活に屬する問題であり、またひろく人類のためのものであつて、その本來の性質から言へば決して國境や民族の差別の上に立つものでないことは、わかり切つた話だ。印度の黑人が佛敎を信じた如くに吾等日本人も亦同じ佛敎を信じ、また日本人が敵國人と同じ宗敎に歸依して隨喜渴仰の淚を流したからとて、少しも不都合はないわけだ。もとより同じ佛敎であり基督敎でありながら、それがある特殊の國土や民族の宗敎となるとき、自然にその特殊な國家や民族の色彩を具備するに至ることも、おのづからなる現象として咎むべき事ではあるまい。唯それが惡用せられることによつて領土擴張の帝國主義の手先となり、資本主義的國家の擁護の武器となるとき、それは明らかに宗敎としての墮落であるのみならず、人類に與ふる害惡も亦眞に恐るべきものがある。

いま世界はこの第一の民族鬪爭の問題を解決すべく永久平和の大理想をかかげ、先づその最初の一步を踏み出すべく極めて姑息なる軍備縮小といふが如き手段を試みてゐる。しかしたとひ之を極度に完全に實現し得て軍備全廢の域に達しようとも、依然たる資本主義の經濟戰を以て之に代へるなら

ば、結局人類の不幸は唯その形を變化したまでで、世界平和の大理想は果敢なくも蹂躙せられるのだ。かういふ時にこそ、最も力をこめてこの大理想の實現のために盡し得るものは、本來國境や民族の上に超越して人心を支配し得る宗教そのものであらねばならぬ。然るに二十世紀の歴史上には、神に奉仕すべき宗教家みづからが、永久平和の大理想に向つて貢献するどころか、寧ろ惡魔の手先となつて之を蹂躙しつつ破壞してゐる多くの事實を眼前に見るのは何としたものだらう。

わたくしは固より、英米の兩國に於て基督教徒が近世の平和運動のために盡すところ極めて多かつた事實を認めるに躊躇する者ではない。しかしそれは單に英米だけのことで、獨佛露の如きに至つては、甚だしく無力なものであつた。現に舊帝政時代の獨逸は、自國を以て神の國なりと宣し、亞弗利加や極東に向つて領土侵略の帝國主義を實現しようとするとき、基督教の神はいつもカイゼルと云ふ惡魔のために手先に使はれた道具であり武器であつた。はじめ膠洲灣に土地を占領しようとする時、惡魔が抱藏せる野心を滿足せしむべき二人の宣教師は、先づ山東地方に神の教を說いた。そして或支那人の妻女を姦した。これがために共宣教師が殺されたとき、機は熟した。卽ち獨逸の加特力教會は之に抗議する事によつて、軍閥國家のために山東占領の好個の辭柄を拵へてやつた。異教徒を教化して基督の教によつて救つてやらうといふ布教傳道の宣教師は、あれは實は身に寸鐵をだも帶びざる最も精銳なる兵士ではなかつたか。むかし印度を征服した英國が先づ東印度會社といふ商賣人によつて

侵略を行つたのは、寧ろ舊式だ。今日では算盤よりも先づさきに、バイブルの方が侵略の武器として重寳がられてゐる。

獨逸皇帝は嘗て Berlin から Buda-Pesth を經て Baghdad に至る、三つのBを貫く鐵道敷設の惡魔的夢想をゑがいて、世界大戰のもとをなした。其獨逸が破れて、今度はまた同じ近東土耳其あたりに聯合國が馬鹿々々しい慘劇をはじめた。エホバの神を信ずる基督教徒と、アラアの神に仕ふる回教徒との爭の歴史は古いが、二十世紀の今では、エホバもアラアも共に領土利權爭奪者の看板に過ぎない。資本萬能の帝國主義と、亞細亞に對する民族的反感とは、基督教を旗じるしとして實はメソポタミヤの石油坑に垂涎し、バグダッド鐵道をねらつてゐるのだ。更に一方またケマル・パシャの蠻勇に率ゐらるる回教徒に至つては、これはもう教祖以來、宗教と政策とをごつちやにして惡魔の劍を振りまはすに慣れたる三億萬の未開人だ。來るべき天國はおろか、いま眼前にインフェルノを現じつつある餓鬼畜生の爭である。

この爭鬪は單に國際間に於てのみではない。同じ一國內ですら、英國の愛蘭問題のごとき、アルスタアを除いた愛蘭が聖パトリック以來、頑固な舊教徒であるがために、あの紛擾は半世紀にわたつて今になほ砲火劍戟の爭亂をさへ繰返すのだ。愛蘭の自治とか獨立とか、ケルト人種だからとかいふ問題ばかりに基づくのではない。

わたくしは二十世紀の現代に於て、今なほ斯くの如き事例が無數に多い事を知るが故に、一々それを列擧し指摘するの煩を避ける。唯さきに英米の基督教徒が平和運動に貢献するところ多かつた事を言つたが、それに就いてはまた別に、彼等が『右手のなすところを左手に知らせない』やうな顔をして、われらのすぐ近くの朝鮮や支那內地などに於て、何事をなしつつあるやをも一顧しておく必要がある。卽ち今日世界に於ける最大最盛の資本主義的國家である米國といふ國民的色彩の極めて濃厚な基督教宣教師が、その米臭紛々たる基督教を提げて朝鮮支那に於て何事をなしつつあるかを思へ。かれらは彼等の後からついて來るべき自國の資本家のために先づ道を拓くべく、その民族的勢力扶殖のためにバイブルと祈禱とによつて、砲彈や潜航艇以上の目ざましき惡魔的侵略力を發揮しつつある事實を見よ。聖書と祈禱とでも追附かないと見ると、幾多の美名の下に今度は慈善病院をまで建てて民心を收攬する。さぞかしベタニヤのラザロのやうに、死んだ者までが生きかへることであらう。經文と劍とを兩手に持つて行つたマホメットや、むかし『南都北嶺』の坊さんが僧兵となつて惡鬼のごとくに戰つた位はまだ無邪氣であつたが、現代の宣教師はバイブルの外にまだ藥瓶をまで提げて、その征服慾と勝利慾とを滿たさうとするのだ。××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××。××××××××

××××××××、×××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××
××××××××××××××××××××××××。

しかし英米の基督教徒の中にはとにもかくにも、Peace at any price の極端説をさへも唱へて國際平和の實現に努力したものは多かつた。しかし幾千萬の日本の佛教徒は、世界平和の大理想のために今まで果して何者を貢献したか。×××××××××××、×××××××××××××
××××××××××××××××××。しかし永久平和と自由解脱の極樂淨土を西方十萬億土の遠きにのみ求めずして、先づこの現世界の地上に建設すべく、たとひわづかなりとも彼等は努力した覺えがありと言ひ得るか。

平和の神の教が民族鬪爭の具となるとき、血を見て喜ぶ惡魔の面に浮べる會心のほほえみを見よ。

四

次には、第二の兩性の差別から生ずる反爭に就いて、なるべく簡單に一言しよう。この第二の反爭を解決すべく、いま婦人問題が世界の人心を惱ましてゐる。元來がこの兩性反爭は決して砲火劍戟に訴ふることの出來ない性質のものであるが、この場合に於てすらも寺院教會の既成宗教は橫暴なる男子專制のためやはり絶好の武器となつて役だつことを忘れはしなかつた。また翻つて考へると、遠い遠い過去に於て女性中心の社會が滅びて了つて以來、今日に至るまで幾千年の間、男子はその暴力に

よつて絶對的强者として女性を壓迫して之に君臨し得たがゆゑに、必ずしも他の武器を借るほどの必要もなく、安心してたやすく女性を蹂躙し虐使し征服することを得た。從つて唯わづかに布敎傳道者の口を借つて、婦人屈從の輕便な旗じるしだけを揭げておけば、それで充分に濟むのであつた。そしてその旗じるしといふものが、やはり宗敎から得たものであることは言ふまでもない。然らばその旗印とは如何なるものぞ。

人間の腹の中に巢をくつてゐる惡魔は、食物のための爭鬪本能ばかりでなく、今度はまた性慾といふ別の姿になつて、更にその恐るべき猛惡兇暴の威力を發揮してゐる。古代の原始宗敎に於てまた今日の淫祠邪敎に於て、此惡魔が神と握手し提携したとき、それは各種の生殖器崇拜敎となり、また甚だしきに至つては、をぐらき神殿のかげに犧牲や供物や救濟といふ、神の名に於て行はれる司祭僧侶の婦女姦淫となつて現はれた。昔からすべての宗敎學者、すべての性慾學者が說くところの宗敎信仰と性慾との極めて密接なる關係に就いては、今さら私のやうな門外漢が之を繰返す必要もないであらう。實際、兩性問題に於ては、神の名に於て立てる宗敎はその起源發達の歷史からして、既に明らかに惡魔の宗敎たる立派な資格を具へてゐたのであつた。

幼稚な宗敎生活の心境は、先づ自我の放棄に於て法悅の快感を喜ぶ事である。司祭や僧侶の手に導かれて祭壇の前にぬかづき合掌禮拜せるとき、多くの善男善女はたやすく自己のすべてを投げ出し

て、忘我恍惚の境に入る。職業的宗教家である多くの妖僧や惡僧や怪僧は、人心のこの虚に乘じ心のゆるみに附け込んで、善男からは巧にお布施と稱する財物を卷き上げるとおなじく、更に弱きが常なる女からは、その天地にも易へがたき貞操を、やす〳〵と事もなげに捧げしめた。地方まはりの說教僧が良家の處女や寡婦を姦するばかりではない。江戸時代の『蓮華往生』も、古代の埃及印度などの神殿で普遍に行はれた『宗教的賣淫（レリジアス・プロスティテュウション）』も、また露西亞帝政の末路、たくみに其宮廷貴族の女たちを誘惑して居た怪僧ラスプウチンの魔力も、すべてみな同一の心理から解釋せらるべき事であつた。

學者が呼んで『宗教的賣淫』と總稱するものは、神を象徵し代表せる或者によつて婦女の貞操を穢す風習を謂ふのである。これには色々の種類があつて、たとへば××××××××××××××××××、××××××××××××××××××、神の偶像を抱擁せしめるとかいふ類は甚だ多い。しかし最も普通でまた最も惡性なるものは、地上に神を代表せりといふ王侯若くは僧侶が、自ら所謂『活き佛』になりすましてこの恐るべき姦淫を行ふ事である。宗教家とか僧侶とかいふ者に今も昔も女たらしが多いのは、要するに惡魔と神とのこの握手提携だと思へば何も不思議はないのである。經文と春畫とは昔から極めて仲の好いものであつた。

この極端なる實例としては、たとへばバビロンのミリッタ崇拜 Milittacult のごとき、今日、常人のあたまでは到底考へられもせず信じられもしないやうな醜怪な風習が、かつて熱烈なる宗教信念を

以て行はれてゐたのであつた。多くの『寺院賣淫（テンプル・プロスティテユウション）』や divine harem なども凡て皆おなじ意味のもので、東西古今にわたつて少しも珍らしい話ではない。寺院には歌舞音曲をする無數の女が居て、戀愛の有無なぞはもとより問題外として、單に祭式として『不見轉』の性交が行はれる。參詣者はそれによつて『淨め』られ、賣淫の料金は『淨財』として寺院の收入となつた。印度あたりの寺院の大規模なものには、千五百人ぐらゐの女僧（プリイステス）があつて、それには良家の娘が尠からず居た。みな幼時から寺院で特別な教育をうけて、國中で教育ある女と言へば、恐らくこれらの巫女（みこ）の外にはなかつた位のもので、それがみな此宗教的賣淫を營むのであつた。希臘のコリンスに在るアフロダイティの神殿の賣淫女僧の數は、一寺院だけでも一千人に達してゐたさうだ。その他、殿堂の境內で性交を許さない場合には、寺院の周圍に於て此種の賣淫窟の非常に多い事は、現在の日本に於て觀音の靈場とか何とかいふ土地に、之と全く同一の魔窟が堂々として存在する事によつて、たやすく理解せられるであらう。近松や西鶴の作に出てゐる歌比丘尼といふ尼僧すがたの賣淫婦も亦、わが日本に於けるこの實例の一つだ。またかの『十訓抄』や謠曲にある江口の女、普賢菩薩となつて上天すといふ話は、實は普賢菩薩が、性慾に惱める男子を救はんがために、しばらく遊女に化身して居たといふので、傳說としての意味は矢張り同じものだと解し得られるだらう。

かくの如き實例は枚擧に遑がない。今さらエリス、ブロッホを繙き、或はフレイザアの『黄金樹枝（ゴオルドン・バウ）』

の如き名著から受賣をすれば、古今東西にわたつて際限がなからうが、私にはそんな餘暇はない。また以上のごとき幼稚な原始的な宗教でない場合に於ても、廣く一般に宗教心理と性的心理との交渉に就いては、宗教學性慾學人類學のほか、また別に心理學の方面からも、たとへばジェイムズの『宗教的經驗』なぞのうちに論じられてゐる通りだ。わたくしはなほ更に進んで、今日の佛教とか基督教とかいふ遙かに進化した宗教が、如何にしば〳〵男子專制、婦人征服のために好個の武器を提供し、有功なる旗じるしであつたかを指摘しよう。

×××××××××××××××××、××××××××××××××××××××やうに、古代宗教の婦女姦淫も亦、後に至つては色々な美名によつてその形式を變へて進化した。教會は花嫁で基督は花婿であると言つて見たり、尼さんや信心ぶかい處女のことを神の花嫁たちと言つて見たりするのは毫も珍らしくない。尼僧がはじめての得度式には花嫁の盛裝をして神の祭壇にぬかづき、この神祕的なる結婚式によつて永久に基督の妻となるといふのだ。性慾の惡魔がさまざまに姿を變へて佛智不思議となり、宗教的神祕說となると共に、羅馬舊教の祭式ともなり、聖母崇拜ともなつたのだ。新教に於ても亦、かのディクソンの著『精神的の女房たち』に數へあげられたやうな、奇怪な多くの現象を見るに至つた。

宗教の進化はやがてその女性觀をして、幼稚な原始宗教とは全く正反對の觀を呈するに至らしめ

た。即ち女人凌辱は、今度は逆轉して女人崇拜となつた。女子の生活の全部が男子性慾の對象としてのみ觀られるとき、さきに之に屈辱を與へてゐたものが、今度は更に利巧になつて、之を尊崇禮拜するに至つたのに不思議はない。つまり逆の手を執つただけで、男子と同樣な人格を『人』としての婦人に認めない點に於て、根本精神は少しも異なる所がないからだ。日本の佛教は階級的な、そして男尊女卑の孔子教を奉じた支那を通して傳來したのだから趣を異にするが、印度の佛教には先づ天を拜し地を拜し太陽を拜し、また女人を拜せよといふ思想が確かに存在した。しかし此女人讃仰の極端なるものは、固より中世基督教の聖母崇拜（マリエンクルツス）である事は言ふまでもない。即ち聖母マリアによつて現はされた『女性』を禮讃し渴仰する事によつて、そこに救の神を見出したのであつた。

さきに私は女性觀の逆轉と言つた。そして筆がはからずも聖母崇拜に及んだとき、惡魔の宗教の女性觀が如何なる進化の徑路を取つて、今日の婦人侮辱思想となつたかを語るべき好機を得た。

羅馬舊教で謂ふところの清淨受胎說（イマキュレイト・コンセプション）は、何も西洋ばかりではない、日本の佛教にもいくらも有る。試に『古今著聞集』の釋教の部を繙いて見ても、同じやうな救世主降誕說話はいくつも出てゐる。女が僧侶や偶像を夢みて孕むと云ふ類の話は、若し之をさきに述べた僧侶の『宗教賣淫』にあらずと見るならば、この清淨受胎說に歸するほかなきものではないか。たとへば、

御母の夢に、金色（こんじき）の僧きたりて『われ世を救ふ願あり、願はくはしばらく御腹にやどらん、我は救世菩薩、

家は西方にあり』といひて、をどりて口に入ると見たまひて孕まれ給ひつる所なり。――『古今著聞集』卷二。

性信二品親王は三條院の末の御子、御母は小一條の大將濟時卿の女なり。むかし母后の御夢に、胡僧來りて『君の胎に託せんと思ふ』と申しけり。その後懷姙したまひけり。――同上。

平等院僧正行尊は一條院の御孫、侍從宰相の子なり。母の夢に、中堂にまゐりたりけるに三尺の藥師如來を抱き奉ると見て、いくほども經ずして懷姙ありけりー―同上。

マリアの清淨受胎はプロテスタントの方では否定してゐるが、とにかく亭主に覺えのない子供が出來たのならば、それが基督だらうが、『××××××××××、×××××』だらうが、何だらうが、それはみな明らかに姦通によつて生れ出でた私生兒に相違ない。單性生殖 Parthenogenesis は人類の如き高等動物に於て、絕對に不可能な事はわかり切つた話だ。東西の宗教家といふものが兩性關係に就いて、かくまでも馬鹿々々しい苦しい言をなさなければならぬに至つたその動機を深く考へて見ると、その裏面には婦人征服のため宗教的な新しい旗じるしがたやすく發見せられる。

五

進化と共に逆轉して女人崇拜となつた淸淨受胎說の根本には、性慾の絕對拒否がある。人間の正しい生殖作用をも否定し去らうとする禁慾思想が、疑もなくその根柢に存在する。茲に至つて、惡魔は、更に恐るべき新しき假面をかぶつた。すべての種類の宗教が、皆ことごとく或程度の禁慾思想を

主張せる明確なる事實あるを見よ。

婦人の人格をみとめずして、單にそれを横暴なる男子が自己の性慾滿足と生殖作用の對象としてのみ見るとき、禁慾思想はやがて女人罪障の說となつてあらはれた。すでに婦人の人格を認めないのだから、性慾の人格化、卽ち私がさきに『近代の戀愛觀』に於て反覆して說いたやうな戀愛は到底考へられないことになる。個性化されたる人格的な性的生活、卽ち戀愛を正しく認めて居ないのだから、勢ひ荒淫亂行となるか、然らずんばこの不自然なる禁慾思想たらざるを得ないわけだ。卽ち女人といふものから性的生活を全部引き拔いて、淸淨受胎說といふ馬鹿げ切つた虛僞を作り出し、これを禮讃して居たのである。姦淫と禁慾と、凌辱と崇拜とは、婦人の人格を認めざる惡魔にとつて、兩方ともに極めて都合のよい旗じるしであつたのだ。すべての兩極端は相等しい。原始宗教の婦人姦淫も、進化した宗教の禁慾生活も、外面は正反對だと見えながら、實は全く同一物に外ならないのである。

禁慾主義に立てる昔からの高僧の多くは、强烈なる情慾の人であつた。聖僧と言はれる人たちの顏を見るとき、私はしば〳〵惡魔的な性慾犯罪者をさへも聯想する。また僧侶に限らず、すべての禁慾的傾向の思想家は、强い性慾のために自分がひどく苦しんだ體驗ある人か、或は嘗て voluptas の生活に溺れた人で、これは現にトルストイなぞの自らの告白によつて明らかに知られる。(ことわつて置くが、私は決して之を惡いといふのではない。藝術なぞも矢張り性慾の轉化で、私はロダンがアトリ

ェでの仕事服を着た寫眞を見て、あの淫蕩の怪僧ラスプウチンを想ひ出した事すらあつた)。

筆が思はず横道にそれたが、この禁慾思想はまづ初代の基督教に於て、保羅の教であつた事は人の知る通りだ。その婦人に對する教訓に言ふ。

『婦なる者よ、主に服ふが如く己の夫に服ふべし。そは基督が教會の首なる如く、夫は婦の首なればなり。基督は身の救主なり。されば教會の基督に服ふごとく、婦もすべてのこと夫に服ふべし』――以弗所書五、二十二――二十四

亭主を活き佛か、神の化身だと思へといふのだから、此婦人壓迫は日本の夫唱婦隨說どころの騷ぎではないと思ふ。もとより私は之を以て古代の僧侶が自ら活き佛となり、救ひ主となつて婦人を姦し、或は犧牲として神前に女を獻げたのと同一視するものではないが。

しかし禁慾思想によつて基督教が眞に婦人征服の完全なる武器となるに至つたのは、言ふまでもなく中世紀に於てである。男子專制の思想は、婦人をおのが性的生活の對象たる奴隸としてのみ見るが故に、性慾を否定すると共に女人を以て一切の罪惡の素因なりと見なし、人生の魔障なりとして之を侮蔑した。(同一の中世時代に於てすら、女人崇拜の他の半面に此反對現象を見る事は、既に上にも述べた通り、自然なことではあるが、また興味ある事實だ)。羅甸語の女 Femina の語は『信仰なきもの』を意味し、女性は永久に呪はれたる者としてさげすまれた。そこで横暴な男子が考へ出した極め

て面白い、そしてまた婦人侮辱思想の極度を示した有力な一つの旗じるしが出來た。それは即ち中世の『妖女の術（ウヰッチクラフト）』である。

妖女（ウヰッチ）といふ思想は、必ずしも中世基督教の創始なりとは限らない。世界到る所に類例がある。即ち男子が、自分の性慾の抑制すべからざる不思議の威力を一種の魔法だと信じ、その魔法を相手の女になすり附けて了つたのだ。即ち女人は魔ものであつて、この妖術を行使する者だと誣ひたのであつた。獨逸語の妖女（ヒッチ）に當る言葉は Hexe だが、その語源は Hagat 即ち『流浪の女』の意であつた。すべての女人は、玆に到つて遂に惡魔そのものだと考へられた。今日の吾々から考へると兒戲に類した思想ではあるが、この旗印は近代に到るまで非常に頑固な迷信となつて、歐洲の人心を支配し得たのであつた。（古代の宗教賣淫の場合は、つまり性慾滿足によつて、この魔もの——佛教でいふ陰魔——を拂ふ事を得るが故にそれを救濟と思ひ、宗教的法悅の三昧境だと感じたのであつた。）

基督教神話にいふエバが智慧の木の實（即ち性的知識）を味はつてから、人間は墮落して神の樂園を追はれた。一切の性的生活は罪惡だといふところから、かの原罪（オリヂナル・シン）の說は生れた。清淨受胎などといふことも畢竟ずるに、この原罪なるものを女人から無理に抽出しようとして出來た說話に過ぎない。かりに禁慾思想を正しとしても、そしてまた性慾を以て魔障なり陰魔（おんま）なり罪業なりと見るとしても、性慾生活は男子も女子もお互樣の事なるが故に、婦人のみがこの禁慾思想の結果として侮辱を受ける謂れは、寸毫だもあり得ないわけだ。女人よりも寧ろ性慾熾盛なるを常とする男性、ことに破

戒僧などこそ、罪業の權化だと言はれなければなるまい。

禁慾主義の佛教が同じくまたこの旗じるしを用ゐて、婦人征服の武器としてゐる事は固より言を俟たない。高野の山は長い間女人禁制であり、說教僧はいつも壇上から女子に五障三碍ありと言つて、今日なほ參詣の婦女に向つて甚だしき侮辱を與へてゐる。禁慾の宗教としては極めて寬容の態度をとれる念佛宗に於てさへ、その「淨土和讃』の一首に言ふ、

彌陀の名願によらざれば、
百千萬劫すぐれども、
いつつのさはり離れねば、
女身をいかでか轉ずべき。

古來宗教家は、さながら變態性慾病者のサデイズムの如くに、東西ともに女を虐めることによつて自瀆的快感を貪つたのだ。女は虐められながらも、外ならぬ往生成佛の一大事で『百千萬劫すぐれども』救はれないぞよと言つて、活き佛を粧ふ僧の口からこの猛烈なる威嚇を受くるに至つては、婦人たるもの長い間文句は言へなかつたのである。宗教の惡魔的威力もまた偉大なるかな。この點に於ては軍閥的國家擁護の惡魔の劍としてよりも、それが人生の根本問題である罪惡觀などを利用してゐるだけに、一層また有力な旗じるしであつた。

犯罪者のなかに、心から宗教信仰深きものを見ること稀ではない、といふ事實を犯罪學者は指摘してゐるが、以上わたくしが述べた宗教の性的暗黒面を見ただけでも、這般の消息は容易に理解せられるであらう。既に餘りに長きに失した此一節を終るに先だつて、私が曩に世に公にした『近代の戀愛觀』に就いて、序ながら玆に一言して置かう。

自覺ある個人がその性的生活を強く個性化したものが戀愛である。それは言ふまでもなく個人としての對等の人格を基礎としてゐる。ところが婦人を男子よりも一段と下等なものにして、戀愛なき凌辱的、不見轉結婚をも神聖なりとし正義なりとするためには、さしあたり宗教の惡魔的威力を借る事は最も都合がよい。古代の寺院賣淫なぞは全然戀愛を無視して、相手構はずに『神聖なる』性交が行はれたのだ。支那の方では立派な宗教になつてゐた孔子教の祖先崇拜、階級差別の教を日本化したる家族主義の信仰が、如何に多くこの人格的なる戀愛結婚妨害の利器として役だつてゐるかを思へ。×××。ちやうど古代宗教が、結婚式に際して先づ王侯とか僧侶とか家長とかに、『初夜の權』Ius primae noctis を與へて、處女の神聖を奪はしめたと同じく、今ではその Defloration が見ず知らずの新郎によつて行はれるといふだけの違ひだ。生蠻の生首が勳章に進化したやうに、形だけは少し高尚になつても根本精神は變化して居ないのである。すべての不合理を合理的に見せかけ、

醜穢なる蠻行を、神聖にして道徳的なるかの如くに胡魔化すために、宗教もしくはそれに類似したる一種の信仰は、常に至便最良の假面を提供する。

六

第三の差別に基づく反爭は即ち階級鬪爭だ。この爭に於て傳來の誤れる既成宗教や寺院教團が、貴族、資本家などすべての特權階級のために今も昔も、如何に巧みに惡魔の爪牙となつて御用を勤めつつあるかに言及しよう。東洋では餘り言はないことだが、西洋にはちやんと僧術（priestcraft）といふ言葉まで出來てゐる。その意味する所の内容は主として、この第三の點に於て宗教家が有する魔力を指すのである。

すべて强者の專制横暴は、宗教の魔力を借らずしては行はれ難いものだ。昔から多くの暴君や專横の貴族は、この理由のために必ず先づ寺院僧侶を保護した。神とか佛とか寺院とか、教會とか、何とかいふ偶像を背後にして僧侶が物を言ふとき、理窟なしに人はかうべをうな垂れ易いからだ。嘗て宗教家の言説に不思議な一種の感化力があり魔力があると思はれたのは、實はその背後に光を放てる偶像の蠱惑であり權威であつたのだ。さながら魔法使ひ(マジシアン)の杖(ワンド)の如く、意のままに容易く弱者を左右し得る點に於て、御用學者や道學先生の言論よりも遙かに有力なる平和の武器であつたのだ。護摩壇の前に合掌禮拜するとき、人はいつもの自己を放棄してエクスタシイの心境に入る。つまり一種の催眠(ヒプノティズム)

にかかれるその虚に乗じて、魔王の黒き手は易々として彼を動かすのである。さながら電車のなかで何かに見とれてゐるひまに財布を掏られるやうに。

私は今さら、中世の羅馬教會と法王の教權とが如何に恐るべく偉大なものであつたかを、繰返すの煩を避けよう。また佛蘭西革命以前の貴族と僧侶との關係などを擧げて、專制の怪力としての宗教が、東西の歴史の上に如何にしばしば巨大なる暗影を投じたかをも言はないであらう。ただ玆にまだごく新しい事實として、露西亞專制政治崩壞前に於ける希臘教會の偉力を見よと言はう。かのロマノフ王家の虐政は、教會の神祕的威力を唯一最大の武器とする事によつて、はじめて行はれ得たのであつた。教會の議決命令信條は直ちに神の宣言として、救世主の名に於て行はれるが故に、すべての言言は言ふまでもなく、政教いづれの方面に於ても、その絶對の命令には必ず絶對の服從が要求せられた。露國の希臘教會は一億萬に近き民衆を信徒としたが故に、傲然として帝都に君臨せる大魔王の如きそのシノッド(總本山)は、常にあの尨大なるザアの帝國を意の儘に左右し得たのであつた。一世の大思想家トルストイもこれがためには破門せられた。信仰の人ドストイエフスキイが西比利亞の曠野に流竄幽囚の身となつて『死人の家』に描いたやうな慘憺たる迫害をうけた志士は、數知れず多かつた。ラスプウチンに劣るまじき幾百幾千の怪僧と妖僧と俗僧の魔の手によつて、遂に今の赤色露西亞を生むべき素因が、過去半世紀の間に醞釀せられたといふ戰慄すべき事實を回顧せよ。神の救、御(み)

佛の慈悲の名に於て働き得る魔王の宗教的威力は、何も遠く時代を隔てた昔の歴史談のみではない。

人或は言ふだらう、それは舊帝政露西亞の特別の國情に因るのだ、英米その他の諸國に於ては然らずと。それならば再び思へ、今日いづれの國に於ても、その寺院教會或は青年會や救世軍の如き凡ての宗教團體が、果して何人の資力によつて維持せられつつあるかを。詳しく言へば幾千萬の宣教師僧侶といふものが、精神的にも肉體的にも何等の苦しい勞働に服せず、唯アアメンを唱へ木魚をたゝく事によつて、金襴の袈裟法衣を纏うてやす〳〵と生活し得るのは、主として何人の資金によつてであるか。あの巍々として雲表に聳ゆる大伽藍大殿堂にをさまつて、數奇をこらした庭園を控へた書院の一室に閑日月を送れる僧侶は、その衣食の資を主として如何なる階級に仰ぎつつあるかを思へ。もとより吾々のやうな貧乏人の金をも多少は捲き上げてゐるに相違ないが、そんなのは先づ貧乏寺か、然らずんば所謂貧者の一燈、もとより言ふにも足らない。その維持資金の大部分が支配階級、資本家、大地主などの寄進であり寄附であることは今さら言ふまでもない事實だ。

米國は世界に於ける最大の資本家國であり、また寺院教會の最も富有な國だが、その國でのまた最大の資本家の一人であるロックフェラアの爺さんが、今年八十幾つかになるまで寫眞といふものを嫌つて滅多に寫させた事がなかつた。――私はこの話を、つい前週に或外國雜誌で讀んだのだが。――そこで或新聞記者が無理にでも寫眞をとらせて呉れと賴むと、翁は遂に之を諾した。然しそれには一

つの條件があつた。お前さんが來月まで毎日曜には、缺かさずに私の行く教會へお參りするなら、そのあとで寫させてやる。記者は遂にその言の通りにして此寫眞を得た、と云つて皺くちやの爺さんの顏が寫眞版になつて出てゐた。如何にもこれなぞは日本でも資本家の御隱居さんの言ひさうな事だが、その教會が又ロックフェラア家の巨萬の大寄附金によつて維持せられて居る事はいふまでもなからう。又かの支那朝鮮の內地などへバイブルと醫療器械とを提げて行つて、資本主義的國家大發展に貢しつつある多くの宣教師も、これら資本家の財源によつて派遣せられてゐる事も言を要しないのである。

米國とちがつて日本のやうに古い歷史を有する國では、今日なほ寺院が、幾百年前から支配階級によつて與へられ保護せられた鞏固な基礎の上に立ち、その或種のものの如きに至つては旣に巨萬の世襲財產を擁して、僧侶みづから旣に立派な御前樣であり貴族でありブルヂョアである。從つて事柄は更に明瞭だ。

多年うまい金儲けをして身は大資本家となつて貴族に列せられる頃には、引退して何食はぬ顏で今さら論語なぞを說いて廻はつた男があつた。それも長年の罪滅ぼしには誠に結構であるが、多年の搾取によつて積み得た巨萬の財を寺院に寄進して、新聞記者にお寺參りを强要する亞米利加の御隱居さんとは實に好一對のものであらう。わたくしは經濟學に就いて何等の知る所はないが、陶朱倚頓を凌

ぐ資本家のあの私有財産が、もし第四階級からの搾取によつて成立する不淨の財なりとするならば、寺院や教會に寄附せられてゐる淨財といふものの大部分が如何なる罪惡の罪滅ぼしであるか、また如何なる性質來歴のものであるかは、民衆の一考に値するではないか。極めて無遠慮に言へば、さきに述べた原始宗教に於ける『寺院賣淫』の賣淫料と軒輊する所なき不淨の『淨財』ではないか、汚財ではないか。

ここに至つて私の念頭に浮ぶものは、バアナアド・ショオの傑作である三幕物の戯曲『バアバラ少佐』である。作者一流の辛辣痛烈を極めた皮肉を以て、世界最大の軍器製造業者アンダシャフトをして資本家一流の奇怪至極な人生觀社會觀を語らしめ、この人殺しの武具製造者の娘バアバラをして救世軍といふ宗教團體の一士官たらしめ、之に黠ずるにバアバラの戀人である希臘語の教授(プロフエツサア)や、『神樣なぞに救はれなくたつて好いから、早く俺の情婦(いろ)を返せ』と言つて救世軍に怒鳴り込むビルといふ若者や、救はれるとまた直ぐに救世軍で金を盗むプライスや、その他、色々の人物を配合して巧みに現代の宗教團體と階級鬪爭との關係を深く突込んで描き出し、今日の社會問題に就いて色々考へさせる作品である。その二幕目の終に近い所に、救世軍が貧民救濟の事業資金に窮して、二大富豪から一萬磅を受取る話がある。半分はボッヂャアと言つて、これは泥醉といふ害惡を世に廣める大酒造業者、さきにヘイキントンのお寺を再建した功勞によつて男爵に敍せられた資本家から得られた。あと

の半分は卽ち軍器製造業者アンダシャフトの寄附金で、色々の殺人機械を造つて神の平和を破壞する惡魔が、勞働者を搾取する事によつて儲けた金だ。作者ショオは此問題に關して、例によつて長たらしいその序文の一節に於て言ふ、

『富人の施物分配者としての宗教團體は、壓迫者補助のやうなものだ。石炭や毛布やパンや砂糖水で『貧乏』の謀叛的な鋒先を取拂ひ、來世に於ては廣大無邊の幸福が得られるといふ希望を與へて置いて、犧牲者を元氣づける。その時はもう貧乏人が、ちやんと富人の御用を勸めて早死にする段取りが、之で完了してゐる時なのだ』(同書一七八頁)

すべての宗教團體が、現世に於ては社會事業のために盡くし、未來に於ては極樂淨土や天國に導くと云ふ救の仕事は、實は無產者の血と汗とを搾取して得られた資本家や貴族などの財嚢から出てゐる。そこで此宗教家たちは果して如何なる言を以て、その所謂有難い御說教なるものをしてゐるのか。彼等の言動が動もすれば軍閥的帝國主義的國家の擁護となり、男子橫暴の五障三碍の說となりつつあることは旣に上に述べた。この階級鬪爭の問題に就いては果してどうであらうか。

私は平素寺院の說教なぞを聽くやうな機會はない。しかし、ついこのあひだ、ふと茶の間に轉がつてゐた『婦人』といふ雜誌を取つて何心なく中をのぞくと、卷頭に大本山と關係淺からざる或貴族の夫人で、いつも佛教婦人會といふものを主宰したりする人の說教めいたものを見た。その中には下の

ごとき言がある。

『階級闘爭といふ事に就きましても、佛敎の敎理が因果の原則の上に立つて居ることから理解させて頂きますと、世間のすべてはみな各自の惑業のあらはれであつて、自己の業果によつて、自繩自縛せられ、どうしても因果を自身で左右することは出來ないのみならず、善因善果と云ふ事も其人の業果なのです。此世に於て正直に勤勉しながら、なほ不運であつたり、不義のものが却つて幸運であつたり、到底現在一世では說明の出來ない矛盾も、三世因果の法から容易く信ぜられますし、又現世の果報の中には過去世の業のあらはれもある、現在の業が現在に生ぜず、未來に於て果を引くものもありませう。此矛盾も三世に亙つて考へれば、因果の法のあらはれに外ならないのだとも思ひます、大無量壽經に『善人善を行じて樂より樂に入り、明きより明きに入り、惡人は惡を行じて苦より苦に入り、冥きより冥きに入る』とのお示しは、誰にも了解の出來る自明の理なのです。無差別に、平等に、と希ふことは人間の欲求として無理からぬことで御座いますが、但し玆に因果の理の必然として有產無產、貴賤の區別が自ら出來るやうに考へられます。

是は婦人（レデイ）の言葉だから特に敬意を表して私は批評を愼むが、とにかくその主意は俗に云ふ『因果をふくめて』である。『貧乏するのは天罰だ、罰あたりめが』といふ事である。諦めろといふのである。特權階級にとつてはこれよりも都合のよい說はない。村の坊主が檀家の地主から布施を貰ひ、庫裡の修繕費を寄附させて、小作人に向つて言つて聞かせる說敎も、恐らくは之と異曲同巧のものであら

う。お救によつて來世は極樂に行けるぞとうまい事を言つて、人を現世の阿鼻地獄に投じておく者の言葉としては極めて適切なるものであらう。オオマア・カイヤアムの歌の詞を借りて言ふと、今の無産者は來世なぞといふ遠い所の太鼓の音などには耳を假して居ない。現世の現なまを取れといふ。來世の信用貸などはお斷りだといふのだ。それでなければ救はれないのである。また彼等佛教者は、しばしば『平等』に『惡』の字をまでも附けて、さも憎さげに『惡平等』といふ。そして差別觀の上に立てる平等觀でなければ駄目だといふが、なるほど詭辯的な空疎な思想遊戯としてはさういふ事も立派に言へるであらう。しかし今日のやうな息苦しい行詰つた生活をしてゐる吾等にとつては、差別の上に立つ平等といふ、まるで跛の下駄を穿いたやうな平等では承知が出來ないのである。大乘佛教は、あの古代印度で八釜しかつた四姓の差別をすらも撤して說かれたものではないか。お救で極樂往生をする時にも、五濁惡世の悲しさは、寄進の淨財の額によつて白切符と青切符との差別があるのだらうか。ちやうど坊さんの讀經の度數と時間とが、布施の金額によつて異なるが如くに。

また職業的宗教家の或者はいふ、聖者の說ける同朋主義、平等無差別觀は、宗教生活の法悅に於て體驗せらるべきもので、大乘佛教のこの所說は社會改造問題に持出すには餘りに貴きに過ぐと。なるほどさうかも知れない。しかし若しその通りならば——即ち宗教生活と社會問題とを峻別する事が正しいといふならば、今日何が故に佛教家は自ら進んで社會事業なるものに手出しをするのであるか。

何の必要あつて、何の理由あつて、

〇　佛教徒社會事業の奬勵並に聯絡統一に關する件。

一、各派宗務所又は本山は社會課を設置して左記各項の事務を專任せしむる事。

(イ)宗派内寺院住職を奬勵して所在地方に適切なる社會事業を經營せしむること。云々

かくの如き決議案をまで提出するのであるか。それは明らかに頭と尻尾とでものを言ふ惡魔の胡廊化しではないか。私は宗教家が社會事業に干與する事を正しと信ずる。そして飽くまでその同朋主義と平等無差別の宗教觀を、人間の全生活の上に徹底せしむべく努力し高唱してこそ、宗教家の宗教家らしさはあるのだと思ふ。吾々に宗教生活と社會生活との二重の生活があるのではない。そこにはただ一つの人間生活があり、ただ一つの生命の躍動があるのみだ。これを無理にも二つに峻別して說かうとするのは、例の惡魔の財源……もう言はなくても解つてるだらう。

人々はいま生活の痛苦に悶へ、魂の飢に泣いてゐる。かくて救を求めんとするに急なる人心の虛に乘じて、あやしげなる因果を說き、消極的な諦めをすすめて、資本家や特權階級の溫情主義の手先となるが如きは、決して眞の宗教家の天職ではあるまい。それは飢ゑたる鼠に與ふるに猫イラズの饅頭を以てする惡魔の業ではないか。

或所で市區改正をして電車のために道路を擴げた。そこには可なり大きな寺院があつて、境內には

勿論空地もあつた。電車道路のためにその一部を取拂はうとすると、寺僧は頑然傲然として之を峻拒した。曰く、當山は何とやら家といふ貴族の菩提所だと。やむを得ず、それらと反對の側の十數軒の小さき民家は取り拂はれて、電車線路は迂曲する外はなかつた。惡魔の殿堂の威力は恐ろしい。

以上は主として日本の現狀に就いて言つたのだが、西洋の方を見ると、中世修道院の孤獨の宗教が文藝復興期以後全く面目を一新するに至つて、宗教の社會性といふ事が著しく强調せられるに至つた。特に近代に至つてはオオエンやサン・シモン等の宗教的な社會改造論が最初の刺戟となつて、宗教は社會運動と結び前世紀中葉のキングズレイ、モオリス等の基督教社會主義ともなつた。もとよりそれは長續きはしなかつたが、ラスキンやカアライルの社會論も亦此系統に屬するものであつた。特に英米で今日宗教家の社會事業の盛んなのも、當時の影響だと見られ得る。但しマルクスやラッサルの感化が强くなるに從つて、基督教の博愛人道主義的の社會改良論は勢力を失墜した事は疑はれない。特にまた宗教家には東西ともに固陋な人が多くて、今もなほ現世に於て人は各その分に安んぜよ、やがて來世に天國は到らんなどと說くので、一般から言へば基督教は動もすれば勞働階級の强い反感憎惡の的となつてゐる。しかし此點では、日本の念佛宗の人たちが今なほ因果說や偏狹の差別論を持出すのと違つて、西洋の基督教は確かに一步進み出してゐる。卽ち神の王國は天國ではない、現在のこの地上に基督の精神が支配するのだと說き、神を現世と離さないで考へる所謂內在(インマネンス)の說に重きを置

いてゐるが如きはそれだ。

序ながら近ごろ、日本で僧侶の力によつて『思想善導』を圖るといふ話を聞いた。今の日本の佛教界に果して其人ありや否やを私は知らない。說の可否は別として、現代英國思想界に一方の雄たるイング僧正の如き學德たかき人が、果して居るのだらうか。

七

人間が生きると言ふ事は、そこに何等かの信仰があり要求があり理想があるからだ。すべてこれらを否定すと言ひながらなほ生を貪る者あらば、それは虛僞の徒にあらずんば卽ち畜生だ。人間らしき信仰、人間らしき要求、人間らしき理想の全部を否定し去るとき、そこには『死』よりほかに步むべき道は有り得ない筈だからである。近頃日本文壇の作家の一部に怪しげな虛無思想の流を見るやうだが、あれなぞは自分が生きんとする努力の足らない結果、極めて淺薄なる自暴自棄に陷つた絕望を、賣文の商賣道具に使つただけのものとしきや考へられない。少しく酷評すれば、損をした株屋のやけくそ生活と何等選ぶところなきものである。眞のすぐれた思想家藝術家には、たとひそれが虛無主義の人であるかの如くに見えて居ても、そこには常に何等かの理想と信念の閃きがあつた。普通に虛無思想家だと思はれてゐるトゥルゲニエフは、あれは實は一種の夢想家であつたのだ。また絕望厭生の破壞思想を、噴火山の爆發のやうに十九世紀の思想界に投げだした最初の第一人者バイロンさへ、今

口から思へば、『自由』といふ理想を棄てては居なかつたのだ。ただトゥルゲニエフやバイロンに於ては、この理想と信念とが餘りに夢幻的であり、空漠たるものであつたといふに過ぎない。

私はかくの如き意味に於て、また常に肉より靈へ、物より心へ、常識より神祕へ、有限より無限へとあこがれる事が、人間のたふとき本性である事を信ずるが故に、宗教そのものの意義と存在とを飽くまでも強く肯定する者である。ただその信仰とあこがれと理想とが、空疎なる概念や、死せる偶像であつてはならないといふのだ。この信仰、この理想は、飽くまでも生命の烈火に燃ゆる人生の藝術であり、人生の宗教であらねばならぬと考へるのである。かの前世紀の多くの唯物論の徒や、或はニイチェ、バアナアド・ショオなどの口吻を學んで、宗教そのものを否定し攻撃するが如きは、根本に於て人間性の貴さを侮辱したる謬見だと思ふ。それは確かに人間冒瀆である。

わたくしは基督によつて佛陀によつて說かれたる宗教が、その本質に於て天地と共に偉大であり、日月と共に永久である事を十分に承知してゐる。毫もそれを疑ふものではない。（支那に於ては宗教となつて居た孔子教といふ祖先崇拜教は、宗教として全然無價値なものだとは思ふが）。ただ私の言はんと欲するところは、既成の寺院宗教の偶像化、功利化を飽くまでも排擊したいと思ふのである。生命なき囚はれたる既成宗教が、賤劣なる妖僧俗僧の魔手に弄ばれ、巧みに利用せられ惡用せられるとき、大魔王の恐ろしき毒手が神壇の背後に動きつつある實際の事實を見よと言ふのだ。今日いかに多

くの憎むべき罪悪が、胸に十字をかけたる黒衣の人や、活き佛を粧へる圓頂緇衣の徒によつて、白晝公々然として神のおん名に於て、御佛の稱名によつて行はれつつあるかを見よと言ふのだ。幾百年幾千年の長い歴史によつて穢された帝國主義的國家擁護の宗教、婦人抑壓の宗教、特權階級の走狗となり了れる宗教を葬り去つて、自由清新の潑溂たる生命の熱に燃ゆる宗教たらしめよと求めるのである。寺院教會のうちに『囚はれたる宗教』を、先づ野に放つて眞に人間のものとせよ、民衆の手に返せよと呼びたいのである。

　神や佛が寺院教會に在りとのみ思ふのが根本の誤謬だ。信仰は人間の個性の表現であり、生命の創造である。詩人實朝の言葉を借りて云へば、『神といひ佛といふも世の中の人のこころの外のものかは』(『金槐集』雜部)。たとひトルストイは國教たる希臘教會から破門せられても、また愛國心と宗教との野合に力づよく反對したにしても、彼が近世に於ける最大の基督者であつた事を疑ふ事は出來まい。革命詩人シェリイは無神論者であつたと普通に言はれるが、その大作『解縛(アンバウンド)のプロミイシュウス』を讀むと、彼が囚はれたる教會の神を否定してゐた他の半面に於て『放たれたる神』には燃ゆるが如き熱烈の信念を有つてゐた事が、明らかに知られるではないか。

　既成の寺院の宗教は、たとひそれが俗僧の手によつて惡用せられないまでも、多年の歴史的因習の結果、それ自らのうちに既に多くの迷信と偏見とを包藏し、殊に私が現代生活に於ける新理想主義の

三つの標識として掲げた、(一)世界平和、(二)戀愛至上主義による男女關係の更新、(三)階級打破の社會を求むる思想(詳しくは『近代の戀愛觀』を參照せられたい。(本全集第五卷))と背反せること著しきは、上來述べ來つた通りの有樣だ。今もなほ昔ながらの極めて偏狹固陋なる差別觀の上に立ち、過去の時代の多くの謬見迷妄に煩はさるるが故に、既成宗教が今や既に自縄自縛の窮地に瀕しつつあることは否定すべからざる事實である。

『行きて諸國の民に教へよ』といふ馬太傳の結語を見て、わたくしは神々しいと思ふ。民心を化導して彌陀の心光に浴せしめ、街頭に教を說いて衆生濟度の使命を果たさうとする宣敎傳道の大業が、心きよく德たかき聖僧によつてなされる時、わたくしはそれを貴しとも有難しとも思ふ。それを何事ぞ、濁世末代の俗僧が有緣を度すと稱しながら、實は私腹を肥し、資本主義の害毒を大いならしめ、婦人を侮辱し、あまつさへ軍閥の爪牙となつて國際平和をまで妨ぐるが如きに至つては、誰か之を惡魔の傳道にあらずと言ひ得るものぞ。皎々たる滿月にさへ、いつも暗い半面があるやうに、佛陀や基督のたふとき教の半面にも　黑い魔王の影は潛み易い。

基督はいふ『ああ禍なるかな、……爾等あまねく水陸を經めぐり、一人をもおのが宗旨に引き入れんとす。既に引き入るれば之を爾等よりも倍したる地獄の子となせり。』今の世の布敎傳道者、先づこの言葉を聞いて如何の感ありやと問ひたい。

友人の紹介名刺を持つて來て、玄關に面會を求める男がある。會つて見ると保險會社の勸誘員で、かれは滔々と保險の功德を說き立てる。あなたのお爲ですからと言ふが、實は彼自身の會社の利益配當を一錢でも多くしたいからだ。保險は私の爲に加入するのだから、私が求める時私から申し込む。保險の押賣はお斷りすると言つて、私はハイカラな服裝をした其勸誘員を追返して了つた。

今の寺院教會の布教僧、宣教師と、この保險の勸誘員と果してどれだけの違ひがあるだらうか。各宗各派は何の必要あつて布教傳道の競爭なぞをするのか。その競爭する心には、各保險會社の勸誘員が惡辣を極めた競爭をすると同じく、寺院の收入と勢力とを少しでも大きくしたいといふ職業的爭鬪根性が毫も無いと言へるだらうか。是は獨り異なれる宗旨宗派の間に於てのみならず、同一宗派內に於ても僧侶や宣教師ぐらゐ勢力爭や慾得づくの野卑な喧嘩をするものは無いと思ふ。苟も、宗教家の假面をかぶれる以上、今の政治屋や實業家のやうに露骨な惡事が働けないために、彼等職業的宗教家は驚くべく陰險な狡猾な手段を以て仲間喧嘩を事としてゐる。習ひ性となつては、おのづからその人相顏面にもあらはれるのであらう、多くの俗僧や宣教師の顏や目つきを見よ、おのづから老猾陰險の色あらはれて、容易に近づくべからざるものも、決して稀ではないのである。いづれの道を踏んで行つても、救の山の頂にのぼれば同じ眞如の月は見られる。是非おれの示すこの道を通つて登れと言はずとも、又强ひて茶店の婆が客を呼ぶやうな眞似はしなくても、神や佛の使徒となつて衆生濟度の使

命を果す事は立派に出來るではないか。それを無理にも押賣の態度で大擧傳道だの何だのと騷ぎ立てるのは、あれは惡魔の軍隊の一齊射擊だらう。そんな卑しい眞似をしてまでも自己の寺院教會を大きくしたければ、一層あの保險會社と同じく株式組織の會社に改めたらどうだ。資本金一億萬圓とやらを募集して基礎を固め、何々宗傳道株式會社、配當幾割といふ方が、無邪氣なだけに惡魔的分子は遙かに少くて好い。その株式も、宗教の事だから綿絲のやうに暴落はすまい。また殊に資本家の味方になつて因果を說いたりするにも徹底して却つて便利であらう。

むかしミルトンが『失樂園』に描いた大魔王(セイタン)は、神樣を向うに廻はして壯烈な大喧嘩をやつてゐるが、二十世紀の惡魔はそんな拙(こす)い事はしない。ちやんと神樣を道具に使つて、大昔の僧侶が『寺院姦淫』をやる時、女の身に神を宿してやるのだと言つたと同じく、巧みに善男善女を操つて、慈悲や救濟を名として、今の腐敗せる既成政黨にも劣るまじき惡事をさへ働いてゐる。さうして既成政黨が自らの惡事によつて自らの滅亡を早めつつあると同じく、既成宗教もまた自ら『悔い改め』ざるかぎりは自滅の外なきものではなからうか。

求めよ、然らば與へられんといふ。今は人々が心の生活に飢ゑて、求むること日に益々切なるの時である。しかるに寺院や教會は『パンの代りに石や、魚の代りに蛇』どころの騷ぎではない、猫イラズの饅頭にも似たる惡魔の殘飯を與ふるほか、理想たかき現代の新人に與ふべき清新なる何物をも

提供して居ないではないか。職業的宗教家みづからにさへ、僞らざる確固たる信仰が無いのではないか。

今はすべてのものが皆新しき內容と形式とを得べく努力してゐる。その今日に於て、少くとも日本だけで言へば、一番時勢の進運に後れてゐるものは、まづ遊廓と寺院とであらう。二つのものは昔から仲が好い。

舊信仰の廢墟が今すでに悪魔の殿堂と化しつつあるを見よ。いつまでも、そのをぐらき須彌壇のかげに消えなんとする明滅の燭光を仰がんよりは、人々よ、先づ自らの心の聖殿に、新なる生命に燃ゆる信仰の靈火を點ぜよ。

僧正イングそのほか

——『悪魔の宗教』に就いて言ふ——

一

『讀賣』の第三面に、さきごろ連載されてゐた『滯英雜記』を、わたくしは深い興味を以て讀んだ。筆者の長梧子とは何人であるかを私は全く知らないが、英國に於ける見聞感想の雜錄として、少しも理窟張らないで平淡な日常生活を敍し、そこに明確な批評を下して行くその筆致は、さながら長の旅路から歸つた敎養ある友の爐邊の閑話をでも聽くやうで、新聞紙上の讀み物として近頃上乘のものであつた。すらすらと書き流して行くあの筆使ひにも、特に英吉利の國語文章に親しみの深い人でなければ出來ないと思はれる好い所があつたのは、殊にうれしかつた。

その後の方の部分にW・R・I・と題して、セントポオルのイング僧正の事が出てゐた（讀賣新聞大正十一年十二月二十日及び二十一日參照）。英國現代の宗敎界思想界に於けるこの勇敢な戰士、——身は顯要の僧職にありながら、侃々諤々、因襲的なる寺院宗敎に痛撃を加へて全國の僧侶をして顏色を失はしめたのみか、その高邁の識見と暢達の筆とは、遂に勞働問題、優種學（ユウゼニクス）などの批判にも及んで、一代の耳目を聳動した。

ラッセルやショオやエルズの名は邦人の間に喧傳されてゐるが、これらの人々とは全く異なつた純粹の宗教家としての立場から、社會主義や民主主義（デモクラシイ）に忌憚なき痛烈な批判を下してゐるこの哲人イングの名は、邦人の未だ多く傳へざるところであつた。それがあの『滯英雜記』の筆者によつて語られ紹介せられた事をも、私は喜ばしいと思つた。

イングが最近の著『直言論集』（アウトスポオクン・エッセイズ）第二篇の卷頭に、先づ『信仰の告白』（コンフエシオ・フイデイ）をのべ、更に在來の國家觀を評し、文明を論じ、ギクトオリア朝を回顧するところ、その獅子吼は恐らくセント・ポオル寺の鐘の聲よりも、より深く、より強く時人の胸奥に響くであらう。イングが最初先づ盛名を馳するに至つたのは、今から二十四年前の著『基督教神祕思想』（クリスティアン・ミステシズム）であることは言ふまでもないが、イングは決して普通の意味で言ふ宗教家ではなく神祕主義論の論者でもなく、國家社會の時事を慨しては、痛烈骨を刺し、精鋭さながら利刄の如き筆を以て、社會批評生活批評を試みつつある一個の哲人であり、また明晰な批判家思想家として見らるべきだ。その思想が今の所謂新思想と全く方向を異にしてゐる事は、まことに長梧子の言はれた通りで、彼は飽くまでも宗門の見地に立てる改造論者であり愛國主義者であり、戰後英國社會の墮落と風紀の頽廢とに對する最も熱心な攻擊者である。率直なるその言葉、大膽なるその態度、さながら日本の昔の禪門の高僧を想はしめるものがある。今の社會主義萬能說に反抗する勇敢なる一個の貴族的思想家として、劍橋牛津大學（ケインブリッヂ、オックスフオド）の講堂に立ち、『エディンバラ評論』

『ヒッバアト誌』筆を執り、さてはまた僧服を纏うて寺院の教壇に說教するとき、淵博なる宗學の知識は言ふまでもなく、その最も得意とせる希臘羅馬古典の學殖は、かれが飽くまでも獨創的天才的なる識見と相俟つて、いまの歐洲の思想界に全く特異なる燦たる一異彩として輝きつつあるのだ。もとより渾沌たる現代の如き社會が、炯眼炬のごとき斯くの如き豫言者の目に映ずるとき、それがカアライル一流の熱烈な憤激（イ・ディイゲチシオ）となつて現はれざる限りは、必ずや憂欝なる慨世の悲調となつて叫ばれざるを得ない。わたくしは此イングが、英國公衆のため動もすれば『陰氣な僧正（グルウミイディイン）』と呼ばれるのを聞いて、恰も昔の豫言者エレミアが『泣き悲しめるエレミア』と名づけられたのを聞くと同じ沈痛悲壯の感に打たれざるを得ない。かれの生れは千八百六十年だと聞くから、今すでに六十歳を越した老齡の新人である。かつて劍橋（ケンブリッヂ）大學の神學講座を擔任し、また宗論を以てカンタベリの大僧正をはじめ、全英國の僧侶を向うに廻はして論戰し、『信仰と知識』『英國神祕家の研究』『宗教に於ける眞と僞』『信仰』『教會と時代』などの名著によつて、英吉利の思想界を震撼した頃の英邁の氣は、今に至つてなほ毫も衰へては居ない。わたくしが曩に雜誌『改造』の十一月號に掲げた『惡魔の宗教』の拙稿のうちに、この僧正の名を擧げて、日本の宗教界にも若し僧侶の力による『思想善導』などを言ふならば、せめて此イング僧正ほどの人が……と言つた所以は、まことに正直なところを語つたのであつた。
表題からして Outspoken といふイングの著『直言論集（アウトスポオクン・エッセイズ）』の第二篇の方は最近の出版で、これは

既に長梧子の紹介があつた通りだが、その第一篇の方は三年前に出た。時あたかも平和克復後、間もなき頃のこととて、この一卷の論集は英國の思想界を震撼した。殊に卷中の基督教の將來、愛國心、出産律、英國人種の將來などを論じた諸篇は言ふまでもなく、はじめて此書に於て公にされた卷頭の一篇『吾等が現在の不滿』は最も多く世論を湧かしめた。民本主義を駁するに六箇條の理由を擧げ、勞働運動の非なるを說くあたり、論旨はもとより私どもの一致し難い所ではあるが、その堂々たる態度と率直大膽なる立言とに至つては、英國の宗教界この人あるを見て、誰しも敬重の念を禁じ得ないであらう。警句に富めるその雄勁の文體も亦、確かに讀者を惹きつける大きな力であつた。例へば、

「コンスタンティン大帝のもとに敎會と國家との間に最初の協約あつてより、敎團としての宗敎はすべて失敗であつた。」(同書三〇頁)

「近世の都市居住者は神も有たなければ、惡魔も有たない。畏なく感嘆なく恐怖なくして生く。」(同書二〇頁)

「人事のうち若し一つの大丈夫な概括論ありとすれば、それは、革命は常に自滅を招くと云ふ事である。狂熱の徒は今まで幾たびか「第一年」を宣言した。しかし如何なる革命時代も「第二十五年」を數へた事はない。」(同書第一頁)

すべてがかう言つた調子で、彼は極めて露骨に所謂近代思想なるものに反抗するが、さりとて敎會

や國家や社會に對する彼の見解は極めて自由なもので、その思想はその文體と共に清新潑溂の趣を失はない。「今や新しき暗黒の時代は來らんとす」と叫びながら、またわが子孫が如何にして人生の行路を歩むべきや、刮目して待たんと言つて、最後の望みを失はないところなども、さすがは信念の人である事を想はしめる。かの徒らに保守頑冥の説をなして時代の進運を妨ぐる者とは、固より同一視すべきではない。

二

しかし私は玆でイング共人に就いて語らうとするのみが目的ではない。さきの長梧子の『滯英雜記』の一節に、左の語があつたから、わたくしは英語英文學の學習者として一言したいのである。長梧子は言ふ、

『そして彼（インジ）の書くものは宗教的のものが多いので、殊に新しいものでなければ流行しない日本では、數へるほどしか讀者を持つて居ないらしい。英國通の某文學博士がインジをイングと發音してゐた處などを見ても、凡そ想像出來る』（讀賣新聞大正十一年十二月二十一日、一六四三九號、第三面）

この『英國通の某』とは、果して何人を指したのか、私は知らない。しかし、さきに言つたやうに、『改造』誌上の拙稿『惡魔の宗教』の第二十四頁に於て明らかに、わたくしは確信を以てイングと

書いて置いた。インジとは言はなかつた。長梧子にして若し之を誤膠なりと速斷し、更に進んで日本の讀書界の知識の程度をまでも疑はれるならば、英語發音問題のやかましい昨今、わたくしとしては一言なきを得ない。殊にまた、一外國語の精確なる素養をさへも怠りながら、西歐近時の思潮を論じ西人の名を擧げて大言放語せるわかき批評家の群がれる今の文壇に、飽くまでも細心精緻の學風を重んぜんとするものが、英吉利言語學上、特に重大な意義を有する語の一例たる Inge の音に就いて言ふ事は、必ずしも徒爲ではないと信ずるからである。かつて或學者が本居宣長の名をノブナガと讀んで日本固有思想なるものを論じ、嗤笑を招いたといふ話があるが、イングの發音を誤つて今の英國宗教界に就いて語つたものありといひ、はてはそれによつて日本の讀書界をも評價せられるならば、いささか恐縮——とでもいふのだらうか、ちよと困りもするし、また滑稽にも見えるからである。

INGE と云ふ名前は、もと〳〵古代のアングロ・サクソン語に『河邊の牧場』を意味する語から出た由緒の正しい純粹な英語である。（私はここで教室の講釋のやうな事を言ふ事も出來ないし、また活版所の不便をおもうて聲音學の音標文字を用ゐることも避けるから、不正確な假名を以て發音を表はしておく。）その語尾のEは、かういふ言葉の常として、古い形の名殘をとどめてゐる遺物に過ぎない。今さら中期英語（ミッドル・イングリッシュ）の昔にさかのぼり、チョオサァなぞにあるこの無音と有音の語尾のEに就いて論じなくとも、近代英語（モダン・イングリッシュ）に於ては、この尾のEは殆どすべて脫落しつつあるのだ。だからこのイ

ングと同一語、同一發音の名前で語尾を省略してINGと綴つてゐる英人さへもある。英語の綴字は、少しも發音を表示しては居ない。(殊に姓氏の綴りといへば亂暴なもので、沙翁（シェイクスピア）の名の綴りの多様な事は誰でも知つてる話だが、二三世紀前までは、人々が多く無學無筆なためにお寺の坊さんが頼まれて、よい加減な綴字を書いてやつたのだ。)だからイング僧正の名の場合も、Eの無いのと同じやうに發音する方が、學問上、正しいのである。獨り此僧正の名ばかりではない。近年小説界で知られてゐる作家に、チャアルズ・イング Charles Inge といふ同姓の人が別にあるが、それなぞもイングといふ方が正しい讀み方である。現に倫敦大學のジョオンズ教授の『英語發音辭典』には、明かにイングと云ふ發音を示してゐるではないか。

しかしながら今日普通の英人中には、僧正の名をインジと言つてゐる者も多いのは事實だ。ことに亂暴な無學な發音を平氣でする米人などになると、十中八九人まではインジと言つてゐる。それは綴字の表面をだけ見て發音するから生ずる誤謬だ。もとより名前なぞは實用の符號に過ぎないから、當人ですら誤り呼ばれても平氣でゐる。『神谷』といふ私の友人が、カミヤと呼ばれてもカミタニと呼ばれても返事をしてゐる。どちらだつてわかれば可いので、その名の當人にすら、かのロオズヱルトの名の發音のやうに、屡疑問を生ずるのだ。しかし苟も英文の研究に從事してる者としては、この古代英語そのままの名を自分の著書や文章のなかに書くとき、明らかに正しくない百姓よみ流の發音の方

を筆にのぼす事は、何としても忍び難い事である。

この古代の遺物であるEを今日わざ〳〵語尾に附して、それが舊家の名である事を示して置くなぞは、いかにも英吉利人の保守的氣風の一端を表はしてゐるから面白い。かのオスカア・ワイルドのWilde も、Wild といふ普通の姓と同じものだ。Clarke といふ名も、Eの有るのと無いのと語源發音すこしも異ならない。なほイングの場合と同一のGEの他の例を考へて見ると、さきに印度總督であり駐佛英國大使であつた Hardinge の如き、よく日本の新聞の海外電報などに、ハアディンジと書いてあるが、あれなぞは立派な百姓よみである。今の米國大統領の名を、唯もハアディンジとはいはないではないか。またかの愛蘭の戲曲家シング Synge の名に至つては、英國に於ても時々疑問とせられてゐたが、かのモリス・ブルジョアの大著『シング傳』の脚註によつて、この名が或韻文のなかで Sing といふ語と押韻せられてゐる事によつて、シンジではなく、シングと讀む方が正しい事が明らかになつた。

この類の事は一些事のやうに見えながら、實は長梧子のやうな立派な文章のなかに、かのごとき數行の文句を見る事は、美人の頰べたに、ちよと鍋墨が附いてゐるやうで可笑しいと思つたから注意しておく。

階級藝術とか文藝思潮とかいふやうな事は重大な問題には相違ないが、それらは物を識らなくて

も、理窟の附けやう次第で、粗大の論議はどちらにでもなる。動もすれば水掛論に終つたり漫罵に了つたりするのが常だ。しかしかういふ言語の問題なぞは、そこに歴史の事實もあり、動かすべからざる文獻學上の論據もある。素人のごまかし論なぞで有耶無耶に葬る事の不可能なるものである。私が特に此一節を書いた所以だ。

外國の歴史や古典や國語に就いて、孜々として嚴密の研究を怠らざる者にして、はじめて異邦の思潮や藝術を語り得べきは、今さら言ふまでもないが、近ごろ出來る外國文學の飜譯書などを時々見ると、實は憚りあつてまことに言ひにくい話だが、なかには隨分と亂暴極まるものが續出してゐる。これ位の事が解らなくて又こんな文句ぐらゐを誤譯してゐるやうで、どうしてかの大言壯語をなし得るものか、と呆れ果てるやうな例さへ見受けられる。なほそれのみではない、細心精緻の溯源的學術的研究なぞを目して、腐儒衒學者流の閑事業として之を輕んじ、はては獨り自ら天才氣取りか何かで物を識らない事を手柄にするやうな惡風をさへも今の青年の間にみとめる。わたくしは率直に之を言ふのだが、かくのごときは恰も學問の出來ない學生が自己の無努力と不勉强とに功能をつけたり、はてはその不勉强を誇にする負惜しみと同じ意味の墮落である。知識や學藝の事には、ブルジョアもプロレテイリアンも何もあつたものではない。無知無識とか、物を知らないとかいふ事は、要するに人として恥づかしい事なのである。たとへばわかり切つた平明な事實が書いてあるのを目して、衒學的

だなぞと評してゐる者がある。私どもは猥りに他を衒學的なぞと罵るに先だつて、まづ自らの無知無學を耻ぢねばならぬ。

これらのことは、固よりかの長梧子の『滯英雜記』の如き、すぐれた文章とは何の關係もない話であるが、文壇の近事を慨して思はず筆が辷つたのである。その辷つた筆の序に、わたくしは拙稿『惡魔の宗教』に就いて、茲にまた一二附言して置きたい。――これこそ、どうでもよい事だらうが。

三

わたくしはあの拙稿のうちに、宗教の重んずべき事を明言しておいた。佛陀や基督によつて說かれた教が、太陽の如くに貴く有難い事をも疑はないと言つて置いた。ただ過去殊に現在の宗教屋――因襲的なる寺院教會を金城鐵壁とたのめる職業的宗教家の僞せる言動が、動もすればその教祖や祖師の意に反し、殊に現代の新しき理想と背馳せること甚だしきを指摘したのであつた。昔の聖者はいふ、『依レ法不レ依レ人』と。宗教そのものは有難いが、これが俗惡醜劣なる傳道者の手と口とによつて、如何に屢惡魔化せられつつあるかを語つたのであつた。これを手短に言へば、宗教そのものは貴いが、宗教屋の言動には非難すべき點が多いといふのである。事理は極めて簡單にして明瞭だ。現に眞面目な多くの宗教信者は私の言に贊成して吳れられたが、若し眞に德たかく心淨き聖僧にして、あの『惡魔の宗教』を讀んだならば、恐らくは微笑をたたえて言ふであらう、『みな分り切つた事實だ、この通り

の事を今日の宗教家は爲てゐるのだ。今さら言ふほどの珍らしい話でもない。わたくしなぞには何の痛痒をも感じない文字である』と。

しかし自ら顧みてやましき卑俗の傳道者なぞは、あの拙文を讀んでも恐らくは多少の反感を抱いた事であらう。まことにお氣の毒であつた。しかしさういふ人たちは、ぐづ〳〵言ふひまに少しく自ら省みるが可からう。惡事を働いたと言はれて、眞赤になつて怒り出すやうな者には、とかく惡黨が多い。善人は我不關焉で空うそぶいてゐる。

わたくしがかの『惡魔の宗教』の一篇に於て言はんとしたところは、上に言つたやうに極めて簡單明瞭であるにも拘はらず、宗教そのものを攻擊してゐるかの如くに誤解した者（たとへば『早稻田文學』の木村莊氏、『新精神』の記者等）のあつたのは、表題が『惡魔の宗教家』としてなかつたからだと、或友人が注意した。しかし私のエッセイは、たとひ極めて拙いながらも、自分としては藝術品として一言一句の末にも、わたくしの生命の律動を表現しようと努力してゐる。あの表題に『家』の一音を加へるとき、その一句全體の聲調は破壞されて了ふではないか。『惡魔の宗教クワ』そんな私の心の耳に jar するやうな音律の一行と雖も一句といへども、斷じて私は之を筆に上すことは出來ない。何か理窟をでも論ずるための實用の文句ならばいざ知らず、苟も散文の詩として emotional logic を根柢とせるエッセイに於て、私の心律に合せず耳に逆ふが如き一言半句と雖も、之を容るるの餘地

は無い。況んや表題に於てをや。

そもそもエッセイとは如何なる意味の藝術的創作なりや。此事に就いてはいくたびか私は說いて置いた。一口にエッセイといつても、近頃の學徒が設けた分類法で言へば種類は甚だ多くなるが、私の言ふ所は必ずしもラムやスティヴンソンの書いたやうな personal essay とか、familiar essay とかの類をのみいふのではない。それらが純然たる散文の抒情詩である位は誰でも知つてる事だが、私の言ふのは、かの J.C. Shairp がカアライルを目して『散文の詩人』といつてる場合とおなじ意味に於て言ふのである。英國のこの近代の豫言者が英雄を論じ、佛蘭西革命を說き、『衣服哲學』を語るとき、それがみな立派な詩であつて、彼の警拔なる思想を警拔の文辭に托した藝術的創作である事に氣附かざる者の如きは、斷じて他人の文章を評するの資格なき者である。もとより何も是はカアライルと限つたわけではない。古くはプラトオンの哲理を聞く前に、先づその『フェドラス』冒頭の雄麗なる敍景の筆を見よ。『理想國(レリパブリック)』のここかしこに散見せる壯麗の文辭を見よ。之を近世で言へば、ジェレミイ・テイラアやトマズ・ブラウンの稀世の名文は言ふまでもなく、エドマンド・バアクの『佛蘭西革命論』中、かのマリ・アントアネットを敍したる條の如き、あれをしも殺風景な實用の『論文』などと同視するものあらば、よほど頭がどうかしてゐるのである。二十世紀の現代の文學は散文が全盛を極めてゐる時代だから、この種の藝術的創作としてのエッセイは、言ふまでもなく汗牛充棟だ。

みづから『憤激は詩を作る』*Facit indignatio versum* と言つて、思ひ切つた毒舌惡罵を詩にしたのは晩年のジュヹナルであつた。遠き昔のホレス以來、近くは十八世紀文學に至るまで、歐洲文學でいふ『サタイア』と名の附く種類の詩歌は、皆悉く冷嘲熱罵の喧嘩腰の文字であつた。あるものは狂犬の如く、あるものは毒蛇の如く、またあるものはブルドッグの如くに敵に喰ひ附く極めて『非紳士的』（牧師なにがしの語を借る）なる詩歌であつた。いまは既に時勢が變化した。むかしの劇詩は散文戯曲に移り、敍事詩が小說と變ずると共に、この種の『サタイア』の詩歌も亦、今日すでに多くの種類の散文のエッセイとなつて、辯難攻擊はおろか、皮肉冷罵の文學作品となりつつあることに氣附かないのであるか。

昔の『サタイア』の文學には隨分毒々しい人身攻擊が多かつた。しかし其種類の物は當時に於ても矢張り上乘の作品とは見られなかつたことは言ふまでもない。その憤が私憤ではなくして、飽くまでも義憤公憤であらねばならぬことは勿論だ。今日に於ては、單にエッセイの類のみではなく、戯曲に於てもバアナアド・ショオの作品の如き、その辛辣痛烈を極めた皮肉や嘲罵を除けば、果して何が殘るであらう。

また特に宗教家の爲すところに對してかくのごとき痛罵を試みた作品も、昔から例は甚だ多い。たとへば、最も强く豫言者の風格を具へてゐた抒情詩人シェリイが、その青春時代の燃ゆるが如き熱を

以て社會改造の理想を歌はうとして、正義自由人道のために叫んだ『クヰイン・マブ』の如き詩篇を見よ。俗悪醜劣なる此地上に生れんには、身も心も餘りに美しき人であつた此革命詩人は、强者を罵り戰爭を呪ふと共に、僧侶を難じて言ふ、

Then grave and hoary-headed hypocrites,
Without a hope, a passion, or a love,
Who through a life of luxury and lies,
Have crept by flattery to the seats of power,
Support the system whence their honours flow..........
They have three words:—well tyrants know their use,
Well pay them for the loan, with usury
Torn from a bleeding world!—God, Hell and Heaven.

——*Queen Mab* IV. ll. 203—210.

『おごそかな白髪の僞善者は、望もなく熱もなく愛もなく、奢侈と虚僞との生を通じて、諛をもて權勢の膝下に伏し、おのが名譽の源たる現制度を維持せんとす。彼等には三つの言葉がある。暴君はその言葉の使ひ方をも心得て居る。血を流す世の人々から、むしり取つた高利を共に、それを借方の支拂に使ふ。三つの言葉と

は、神と地獄と天國と。』

この數行は、さきに私が『惡魔の宗教』の階級鬪爭の條に言つたところと同じ意味のものである。世の批評家よ、爾等はシェリイをも詩人にあらずと考へるのか。さてはまた、詩は遊戲にして實際生活實行生活と相關するものにあらずと强辯せんと欲するのか。正しく詩を解し得ざるが如き宗教家をこそ、名づけて俗僧と言ひ、妖僧と名づけ、惡牧師とは呼ぶのである。

シェリイと同時代のバイロンは、人のいふ通り噴火山の爆發の如き力と熱とを以て、すべてを否定した稀世の天才だ。彼がエホバの神をさん〲に叩きつけた『ケイン』の一曲は、この種の文學の最も痛烈なものであることは云ふまでもないが、いまの宗教業者に與ふるために、私は彼の大作『チャイルド・ハロルドの巡遊』から、有名なる下の數行を引用して置かう。

Foul Superstition! howsoe'er disguised,
Idol, saint, virgin, prophet, crescent, cross,
For whatsoever symbol thou art prized,
Thou sacerdotal gain, but general loss!
Who from true worship's gold can separate thy dross?

——*Childe Harold's Pilgrimage* II. xliv.——

『醜劣なる迷信よ。偶像、聖者、處女、預言者、新月、十字、そは如何なるものの象徴として爾が渇仰せらるとも、なんぢ僧侶の腹を肥やし、世の人の損失となる迷信よ。誰か信仰のまことのこがねと、迷信といふ鐵滓(かなくそ)とを區別し得べきや。』

また詩歌ではいかぬと言ふなら、散文の文學にも宗教家に痛い例はいくらもある。わたくしはその最も著しきを例として先づ、佛蘭西革命の先驅であり、また近代思想の源流の一つと見なすべきヴルテエルを繙けと云はう。『醜類を打ち滅ぼせ』"Ecrasez l'infâme !" と叫んだ此懷疑思想家は、その痛烈なる罵倒と巧妙なる嘲笑とを宗教家に向けた時に、彼の天才は更に一段の光彩を增した。鋭きその筆鋒は固より主として當時の羅馬教會に向けられたものであつたが、彼が『思想の字引』"Dictionnaire Philosophique" や尺牘集(コレスポンダアンス)などに於て、僧侶に向つて加へた痛撃は、その諷刺小說『カンデイド』と共に、一世紀を隔ててなほ今人の胸奥に徹し得るだけの力强さを失つては居ないと思ふ。(私は決してヴルテエルの宗教觀に同意するものではない。ただ藝術的創作としてのその表現の樣式に於て、先哲の一例として之を擧げたのである。)

東京の或新聞の記事によれば、京都在住の牧師なにがしなる者、わたくしの『惡魔の宗教』の數句を引用して『非紳士的の暴言』とか言つたさうだ。いつたい文章を批評するのに非紳士的の文章とは如何なる意味ぞ。ホレスやジュヹナルの古き『サタイア』は言はず、ドライデンやポオプの作品を目

して、紳士的とか非紳士的とか言へば、それで、批評とか辯駁とかに成つてゐると思ふのか。再び問はう、紳士的の文章とは、昔の美辭麗句とやらを聯ねて、あの好んで教會に出入りする美しいお孃さんを見るが如きお上品な文字の遊戲を言ふのであるか。更に三たび問はう。牧師ならばせめて聖書の二三頁ぐらゐは讀んでゐるだらう。基督がパリサイの徒を罵るときは如何なる言葉を用ゐたかを思へ。『蛇まむしの類よ』かのパラブルを借りメタフォアを用ゐ、言語の藝術によつてその思想を力づよく表現しようとした『詩人基督』をも、爾等は『非紳士的』なりと言はうとするのか。今の職業的宗教家によつて與へらるるものが往々にして惡魔の殘飯であり、傳道の事業が祖師の意に反したる株式募集に類する事多しと私が言つたとき、それは聖書に散見せる多くの所謂『毒舌』なるものに比して、遙かにお手ぬるく遙かに上品なるものであることを知らないのか。『立正觀抄』の結語に於て『禪は天魔外道の法』なりと喝破したとき、豫言者日蓮を目して『非紳士的』なりと云ふことを得べきか。

いつたい紳士道とは如何なるものぞ。その本家本元の英吉利に於て、むかし處女王朝の文學時代にサア・フィリップ・シドニイ等のお上品ぶりに源を發し、後に清教徒の道德觀の時代を過ぎて、さきのヴイクトオリア朝に入つては大陸の人たちが所謂『英吉利の僞善』とまで成りさがつたもの。現代の思想上に於ては、さながら日本の武士道の如きものである。武士道を以て今日の詩を論じ、基督一流の『暴言』を批評せんとする牧師もまた滑稽なるかな。

しかしさうばかり言つたものでもない。或所では、私の『惡魔の宗教』を反駁するとかいふ看板を辻々に掲げて、廣告までして與れたさうだ。門前雀羅を張れる教會のために、私のあの一篇の拙文が人寄せの種に役立つたとすれば、まさに幸慶の至りである。呵々。

『讀賣』の紙上で、一評者は私の『惡魔の宗教』を評して、道行論文だと言つた。笑つてその冷評を甘受しよう。あの一篇のうちに私の言はんと欲した所は事理一貫して極めて明白である。そして主旨とするところは、かの最後の結文『舊信仰の廢墟が今すでに惡魔の殿堂と化しつつあるを見よ』以下の二行に於て述べた通りだ。しかし若しこの道行論文といふ惡罵が、私のエッセイは解決を示してゐないと言ふ意味ならば、先づ問はう、人生そのものに解決があるか。生れてから最後の死に至るまで、人間の生活そのものが既に立派な道行に過ぎぬではないか。沙翁の如きイブセンの如き曠世の天才と雖も、その作品には何等の解決を示して居ないではないか。生きたる此事實を見よ。唯さういつて沙翁もイブセンも、そつぽを向いてゐた。文藝の作品は、それが戲曲だらうがエッセイだらうが何だらうが、會社設立の趣意書や、宣傳勸誘のビラのやうに、手取り早いおちや結論や解決なぞを出すと限つたものではない。この事に關しては既に拙著『近代の戀愛觀』の最後の一章に『宣傳と創作』との別を明かにしてこれを述べた。ただエッセイが必ずや最後に於て何等かの結論に到達せざるべからずと考ふるが如き人々のためにわたくしは、最近に世を去つたメイネル女史の論集に與へられた『ア

シニアム』記者の評語を、茲に引用して置かう。

"The meditations to which we are invited may be generally inconclusive, but conclusions are not what we seek. We read rather for the deftly turned phrases and the fancies by the way——*The Athenaeum* No. 4277. (Oct. 16. 1909.)

これは即ち道行論文の極端なるものの味はひを言つたのである。

みづから顧みて淺學菲才のおのれなりとも知らずに、かの大家とやら言ふ半耄碌を氣取つて、その尊大ぶりや雅量振を粧ふが如き痴態を、私は生涯學びたくないと思ふ。如何にくだらない批評に對しても、氣が向けば私は何時でも筆を呵して此種の文を草し、之に應酬するの勞を辭する者ではない。

（附言）わたくしが此文を雜誌上に公にして後に、即ち一九一三年三月發行の The Contemporary Review (No.687) の誌上に、イングの思想を論じたる左の一篇を見た。讀者の參照に便せんため、こゝに紹介する。

The Philosophy of Dr. Inge. By Dr. J. Scott Lidgett.

文學上のリアリズム

吾々が、人間であることは誰でも疑問の起らない點なのです。そこで吾々が一番知らなければならぬものは何かといふと、昔の詩人が言つたやうに、人間の本當に學ぶべきことは、人間であるのです。吾々人間の生活が本當に解つて、本當に人間の上に尻を据ゑて居れば、吾々は完全な解放された自由な生活が出來る。人間が機械の上に坐つて居たり、妙な動物の世界に這入つて居たりするのでは、生き苦しくて仕方がない。文藝は人間性の本當の所をつかまへてその眞實に徹したいといふ努力であります。さういふ意味から言へば文藝といふものは廣義のリアリズムであると言ひ得るのです。

一體今日のやうな時代に於ては、吾々は人間といふものが一體何處に居るかといふ疑問をば抱くでせう。人間生活とは果してこんなものだらうかといふ疑惑を持ちます。電車の鈴生り、荷物か何かのやうに電車の箱で運送される時には、あまり人間らしい心地はしない。私はよく動物園に往つて柵の中に居る獅子を見ますが、あれを獅子と見るのこそ間違つて居るので、恰も今の人間が人間性を失ひ、間違つた人間の生活をして居るのと同じく、あれは猛獸の本性を失つた或獅子以外の動物に過ぎないのです。東京の動物園の獅子はさうでもありませぬが、京都の動物園には三代、四代ぐらゐ、檻とい

ふ一種の家族制を作つてあの中で繁殖して出來たライオンです。中々よく子供が育つさうです。産兒制限どころでなく非常に巧く育つといふことを園長が自慢して居ります。檻の中の彼等は、昔山野に咆哮して居た時分の本當の獅子性を有つて居りませぬが、あれでも自分では矢張り獅子だと思つてるかも知れません。そこは獅子に聽いて見なければ解りませんが……。

今日の人間は大抵は獅子よりも貧しいのです。獅子の檻には防寒設備もあつて部屋を暖めてあります。普通の人間の生活より獅子の檻の設備の方が遙かによい。吾々人間は火鉢もなくて慄へて居る有樣です。かくの如く、今日は人間をも全く檻の中に入れて、さうして本當の吾々の、人間の人間らしい靈を忘れたのであります。詰り人間性の美しさと自由を奪はれて居るのです。近頃は經濟上、或は社會學上の方面から、弱者、無産者が奴隷の狀態に居るといふことを世間で皆がやかましく申されますから、此方面のことは私から申上げませぬが……私はさういふ方面の學問をして居る人間でありませぬから、それは私が言ふよりも、皆さんがよく御存知かと思ひます。

そこで、一體人間らしい人間とは、どんなものか。それを一口に言ふ事は出來ませぬが、機械でもない、動物でもない、神樣のやうな者でもないと言ふことだけは考へられさうに思はれます。元來人間が人間を忘れてしまふと言ふ事は一寸不思議なやうですが、實はいつでもやつて居ることなのです。世界で女や子供が人間であることを知つてから、未だ百年になりませぬ。ルソオですらも女は一人前

の人間だと思つて居らなかつた。子供といふものを本當に貴い人間だと知るやうになつたのは、やつと百年以來の事であります。高慢ちきな利巧な西洋人でもさうなのです。日本では今日漸くそれが解るか解らないか位の所です。私は先刻、人間が皆動物のやうになつてしまふ事を申しましたが、食慾と性慾との二つの本能に限られて居ては、單に生存といふことであつて、本當の人間らしい生活ではないといふことになります。また吾々が機械になつてしまふことも情ない。機械は人間が使ふために作つたものである。人間は機械や道具を造るところの唯一の動物で、此點が人間の一大特色である。ところが近世では、サイエンスの力を借つて益々盛んに色々の機械を作ります。そこで遂に經濟上產業革命の問題が起ると同じく、今度は人間の方が逆に機械に使はれてしまふことになる。人間が全く機械になり切れるものならば機械でも可いのですが、機械の癖に色氣があつたり、慾が深かつたりするから仕末がわるい。そこから吾々の生活に無理が出來る。一定の目的のみに働かせる事、卽ち能率といふことのみ言ふならば、到底人間は機械に叶ひませぬ。工場主が人間よりも機械を大事にするのは、機械の方がよく仕事をするからでありませう。そこで今度は、苦しまぎれに考へて神樣の方に出向いて行つた。鎭魂歸神だとか、何だとかいろ〳〵な名前をつけて神樣に成れるやうなことを言うて聽かせる。また懺悔奉仕なぞとも言ひますが、吾々は何も懺悔なぞしなくてもいいのです。人間は永久の人間である。これも京都のことを言ふやうでありますが、何とか園といふ處の人達が、木屋町と

稱する一種の賣淫窟のやうな町の便所の掃除をして歩く。それが奉仕であるとか言つて變態性慾か何かのやうな事ばかりして居る。そんな餘計なことばつかりして居る。本當の人間の人間らしい所へはなかなか入り込めない。機械になり、神様に求め、動物に下落し、色々とあつちへ往つたり、こつちを叩いて見たり、出拔けようとして頭を打つける。ここに永久の人間の苦しみがある。

そこで人間性の眞實を掴みたい。本當の人間の人間らしい生活を把握したいといふ時に、吾々は文藝の世界に行くのです。一體人間ぐらゐ都合の惡く出來て居るものはない。神様がかういふものを造つたとすれば、神様も隨分まづい造り方をしたものですが、私は寧ろ人間が神様を造つたと考へる方が可いと思ひます。その證據には人間がなかつたら神様は無い。例へば人間と言ふものは一方には飽くまでも秩序を求める性質を有つて居るし、又一方に於ては秩序を破る性質を有つて居ります。總べての法則は破るために存在するのですが、破つては新しい法則に直して進んで行くのであります。かくのごとく、つまり人間は神といふものと、一方畜生や惡魔といふものとの中間に居るのです。吾々の腹の中には神性と惡魔性とが兩方宿つて居ります。一方に愛があれば、一方に憎しみがある。兩方のものが種々様々の衝突や矛盾をして、苦しむところに人間の永久の姿があります。永久の疑問があります。片方が往かうとすれば片方が喰ひ止める。仕方がないから機械に行つて見るが機械では矢張り具合が惡い。動物に行つて見たり、神様にならうとしても皆駄目であります。

これは日本の歴史でも、封建時代から明治、大正に移る歴史を見ても同じであるが、一體西洋の歴史を回顧して見ると、要するにこれは人間が人間であることを思出したり、忘れたりした歴史に他ならないのです。折角人間性を回復すると、やがて又失つてしまふといふ風にして人間は進んで來て居ります。一體希臘の時代は何もかも人間中心に考へた時代で、神樣が矢張り燒餅を燒いたり、仕返へしをしたり、希臘の神話ぐらゐ、人間臭い神話はない。次に羅馬人が此文明の後を繼いで、更に羅馬の文明が亡びると、今度は中世の隨分長い間の時代は、皆人間が神樣になつて、獨斷的宗教たる羅馬教の權威の前に皆が平伏して、すつかり人間らしい自由も何もかも皆取上げられ、智慧も學問も皆捨ててしまつた。人は唯神と天國とだけを考へてゐた。これぢや何うもならぬと氣が附いたのが御承知の十四、五、六世紀のルネッサンスであります。此時代をコロンブスの亞米利加發見と同じやうに『人間發見の時代』とも言ひます。即ち主として藝術方面から、人間生活を本當の人間生活らしいものに戻す回復運動をしたのです。ところがこれで宜かつたのですが、更にその後、十七、八、九世紀あたりに來ると、いろ〳〵な所に片寄つて行つて、また人間そのものを閑却する傾向が起ることになつた。即ち十七、八世紀には人間を何でも型に嵌めて了つて、文藝といふものも一種のクラシック風の型にはまつて、法則萬能の時代を作り人間性の動きの取れない時代を作つた。そこで、またこれではならないといふのでカントといふ男は、自分が飽くまで批評的の立場に立つて物を考へることを唱

へますし、此カントを喜ばしたルソオの說も、人間は元のままの自然に歸れと言つたのです。彼の言葉『自然に歸れ』とは、一方から言へば、人間に還れといふことなのです。さういふ事が言ひ出されてから段々世の中がでんぐり返つて、十九世紀の始めからゴタ〳〵して、嘗て失はれたる人間性を回復するために、種々の方面から一生懸命になつて努力して居ります。それが經濟上や、社會上の問題として現はれて居ることは諸君がよく御承知の通りであります。

しかし此人間生活回復の運動も中々最初はうまく行かない。最近百年來努力して居るわけです。十九世紀の初のロマンティシズムは人間の感情性を解放し、神祕に對する人間の憧れと言つたやうなものを復活し、一生懸命にやつて居りましたが、その間に何時か、また足が地べたを離れて了つて人は現實を離れて夢幻空想の世界にのみ生き、我々の現在の生活の姿といふものを忘れて了ふやうな事になつた。それでは困ると言つて今度はまた急に地上におろして、自然科學の影響から人間の有つて居る獸性と動物性といふものを無闇に誇張してこれが人間と思ふに至つた。それが自然主義でありました。しかしもつと面白いことは私は、この近世の人間性の回復に『惡魔の發見』といふ名前をつけたいと思ふのであります。新大陸の發見と同樣に、人間性の發見を文藝復興期がやつた。その人間の腹の中に惡魔性を發見してこれを禮讚することを知つたのは、最近百年前の事であります。此惡魔詩人の始祖と見るべき英國のバイロンが死んでから明年（一九二四）で百年になります。人間の腹の中に

ある悪魔を發見して種々な所に人間の本當の姿を發見しようと思つてそこらを捜し廻はる狀態で、はては原始生活を非常になつかしむといふやうな傾向も現はれて來た。即ち吾々が今まで文明として見て居つたものは間違つて居る、原始生活に還るのが本當だ。總べてのものが原始生活を懷かしんで、人間の魂の本當の故鄕は原始生活に在ると感ずるといふやうな傾向が著しくなりました。餘り人工的な生活をのみしては機械になつて了ふから、吾々の生活をもつと土の香に親しむものにして見たい。紐育や倫敦の如き大都市の生活は、町の中に居ると土を踏むことさへ全く出來ない。そこで色々な工夫をして、田園に懷かしんで見たり、少しでも安易の生活を得たいと切に求めるのであります。要するにかうやつて人間性の自由解放、或は人間性の眞實に徹して見たいといふ努力が、煎じつめたところつまりリアリズムであります。此リアリズムといふ考へ方は何も新しい事ではなく、開闢以來ある考へ方であります。近世の文藝はさういふ意味に於て、人間性の眞實に徹し見失つた眞の人間生活の姿を見ようとする點に於て最近百年以來の文藝をリアリズムの文藝と言つても宜いでせう。

リアリズムといふ言葉はいろ／＼に解釋されて居ります。これは解釋次第でありますが、哲學の方で言ふリアリズムはもつと異つた意味を有つて居る。リアリズムはプラトニストの學者に言はせますと、吾々の感覺の世界に人間の本當の姿は在るのではない、魂に於て、目に見えざる世界に人間の本體を捉へるのがリアリズムであると言ふのです。また英文學で使ふリアリズムといふ言葉の意味は、

事實を書くものである。何でも事實らしく書くと言ふ事なので、先程芥川さんから御話もありました英國十八世紀のデフォオといふ人が、此意味のリアリズムの元祖になつて居ります。そんな風にいろいろな意味もありますが、本當に一番廣い意味で言へば、文藝上のリアリズムとは失はれた人間の眞實性を把握し恢復したいといふ努力だ、と言つて宜いと思ひます。十九世紀以外いろ〳〵の事を皆が案じたけれども、唯物史觀等の考へ方もあれで結局は、人間に還らうといふ一つの努力に他ならないのであります。

つまり人間性はいろ〳〵なものがゴチャ〳〵に混つて居る。その中から何とも言はれない味が出る。その無限に深い味はひを味はふとする努力が文藝なのであります。經濟とか、道德とか、さう言ふ部分的でなしに全體として人間生活の眞をつかまへようといふ事であります。この永久なる人間性といふもの、一體人間の根本は今でも昔でもちつとも違つて居りませぬ。よく歐羅巴の文明は進んだといふけれども、希臘の文明より今日の歐羅巴人は人間としては一歩も進んで居らないと斷言する人もあります。或はさういふ事も言へませう。人間性といふものの根本はちつとも動いて居ないに拘はらず、それがなか〳〵捉へられないのです。詰り吾々は厚化粧をしたやうなもので、生地の肌の美しい良い所は化粧品で塗りつぶして了つたのです。これは今日の御話に關係はないが、此厚化粧は人間の生活としては間違つて居ります。だから厚化粧の法則や因襲を皆削つて素肌になることですが、そ

れは實際には出來ない。文明の生活をしてからは、もはや野蠻な原始生活には戻れない。大學まで行つたものに今さら幼稚園の頭に還れと言つても、それは出來ない事です。細く申すと面倒であるが、化粧といふものは人間性の生地の美しさを發揮するための化粧でなければならぬ。文明も化粧も、厚化粧のやうに人間性の眞と美とを滅却したものでなく、寧ろこの眞と美とを十分に發揮するためのものであらねばならないのです。

さて人間性の眞と美とは、研究したつて解剖したつて解るものではない。人間の頭や理窟では解りつこない。人間性全體として文藝の鑑賞の前にこれをば持つて來るより仕方がないのです。

私は一つの譬としておでんの話を想ひ出すのです。おでんの鍋といふものは熟々考へて見ると汚いものです。或處におでん屋がありまして……おでんの講釋をするのは可笑しいやうですが、鍋があまり不潔なのを見て警官が來て、お前の鍋は何時洗つたのかと尋ねましたところ、實は親父の後を繼ぎましたが此鍋は四十年來まだ一度も洗つた事がありません、と答へました。しかし鍋の底からねこそぎ洗つて了つては、味の素を入れたつてなか〳〵あの好い味は出ないものであります。醬油や、蛸の足や、芋のへたや、色んな物が溜つてそこに味の素や、ギタミンだけでは追付けない味はひが出來る。その中から法則を出して見る人も、經濟上の問題を出す人もありませう。蛸の足を引張り出すのも、醬油のカスを引張り出すのもあらうが、これは全體として味はゝなければならぬ。これは科學的

の分析をしても解りませぬ。芋や蛸があつて甘さうですな、けれども汚いものに違ひない。道學者先生といふものは恰度鍋を洗へといふ警官のやうなものです。鍋の中には人間の獸性とかその惡魔性とかいふ汚いものが澤山溜つて、それからその甘味が出るのです。驚くべき複雜なものです。或時おでん屋の親父が、晩に腹を減らして歸つて來ました。女房に向つて、腹が減つてたまらないから何か食ひ物を出せと申しますと、女房が言ふには、お前さんが賣つてるおでんを食べれば宜いぢやないかと言つたところが、何であんな汚いものが食へるかいと言つたさうです。成程汚いに相違ないが、それを人に食はしてゐるのです。この頃私の顏を皆さんが御覽になると、すぐに戀愛問題のことを論ぜよと申されますが、私は戀愛のことを一寸申して置きます。戀愛だつて矢張り人間性の至高の發現ですから、おでんのやうなもので、吾々の人間性が全的に活躍して居るのだから、その中をほじくつて見れば性慾だの何だの種々なものが出て來ます。要するにおでんは甘いものです。それを幾ら論じたつて始まらないから私は論ずる事は止め度い。つまり人間性といふものが一番正直にありのままに出て居る現象として、私はおでんを例に取つてもさう無理はなからうと思ひます。詰り全的に人間性の眞實に徹しようとするのがリアリズムであります。

　近頃問題になつて居る事をここに一言申添へて置きたいと思ひます。この頃ブルジョア文學といふ事がよく論ぜられる。一體ブルジョアといふ外國語の意味は、……日本では金持といふ意味に使はれ

てゐるやうだが、それは誤だと思ひます。たとひ經濟學上や、社會學上の意味から申しても、ブルジョア階級といふ事は所得の種類に依つて定るので、貧富とはおのづから別問題です。佛蘭西語に épater le bourgeois 即ち『ブルジョアをやつつける』といふ慣用の句があつて、これなぞは決して有產階級だの資本階級だのといふ意味に用ゐて居るのではありません。ブルジョアとは、英語で申せばミッドルクラスに當る。一體ブルジョアは語源から云つて『町人』のことであります。現にロダンの作品『カレイのブルジョア』の題は、市民といふほどの意味に他ならぬのです。英國で申すと、ミッドルクラスは上品な紳士といふやうな御上品振つて居るものを呼んでブルジョアといふのであります。勿論資本家階級のやうな所にはどつさりそんなのは居るには相違ありません。しかし無產階級にも此ブルジョア先生は居ります。だからさういふ意味でブルジョアといふ言葉は昔から使はれて居るのです。つまり人間性の眞實といふものを逸していやに取澄まし取繕つた、虛僞因襲で固まつたやうな連中を名付けてブルジョアと申すのです。無產者、有產階級といふやうな事とは話が違ふのです。經濟學上のみの用語例から言へばいざ知らず、普通の用例、ことに又私達文藝の方から言へば、人間性の眞實を逸して平氣な奴、それを名附けてブルジョアと申すので、人間性の眞實をつかみたいと努力して居るものが、これに對立される譯であります。勿論この分類も、經濟學上の分け方に交錯し、絡み合つては居りますが、言葉の眞義は此點にあるのです。たとへばシェイクスピヤの藝術は人間性

をば本當につかまへようとしたものであります。近頃は時々惡評を受けて居りますが、此大天才が描き出したものは、人間性――卽ち永久的な、根本的な本質的な、そして經濟上の階級などに關係のない人間性であります。シェセイクスピヤの文學はブルジョア文學か、プロレタリア文學かなどといふ分類をすべきものでなく、ただ眞に人間的なものであります。見方によつてはプロレタリアトでもあり、又見方によつてはブルジョアとでも見えませう。ところが此間或書物を見ますと、勞農露國政府の文部大臣が、態々『ハムレットを』演らして、勞農氣分に直してやつて居る。ポロオニアスにロイド・ジョオヂ一流の俗物性を當て嵌めて演出したやうであります。つまり沙翁劇には根本に人間性の活躍があるのでありますから、何うにでも演出できるのです。人間といふものは階級意識を離れて存在しないといふやうな議論も、一應は尤ものやうでありますが、これは少しく別の方面で考へれば誤は直ぐに知られます。卽ち今日我々の一番厄介な區別は階級の外に、民族の差別であります。卽ち民族意識――これを離れては文學は成立しないかのやうに昔は言つた時代もあつたのです。卽ち今から百年以前には國民文學を旺んに論じたのであるが、今ではそんな馬鹿なことは誰も申しませぬ。無暗に民族意識の旺んな時には人々がかういふ考へ方をしたのです。どこの國人でも民族意識を有つて居ることは、いかなる人でも階級を持つて居ると同樣ですが、それは全的人間性の一部分に過ぎないものです。私は時々さう思ひますが、階級意識などといふ問題はいろ〳〵に姿を變へて居りますが、人

間性の一部分として存在する事は今も昔も同じなのであります。貧者と富者の差別があれば、弱者が強者に對する反抗心もあるので、それはいつの時代にも階級といふ形に現はれて居ります。たとへば最もブルジョア臭い文學で、いま市村座で羽左衛門が演つて居ます御所の五郎藏のやうな俠客物は、徳川時代の人間も喜ぶし、今の人間もやはり喜んで見て居ります。詰り横暴を極める殿樣や、武士といふ特權階級に對する民衆的の反抗心があの劇を見て痛快を覺えるからなのであります。抑壓されて居る苦悶が形を變へて文藝の世界に出るのです。詰り階級鬪爭の問題に性的問題が絡みつき、そこに時代々々の社會的背景が七重、八重にこんがらがつて、言ふに言はれぬおでんが出來上がつてゐる譯なのです。近頃、性的生活の描寫を無暗に力を入れてやる事が流行する。佛蘭西では段々忘れようとして居るのに、今頃一生懸命にこれをやつて居るのは英吉利文壇の小説であります。それが皆大抵は性的生活と階級鬪爭とを搦み合はせてゐる。日本でもさういふのが近頃はなか〳〵多いやうです。これなども今まで閑却して置いたところの、お上品に胡魔化して見たり、自然主義が動物的に描いて見たりして居つた誤を正して、人間性の眞實に肉迫しようとするものです。文學には大昔から性的生活の描寫はありますが、それらは皆巫山戲氣分のものであつた。さりとてギクトオリア朝の英文學のやうに、紳士的のお上品振りでこれを胡魔化して居る譯には行かない。人生の本當の姿を描くためには性的生活は度外して居られないと言ふので、急に此方面に力を入れ出したのであります。其時々によ

つてその引掛かる所はいろ〳〵あります。人間性は詰り圓い球のやうなものです。どこか捉まへ所がなければ、つかまへられない。柄(ハンドル)の所を持つやうなものです。或場合には性的生活をつかまへたり、神樣の問題をつかまへたり、道德問題をつかまへたり色々するが、結局は人間性の眞實に徹しようとして永久に努力して居るのが文藝であります。その文藝作品に接し、これを味はふ事によつて、其時に人間は最も人間らしい生活をして居るのです。その他の時は動物園の檻の中に入れられて居るやうなものであります。然らば文藝作品によつて、どうしたらば此自由解放の境地に往けるかに就いては、私は既に改造社の雜誌に(『苦悶の象徵』(本全第二卷參照))一二度書きましたが、それはつまり夢の境地に入ることなのであります。つまり長谷川さんの御話の錯覺ですな。今日の御話はこれだけで御免を蒙ります。

――『女性改造』文藝講演會にて――

文藝と性慾

一

人間の本能のうちで最も力強いものは食慾と性慾とである。前者は自己の生存のために後者は種の存續のために、人間の物質生活の最も重要なる部分を占めてゐる。人間がいまだ今日の如く、因襲や法則に束縛せられずに極めて簡單で素朴な、そして赤裸々の自由生活を營んでゐた原始時代に於ては、食物掠奪の關係に於て起る戰爭と、男女間の性的關係である戀愛とが、生活現象としては最も重きをなしてゐた。例のマルクス一流の唯物史觀論者に言はせると、歴史は食物の關係に於て回轉し展開して來た。民族間の戰爭も階級間の鬪爭も歸するところはこの本能の滿足に原因したと說く。元來が人間生活の批評である文藝に於て、食慾よりも更に多くの感情的美的要素の附隨してゐる男女の性的關係が、最も重要な題目となつてゐるのは怪しむに足らない。西洋文學の源流とも言ふべき希臘の昔のホオマアの敍事詩は、トロイの戰爭と絕世の美人ヘレンの戀愛とを主題として描かれてゐるのではないか。歐洲中世のロマンスといふものの多くはまた戰爭と戀愛とを織りまぜて、それに宗教感情を加へたものに過ぎない。(序に言ふが、近頃殆ど日本語化したロマンスといふ語の用法は隨分出鱈目

な濫用で、歐洲文學でいふロマンスとは似ても似つかぬ違つた意味に用ゐられてゐる。）

原始宗教を生殖器崇拜教なりと見なし、宗教を以て人間の性慾生活の所産なりと見る學說があるが、文藝と性慾とは更にもつと密接な關係ありと見なされる。現に藝術の起源を說明する學者の所說のうちには、性的關係に基礎を置いたのがある。卽ち異性を惹きつけんがために音樂や詩歌や裝飾などの美的表現を用ゐる事が藝術の起源だ、といふ風に說く學者さへあるのだ。

ただ茲に附言して置きたいのは戀愛と性慾との關係である。戀愛の物的基礎が性慾に在る事はいふまでもないが、人間生活が進化して複雜となるに從つて、遂には性慾から出發せず性慾に基づいてゐない戀愛が、少くとも文藝上には現はれるに至つた。最後まで全く肉を離れたプラトニック・ラヴといふやうなものは存在しないにしても、その發端、その根柢を純粹の非性(ノン・セクシュアル)的の精神生活に置いてゐるやうな戀愛は、浪漫派の作品の中などには多く見られる。ちやうどこれは經濟心理の場合に、人間が最初金錢を愛するのは金錢によつて得られるべき物資を重しとしたのであつたのが、のちには其感情が他に轉移して、遂には物資を離れてただ金錢そのもののために金錢を愛する守錢奴を生じ、今の日本の經濟界に見られるやうに、物資そのものは窮乏してゐてもただ金さへ澤山あればよいと考へる謬見を生むに至つたのと同樣である。かくの如くにして戀愛のうちには遂に性慾を離れて、異性に對する尊敬、同情、惻隱などの純然たる心的現象を起點とし根本としてゐるのが、文學上の作物には往

往にして見られる。

二

近代に及んで一方には、科學的精神の影響から生まれた現實主義自然主義の精緻深酷な獸性の描寫が出來、また近代人の疲勞、頽廢性、病的性質、敏感な神經質から、性慾は文藝に現はれた人間生活の更に一層大きい重要な一現象として取扱はれるに至つた。

そこで世人は普通に性慾を描ける文學は近代のそれに限るかのやうに思ひ、ゾラやフロオベエルやモオパッサンやトルストイや或はそれ以後の作品ばかりが性慾を取扱つてゐるやうに言ふが、實はこの題目は昔の文學の方がずつと大膽に露骨に無邪氣に、さながら尋常茶飯の事をでも描くやうな氣持で書いたのであつた。西鶴の好色本や春水の人情本、或は英文學で復位期(レストレイション)時代の戯曲に描かれてゐるのは、その思想上の根柢も違へば作家の態度も全然近代文藝のとは趣を異にしてゐる事はいふまでもない。

西洋の古代文學で露骨に性慾を描いた最も名高い物は、恐らく羅馬文學の黄金時代であるオオガスタス帝時代のオギイディウス(英音オギッド)の作『戀の道』であらう。淫靡を極めた當時の宮廷貴族の性的生活を露骨に描き、今日ならば○○なしには到底公にさるべからざる文學も、それが七面倒な雜句語であり詩の句であるために、われわれは矢張り支那の西遊記でも讀む折のやうな呑氣さを感

するばかりで、近代文學の性慾描寫に對する時のやうな痛烈深酷な實感を伴つて來ない。卑猥醜劣を極めた pornographic literature は古今東西ともに多いが、オギディウスの『戀の道』の如きはその最も古くて名高い物であらう。

三

外的生活の壓迫と內的生活の苦悶とは、近代の文藝に强く深い病的色彩の暗影を投じた。嘗てはある大きな理想とか慾望とかのために動いてゐた人間が、俄然として絕望の淵に陷り憂愁悲哀の底に沈むとき、厭世とか諦めとか忍從とかいふ態度に出るためには、近代の人々の生に對する執着は餘りに强い。諦めんとして諦め得ず、逃れんとして逃れ得ざる者は、糜爛し頹廢した肉感生活に自己の苦惱を忘れようとする。革命のための努力が失敗に歸したやうな時代に、性慾生活の病的現象が特に文藝の上に最も强く現はれるのはこれがためである。露西亞のアルツィバシェフの『サニン』が一時全歐羅巴の耳目を聳動したのは、かくの如くにして平衡を失した人心の狀態に投じたからであつた。

日本なぞも思想界はいま混亂狀態にあり、また今まで勃興してゐた成金熱が俄然財界の變動に打擊を受けて沈衰した。かういふ狀態に陷つたとき、その苦悶その絕望は病的な性慾文藝の時代を出現するだらうとは、西洋の社會狀態を見た者の目からは當然豫期せらるるところである。ところが日本のは例の上調子の上辷りで、根柢となる生命の力が弱くて、生に對する執着なぞも極めて淡泊で冷淡な

のだから、とても『サニン』時代をわが日本文壇に見る事はあるまいと思ふ。テュウトン人種の執着もなく羅甸人種の熱烈もなく、況んやスラアヴ人種の徹底性をも有たないのが日本人である。そんな毒々しい濃厚な色彩の文學が出よう筈はないではないか。日本ではすべての問題がヒステリの女のもらひ泣きか、醉つぱらひの囈語のやうに易々と一時的現象として消えて行く。一時の發作がやみ醉が醒めればもう問題はなくなつて了ふので、深い苦悶や絶望といふところまではとても行かないのである。この頃の文藝の作品を見ればそれがよく示されてゐる。だから西洋の社會現象を見て甲の次には乙の時代が來るといふ事を豫期してゐると、日本では幸か不幸か、それは全くその通りには行かないのである。他の類例を言へば、財界の好景氣時代に勞働問題が非常に喧しかつた。次いで不景氣時代が來れば、財界窮乏のために勞働者の要求は容れられず、一方に失業問題などのためにこの勞働問題は益々熾に火の手を揚げるだらう、とは西洋の社會でならば當然考へられ得べき徑路である。然るに日本では財界好況時代に勞働問題が世人の視聽を驚かしたにも拘はらず、次いで起つた不景氣時代にはどこにか影を潜めて近頃はこの問題もケロリと忘れられてゐる。社會生活と文藝との關係なぞに就いても西洋と同じ考へかたをすると、日本ではすつかり見當違ひの觀察になつて了ふのは、すべて日本人の性質が上辷り上調子である不徹底性から來るのである。

四

最近の心理學說として注目されてゐる精神分析學（サイコアナリシス）は、一切の藝術品を性慾關係の所産だとして說明しようとする。學說として最初これを唱道した維納（ヰンナ）大學の精神病學教授ジグムンド・フロイドの所說は、のち瑞西（スヰス）ツュウリッヒ大學のユング教授や、米國クラアク大學のスタンリ・ホオル教授（かの青年心理の研究で日本の教育界などに廣く知られてゐる）などの研究と共に、今では學界に動かすべからさる一勢力となつた。我が國にも既に九州醫科大學の榊教授の『精神分析學』といふ書物が出來てゐたと思ふ。最近ではこの學說は心理學者の間のみでなく、文藝研究者の注目を惹き、作者の精神分析によつて作物を解剖批判しようとする傾向が學界の一方に盛んならうとしてゐる。

この一派の學者に言はせると、性慾のやうな强烈な興奮的情緒が、道德とか法律とかその他色々個人の內外からの束縛力のために自由な發現を妨げられてゐる（フロイド教授はこれを名づけて抑壓作用（フエルドレンゲング）といつた）。ところが性慾は決して春期發動期を俟つてはじめて現はれるのではなく、嬰兒が母親の乳房に吸付くときから、そこに既に性的興奮があるので、この乳兒時代からの記憶はたとひ意識界の外（ほか）にあつても、後年に於て色々の形になつて表現せられる。天才の藝術的作品は多くはこの過去の經驗の變形であると言つて、フロイド教授は先づ之をレオナルド・ダ・ギンチの研究に應用し、先づレオナルドが幼時の備忘錄にあらはれた話を基にしてゐる。卽ち彼がまだ搖籃にゐた頃に一羽の兀鷹（ヴルチュア）が飛んで來て、その尾で彼の口を開いて唇を數回突つついた。鳥の尾は男性生殖器の象徵であつて、

これは想像作用によつて後年レオナルドの有名な同性愛の變態性慾に連關してゐる。この話を基としてフロイド教授は、かの藝術界に於ける有名な謎の笑である「モナ・リサ」(卽ち「ジョコンダ」)に新解釋を試みた。この一派の心理學者はかういふ精神分析によつて沙翁を解釋し、ワグネルやトルストイを解釋しようと試みてゐる。最近にはこの試みをする學徒は甚だ多く、さきに米國の雜誌『ポオエト・ロオア』に載せられたストリンドベルヒ研究の如きをも、わたくしは尠からざる興味を以て讀んだ。ただなほ學界の定說として行はれるまでにはまだ多少の時日と研鑽を要するであらう。

わたくしは曩に文集『小泉先生そのほか』のうちに『病的性慾と文學』と題して、文藝にあらはれたサディズムやマゾッヒズムや同性愛に就いて少しく詳しく述べた事があつた。これらの研究が今ではフロイド一派の學者によつて新しき解釋を得たのである。

再び民衆の手に

一

『困つたものだ、』

この言葉を冒頭に置いて、近ごろは色々の人の口から、下のやうな苦情を聞く。

曰く、この頃の勞働者は賃銀ばかりを多く要求して、本當に働く者が少い。大工なぞでも朝の九時とか十時とかから出て來て、先づ焚火にあたる。世間話をしたり女の噂なぞをして、やつと仕事に掛かると、まもなく旣う正午だ。食後の休息をして更にまた三時頃から一休み、これでは八時間勞働がその半分の四時間勞働にも成つてゐないではないか。慢性のサボタアジュであると。これは如何にも資本家の御隱居殿が、別莊か茶屋の普請でもする時に言ひさうなお小言である。

曰く、近頃の芝居の見物は成つてゐない。行儀が惡くて、本當に藝なぞも解らないやうだ。解らないので、面白くないとすぐに『湧く』のだから困る。口笛を鳴らしたり罵つたりで蟬噪蛙鳴だ。これでは芝居も脚本も藝術もあつたものではない。昔はかうではなかつた。掛聲を入れるのにも、ちやんとかいかいとかんどころを心得て、無闇に彌次つたりしない見巧者な見物が多かつた。英佛のやうな國では、芝

居が面白くなければ見物は鳴りを靜めて靜肅にしてゐるか、或はまたいよ〳〵堪へられなければ、幕合ひを見計らつてそつと席を外すだけだ。これは如何にも芝居好きや役者や作者の口から出さうな苦情である。

曰く、この頃のお客と云ふ者も困つたもので、淸元哥澤は問題外としても、そも〳〵三味線の音〆めの解る者が少いのだから酷い。そして直ぐ藝者や女中をつかまへて亂暴な眞似をする。いやに威張りたがる。宴會のはてた後など、踊の一つも解らないやうな男に限つて、淺ましい獸慾にかがやく目附きをしながら、若い藝者なぞ捉まへて『おい、どこか附合はないか』なぞと囁く。本當に當節はお話しになりませんよ。とは如何にもお茶屋の女將なぞの口から出さうな慨嘆の言葉である。所謂通なぞと呼ばれた化政廢頽期以來の一種の藝術的訓練を經た人が少くなつた事を嘆くのであらう。

曰く、勞働問題や民衆運動がやかましくなつてから、職人の仕事がぞんざいになつた。手間のかかる、念の入つた細かい面倒な仕事はてんで受付けないんだから困る。デモクラシイと云ふ事はすべて仕事を粗略に、行りぱなしにする事とでも思つてゐるらしい。勤勉も禮儀も責任も、またよく世間で言はれる社會奉仕といふ事も頓着しないと云ふ意味だらうか。さう言つてまた『困つたものだ』が繰返される。

曰く、近頃の東京の電車などではひどい現象が見られる。婦人に對して相當の敬意を拂ふといふの

で席を譲る事が流行ると、若い女でも老婆でも當然だといふ顏をして目禮一つしない。横着な女になると、遠慮會釋もなく人を押し除けて、大きな尻を割り込ます。男がぐず〳〵してゐると、じろりと睨みつけるのすら居る。あの通りつけ上るんだから女は困る。あれもやはり弱者の横暴であらうと、かくして女權運動の前に、多くの男子の口からまた『困つたものだ』が繰返される。

曰く、近ごろの若い者にも困つたものだ。行儀も知らなければ禮儀も辨まへない。ものの言ひ振さへ知らない。賣女（ばいた）の尻を追ひ廻はす年ごろになつてから、自分の兩親の事を他人に向つて言ふのに、平氣で『お父さんが』だの『お母さんが』だのといふ。年始狀だの年賀だのの虛禮は全廢しても不都合はなからうが、同じものを言ふのにも、對者に不快の感を與へないだけの禮を心得てゐて欲しい。禮儀三千威儀八百の舊形式を打ち壞すのには何の異議をも挿まないが、誰（たれ）も彼（かれ）もが田夫野人になるのは困つたものであると、また『困つたものだ』が出る。

曰く、この頃の奴は相當に敎育のある者までが義理も知らなければ人情も顧みない。人を屁とも思はない、困つたものだ、これは自分が不義理不人情惡辣の限りを盡くして金儲をしてゐる會社の重役などが、よく新時代の新人たるべき人を評して言ふ『困つたもの』の一つである。

曰く、近頃の奴は實に無學だ。口には高慢ちきな理窟なぞを並べはするが。實は何も知らないんだ。手紙一つ書かせても當字と嘘字とで充滿してゐる。保険の險を儉と書いたり、言語道斷を同斷と

平氣で書くなぞは眞にそれこそ言語道斷である。語句の使ひ方も知らないんだから、例へば『學究』といふ侮蔑的の成語を平氣で『學問研究』の略語だぐらゐに思つて使つてゐる。西洋の學者の名なぞよく振り廻はすから、その著書の原文のただの一頁をでも譯させて見ると、誤譯なしに讀める者は殆ど居やしない。この『困つたものだ』は時々學校の教師の口なぞから洩れる。

最近民衆主義や社會主義や勞働運動や婦人問題などが世の視聽を聳てて、あらゆる方面に改造が叫ばれるやうになつて以來、以上に列擧したやうな『困つたものだ』が、各方面の人々の口に上る。それが資本家の御隱居や、女たらしの藝人や、茶屋の女將や、暴利を貪る商人や、婦人壓迫に慣れた電車乘客や、會社の重役や、老人や老先生輩の口から出たからといつて、わたくしたちは毫もそれに重きを置き耳を傾ける必要は無い。然しながら唯ここに一つ、民衆生活の向上をおもひ、眞の文化生活の建設に思を潜むるとき、彼等が口にせる『困つたものだ』には、たしかにわれわれの考察を促すだけの眞實性があり、十分の力がある。眞面目に考へて見て、果して『困つたものではないのか』と考へて見る必要があるではないか。われら無産者勞働者貧乏人が、これ等の點に於て充分に自省して見る必要があるのではないか。

二

わたくしが之を言ふのは、單に民衆文化の建設といふやうな大きい問題のためのみではない。ごく

手近な差し當つての問題として、新思想の運動のために、また無產者勞働者の主張そのものの貫徹のために、この『困つたものだ』は最も恐るべき勁敵であり障害であるからだ。かの保守頑冥の反動者や、或は封建時代の思想道德を以て强ひて現代を律し時代の進運を阻止せんとする老輩にとつて、この『困つたものだ』は最も都合よき好個の辭柄であるからだ。抑壓者や反動思想家（リアクショナリイズ）に向つて、究竟の誂へ向きの武器を供給することになるからだ。何となれば彼等が言ふところは、如何にも『困つたもの』らしき、尤もらしき半面の眞理を藏してゐる事を否定するわけに行かないからだ。武器として辭柄として、この『困つたものだ』はたしかに、無理解なる抑壓政策や資本家の壓迫なぞよりも以上に、はるかに有力なる敵の武器であらねばならぬ。

　新思想家よ、新運動者よ、無產者よ、世の弱者よ、卿等はかくの如くにして自ら知らずして敵に糧を與へ、また敵に乘ぜらるべく自分の身に隙を拵へてゐるのである。それは責任觀念、社會奉仕の思想、秩序節制、藝術的教養、勤勉性、努力の意志、權利の主張と共に、當然また卿等が負はざるべからざる義務の觀念、學問知識の獲得、新時代の新道德、すべてさういふ民衆的生活の根柢たるべきものを、閑却し無視し喪失せんとする傾向ある事によつて、恐るべき自滅を招きつつあるのではないか。自ら求めて不利の地に身を置かんとしつつあるものではないか。これこそ眞に『困つたもの』ではなからうか、賃銀の値上げ勞働時間の短縮を要求するのは勿論良からう。然しそれと同時に、或は

それらよりも先に無産者が反省し自省して見なければならぬのは、この『困つたもの』の問題である。單にマルクスの糟粕を嘗めて餘剩價値なぞにのみ氣を取られてゐるから、何とか協調といふやうな妥協と胡魔化しとに胡魔化され終らうとするのである。到るところに無用の爭鬪を繰返してゐる暇に、無産者が眞に考へて見なければならぬ事は、如何にして自己を善良にし、賢明にし、勸勉にし、偉大にし、有力ならしむべきかであらねばならぬ。それでなければ、吾々は眞に自由な幸福な生活には到達し得られないのである。

資本家、特權階級が横暴だからと言つて、暴に報ゆるに暴を以てするが如きは戰術としても眞に拙の拙なるものであらう。また訓練なき群衆の盲動なぞに何の大きい底力があらうぞ。秩序あり節度あり知識ある千人の兵は、十萬の烏合の衆よりも遥かに力强い。鳴りを靜め肅々として向上の一路を辿る行進、それが出來るものでなければ眞の勝利は得られない事を覺悟せねばならぬ。

三

道德宗敎藝術學藝、さういふものが嘗て一般民衆の手にあつた時代が過去に於てはどこの國にもあつた。たとひ專制の治下にあらうとも、また階級制度のもとにあらうとも、やはり民衆が文化の負擔者であり支持者であつた。さればこそ基督は先づガラリヤ湖畔の漁夫に向つて道を說き、王子であつた釋尊もわざ〳〵王宮を飛び出したのであつた。それが後にはまたどこの國に於ても、貴族富人の特

權階級の手に歸し、道徳宗教文藝學問はすべて彼等——所謂『上流者』の擁護によつて存立するが如き時代を現じた。勢ひ彼等特權階級にとつてのみ都合の好い道徳が說かれ禮儀が作られ、富人か貴族でなければ鑑賞し得られないやうな文學藝術が生れるに至つたのだ。正義、秩序、禮節、義務、學問、繪畫、彫刻、信仰、さういふ言葉の響きを耳にしただけで、今人は直ちに一種の貴族臭味を聯想し、髣髴として富豪資本家の面影を眼前に見る程までに、特權階級と『文化』とは深い〳〵腐れ緣を結んで了つたのであつた。彼等は『文化』を獨占して、民衆をその埒外に投り出して居たのであつた。武士には武士道といふ變挺な道徳があつたが、農工商にはそれがなかつた。下士下郎の根性が認められただけであつた。町人は四角な文字を知らないでも濟むと云ふことになつて居た。

　今日に於て、弱者が強者の手より、無產階級が有產階級の手より、勞働者が資本家の手より、正當に要求し正當に取り上げて然るべきものは、黃金でもなければ權力でもなく、夫れは『文化』そのものであらねばならぬ。多年黃金色に彩られ、一種の保護色に染め上げられて來た道徳や宗教や藝術や、それ等のすべてを今再び民衆の手に奪ひ返して、それを淨め、それを磨き、それを洗ひ上げて新道徳、新知識、新藝術、新宗教に仕立て上げねばならぬ。かくてこそ始めて民衆文化建設の大業はその緒に就くと共に、またかの『困つたものだ』の難問の如きもおのづからに解決せられるであらう。そこに民衆の努力精進があらねばならぬ。

『民衆文化』を標語とせる新生活は、貴族を引き下して下士下郞の仲間にするといふ事ではない。下士下郞がことごとく皆昔の貴族になるといふ事である。海内擧げて皆責任を重んじ、義務を行ひ、品格を貴び、知識を喜び、節度を守り、正義を行ひ、信仰に生き、文藝を鑑賞　得るといふ事を、目標とし理想として進むものが民衆運動であらねばならぬ。誰も彼もが平等に一樣に、泥龜か泥豚の喧嘩のやうな眞似をする事が民衆化でありとするならば、それは確かに人間の墮落であらう。文化ではなくして、まさに蠻化である。粗放、野卑、懶惰、亂行、無智、無學、盲動とから數へ擧げれば、新しき民衆運動の前に横たはる、これらよりも恐ろしい大敵は無いのである。例の『困つたものだ』を聞くとき、われらは慄然として恐れ、深く自ら省みねばならぬ。

民衆が悉く貴族化（精神的の意味で）する事は固より望ましい。しかしそれは一片の理想論であつて實現し得べからざる空論だと、かう或人々は言ふだらう。さういふ事を言ふのが、既に道德や禮節や藝術などの總べてを、今もなほ貴族有產者階級の特有物なるかの如くに思ひ做せる因襲的謬見から來るのである。今日世界の實例に徵して見ても、露西亞や米國の民衆には如何にも亂民らしい亂調子が見られるが、いま世界で最も進んだ文化と文明との所有者である英吉利と佛蘭西との狀態を見よ、政治、商工業、藝術等の一切の活動に於て、英佛の二國が全世界に於て最も優越した地位に立つてゐるのは、この兩國の民衆が比較的に最も多く最も高く貴族化してゐるからである。想へばボクトオリ

ア朝までの英吉利は純然たる貴族萬能の英吉利であつた。しかしその間に一方には產業革命があり、一方には教育の普及、選擧權擴張等の現象のため、政權と文化とは漸次民衆の手に移り、エドワアド七世の代から今日のジョオヂ五世の時代に移つて、遂に貴族文化の英國は化して民衆文化の英吉利となつた。その推移の勢は更に今度の世界大戰の前後に於て著しく促進せられて、今日の英吉利となつた。あれほど頑固な保守的な一面を固持してゐる英吉利に於てさへ、貴族や特權階級は、今日では政治的にも文化的にも、その所有してゐた多くのものを民衆の手に渡した。一例を云へば大學教育などでも、貴族主義萬能の牛津（オクスフォード）、劍橋（ケンブリヂ）の如きは甚だしく勢力を失墜して、マンチェスタア、リヴアプウルなどの新しく民衆化した大學が學藝の府として重きを爲すに至つた。また他の例を擧ぐれば、かの勞働運動などでも、その秩序節制などの點に於て英國のそれが如何に他の諸國に優つてゐるかは、私なぞ門外漢の指摘を待たずして明らかなるところであらう。また更に佛蘭西を見よ。あの國は大革命のためにその文化生活を少しも退歩させる事はなかつた。完全に民衆化した文明國でありながら、すべてまだ路易（ルイ）王朝時代の品格と禮節と高雅とを、民衆の手に奪ひ返したままで今日なほそれを完全に保持してゐる。大革命によつて無產階級が貴族や僧侶の手から奪ひ取つたものは、獨り政權のみではなかつたのだ。王朝時代久しく貴族階級によつて保持せられた總べての貴きもの、羅馬文明の正系を傳へて世界に誇るべき立派なものを、そのまま共和政治下の民衆がこれを承け繼いでゐるところに、

佛蘭西の大きな强味がある。

わたくしはかくの如くに論じ來つて、更に此問題を自分に最も關係の深い思想藝術の上から見て、天才と民衆との關係に言及したいと思つてゐた。時あたかも『早稲田文學』の一月號を手にして、金子筑水博士の『民衆主義と天才』の文を讀み、わたくしの言はんとしたところとほぼ同じ主旨が、精細に明晰に說かれてゐるのを見て、私はここに筆を擱くこととした。そして讀者に向つて、金子博士のかの一篇を精讀せられん事を薦めておく。

演劇と觀客

すべての藝術には、それを構成してゐる種々の要素が完全に調和を保つて統一せられる事が最大要件の一つである。ワクネルが美の宗教の殿堂、藝術の聖殿としてバイロイトに創めた樂劇（オペラ）は、建築音樂繪畫詩歌等の姉妹藝術（シスタア・アアツ）を綜合して、そこに立派な統一を作つたのであつた。

また英吉利（イギリス）の舞臺藝術家ゴオドン・クレイグの主張するところによれば、芝居では脚本から劇場建築から書割から役々の解釋から、總てが皆一人の頭腦から案出せられ、かくする事によつて全體の統一調和を得ねばならぬとまで言つてゐる。

しかし私が茲に言はうとする統一のうちには、役者や舞臺のほかに、演劇として最も大切な要素の一つである觀客をも含んでゐる。演劇は他の藝術と異なつて鑑賞者たる觀客が藝術そのものの重要な一部をなしてゐる、觀客あつてはじめて劇場全體が一つの纏つた統一ある藝術品となる。

演劇は群集心理に重きを置く藝術、でこの點に於ては詩文繪畫などと、全く趣を異にしてゐる。小說でも詩歌でも獨りで靜かに心ゆく儘に味はふに越した事はなく、繪畫彫刻の類も帝展の會場などで群集と押合ひへし合ひでは、鑑賞氣分を妨げらるる事の甚だしいのは何人も經驗するところである。

しかし芝居ばかりは、如何に獨占私有根性の烈しい成金と雖も、自分一人とか一家族とかの少數者だけで見物しようといふ者のないのを見ても、他の藝術との差は解る。

歌舞音曲に對しては、歌はざる者も舞はざる者も、皆心にて舞ひ心にて踊ると同じく、またピアノの音を聽けば幼者と雖も自然に手拍子足拍子を取るやうに、生命のリズムには感染性があつて、共感共鳴を誘ふ魅力がある。舞臺に現はれる生命の表現は、そのリズムが觀客の胸奥に響いて舞臺と見物とが完全に合一し冥合するとき、そこに藝術品としての演劇は成立する。

卽ち昔の芝居で言へば、喜怒哀樂の情とか、近代劇ならば氣分とか、また一つの思想とかが、十分に暗示せられるのだ。

これは歌舞演技の最も原始的な形である輪圈舞踏（リング・ダンス）、卽ち日本の盆踊の場合などと同樣だ。かの音頭取りは、後に進化して作者となり俳優となつたもの、またそれと拍子を合はせてただ踊つてゐる多數者は、卽ち今日の見物に相應するもので、音頭取とそれを取り圍む踊り手とがうまく調子を合はせて、渾然たる一個體となつてゐるのでなければ盆踊は成立しない。

希臘の古劇に立歸つて考へて見ても、最初イイスキラスの作の如きは別に舞臺といふもので演じたのではなかつた。觀客とか見物席とかが別に離れたものになつたのは後世の事である。

農事を休んで集つて來る多くの民衆が一緒に合唱舞踏をやつたので、演劇の本質からいへば役者と

見物とが別々になるべき筈のものではないのである。嘗て米國の或劇作家が、觀客と役者とが共同して演ずる脚本を書かうとしたのは、もし出來ればそれの方が理想的であり、また演劇本來の性質から見ても見物席が舞臺から全く離れたのは近世の事で、現に日本の能樂や或はイリザベス朝の劇場では、舞臺が見物席の眞中に押出してゐて、沙翁時代の觀客などは行儀がわるくて、熱してくると見物が舞臺の上までも上つて坐り込んだものである。また脚本から見ても沙翁劇などの旁白(アサイド)や獨白(ソリロクイ)や、或は道化(フウル)なぞは、明らかに最初から作者が見物との連絡のために設けた手段に外ならないのである。

芝居と觀客との間に右の如き緊密な共鳴共感があるとき、劇場には一種の空氣即ち華やかな或は緊張した統一ある雰圍氣が出來る。だからいくら役者が巧くても、また背景が見事であつても、觀客の方がそれとぴつたり調子の合ふ性質のものでなければ調和や統一は破られて了ふ。見物が皆幻覺の境に引き入れられてゐるとき、子供の泣聲一つでも、咳拂ひや廊下の足音だけでも、この幻覺を打ち壞すに足るのである。たとへば『藤十郎の戀』でも、宗清の離座敷の場などは、あの芝居として既に餘り出來の好い場面でなかつたのに、行燈の火を吹き消すところで見物のなかに手を拍いたものがあつたために、尙更打壞しの甚だしいものになつて了つた。ただの話ですらも、話上手に聞き上手といふものがなければ巧くは行かない。リズムの共鳴共感を打破られるからだ。

群集たる見物を要素とするところに、演劇の特に民衆藝術たる性質が現はれてゐる。觀客全體が一

つの有機的群集(オオガナイズド・クラウド)となつて共に泣き共に笑ひ共に熱して、それがまた舞臺の方の藝と、完全に呼吸が合ふやうでなければ芝居が成立し得ない。

　しかし劇場だからとて何も燕尾服やタクシドに身を堅めて、靜寂に行儀よくして居るばかりが能ではない。何事にも粗野であつた沙翁時代の演劇では、觀客は熱狂してくると舞臺の上まであがり込んで見物するといふ有樣であつた事は前にも述べたが、日本の芝居でも大向うの喝采や、巧妙な掛聲なぞは決して惡いものではない。否なあれなぞは巧妙に打ち込まれた場合には、却つて全體の緊張した氣分を作り、詩の押韻のごとく、また踊の足拍子の如き効果を生ずるので、佛蘭西の昔の劇場では土間の眞中に、わざ〳〵喝采(クラア)をするために claqueurs といふ特殊喝采者の一團を用意して置いて、巧妙な拍手や掛聲をさせた位だ。日本でも維新前には、花道に床几を出してこの褒め役をやつたものがあつたさうだ。唯それらは、すべて學生雄辯會や議會の彌次連の如くに、盲滅法に彌次つたり拍手したりするのでなく、掛聲にはちやんとかんどころを心得てゐて、そこへ『成駒屋』などと打ち込むだけの手際ある見物であらねばならぬ。

　わたくしは芝居を見るたびに、日本のは演劇そのものよりも、或はそれと同時に見物の改良が先づ急務である事を痛切に感じさせられる。

　東京の歌舞伎座あたりですら觀客は既に往年のものとよほど趣を異にしてゐる、と坪内博士などは

れる。飮食をするために或は女とふざけるために芝居に來るといふ人が、今なほ尠からず見受けられるではないか。

資本主義のために演劇が商品化コマシヤライズされて、ただ金を拂つて見に行くものとなつた時に、劇場藝術の本質はなかば失はれてゐるのだ。感激による舞臺と觀客との融合、これがなければ藝術の民衆化も社會化も望み得べからざるものとなる。

西洋の『蛇性の婬』

はるかなる岩のはざまにひとり居て、人目おもはで物おもはばや。(新古今、戀)

これは西行法師の歌である。

英吉利の國が淸敎徒の騷ぎで鼎のわくが如くになつてゐた時、騷亂の巷をよそにして遠くデヴンシアの田舍に法を說いてゐた坊さんがあつた。かれは八十二歲の高齡で世を去るまで、閑寂の境に風月を友として田園自然の淸興を歌つてゐた法師であつた。さながら日本の勅選集時代の歌人を想はせるやうな詩風で、敬虔な心と哀切の情は更にそれにもまして深きものがあつた。この法師の名は、ロバアト・ヘリック Robert Herrick (1591—1674) といひ、王黨の詩人であつた。世智辛い今の世には、また却つてから云ふ閑雅な歌を愛誦する人も英吉利には多いと見えて、この法師の歌集は、近頃でも色々な新版が出來る。はるかに都を離れた彼の舊居のあとを見るために、今もわざ〳〵杖を曳く旅の人が尠くないと聞く。宗門の信心を歌つた方の集はさまで深く異敎徒の私の心を惹かないが、『ヘスペリディイズ』の一まきには、和歌に極めて近い詩境が歌はれてゐるためか、年ごろ自分の愛誦する幾篇かの歌は此方の集にある。そのなかに『閑居のねがひ』と題して、

Give me a cell
To dwell,
Where no foot hath
A path:
There will I spend,
And end,
My wearied years
In tears.

とある一首が、あまりによくかの西行の歌と似てゐるので、さまですぐれた作でもないのに、いつまでも私の記憶を去らない。

わたくしは思はず餘計なお喋舌りをしたが、東西の暗合といふ事で人と近ごろ此話をした事があつたので、つい筆に上せたまでである。元來こんな抒情詩の場合に、東西符節を合するやうな暗合の例は少しも珍らしくないので、この二つなども天才の孤獨癖を歌つたのだといへばそれまでである。またこれ程までに一致したのでなければ、その心がけて讀んで居ればいくらも例は出てくる。ところが敍事詩——もつと廣く言つて物語の系統に屬する文學の場合では、その話の一致は、單に暗合とのみ

は思はれない深い意義のあらうと考へられるのがある。それも普通の神話の類ならば、比較神話學の方から見てすぐに解る事でもあり、ラングやハアトランド以來、學者の研究もよほど進んでゐるが、ただ普通の物語文學としての一致には、その材料の出所に就いてなほ學者の摯實な研究を促すに足るだけのものがある。わたくしが先年『お伽草子』の『鉢かつぎ』と『シンデレラ』との比較（拙著『小泉先生そのほか』（本全集第四卷）參照）をしたのは、むしろ說話學の一例だから平凡な、言ふに足らないものであるが、往年坪內逍遙博士が百合若傳說とオディセイとの類似を指摘せられたのは、今もなほ私は深い興味を感じて、學者としてあの問題提供以上の深い研究の出來るのを待つてゐる。よく獨逸の學徒が浮身をやつすあの溯源研究(クヱーレン・ストウディエン)をやつて、的確にその出所出典を印度や支那の文獻のうちに指摘する事が出來たらば、とも思ふのである。

雜誌『表現』の創刊號で、上田秋成の『雨月物語』中の『蛇性の婬』の話を讀んでのち、更に斯學の權威である某先輩に訊いて、あの話の出所が別に支那の書物にある事を敎へられた。ところが私は年來あの上田秋成の物語が、英文學のうちでキイツの傑作の一つに數ふべき『レイミア』"Lamia"に酷似してゐるのを不思議に思つてゐた。レイミア（蛇女）といふ名前の示すとほり、またキイツみづから言ふ如く、出所は明らかに希臘にあるのだから、或は此話は印度起源の物語で、それから東西に分れて傳はつたのではないかとも想像し得られる。殊に日本では淸姬の話でも、蛇と女との關係が

『レイミア』をひどく東洋的色彩のあるもののやうに思はせるからである。

キイツの『レイミア』が出たのは千八百二十年、今から百年前だ。全篇二部に分たれた七百行ばかりの敍事詩である。かれの他の作品と同じく材料を希臘に取つて、それを當時の浪漫派の手法で織り上げた美しいものである。今ここでは藝術品として品隲するのが目的ではなく『雨月物語』卷の四との比較であるから、唯その荒筋だけを語らう。

レイミアは、五彩燦爛たる美しい蛇であつた。そして物を言ふ時には全く女人と異なるところはなかつた。もとは一代の麗人と仰がれてゐたのが神罰をうけて蛇身となり、そのために苦しみ悶へてゐる。クリイトの島の森かげに寂しい孤獨の身の上を嘆きながら、わびしい生活を送つてゐた。

レイミアの魂だけは心の儘に何處へでも飛んで行く事が出來た。或日、海を越えてコリンスの方へ行つて見ると、そこはお祭の競技で賑やかであつた。その競技に最後に優勝を得た美男リシアスの雄雄しい若姿を、この時レイミアは見そめたのであつた。

あしたゆふべに此美男をおもひ焦がれてゐるうち、夏も過ぎ秋はまた冬となつた。レイミアも、蛇身の儘ではいつまで經つても戀は遂げられない。或時、森の女神が多くの男性から追ひ掛けられて苦しんでゐるのを見て、身を隱す術を授けてやつた。ところがその女神を追ひ掛けてゐた中の一人が、あの韋駄天のやうな早足のハアミイズであつた。

そこでレイミアは一計を案じて成功した。卽ちニンフの所在をハアミイズに敎へてやる代りに、自分をもとの美しい女人の姿に戻して貰つた。五彩まばゆきばかりであつた斑紋も皆消えて了つて、蛇身が無くなると共にレイミアは世にも稀なる美女となつた。

話變つて、リシアスは文武兩道にすぐれた美男であつたが、いかに神々の恩寵を得てゐても心は滿足しなかつた。或時、ふと山の麓の松かげに一人の處女を見てはじめて戀を知つた。その女の前に跪いておもひのたけを語つた。女の方でもまた年ごろ積る戀しさを語つたのであるが、その處女は卽ちレイミアであつた。

日の傾くころに、二人は相携へて程遠きコリンスの町に歸つた。リシアスも街の通を行くのに人目を避けて行つたが、途中でふと哲人の衣を着た禿頭白髯の老翁に出くはした。老翁の鋭い眼ににらまれて、レイミアは愕然として色を失つた。どうしたのかとリシアスが訊く。

美しいレイミアは言ふ『疲れたのです。しかしあの翁は誰なのです。あの姿を私は想ひ出せないの。リシアスよ、なぜあなたは老翁の目を避けたのですか。』男は答へた、

『あれこそは賢者アポロオニアス。私の導師であり、

師匠である。しかし今宵ばかりは、あの賢者も、
私の樂しい夢路に通ふ愚人の羹に過ぎない。』
——第一部、三七一—三七七。

リシアスはそれから、帯て知らない美しい家に導かれた。二人はその家で幾月かの樂しい日を夢のやうにして送つた。或夏の夕、薔薇のかをりに滿ちた庭で、そしてナイティンゲイルの歌がさながら二人の戀のささやきを反響させる頃、ふと街を通る大勢の人聲を聞いた。樂しい同棲をしてからは今まで世間をよそに暮らしてゐたリシアスが、急に思立つて自分の美しい新妻を皆の人に誇つて見せたいと考へた。レイミアは固より強く之に反對したが、遂に饗宴を設けて人々を招く事になつた。但しあの老翁アポロオニアスだけは招待しないといふことになつて居た。

いよ〳〵饗宴の其日には、リシアスの親類や知友が招かれて大勢が集まつた。レイミアもその魔術を盡くして美酒佳肴をそなへ、花かざりなどに、まばゆきばかりの意匠を凝らしたのであつた。招かれざる老翁アポロオニアスも來た。リシアスも仕方なしに歡迎はしたが、その夜、美の女神のやうに美しいレイミアにはそれが何よりの苦痛であつた。客の誰も彼も口を揃へて女王のやうなレイミアを讃美した。

歡聲堂に滿ちて宴酣なる時、冷然として哲人アポロオニアスはレイミアを見つめた。色蒼ざめたレ

イミアのおののく手を執つて抱きつつリシアスは惑うたが、美女の息はやがて絶えてしまつた。

『蛇だ』と哲人が言つた。言つたが早いか、恐ろしい叫びと共に女は消え失せた。

——第二部、三〇六—三〇七

このきはめて殺風景な梗概で私が傳へようとした物語の筋は、キイツが、十七世紀の最も有名な本の一つであるバアトンの『鬱憂の解剖』(Robert Burton's *Anatomy of Melancholie*, part III; Sect. 2, Numb. 1, Subs. 1) から取つたのであつた。年わかきキイツは學殖の無かつた人だから、その好んで詩材とした希臘は、皆手近かな書物などから資料を得たに過ぎない。バアトンのこの有名な本は文藝復興期の餘澤によつて全卷を殆ど希臘羅馬の古典の引用で埋めたやうな書物である。獨りキイツばかりではない、此本を利用した作家や批評家は昔から幾百人あるか知れない位である。

さらばまたバアトンは此物語を何處から得たかといへば、それは希臘のフィロストラタス(紀元三世紀)の著『アポロオニウス傳』"De Vita Apollonii" の第四卷からであつた。だからこのアポロオニアスは Apollonius Tyanaeus (4 B. C.—*circa.* 97) の事であるが、彼は色々の魔法や奇蹟を行つた事が傳へられて居り、また印度哲學の影響ありといふピタゴラス派の哲人である。殊にアポロオニアスが波斯から印度國境までも旅行したといふ事がわかつてゐるために、私は何だか印度古代の文献

に物語の出所があるのではないかとも考へてゐる。一方それが西方の希臘に傳はつて、遙かに後のキイツの天才によつて藝術化せられ、東方に傳へられては更に支那を經て、日本の上田秋成の筆に描かれたと見る事も出來ようと思ふ。

なほ參考として見る可きは、希伯來の Lilith（夜の魔）が羅甸語にはレイミアの字を當ててある。Lamiae といふ複數形のは、やはり泉鏡花の『高野聖』に見るやうな妖女（キツテ）である。また普通に希臘神話にあるレイミアはリビアの女王で、子供を食ふ鬼女になつてゐる。なほ獨逸文學の方では、ゲエテの『コリントの花嫁』"Die Braut von Corinth" も同一の物語ださうだが、それは私が讀んで居ないから何ともいへない。

キイツの『レイミア』は更に佛蘭西の浪漫派の作家を動かし、殊にテオフィル・ゴオティエの作『死せる戀人』（"La Morte Amoreuse"—ヘルン氏の美しい筆で英譯されたのは、題が "Clarimonde" となつてゐて、ゴオティエの短篇集のなかに收められてゐる）は、蛇と vampire とのちがひだけで、殆ど趣向を一にしてゐる。殊に面白いのは、キイツもゴオティエも共に化性の美女の戀に深い同情の筆を用ゐてゐることである。怪女を惡まずして寧ろ悽艷ともいふべき不思議の美を感ぜしめるところは、わが秋成の作といたく趣を異にした感がある。

强ひられたる文明

自己のなかに充實してゐる自分の力で動いて行く事は、自然であるが故に苦しみがない。殊にその力が深い底力である場合は、その動き方はたとひのそのそした遲々たる鈍重なものであつても、それには確かさもあれば强味もある。そして少しも危かしさや無理がない。たしか華嚴經の句だとか聞くが『獅子の歩み』といふやうに速度は鈍くても、その足がしかと踏みしめた跡には草も生えないとさへ言はれる。極めて保守的な外觀を具へて居ながら、而かも一面また極めて急進的な文明を建設してゐるものは今日のアングロ・サクソン人種だ、彼等は極めて鈍重なる保守性を有しながら、自分の底力でどしどし行つてゆく。外部から何を持つて來ても驚かない。ちやうど胃袋の丈夫なものがすべての物を消化し盡くすやうに、外國の勢力に對しても外來の思想に對してもびくともしない。うまくそれをこないで行つて、今日では世界の大勢を左右する最も優勢な民族となつたものは、英米二國の根本をなすアングロ・サクソン人である。たとへば露國の過激派の思想の如き、英國があれを今後如何に消化して行くかは、世界文化の變遷に留意するものの等しく注目するところである。かつて流血の慘を演ずるの愚をなさずして、彼等が佛蘭西大革命の影響を受入れたやうに。

これとはまた正反對に、いつも外來の勢力や思想に動かされ迫られて、さながら後れざらん事をこれ恐るる者の如く、自らに底力がないために外から强ひられ、世界の大勢や外國文化の發達に促されて、それに追付いて行くだけにすら骨の折れるやうな民族生活をしてゐる事は、非常に不自然であり苦しい事である。さういふ民族の文明には無理があり矛盾があつて、常に不安が伴ふ。たとへそれが急速の進歩をして居るかの如くに見えても、實際の內幕は火の車を廻はして、喘いでゐる有樣だ。日本の現代文明は、いかにも殘念だが、かういふ外から强ひられた文明といふ性質を免れ得ないやうに思はれる。最初から浦賀灣頭に出現した黑船といふ外來勢力に迫られて、新文明を建設するの已むを得ざる狀態に投げ込まれて以來、半世紀を經て今日なほ、外から强迫せられて無理やりに動かされてゐる氣味がある。

まづ具體的な卑近な例で言ふと、自動車といふ物を無理に外國から持つて來る。持つて來るから使つては見るが、日本の道路はまだ〳〵自動車を走らすやうに出來てはゐない。東京市街なぞで自動車に乘る事は、西洋の坦々たるドライヴを走らするのと違つて甚だしく不愉快なものである。乘つてゐると體が飛び上つたり震動したりするところは、タンクもかくやと思ふばかりの苦しさである。車輪のタイアの損むことは勿論、道路そのものがまた此自動車によつて益々甚だしく損傷されて、文明國にあるまじき惡道路となるのである。仕方がないから今大慌てに慌てて道路改良を叫び廻はつて騷い

である。

外國から好いものを押賣して來る。世界の大勢だから仕方がない。それを國に入れて用ゐない譯には行かない。しかしその要求に應ずるだけの資格や力は決して內に備はつてゐない。たとへば電話といふ便利なものが外國から來たから、それを使はうとしても、十分に之を架設して、米國に於けるやうに何人の家ででも自由に之を用ゐると云ふ譯には行かない。行かないから電話が株券のやうに賣買されて驚くべき相場が出來るといふ、他の文明國に於て全然例のない珍奇な現象を生ずる。また外國風の新しい教育制度を輸入したのは好い。しかし日本では、學校教育を受けるためには入學試驗といふ非常な難關を通過しなければならぬほどに、學校數が不足してゐる。要求を滿たすだけの電話を架設し得ないと同じやうに、學校そのものが出來てゐないのである。だから慌てふためいて教育機關擴張、教員養成と言つて急に騷ぎ立てる。

ところがかういふ現象が、精神生活や道德生活の問題となれば更に一層甚だしい。たとへば汽車や電車を外國から輸入したのはよいが、日本人の腦中には汽車道德もなければ電車道德もない。東京などで電車に乘ることは實際命がけなのである。汽車乘客の行儀がわるいために押合ひへし合ひ喧々囂囂、踏まれなくとも濟む足を踏まれたり、早く乘れるものが乘れなかつたりする。そればかりでなく『太股を出すな』なぞといふ掲示を車內に必要とする程までに亂暴な乘客が、果して他の文明國にあ

るだらうか。日本人はまだ汽車や電車に乘るだけの資格を備へてゐないのを、無理やりに汽車電車を使はうとするから、あの不愉快、あの危險を忍ばねばならぬことになる。

また例へば立憲政治といふものが世界の大勢に動かされて出來たが、日本人の頭腦にはそれを運用するだけの力がない。そこで政治界は、今さら私のやうな村夫子が言ふまでもない程の有難からぬ狀態にあつて、國民全體はそのためにどれだけ不幸な生活をしてゐるか知れない。立憲國民たるべき力もなく資格もない者が立憲政治を行つてゐる事は、道路やら泥やら川やら分らぬ通路の上を自動車を走らして居るより尙更に苦しい事である。思想の發達は道路の改良修繕よりも遙かに骨が折れるからである。

外から無理やりに世界の進運に追隨すべく强ひられたる文明だから、多くの時代錯誤や矛盾が、當然の結果として生活現象のあらゆる方面に現はれる。要求はひし〱と迫つて來ても、之に應ずるだけの力がない。ちやうど譬へて言ふと、落第すべき生徒を敎員會議のお蔭で無理に及第させた場合と同じやうに、當人に力が不足してゐるのだから、その上級の學科程度に追付くだけでも非常な苦痛を感ずるのである。自分の力でどし〱進級して行く者とは非常な差を生ずるのは怪しむに足らない。

制度とか法律とか機械器具の類は唯それだけを輸入して世界の大勢に順應して行くだけに改める事は必ずしも難事でない。難事でなければこそ日本は、ここまで苦しみながらも喘ぎながらも進んで來

たのであるが、根本の内生活思想生活の問題になると、そら自動車、そら電話、そら汽車といふ風にお手輕に變轉させて行くわけには行かない。今日なほ天保錢時代の物の考へ方をしてゐながら、それで今の產業組織立憲政治の世に適應させようとするのだから、吾々の生活は非常に苦しく不愉快ならざらんとするも得ないわけではないか。

わたくしは經濟界の事を知らない。しかし日露戰爭以後、日本の實業の前途は隨分悲觀されてゐたやうだ。また國債で首が廻はらぬほどに惱まされ、或人々は、日本は遂に破產する外はないなぞと心細い事を說き廻はつてゐた。ところが外からの力でいつも動かされ引きずられてゐる國は、仕合せな事に、日本自らの力では何もしないでも、歐羅巴の方であの大戰爭といふ馬鹿々々しい事を始めて吳れたばかりに、おかげで此苦境を脫し得たのみか、少しばかりは金錢さへ儲けたのであつた。產業界も甚だしく景氣付いてゐた。日本に多くの成金の出來たのは日本自らの力によるにあらずして、外から來た世界の大勢が都合よくこれを爲して吳れたのに過ぎなかつた。謂はば天佑だ。戰時中の米國の實業家が活躍雄飛して居たやうに、自分の力で能動的にやつたのではなかつた。戰爭中の反動が來ればば、忽ち昨今噂に聞くやうな財界の慘狀を現出する。何も今さら驚く事でもなければ怪しむ事でもない、外部からばかり動かされてゐる者はいつもこれだ。外から迫られ動かされ引きずられてゐる者の遭遇する當然の運命ではないか。

自らは、世界の五大强國の一つだなぞと祭り上げられたのを好い事にして威張つてはゐても、實は無理やりに及第させられた生徒と同じやうに、他に追付いて行くだけにさへ骨が折れるのだ。民力を休養して自己を充實させてゐるだけの餘裕さへ與へられない慌ただしさである。

日本人が眞に自分の力で動いて行く事の出來る日は、果して何時だらうか。世界の進運に引きづられないばかりか、自らその先登に立つて進んで行ける時が果して何れの日に來るだらうか。すべての事を根本から考へ直して見なければ駄目だ。根柢のないお國自慢をしてゐないで、また固陋頑冥な偏見なぞに囚はれないで。

（大正九年六月七日）

有島さんの最後

淫雨連日、床上に病軀をごろ〳〵させて、かうしてなほ生きてゐる私も可なりに苦しい。

有島さんが自殺をしたといふ。新聞雜誌社の人たちが電話をかけて來たり、來訪されたりして、之に關する談話をでもと求められるが、病中だから皆お斷りする。昨年以來の腸の出血に、此頃は神經痛から齒痛までも加勢して、實は私も首を縊りたい位に苦しいのですと返事をする。

前月までは、それでもひた押し無理押しの戰闘氣分で、日々の業務は續けることを得た。じつかと講壇のテイブルの兩端にしがみ附き、痛む腰を無理に前かがみに突張つて押し立てながらも講釋もして居たが、學校が休みになつたらどつかと寢附いてしまつた。蒼ざめた衰弱した顏付きをして、讀み書きもおほかた病床でするおのれの姿を憐れむばかりだ。

醫者の言ふところを守り何よりも好きな煙草をすら禁めて、養生して見たつて治りはしない。こちらが用心してゐると病氣の奴め、よい氣になつて攻め寄せるな、と今度は憤慨の餘りに抵抗氣分で、ウイスキイだの汁粉だの菓子だの色々の物を入れて驚かしてやると、やはり惡い。どちらに廻はつたつて苦しめられるのだ。それが人生である。それが人間生活の永久の姿だ。戀人と相抱いて美しい

重複自殺（ダブル・スイサイド）――わたくしは、かの何となく野卑な響のする『情死』といふ言葉が嫌ひだから、用ゐない、――でもしない限り、苦しみつつ喘ぎつつ人生といふ嶮難の一路を行くのが當り前なのだ。かくてもなほ私は人生の肯定者でありたいと思ふ。生きてゐるその瞬時々々を出來るだけ深い意義あらしめたい、充實せしめたいと努力するのが本當だと思ふ。

有島さんは、生きる方の途をとられた方が本當ではなかつたらうか。じつと天井を見つめながら、私は獨りそんな事まで考へて見た。

しかしかういふ問題には、客觀の批判なぞが決して認容せらる可きではない。平たく言へば、其時の共人の心持になつて見なければ解るものではない。天上天下その人ただ一人のみが批判し判斷し得るのである。その批判と判斷とが最高至上のものだ。その人みづからが自らに結審を與へてゐるのだ。解り切つた話だが、それでいいのだ。

わきのものが揣摩憶測などで批評がましい事を言つて、之を冒瀆するには餘りに嚴粛なるべき人生の事實だ。

吾等は唯だまつて考へなければならない。

○

De mortuis nil nisi bonum. それは昔から西人の言ふ事だが、日本だつて同じだ。故人に對して

は言をつつしむのが禮だ。禮といふは例のブルジョア氣分とやらの因襲形式からいふのではない。死屍に鞭うつ如きはまことに至情に於て忍びないからだ。しかし有島さんのやうに人としても藝術家としてもすぐれた天分を有つて居られた人に就いては、何人と雖も恐らくは良い事のほか語るを欲しないであらうと思ふ。

ところが新聞紙の傳ふるところが若し眞なりとすれば、わたくしは玆に一教育家なるものの、許す可からざる暴言惡罵を聞いた。某女子高等師範生徒監某女史とかの談話として『かやうに動物性を端的に我儘に發揮されては云々』といふ批評の語を讀んだ。

此種の批評の背後に潛める思想が、如何に甚だしく時代の進運を阻害しつつあるかを今更わたくしは咎めるのではない。ただ死者となつた或個人を名ざして、その臨終の如何に拘はらず、之を動物呼ばはりするが如き非禮の女教師をして、一日といへどもその職にあらしめてはならないといふのである。殊にその明らかに名ざされたる個人が、とにもかくにも思想家として藝術家として一世に重きをなした人であつた場合に於てだ。殊に某女子高等師範學校は、嘗て有島さんを招請してその講演を聽いた事さへあつた。賴む時にはお辭儀をして講演を賴みながら、臨終の樣が異常であつたからとて、之を動物呼ばはりするが如き非禮の人物を、苟も將來自ら女子教育の任に當らんとせる女子高師の生徒諸君は、一日と雖も師として仰いで居てはならない、斷じて斯くの如き教師の教を聽いてはならな

い。また校長たり當局たる者が、かくの如き婦人をしてその職に在らしむるが如きは、曠職の譏を免れないであらう。

わたくしは某といふ女教師が如何なる人であるかを全く知らない。唯私が見聞する所によると、近頃急激に增加しつつある女子敎育機關の內容――露骨に言へば、その生徒監とか舍監とか敎師とか――殊に老婦人敎師なぞの間に、往々にして驚くばかり頑冥愚昧なる者が職にある事を見てゐるが故に、敢へて最近の此一例を擧げて警告を與へる。

○

『人妻と道ならぬ戀をして情死した。』

それに違ひなからう。しかし話はそんなに簡單ではないのである。人生そのものが簡單でないが如く。

『書いた。戀した。生きた。享年五十何歲、千八百四十何年何月何日死』。これは文豪スタンダアルの墓碑銘だ。

書いた。戀した。生きた。有島さんでも誰でも、人生はただこれぐらゐの簡單な話であらう。もつと約めて言へば『生れて、死んだ、』ただそれだけだ。ところが話はさう簡單ではないのである。簡單だと思つてゐる者は、沒分曉な女子敎育者位のものだらう。

○

評者の或者は言ふ、愛は死と一致すと。また言ふ、戀愛至上說は、その極致に於いて『死』に到るの他はないではないかと。私は、斷じて然らずと言ふ。

愛は強くまた深く生きる事である。生の絕滅である死とは決して一致しない。全我を燃燒して白熱の高度に輝く『戀愛』が死と一致なぞしてたまるものか。

然らば何が故に情死があり、或は失戀のための死があるか。

生きる事は戰だ。また生きんがためにこそ吾等は戰つてゐる。その戰の休みなき連續が人生だ。戀愛は卽ち烈しく血みどろになつて戰ふ事ではないか。この戰場に於いて『運命』といふ鐵砲玉に當つた者が不幸にして屢戰死をするのである。强烈なる生活慾に燃ゆる勇猛の戰死なればこそ、戰場に於て從容自若として戰死し得ると同じく、白熱の『戀愛』あつてこそ、人はしば〳〵歡喜を以て『死』をさへも迎へ得るのだ。

笑つて死に就く。それは『愛』が死を征服してゐるからだ。生の勝利だ、愛の勝利だ。

戰は死と一致するものではない。死するがためにのみ戰場に赴く馬鹿は居ないではないか。生きんがため——勝つては強く生きんがための戰だ。生きんがために戰つて而も戰死するのは、『運命』の爲すわざである。

戰場に出る事は、その極致に於て決して戰死する事ではないと同じく、戀愛は決して死と一致するものではない。
最も強く生きんとする者が、しば〱自ら好んで死に就く。『運命』の鐵砲玉は、動もすればかくまでも矛盾したる惡戯を敢へてする。それは戰死に於て、情死に於て、また失戀に於て。
生の最も強き肯定、はち切れるやうな充實――それが戀愛だ。繰返し言ふ、それは『死』と正反對のものであらねばならぬ。『安全第一』の人は、だから、廉價な紙屑道德で身を包むか、或は『實利』とか『常識』とかいふ滋養物でも喰つて、戀愛なぞといふ血みどろの戰場には近寄らないがいい。生活の戰士として先づ微溫であれ、不徹底であれ、懶惰であれよ。そはさながら卑怯もの臆病ものが、戰場に出でず戰線に立たざるが如くなるべし、とでも言はうか。

○

著作を通してのほか、私交の上で私は有島さんをさう深くは識らない。毎年春か秋には必ず一二週間は同志社大學での講義のために京都へ來られたが、人と交際する餘暇と興味との乏しい私は、ただ時々會つただけであつた。東京ではよく色々の集會や講演會などで一緒になつて、同席して食事をする事も屢あつたが、直接には、寬厚にして品格ある一紳士としての外の有島さんを多く私は知らない。こないだ五月十三日慶應大學で改造社主催の文藝講演會の後、帝國ホテルで他の諸君と共に晩餐

をしたのち、色々の雜談に時を過したのが最後であつた。ホテルを出てから、有島さんと菊池君と私とが三人でぶら〳〵日比谷停留場まで來て、その邊で別れた事を想ひ起す。それからのち僅々三週間餘にして、あの悲劇の大團圓は來たのであつた。

○

よほど以前、さうだ、もう十幾年か以前に、有島さんが札幌農科大學の豫科敎授をして居られた頃、私の編纂した"English Essays"を敎科書に用ゐられる共用件で、一度手紙を往復したことがあつた。その後しばらくして『白樺』の誌上に、あの大作『或女のグリンプス』が連載せられたのを見た。有島さんに就いての私の一番古い記憶はこれだ。あの連載小說が今の『或女』のもとであつたと思ふ。

美貌の女、又その蠱惑的な魅力。秋成の『蛇性の婬』か、或はゴオティエの『クラリモンド』を想はせるやうな、好んで蛇の形の指輪をはめて居たとかいふ蛇夫人（マダム・スネイク）、妖艶さながら泉鏡花氏作中の女性を近代化したやうな三十女。それを有島さんがかの名作『或女』のやうに描いたらば、どうであつたらうかとも考へて見る。心血をそそいで、それをペンの藝術創作とすることの代りに、有島さんは遂にそれを自分の血と肉とでかいて、みづからそれを人生の舞臺の上に公演する生命の藝術として、あの最後の悲劇をやつたのであつた。悲壯劇だ。

かりに私が、文藝の研究者として批評的に有島さんといふ作家を論ずるとしたならば、先づその晩期の生活を次のやうに考へるかと思ふ。

〇

最初は有産階級の貴公子。既成宗教の基督教信仰が內生活の中心をなしてゐた青年壯年時代。それがやがては崩壞する時が來た。

外的にはこの第一の生活革命は、先づ學校敎師の職を棄て、札幌を去つて東京に移り、自由な著作家の生涯に入つた時であつた。その以前に最愛の令夫人をも失はれた。

次に私有財產制の非なるを痛感して、みづから英斷を以てこれを放棄し、革命思想家として何よりも見事な先驅者らしい範を自ら天下に示された。有島さん自らの生活は、此經濟的自己革命によつて更に新境を拓かれた。

かうしてぐい〳〵と力强くまた勇猛に、自分の『生命の藝術』を完成して行かれた途上に當つて、今まで抑壓(リプレス)され或は全く閑却されてゐた他の生活側面が、今度は不知不識の間に擡頭し來つて正當なる顧慮、努力を此方面に要求した。それは卽ち性的生活に於てであつた。有島さん自らも、最初はこの方面の自己革命の要求に對しては殆ど無意識であつたらしい。知人の談話なりとして新聞紙上に傳へられるもののうちに、『このごろ一婦人記者が、その美貌を以て人を誘惑しようとする者がある。滑

積ではないか』と或人に、ついさきごろ話されて居たさうだ。有島さん自らその聰明慧敏を以てして、なほ自己の胸奥に迫りつつある絶大の革命要求に氣づかれなかつたのだ。これを精神分析(サイコアナリシス)の論法で言へば、やはり libido の無意識心理の作用であつたらうか。

さてその矢先へ現はれ出た一人の異性は、恐らくは平凡な、ごく普通な表現力を有する近代的女性に過ぎなかつたであらう。當り前ならば有島さんの全生活を左右し、これを破壞全滅に向つて導くほどの偉力を有するやうな女ではなかつたのであらう。ところが有島さんが、さきの第一革命より後、即ち令夫人の長逝の頃から以後、あくまでも道德性の嚴正純淨を固持される人の常として、久しく抑壓せられて來た『リビドオ』は、思ひがけなく今面前に現はれ出でた此一女性を、すつかり詩化し藝術化し夢幻化してこれを見るに至つた。平凡な三十女の一婦人記者は忽ちここに變じて、妖艶なる超自然的魅力を有する吸血鬼(ヴンパイア)の如き蠱惑力を以て有島さんに肉迫したのであつた。それは實は女の力でも何でもなかつたのだ。有島さん自身の魂の中にあつて、長く抑壓されて居た『リビドオ』の爆發力が然らしめたのであつた。ちやうど柔道の勝負のやうに、實は自分の力で自分が投げ出されたのである。敵の腕力は單にこれに機(はずみ)を與へたものに過ぎなかつたのだ。

有島さんが多年禪僧のやうな、性的には枯淡な生活を送つてゐられた事が、今度の悲劇の原因であつたらうと思ふ。無意識の底から迫る、抑壓された性的自我衝動の急激な爆發力が加勢をしなかつた

らば、たとひ戀に陷つても死には至らなかつたらうと思ふ。飽くまで生きる方の戰鬪力が有島さんに有つたであらうと思ふ。更にもつと力があつたならば、あの三十女との戀を客觀化してこれを藝術上の創作となし、第二の『或女』を描き得たのではなからうか。日本の近代文學では岩野泡鳴氏とその性的生活の關係、又外國でならば、例は甚だ多いが、ゲエテの生涯の如き、またバイロンの作品と彼がギッチョリ伯爵夫人との性的關係の如き、すべて此方の途をとつたものであつた。文豪の生活上屢見る amica は卽ちこれだ。『アミカ』——强ひて譯せば『女友』とでも言はうか、日本語や漢語に無きは勿論だが、西洋でも北歐の語には適譯の無い特異の言葉であるから面白い。

○

私有財産を放棄した時の有島氏は革命家として偉かつたが、最後の情死に至つてはやはり通俗文士らしい享樂主義に出でた。かう言つて批評した者がある。愚かしいことを言ふ人たちはいつまでたつても絕えぬものかな。

私有財產制を非なりとして自ら進んで無產者の中に身を投じたのも、戀愛のために遂に命を絕つに至つたのも、その根本にはただ一つの勇猛なる革命思想家の精神があつたばかりだ。財產放棄と重複自殺と、距離はあるが根源は實は同じ所から出てゐるのだ。かつて社會主義の戰士フェルディナント・ラッサルが、一人の女との戀のために遂に決鬪の死を敢へてしたのは、偶然の事でも何でもなかつた

のだ。

燃ゆるが如き愛慾、人類愛、個性の充實、個人の自由、兩方ともにこれらの內的要求から出てゐる同一革命家の敢然たる勇猛の行爲を見ずや。

有島さんは本當に勇氣のある人であつた。この勇氣のある革命思想家を失つた事が、何よりも悲しむべき事であつた。

○

食慾と性慾とは、云ふまでもなく人間生活の二大根柢だ。前者を中心とする經濟生活の自己革命を、有島さんは財産放棄によつて見事に決行し得た。後者を中心とする性的生活の自己革命に於て、有島さんは、もう刀折れ矢盡きて斃れたのだ。三兒に與へた遺書に『父は闘へるだけ闘つて來た』とある、かの悲壯な言葉の背後にも此意味が讀まれる。

しかしこれは有島さん個人の事であつたが、社會全體としても同樣だ。とにかく食物の問題が焦眉の急なのだから、いま世界を擧げて經濟生活の上での階級闘爭が問題とせられてゐるが、やがては性的生活の革命がまた更に一層痛切な困難な問題として人々の頭を惱ましむるであらう。否な現在に於て既に性的革命の問題は時代の新人を苦しめてゐるのだ。經濟革命よりも性的革命の方が、更により深く人間的であり複雜であるがために、その途上に慘憺たる多くの犧牲者や殉教者を出だす事は免れ

ないであらう。ただ記憶せよ、經濟生活に於て資本家階級が今や漸次崩壞しつつあると同じく、性的生活に於てもまた、戀愛至上說を確認せざるが如き舊道德が急速に崩壞し衰滅しつつある明らかなる事實を。

○

酒も飮まず煙草も吸はず、一事が萬事、事大小となくすべての意味に於て寧ろ禁慾的（この語は今の場合甚だ不適當だが）ともいふべきほどに、道德生活の純正を保つて居た有島さんなればこそ、今度のやうな最後の悲劇を眞劍に演じたのであつた。讀者よ、しばらく問題を逆に取つて一考せられよ。卽ち女たらしの不品行もの、ごまかし生活の政治屋といふもの、僞善と因襲とで固めてゐる道學屋、利害打算の世渡り上手、すべて人生に對して虛僞と不眞面目とでやつて行く人たち、是等のものがたとひ如何なる場合に於ても斷じて有島氏の如き悲劇を演ずる事の絕對に有り得べからざる事だけは明らかではないか。而もまた有島さんを非難する者どものなかに、如何に多くのごまかし屋、打算的俗物、僞善者、虛僞虛飾の徒、乃至私利私慾をのみ謀る資本主義的國家の謳歌者が存在するかをも一見せられよ。

○

詩人は大空を仰いで雲の色に見とれ魂を奪はれてゐた間に、誤つて足を踏みはづして溝に落ちた。

大阪あたりの株屋がこれを見て『阿呆かいな』とつぶやく。學校の先生は生徒を戒めて云ふ、『あなたがたは雲の色なぞに見入つてはなりませんぞ。あれは馬鹿か畜生のする事です、戀愛と同じやうに』と。また食に餓ゑたるがために全く他を顧みる事をしなくなつた唯物論者は、この詩人を見て『なあにあれはブルジョアだからね』と言つた。

さし當り有島さんの最後の役割は、この詩人の如きものではなかつたらうか。有島さんは人間的に——あまりに多く人間的であつたが故に、あの悲劇的最後を見たのだ。計算機械や、爭鬪の武器や、お說教の蓄音機の如き輩か、或は動物的な人物であつたならば、あんな最後の幕は演じなかつた筈だらう。

To err is human. ——人間なるが故に過もあり缺點もある。過あり缺點あるが故に、わたくしは人間を讃美し禮讃する、そして機械や動物を厭ふ。

○

また更におもふ。

かつて歐洲の或る大都に高塔がたてられた。工事はめでたく了つたが、さて設計に一つの誤謬があつたために見ごとな此大建築はゆがんで居た。設計者であつた建築技師は、みづからの罪過のために雲を凌ぐ其高塔のいただきから身を投じて自殺したといふ。

戀愛は、人間がおのれの全的生命の力を傾けてたてる大建築である。おのれの罪過のために死した有島さんは、設計の誤のために自殺した建築技師であつた。御覧なさい、建築といふものはあの通り危い怪しからんものですよ、ゆめ〳〵高塔の建築なぞをしてはなりませんよ、と戒め顔なる者どもの笑止さよ。

あの建築技師は死すべきではなかつたのだ、生きて自分の罪過を償ふに足るだけの更に大きい建築をすべきであつたと同じく、有島さんも亦最後の解決を死に求めず、更に强く生きる事によつて自己の罪の呵責を受け、この地上に於てその大建築を完成すべきではなかつたらうか。私としてはさういふ風に考へたいと思ふ。

戀愛と結婚のこと

わたくしは曩に本紙に『近代の戀愛觀』といふ拙い一篇の文を草した。『東京朝日』の方には、それがまだ連載中であつた間に、偶然にも昨今世上を騷がしてゐる『燁子事件』といふのが突發した。そこで多くの新聞雜誌社からはこれに就いての卑見を徵せられるが、本業の方に忙しい私は一切それをお斷りした。此類の一々の事件に就いてかれこれ批評がましい事を述べるのは、一個の讀書生たる私として爲すを欲せざるところである。近代生活に於ける重要なる問題として概括的に、一般に戀愛と結婚に就いて述べた私のかの一文のうちには、さきのH事件にも、またある尊敬すべき學者の戀愛問題にも、また今回の事件にも、すべてこれらに對する私の見解は、あまりに明瞭すぎて露骨なほどまでに明らかに書いて置いた積りであつた。それに今さらそんな質問を受けることは、私としては甚だしく遺憾に思ふ。また『生活批評としての文藝』といふ立場から私があの一篇を草した事も、文藝を俳茶の莚と同一視してゐる人々には、誤解や曲解の原因となつたのかも知れない。

本紙上にあの一篇を揭げた關係上、いま乞はれる儘に、玆にただ數語をつらねる。

『燁子』——現存の女詩人に對してかういふ呼び方をする事を私は快く思はないが、今は便宜のため

此無禮を敢へてする――の今度の行動には、多くの缺點や手落があつたやうだ。絶縁狀が相手の手に屆くよりも前に世上に發表せられた事や、或は自分一人獨立にやらないで周圍の人たちに倚賴してゐる事や、殊にまた自ら良人に妾を薦めて置いた事など、數へ立てれば多くの非難すべき點があつたらう。しかしそれらは離婚事件の本體から言へば寧ろ從屬的な外面的の事柄であつた。良人に絶縁狀を叩き付けてその家を飛び出した行動は、人間としての至高の道德から見て避くべからざるものであつた。私が嚢に『近代の戀愛觀』のうちに述べた賣淫結婚奴隷結婚の畜生道から離脱して、人間としての自己を全うし、おのれの人格を保持するためには止むを得ない行動であつた。褒めるべき事でもないと共に非難すべき事でもない。

私の結論はこれだ。その理由は今さら繰返さなくとも『朝日』紙上十四回にわたつた私の拙文に於て既に述べた。

戀愛にあらず、ただ財産のため家名のため或は他の必要のためにする非人格的な結婚關係が、社會のためにも個人のためにも最も憂ふべき非文化的不祥事であることは、今回の事件――それは西洋にも日本にも毫も珍らしくない事だが――の如きが、最もよく之を示してゐる。燁子も伊藤氏も十年以前、その結婚の初夜に於て既に出發の第一歩を誤つて居たのであつた。十年後の今日に於てその當然の結果は避くべからざるものであらう。雙方にとつてまことに氣の毒な今回の事は、當事者自らが

十年以前、結婚の初に於て既に種子を蒔いて置いたからである。根本の人生問題思想問題としては、燁子の行動は確かに是認せらるべきものだ。"To err is human, to forgive, divine." わたくしはただ斯う言つて置かう。

人としての自覺ある者にとつて、ラヴなき結婚生活を續けてゐる事はインフェルノだ。しかし今度のやうな事は、男でも女でも一寸思ひ切つて決行できないのが普通だ。それを斷行した事によつてこのインフェルノから救はれたのは、獨り『踏繪』の女詩人ばかりではなく、傳右衛門氏にとつても亦幸福であつた事を考へねばならぬ。十年以前に犯した罪が淨められたのである。絶縁狀を男から突きつけたか、女の方から叩き附けたか、そんな事は問題ではない。

既に結婚したものよりも、これから將來、結婚しようといふ青年子女のために警告すべく、わたくしは曩に『近代の戀愛觀』を書いた。何よりも先づ第一に今日の『見あひ』の方法に改良を加へ、青年男女間に安全な正當な接觸の機會を多く與ふる事によつて、在來の野蠻生活から脱却し得られる方法を講ずる事は、今日の社會のために望ましい事だと思ふ。

質問に對する私の答としては、これぐらゐで濟まして置かう。紙が餘つたから、なほ二つ三つ思ひ附いた事を書きつける。

平等な二つの人格の結合が結婚だ。男子が蓄妾によつて既に立派に男子みづからの貞操を破壞して

ゐるとき、女が自分の貞操を破つたからといつて、それを責める事は出來ない。一夫一婦といふ事は男子のみの我儘な所有慾を滿足せしめるために言ふことではない。結婚關係をして十分に人格的たらしめるがためにこそ、一夫一婦の意義は儼存する。この點に於ては『踏繪』の女詩人を責めるに先だつて、世人は何故に傳右衛門氏の蓄妾――もし果してさういふ事實があるならば――を非難しないのであるか。日本の現狀に於ては、不貞の妻を責めるよりは先づ不貞の夫を責める事が正當だとは思はないか。

『燁子』がさきに自ら妾を薦めた事が若し眞ならば、これは今回の事件に於て何よりも大きい過であつた。

私は『近代の戀愛觀』に於て戀愛神聖論などといふ空疎な寢言を持出した覺えは斷じて無い。戀愛は決して『浮草でもなければ根無草でもない』、性慾といふ泥田に深く根を下してゐる事を切言してゐたのだ。この肉に基礎を置いて居るといふ點に、戀愛が他の幽靈道德と異なれる至上の尊嚴性を有する事をも說いたのであつた。靈肉合致の全的人格關係なればこそ『ラヴ・イズ・ベスト』なのである。近代の見かたから言へば、戀愛には强大なる肉的基礎があればこそ、そこに偉大があり崇高性があるのだ、昔のロマンティシズム時代の見かたとは、此點に於て千里の差がある。

歌集『踏繪』を見ると、これがみな人間苦の象徵化であつたことを思ふとき、人生に於ける文藝の

使命とその尊威を、今度の事件と共に併せて考へさせられると思ふ。

女詩人燁子の過去の作品が、その實生活によつて最も強く裏づけられて居た事を知つた時、そのすぐれた藝術的技巧以上のあるものが、讀者の胸に迫り來る所以をも考へねばならぬ。

罵りのしもともて打つ世の人よ知るや我が名はをみなとしいふ。(『踏繪』二三頁)

冷やかに枯木の如き僞りを人の道とし云ふべしやなほ(同七八頁)

言ふ事も答ふる事もわが外(ほか)の世界に住みて今日も暮しつ(同九七頁)

詩としてこれ等は決して卷中の絶唱ではない。しかし今回の事件に際してこれを讀めば、技巧以外のあるものを人は十分に味はひ得るであらう。

一を二と讀むすべ知らず知らざれば智慧足らぬ子とかろしめらるる(同一〇一頁)

『一を二と讀むすべ』を知つて、虛僞と妥協との生活をさへ送つて居たならば、ゆくにあらず歸るにあらず居るにあらで生けるかこの身死せるかこの身(同六八頁)

そして所謂『貴婦人』、鑛山王の『奥樣』とやらで、世間からも非難は受けなかつたであらう。たとひ苛責は受けても非難は受けても、胡魔化しの其日々々を送つて居られないところに、新人の深い惱みは在るのだ。

このごろ人のために英國十七世紀の詩文を講じながら、つく〴〵さう思つた。サックリングやヘリ

ックの美しい戀愛詩にあるやうな、あののどかな戀の出來た時代は夢の世であつたのだ。結婚問題では隨分苦い經驗をしたミルトンの『離婚論』でさへも、その立場はまるきり現代のとちがつて今人の共鳴を喚び起さないものだ。戀愛を遊戲と見なし、別に結婚を人間の職業か義務のやうに考へて、兩方を全く切り離して澄まし込んで居るやうな事は、近代人の道德的自覺が許さないのだから仕方がない。

燁子事件の眞相を私は全く知らない。ただ新聞記事を繼ぎ合はせてそれを材料に、一篇の戲曲のやうなものを腦裡にゑがきながら、その下手に書き下された戲曲を、私たちは批評してゐるのである。裏面に如何なる事情があるかも知らず、各人物の性格をも知らずに、批判などは決して出來ない。私は以上の言を述べただけでも、心なき事をしたやうに思つてゐる。

――大正十年十月三十日『大阪朝日』所載――

オオプン・フォオラム

すべての事が公開的に民衆的に社會的に、また自由解放の精神を尊重して行はれるべき今の代に、これらの精神とは全く相反した色々の現象が、なほ前代の遺物として到る所に殘存してゐる。改む可きを知りつつも猶ほ舊慣に絆されて改めざるもあれば、また改むべきをさへ知らず覺らずして改めざるものも甚だ多い。わが日本のごとき後進國に於ては殊にさうだ。

民衆文化の向上のために、學校以外の社會教育が大切である事は今さら言ふまでもないが、その社會に生きる各個人がお互に接觸し、お互に意見を交換し合つて、人が人を教育するといふ機會が、今の日本などでは甚だしく乏しい。一例を言へばわが國では大都會に於てすら倶樂部は少しも發達しないで、それはただ玉突とか食事のためとか、乃至會員の應接所に用ゐられてゐる位に過ぎない。軍人も實業家も學者も政治家も官吏も、平素は業務の上に於て互に接觸する機會の少い、さう云ふ異なつた 面の人たちが一堂に相會し、胸襟を披いて打寛いだ談笑の間に、意見や知識を交換するやうな機關は少しも發達して居ない。親しい間柄の人たちが、私利私情を離れて時務を論じ合ひ、果ては滿面朱を濺ぎ口角泡を飛ばして激論しながらも、あとは睦まじい握手を交はして別れるといつたやうな光

景は滅多に見られない。いやに勿體ぶつた東洋流の威儀三千禮儀八百によつて空疎な辭令をのみ交換し、談論を以て書生流の兒戲に過ぎずと見る惡習は、今日にしてなほ改まらない。たまたま他人と對坐すれば、盜むが如く探るが如き眼付きをして、相手の顏をさへも直視せず、先づ伏目がちにひとの胸のあたりを見てゐるといつた風だ。收賄の相談や錢儲の打合はせならば、待合の奧座敷でも出來よう。しかし思想を論じ政治文藝を談ずる俱樂部は、事實上日本には存在して居ないと云つて可い。學校や讀書によるほかは、社交界に出て識見を養ひ知識を啓發する機會は極めて僅かだ。言論を重んぜず思想を貴ばざる日本人一流の祕密墻壁主義、駈引萬能主義が根柢に於て破壞せられざる限り、社交の進歩は政界の刷新と共に、或は望み難い事かも知れない。

しかし私が今こゝに述べたいと思ふのは、俱樂部のやうな社交機關に就いてではない。もつと廣い意味での民衆的社會的教育機關とも言ふべき講演會に就いてである。

すべての事が民衆本位に行はれようとする傾向の著しい昨今の時勢に、講演會の流行するのは當然の現象である。三百五百の小集會から、二千三千の聽衆を集める大會合に至るまで、都鄙各地に於て、今では一種の流行物だと見られる位である。善い意味にも惡い意味にも世界で最も多く民衆的な米國が、最も多く講演の流行する國で、あの國では講演はさながら一種の興行物の如くに取扱はれ、日本の芝居に於ける松竹合名會社といつたやうな講演會社の存在をすら見るに至つたのは、全く民衆

的氣分の所産である。各國の名ある詩人や作家批評家などが遠く海を越えて、柄にもなく筆の代りに口舌を以て出稼ぎをやり、役者の巡業や旅興行のやうな藝當をやるのは米國に於てである。タゴオアやマアテルリンクのやうに此巡業に失敗した人も尠くないが、またあの殺風景な國を駈けづり廻はつて詩嚢を輕くした代りには、うんと財嚢を重くして故國に歸る人も多い事であらう。最近には英國文壇切つての皮肉嘲弄の名人チェスタトンが、紐育あたりでかれ一流の警句と奇想天外から墜ちるやうなパラドックスを、新聞雜誌ではなしに講壇の上から連發し廉賣してゐる。かれが先頃紐育での第一回の講演にも『教育あるものの無知』The Ignorance of the Educated などといふ奇抜な演題を揭げて、盛んにヤンキイを喜ばしてゐる模樣をわたくしは近着の外國雜誌で讀んで、またかと思つた。

閑話休題、わたくしは今日普通に行はれてゐる講演會の方法が、民衆的氣分から考へても、社會教育の手段として見ても、甚だしく不適當なものだと思ふ。もとより會の性質によつても異なり、また講演者聽講者の種類によつても違ふではあらうが、近頃行はれる公開論壇 Open Forum の方法の如きは、たしかに一種の改良策として指示せらるべきものだと思ふ。

講演者が聽衆の坐席よりも一段高いところに突立つて、勝手な事を喋舌つてゐる。それを大勢の人たちが默々として謹聽してゐる（もとより彌次は別だが）。さういふ光景は、學校の講堂でならばいざ知らず、自由公開の民衆的な講演會に於て甚だふさはしからざるものではないか。演壇の高所から聽

衆を眼下に見くだして、なかには隨分無責任な胡魔化しのお粗末千萬な言說を傲然として吹き立ててゐる。あの光景を見ると、私はそぞろに專政治下の民を想ひ、自由な民衆氣分と餘りに縁の遠いものであることを遺憾なりとせざるを得ない。

フォオラムは言ふまでもなく古代羅馬の市に設けられた中央公會議場である。そのころ世界の中心地であつた七丘の大都城に、キャピトリンの丘の麓からパラティインの東北に亙れる一大公會場 *forum magnum* があつた。そこには市民が集まつて政治法律その他の公事を議した。今日の言葉で演壇を rostrum といふのもこのフォオラムに於ける名稱であつた。のちには此公開議場がいくつも設けられ、小フォオラムは羅馬の市だけに十九ケ所も出來たさうだ。しかし今日いふ所のオオプン・フォオラムは必ずしも羅馬のそれと關係があるではなく、講演會の新しき樣式として、今特に米國で盛んに行はれてゐる方法に名づけた名稱である。

オオプン・フォオラムでは、講演が了つてのちに聽衆がその講演に就いて自席から質問を發する。講演者は壇上から之に解答を與へる。講演後少くとも三十分位の時間はこれがために割かれる事になつてゐる。また單に質問のみならず、聽衆中の希望者は、その講演の題目の範圍に於て三分演說五分演說をする事によつて、自說を述べ聽講後の所感を語る機會を與へられるのである。かの講演後に講師が別室に退いてから、少數の有志者のみが講師を取圍んで問答するといふが如きは、今日普通の講

演會で行はれるところであるが、それは聽衆全體の面前で皆が聞いてゐる問答でないだけに、效果は甚だ乏しい感がある。

かくの如きオオプン・フォオラムは、必ずしも私が今さら事々しく述べ立てる程の珍らしい方法でないかも知れない。しかもそれは社會的民衆的敎養の機關として、また思想言論の自由を尊重せる點に於て、普通の講演會よりも遙かにすぐれたものであると思ふ。

先づ聽衆の側からいふと、自分たちが質問を提出し得る機會を持つといふ心持で聽くならば、おのづから多く注意も集注せられ、更にまた他の言說を批判的に批評的に受入れる事も出來る。聽者の心持が在來のやうに純然たる受動的(パッシヴ)のものでなくて能動的(アクテヴ)である。御無理御尤もに、所謂知名の士とやらの言を默々として神の託宣をでも聽く如くに聽くのとは、最初から心の狀態を異にしてゐるからだ。またその質問や五分間演說も、それが衆人環視の中で行はれるとすれば、聽者はおのづからそこに自らの批判と考量をかさねて、自尊自重の態度に出づるであらう。亂暴で無責任な彌次馬式の暴言なぞは、少くとも或程度に於て差控へられるのではなからうか。(しかし聞くところによれば、某文明國の議會に於ては、蟬噪蛙鳴その極に達して、逐に動物園の如き奇觀を呈するさうだが、私の狹き見聞の範圍內に就いて云へば、今日日本の普通の講演會の聽衆は、某國の田舍議員ほどには不作法な低級なものではないと信じてゐる)。

壇上の言論を單に默聽してゐるといふ事、それ自らが既に今の時勢から言へば時代錯誤の autocratic なものである。のみならず普通の講演會では、講演者と聽衆との間に何等の連絡がない。從つて他人が勝手な事を喋舌つてゐるのを、ただ其場かぎりに聞き流して濟ますといつた感がある。その講演によつて受ける感銘も印象も、極めて淺く極めて弱からざるを得ないではないか。

更に之を講演者の方から言ふならば、聽衆が果して自己の言說を正しく理解したのか否か、主要の論點を逸して單に枝葉の部分をのみ受入れたのではないか、或は自分の議論に何どこか不備の點があるのではないか。さういふ色々の事が在來の舊式な講演會では講演者みづからに解らないで、多少不安危惧の念なきを得ない場合がある。また講演の後にさういふ質問者や、或ひは坐席(フローア)からの辯士が出るものだとすれば、講演者の方に豫め覺悟も用意もせねばならぬ。從つて世に所謂名士とか大家とかいふ者が大きな顏をして、出鱈目な無責任な言說を弄することをも、ある程度までは防止し得られるであらう。最初、演者と題目との廣告を見て集まる聽衆のなかには、同種の問題に就いて相當の研究をしてゐる人が必ずあるに相違ないと思へば、如何に無責任なる講演屋、演說使ひと雖も、多少は自分の演說の內容に意を用ゐるのは自然の結果である。講演後に別室に退いてからの個人としての質問などは、たとひその質問者が如何に熱心と誠意とを以てすればとて、老猾なる三寸の舌頭に丸められて、滿足な答辯を求め得られないやうな場合が稀ではないと思ふ。たとひさういふ無責任な不用意な

講演者でなくても、自說に忠なる講演者は、また動もすればその論議が極端に走り矯激に失して正鵠を誤る場合がないとは限らない。それが聽者の方の自由な質問や言論によつて訂正修補を得るならば、演者に取つても一般聽衆にとつても、それは大なる利益であらねばならぬ。

言論機關の比較的發達してゐる米國、殊に紐育のやうな所では、銀行家協會(バンカアズアッソシエションズ)でも、商業會議所でも、その他婦人倶樂部勞働團體などが皆このオオプン・フォオラムの法を用ゐてゐる。在來は坊さんのお說教をただ默つて聽いてゐた教會に於てすら、このオオプン・フォオラムが廣く行はれるに至つたのは、時勢の然らしむるところでゐる。

歐洲大戰の初期であつた。國際聯盟の案がはじめ英國のサア・エドワアド・グレイによつて唱へられ、その聲は忽ち米國に反響した。當時は國際聯盟の事は未だ世上一般の人の注意を惹いて居なかつたが、米國の一部の識者は熱心にこれを研究もし唱導もして居た。その頃わたくしは紐育に居て、一タコランビヤ大學で前大統領のタフト教授――さうだ、タフト氏は掛冠の後またエイル大學の教授をしてゐた――の國際聯盟の講演を聽いた。講演のあとで聽衆の一人が立つて質問を發した。『大國は國際聯盟によつて幸福なるを得べしとするも、小國は却つてこれがために苦しむの結果とならずや』といふのであつた。此點は、後には誰も皆氣附いた事ではあるが、確かに當時行はれた國際聯盟說の一弱點であつた。急所に觸れた此質問に對して、タフト教授は何と答へるだらうと思つてゐると、眞摯

に、『或は然らん』と答へたのは嬉しかつた。その質問者が、後に聞けば墨西哥人であつたといふ事は非常に面白いと思つた。わたくしは當夜の印象を今もなほ忘れずに居る。

自說に對して十分の確信ある者でも、その說には自分の氣附かない弱點や缺點があり、或はまた講演者がことさらにいふ點を胡魔化し去つたりする場合が無いとも限らない。それが質問者によつて一般聽衆の前で指摘せられることは色々な意味に於て喜ぶべき事だと思ふ。學殖識見に於て如何に劣れるものの言でも、さういふ眞面目な質問のうちには確かに他山の石として傾聽すべきものがあるからだ。

かくの如くにして世に行はれる講演會の類が、社會敎育の機關として一種の自由大學、民衆講座の如き性質を帶ぶるに至るならば、文化發達のためにわたくしは喜ぶべき結果を齎らすだらうと思ふ。

何が故の侮蔑ぞ

——放浪の個人主義者の群——

一

以前わたしが外國に居た時の話である。おほかた皆點數取りだけの秀才なのだらう、大學を優等で卒業したとか云ひながら何も識らない數人の『秀才』どもが、集まつての雜談を聞くと、猶太人（ジュウス）のことが話頭にのぼつて居た。いやに目をぎよろつかせたフィリピンの土人のやうな一人が、黑びかりにてかてかさせた頭をあげて云ふには、

『あいつは猶太人（ジュウダ）だよ。鼻の恰好を見てもわかる。』

きいた風な口をきく此フィリピンの好男子の說を、前週日本から着いたばかりの一人が感に入つたやうな顏をして傾聽してゐた。それでまた圖に乘つたのか、今度は、

『あの女もクイチなのだ』

とフィリピンが云ふ。

いつたい『クイチ』なぞと云ふ言葉は、鈍感で悟の惡い私には全くわからなかつた。英語にもそん

な言葉は無いなと獨りで考へてゐると、ふと氣が附いた。九と一とで十（Jew）になるといふ、ろくでもない洒落だ。西人の尻馬に乘つて猶太人の惡口をたたく日本人が、普通に外國ではよく使ふ言葉なのである。クイチ——なるほど、才子とかいふ日本の俗物が如何にも好んで口にしさうな言葉だと思つた。

二

先づ第一に訊から、人間として何が故に猶太人を非議すべきであるか。更にまた問題をずつとけち臭く小さくして、日本人として猶太人を侮蔑し嫌惡すべき如何なる理由が存在するのか。

西洋には、宗教上に猶太人を GENTILES と峻別して、これを厭惡すべき昔からの極めて長い歴史的由來があつた。（それさへ吾々から見れば、故なき差別だとしか思はれないが）。日本の歴史は西洋とは全く異なりと云ふ事を、ふた言めには口にして誇り顔なる輩までが、猶太人の事を聞きかじつてはこれを侮蔑してゐるのは甚しき滑稽である。いつたい開闢以來日本の歴史のいづくの如何なる部分に、西洋史に見ると同じ放浪のイスラエルの民との接觸交渉の歴史があつたか。あつたと答へ得るならば言つて見るが可い。

「クイチ」なぞと云ふ言葉を口にして、得意顔なるものどもよ。爾らは西洋史に於ける猶太人の特殊の事情と歴史とを知らないのか。過去現在の事情をも究めずして、ただ多數西人が言ふところを聞

いてその尻馬に乘らうとするのか。爾らには獨立の批判といふものが無いのであるか。いつも西人の說を聞けば外來思想なぞと非議しつつある爾らは、何が故に西人の尻馬に乘つて猶太人を侮蔑せんとするのか。

武力を以て露西亞に勝つたと云つて無闇に喜んだ日本人が、あの日露戰爭の財源を如何にして得たかを考へて見るがいい。そのころ紐育の財界に暴威を揮へるモオガン財閥を向ふに廻はして戰つて居た銀行家シッフが、日本政府のために公債募集を成就したからではなかつたか。わが　先帝陛下は、一度ならず二度までも此猶太人シッフの偉功を賞して勳章を賜はつた。これは恐らくは日本の歷史上、猶太人との唯一の交渉であつたかも知れない。吾等の記憶には猶新なるべき此事實をさへも、日本の秀才とやらは知らないで居るのか。それを知らない程にまで無知なのならば、「クイチ」なぞと云ふ卑俗な言葉を口にしないが可い。

三

遠い昔の話はしばらく問題外におく。先づ近世の哲學史上に最大の巨光を放てる天才スピノオザは、猶太人ではなかつたか。米國そのものを發見したコランバスの血管の中には、いま米人が嫌惡しつつある猶太人の血が混つてゐたことは、史家が明らかに證する所ではないか。英國最大の政治家べカンズフィイルド伯ディズレイリは、立派な猶太人ではないか。十九世紀最大の抒情詩人にして、ベ

の作は今もなほ若き人の血を湧かしてゐるハインリッヒ・ハイネは、猶太人ではなかつたか。

また更に、過去を問はず、現在二十世紀今日の有様を見よと私は言はう。「文化生活」とか云ふ妙な事をお題目のやうに唱へてゐる者どもが、何よりも有難がる電氣機械の、最大の發明者エディソンが正眞正銘の猶太人である事を爾らは氣附かずに居るのか。今日世界最大の哲學者のやうに日本人が褒めちぎれるベルグソンが猶太人である事をば知らないのか。猶太の民がほろびたるその祖國をパレスティナに再建すべく、最近三四十年間盛に活動しはじめた、かの ZIONIST の運動のために、ベルグソンもまた力を致したと云ふことは、遠き吾等の耳にも傳へられた事實だ。それよりも、この間日本へ來て邦人が狂喜して歡迎して居たアインスタイン教授もまた、その國籍を瑞西に於ける猶太種である事を知らないのか。

元來猶太人のあたまは、こつ〳〵と丹念に系統的に物を考へ出すやうな鈍重なものではなく、その特色は寧ろ慧敏なる直觀的な天才肌である。從つて科學に於ける發明や發見に於ても、或ひは文學宗教哲學などに於ける活動に於ても、皆驚くべき天才の創造的偉力を發揮し得るのである。

試に思へ、今日の「やまと民族」といふもの、一人のベルグソンのごとき哲人を、一人のエディソンの如き發明家を、一人のアインスタインの如き科學者を出して、世界人類の進步發達に貢獻し得たりと廣言し得るか。

むかし封建の世に暴力の支配によつて强者の特權階級に乘り出したるサムライとかいふものの子孫に生れた私なぞが、おのれの愚鈍に鞭うつて自ら責むるとき、かりにそれを血統の問題に歸するならば、これで猶太人の血の一滴でもが私の血管を流れてゐるならば、今少しは立派な學問も出來、立派な文章も書ける事だらうとまで思ふ。徒にえたいの知れない系圖とかいふものを有難がるよりも、西洋人が PARIAH（賤民とでも譯しておかう）のごとくに蔑(さげす)める猶太人であつた方が事實上人類の文化に貢獻すること遙かに大いなる功業を樹て得るのかも知れない。

四

人種の差別を置くがために、みづから血迷ひ、みづから苦しめる亞米利加人は、カリフオニアの日本人排斥ばかりではない。第一あの黑人の問題で最も多く惱まされ、次いでは紐育の大都の人口の殆ど半數を占むる猶太人を、嫉惡し侮蔑する事によつて、また憫笑に値ひすべきディレンマにかかつて苦しんでゐる。實際最近では、各方面に於て猶太人問題が米國社會の難問題となれること日一日と甚だしきを見ては、まことに笑止に堪へない。

私には緣の遠い經濟界の話は別として、ただ學界の有樣だけを見ても、米國の大學から猶太人を全然排斥し去る事が出來るならば、さぞかし滑稽なことになるだらうと思ふ。米國の大學總長や敎授のなかには日耳曼猶太種(ヂヤアマン・ジユウス)が澤山に居る。露西亞猶太種(ラシアン・ジユウス)も尠くはないだらう。そしてこれらの學者が、芥

しい大學に於ては、要路を占めて立派な研究事業を大成しつゝある事實を、何人も無視するわけには行くまい。獨逸は嘗てカイゼルの治下に於て頑冥の國であつた。プラシアニズムの御用大學ベルリンでは、猶太人の學者は如何なる高材逸足の士と雖も、正教授には任命しなかつたと云ふ程の馬鹿らしさであつた。さう云ふ風だから、獨逸の各大學でプリヴアト・ドツェントなどをしてゐる少壯有爲の士は、米國大學の優遇に牽かれて、どし〳〵米國に出かけて行く。そこで立派な研究をつゞけて大成してゐる例は決して珍しくはないのである。

ボオトを漕ぎボオルを投げる遊戯に耽りつゝ、女給の尻を追ひかけながら試驗點數だけを多く取る妙技を心得たる日本の『秀才』どもよ、爾らによつて「クイチ」と罵られ侮蔑されつゝある猶太人は、爾らよりも遙かにすぐれた立派な學問をなしつゝあることを見て、先づみづから恥づるがいい。

五

國ほろびて山河ありといふ。山河なぞは、どうだつて可い、國ほろびて人がある、個人が存在する。天才は更にその光輝を增すのだ。言ふまでもなく天才は國よりも大きいからである。エディスンもベルグソンもアインスタインも今日の世界に於て、僅かに國といふやうなものを背景にする事によつて立つてゐるやうなひよろ〳〵の人間ではないのである。

國ほろびて山河があらうが無からうが、個人は秀で天才は輝く。猶太の國ほろびて茲に二千載。流

竄漂浪の猶太の民がさながら歴史の流のなかに水とまじれる油のごとく、あらゆる迫害と侮蔑と虐遇との間にあつて、而も人類のために貢献したるその偉業を追想せよ。

六

わたくしは個人と云ひ天才と言つた。天才は動もすれば孤立に傾く。猶太の民族はその素質に於て、恐らくは國家といふが如き有機的(オオガニック)な集團生活には適しないのであらう。また國家を組織しない事によつて、侮蔑虐待を受けながらも却つてあの偉大なる特性を發揮し得たのではないかとさへ思はれる。

かれらには宗廟の神がある。基督降誕に先だつたこと一千年の遠き昔、ダギデ王が建てたる都に建立せられた ZION の神廟がそれだ。そこに新なる國を建つべき最近の ZIONISM の運動をも、わたくしは此民族の强い個人主義の素質から考へて、之を猶太人のために取らざるのみならず、世界人類のためにも無くもがなと思ふ。否な將來に於てかくのごときザイオニズムの國家の成立と發達とをさへも、私は疑はんと欲するものである。

猶太の國家再建は今までも幾たびか企圖せられたが、すべてか皆失敗であつた。また宗教に於ても、かれらは基督教徒や佛教徒のやうな大教團を有しては居ない。今日世界の各地に分布する猶太人の數は千五百萬だと言はれてゐるが、彼等はたとひ『タルムウト』をよみ、會堂(シナゴク)や法師(ラビ)を有すると

も、かの法主とか法王とかいふ時代錯誤のものによつて統一せられた敎團組織なぞを毫も維持しては居ない。そこが面白いところだ。頭に徹し尾に徹して彼等は個人主義者である。そこに彼等の偉大があり壯美がある。

猶太人を以て私が個人主義者なりといふとき、或者は難じて言ふであらう。紐育に於ても倫敦に於ても、すべての大都に於て、猶太人は特種の集團をなし、かの所謂 GHETTO と稱する部落を形づくり、Jewish quarters をなして群居してゐるではないか。そして金錢にきたなく、貪慾飽くを知らざる金貸を業とし、汚穢の生活職業を營みつつあるに非ずや。他の歐洲人とは婚姻をも通ぜざるの事實を如何に観るべきかと。

此問に對して私は言はう。常に迫害せられ排斥せられたる者が、苦しみの餘り互に相倚り相抱いて自ら扶け自ら衞るべく團結するのは當然の成行きではないか。また猶太人が金錢にいやしく、ややもすれば黄金を武器として基督敎徒を惱ますシャイロックの多きを難ずる者もあるが、これとても迫害虐待の結果が、おのづからここに至らしめたものに他ならぬ事を思はねばならぬ。迫害と侮蔑とを受くる人々にとつて、その人が若し偉大なる天才や强き個性を有せざる限りは、はかなき一種の自衞の道具として先づ金錢を求め、黄金力によつて辛うじて己れを維持しようとするのは、弱者として避けがたき自然の事である。猶太人のうちでも上に述べたやうな偉大な天才の人々は、激烈なる迫害ある

にも拘はらず、學界にも思想界にも藝術界にも、また政治界に於てさへ、自由に派手やかに雄飛し得たのであつたが、そのほかの多數者は、勢ひ金錢を以ておのが身の安全を謀る唯一の金城鐵壁とたのむ他はなかつたのだ。之によらなければ、自己の生存權をさへも危くされるに至るからである。現に歐洲中世の或時期に於ては、猶太人の土地所有は嚴禁せられ、上品な職業はその門戸をさへ彼等の前には鎖された。その結果として、彼等はただ金錢を貯へ利息を貪る事によつて、辛うじて己の生存權を主張するのほか道は無かつた。やがて習ひは性となつて、多くの貪慾卑吝の徒を生ずるに至つたのは寧ろ同情に値ひすべき現象だ。彼等をしてここに到らしめた迫害者である基督教徒をこそ、寧ろ大に惡むべく咎むべきものではなからうかと思ふ。

私は世に多き卑吝の徒を見、後生大事と小金など貯ふるものを見るごとに思ふ、かれらは實は憫れむべき弱者なのだ。天稟に乏しく個性の力弱き者が、果敢なき自衞の手段として蓄財はまさに唯一の自衞策であらうと。よそ事ではない、日本の德川時代の町人根性といふものを回顧せよ。武士階級のためにながく壓迫せられたる者の僻み根性と貪慾卑吝の習俗、それは果して誰の罪であつたか。今日なほ京阪地方などの商人に最も多い俗惡醜劣なる根性は、士農工商の階級制時代に於て幾百年間の長きにわたつて育成せられたる習性ではないか、猶太人根性ではないか。鑵詰に石をつめて暴富をつみ、商品の取引に詐欺手段を用ゐる事を平氣でやる連中は、自から何の資格あつて他の民族を「クイ

チ」などと侮辱するのであるか。日本人中にこそこの悪性の「クイチ」が極めて多い事を、なぜ自ら反省しないのか。

七

資本主義の社會を改造しようとする思想、また露西亞のボルシエヸズムなどの中心人物に、猶太人が多いからと言つて、近頃は猶太人の世界破壞の陰謀などと飛んでもない妙なことを西洋でも言ひ出した。猶太人の憎惡する基督敎徒の Anti-Semitism が、今や保守的なる反動思想と野合するに至つて、かくの如き流言蜚語をまで、まことしやかに傳ふる者あるに至つては寧ろ滑稽の感がある。世界大戰以來の歐洲人は、悲慘なる大事件におびえたる後の人心にありがちな多くの疑心暗鬼に煩はされて、色々な Bogy を夢みた。猶太人の陰謀なぞといふのも、恐らくは薄を幽靈だと見る者の言ひ草に過ぎないであらう。殊に日本などでは、西洋の昔の本もろくに讀まず何も知らないものが、かの中世以來の freemason の結社をさへ奇怪至極なる意味に解釋して、さきに吉野作造博士の一喝を喰つて一言も無かつたものなぞがあつた。世界破壞の猶太人の陰謀なぞといふ流言は、ちかごろ米國に益々盛な The Ku Klux Klan の祕密結社ほどにも、吾等の注目に値しない馬鹿げ切つた話であらう。

あくまでも個人主義的傾向の猶太人に、そんな大きな團體的な破壞運動なぞが出來る筈は無いと云ふ明白なる理由のほかに、この資本主義破壞の運動と猶太人との關係に就いては、近代の歐洲史上に

極めて興味ある現象が見られると思ふ。

露西亞赤化の巨頭に猶太人が多いばかりではない、資本主義破壞の思想の第一人者マルクスも猶太人なれば、ラッサアルも猶太人だ。それと同時に、――また之と對照して十九世紀以來、所謂資本主義の根本となり中心となつて此資本主義を發達せしめたる者も、また同じく猶太人であつたといふ事實を見るのは、極めて面白い現象ではないか。

歐洲の封建時代が去つて近世の産業時代に遷るとき、機械工業のために要する巨額の資本は、先づ誰の手から出て居たか。この大資本を猶太人の金穴に仰ぐの外なかつた事は、ちやうど日本に於て武士階級が廢れると共に、町人階級が今日のブルジョアジイの中心となつたのと少しも異なる所はなかつた。なかにも前世紀の初めから、その暴富の威力によつて歐洲列國の政府をして叩頭せしめた『赤き楯の一家』(英語でいふロスチャイルド)のごとき、獨逸のフランクフルト・アム・マインや墺都維納を本家として、別家はおの〳〵英佛伊諸國の金權を左右し、はては海を越えて米國にまでもその偉力を伸ばさうとした。ナポレオン戰爭以來、すべて今日の資本主義的國家の基礎をつくれる戰爭ごとに、その軍資は多く猶太人の財嚢から出たものであつた。各國は爭つてこれらの猶太人を貴族に列した。

おもへば資本主義破壞の思想家も猶太人ではあるが、資本主義確立の功勞者もまた猶太人であつ

た。そこに何等かの人種的民族的意味があらうなぞとは、獨立の批判なき痴愚無識の徒にあらざる限り、考へ得べからざる事ではないか。

かの『惡魔の宗教』の徒である基督教の一部の僧侶たちが、一方、新思想に反抗して、自己に都合よき反動思想を煽らんがために、また他の一方、宗教上の反感から生ずる Anti-Semitism を之に利用して、世界破壞の陰謀だなぞといふ途轍もない流言を製造し、いまや神經衰弱に陷りつつある世界の人心に、子供だましの old bogy を見せようとするものではなからうか。笑ふべきかな。

猶太人は飽くまでも個人主義的傾向が強いために、すべてが組織的に集團的に行はれる今日の經濟界では、資本家としても既にその勢力を失墜しつつあるのだ。故シッフの財閥のごときさへも、今では既に日露戰爭ごろの勢力はないと聞く。世界顚覆なぞといふ馬鹿々々しい大陰謀が、かくの如き個人主義者によつて行はれ得るものではないと、私が主張する所以である。

八

いつたい猶太人々々々と、西洋人ばかりか、何の緣故もない日本人までが、侮蔑を以て此語を口にしてゐるが、さて『猶太人とは何ぞや』と訊かれると、人種學の上からは、嚴密な返答は出來ないのである。昔のヒイブルウ人の子孫だと云ふが、さて今日の實際に就いて科學者が調べて見ると、骨格や或は眼や髮の色なども全く判別し難いものになつてゐるさうだ。その分布の系統から言ふと、歐洲

の猶太人には二種類ある。卽ち一は ASHKEN AZIM といふので、獨逸種露西亞種の猶太人はこれに屬する。他の一は、これよりもずつと數が少く、SEPHARDIM と稱して西班牙葡萄牙地方に移住したものである。英吉利、ことに倫敦に居るのはこの一派で、――ディスレリの如き大政治家は、この最も優秀な西班牙系統から出たものだらうが、――バルカンから和蘭、エルサレムなどに居るのが卽ち此一派だ。この二つは、頭蓋の形などにも相異があり、また俗に猶太人の特徵なりとして指摘せられる Jawish nose とか Semitic nose とかいふ鼻の形も、歐洲(卽ち歐洲から移住した米國の方も)の猶太人には寧ろ稀に見られるものだ。鼻の形の特徵がないからとて猶太人ではないと言へないと同じく、また古代の中央亞細亞の高原に居た非セミティク人種例へばヒッタイト族等にあの通りの形の鼻が多いのである。さういふところから色々と硏究して此道の學者は結論していふ。猶太人とは決して一人種 a race を云ふのではない、寧ろ今日の英人とか米人とか獨逸人とか云ふと同じく、a people を指すものだと見る方が正しいと。

このあひだ私は右の如き論旨を或外國雜誌(米國の「ネイション」本年二月二十一日發行、一一六卷、三〇〇七號參照)の紙上、ディクソン氏の所說で讀んだのであるが、要するに猶太人の人種的特徵と云はれるものは、今日科學的には俄に斷定できないものであり、また氣質特性といふやうなものに同一傾向ありとするならば、それは到る所で漂浪の亡國民として虐待排斥を受けるがために、單に同一の境遇

が同一の特徴を育成したものだと見るべきではなからうか。

人種的特徴の話の序に思ひ出すのは、猶太人の女には美人が多いといふ說である。スコット一代の名作『アイヴンホオ』を讀んで、猶太人アイザックの娘レベッカの氣高さと美しさとに深大なる感激を得ないやうなものは、人間ではないと私は言はう。『これは猶太の女ではない、天使(エンゼル)である』といふあの作中の言葉も、また忘れがたきものであらう。とにかく女には美人が多く、男には天才が多いとすれば「クイチ」だらうが何だらうが、生意氣な口をきく日本の大學の秀才とやらは引込んで居て然るべきではないか。

九

スコットがあの美しい小說を書いたのは、固より虐げられた猶太人に對する燃ゆるが如き同情からであつたらうが、小說界の事を言ふとき、このごろしきりに『獸人』や『酒場』なぞの飜譯を歡迎する日本の讀書界は、猶太人に對する故なき迫害に憤激し、創作の筆をすてて敢然として正義のために起(た)つた文豪ゾラを忘れてはならない。それはあの有名なドレイフュウス事件に於てであつた。猶太人であるドレイフュウス大尉に賣國奴の罪名を負はせて獄に投じた佛蘭西政府に向つて、ゾラは手きびしく抗議したのみか、激越の辭を以て大統領に宛てた公開狀をさへ發表した。のちにクレマンソオが活躍したのもこの事件に於てであつた。當時佛蘭西の國を擧げて反猶太熱(アンチ・セミチズム)の盛んなとき、憤然として身

を賭してまで猶太人のために正義を叫んだ小說家ゾラの氣慨は、かれの偉大なる文藝作品のほかに、猶太人問題は永久忘るべからざる感銘を世界の人心に與へたのであつた。

さてまた轉じて古來文藝の名作に現はれた猶太人の話を考へて見ると、英文學には、古くチョオサアの『キャンタベリ物語』のなかの『尼の話』に出てゐる幼兒虐殺の慘話のほか、貪慾非道の守錢奴バラバスを主人公にしてマアロオが作つた悲劇『モルタの猶太人』"Jew of Malta" があり、沙翁の『ヹニスの商人』と並稱せられるほどまでに名高い。また小說では、ディッケンズの『オリヴア・トヰスト』の憐れな物語に、フェイギンといふ猶太人の泥棒の描寫など、これらの作を讀んで見ると、基督教徒によつてこの民族が、全く惡魔の化身のやうに取り扱はれてゐる事が、つくづく感じられると思ふ。

英文學には、身みづから猶太人にして猶太人を描いて成功した二大作家がある。一はディスレリ。大政治家にして、また政治小說に於て不朽の名をなした稀世の天才だ。その作『カニンズビ』"Coningsby" は當時の英國政界を諷して、シドオニアといふ財政家に猶太人を描いて自己辯護をした。此小說は今から四十年も前に既に立派な日本譯が出來てゐる。他の一人はいま現存の大作家、英國文壇の大元老として今なほ筆を休めない猶太人イズレイル・ザングヰル Israel Zangwill その人である。『ゲトオ』部落の描寫に於て、彼は獨逸のフランツォスや佛蘭西のベルンシュタインの如き作家

をも凌駕してゐる。
才人ゆくところとして可ならざるなきザングヰル、身は猶太人として生れ、宗教運動にも婦人參政問題にも萬丈の氣を吐いたが、彼がはじめて英吉利の文壇を驚動したのは、今から二十年前に出した『ゲトオ部落の兒』Children of the Ghetto (1892) の大作によつてであつた。倫敦の猶太人部落を描き、その貧民生活の慘狀を寫すと共に、猶太の富豪の內狀をも精細微妙を極めて描寫し得たその寫實の筆のあとには、作者がおのれの同族に對する精透の觀察と燃ゆるが如き熱情とを嘆稱しないものはないのであつた。この作の成功に力を得てのち、彼は更に筆を短篇に試みて、今は『闇を行く人人』They that Walk in Darkness (1899) の一卷に收められた幾多の短篇小說に、此部落を色々な側面から活寫した。今から十四五年前、かれはまたその才筆を劇の方面に用ゐて『るつぼ』The Melting Pot (1908) の作を書き、英米の劇場に上演せられて絕大の好評を博した。これはあの有名な露西亞のキシネフの猶太人虐殺から逃れて、米國の紐育に亡命して來た猶太の音樂家デイヰツドといふ男が、基督教徒の女との美しい戀物語を主題としたもの。米國は人種混淆の「るつぼ」と言はれる國だ。差別待遇のためにかなはじと見えた戀も、この米國といふ所で神の「るつぼ」に熔かされ、人種的反感を超越して、戀愛は遂にその至上の榮光に輝く。猶太人と基督教徒の女との戀を題材にした近代劇では、和蘭のヘルマン・ハイエルマンスの作『部落』も有名なやうだが、讀んで美しく壯快な

感じのする點では、ザングヰルの此作の方が遙かにすぐれてゐる。嘗てメンデルスゾオンを生んだ猶太人は、この二つの近代劇に於ても、兩方ともに音樂家として描かれてゐるから面白い。

十

最近に英吉利の文壇で、猶太人を題目として世の注目を惹いた作物が二つある。一はゴルスワアジイ新作の劇『ロイアルティイズ』で、これは倫敦に次いで紐育でも上場せられ、共に非常な喝采を博した。或一部の人が評して言ふやうな反猶太思想（アンチ・セミティズム）の作品とは思はれない。この作者の事だから、その態度は飽くまでも冷靜にして不偏なものだ。デ・レヸスといふ金持の若い猶太人が千磅の金を盜まれ、遂にそれを盜んだダンシイ大尉がピストルで自殺をするまでの徑路は、之を舞臺で見たならば探偵小說のやうな觀があるだらうが、作者の描かうとしたところが、英國の社會に於ける猶太人の生活の極めて皮肉な一面にあることは言ふまでもない。但しこれは劇としての創作であるが、他の一つの作は直接猶太人問題に關する議論として紹介せらるべきベロツグの近業である。

ヒレイア・ベロックはもと佛蘭西の生れ。英國に歸化して嘗て政界に活動し、その流麗暢達の散文によつて、今エッセイイストとして英國文壇の巨星の一人である。昨年彼が公にした新著『猶太人』の一卷は、このごろ英米で喧しくなつた所謂「猶太危禍」（ジユウヰッシュ・ペリル）（かつて日本人問題で黄禍（イエロ・ペリル）の語が行はれたと同じく）に對する彼の警告だと見るべきだ。基督教國民の間に在つて、いつまでも水に混つた油のや

うに永久に同化し難い猶太人は、結局世界の禍である、と言つて詳しくその特性を論述して、さて結論に言ふ。この禍を除くには二つの道あるのみだ。第一の法は排除(エリミネイション)であるが、これは徳義上おもしろくないのみか、實行も困難だ。第二は隔離集合(セグリゲイション)で、ベロックは強く此方を主張してゐる。即ち隔離と言つても、さきに大戰中に英國の外交家が肩を持つてやつたやうなザイオニズムの王國再建なぞをするのではなく、ただ西歐諸國に居る猶太人を各一團とみとめて、基督教徒との間に、相互の權利平等を確認する約定を結び、之によつて軋轢を少くしようと言ふのである。つまり獨立の別の集團として了つて、之と對等の約定をきめて隔離の法を取らうといふのだ。此案に就いては倫敦の言論界にも贊否區々の論は喧しかつたが、『スペクテイタア』の如きはこれがために非公式の調査委員を設けよとまで論じた。とにかくベロックの此近業は、米國に於て最近に自動車王フォオドが巨萬の財を擲つて騷ぎ立ててゐる猶太人排斥運動と共に、大西洋の兩岸に於て最も注目すべきものであつた。

序ながら、ベロックの此論に對して、さきに私が紹介したイング僧正が直ちに一矢を酬いたのは面白い。『スタンダアド』新聞に出たイングの文が、他の雜誌に轉載されたのを私は讀んだのである。先日わが日本で加特力教の使節問題で出た議論を想ひ出すと興味があるから、その一節を茲に引用する。イングは言ふ。

ベロック氏は佛蘭西人で加特力教徒だから、猶太人問題に關しても、大陸風な見かたをしてゐる。各國はみな

英國相應な猶太人を得てゐるので、英國には猶太人中の最良な者が來てゐる。そして仲間の市民として正しく遇せられてゐるのだから問題はない。善良なる英國人として我が國に居住してゐる者を、わざ〳〵その人種的起源を忘れまいとして、差別待遇するなぞといふベロック氏の所説は、英國の傳統に反するものである。――殊にまた氏は此問題の宗教的方面に就いては言つてゐないやうであるが、わざと之を省略した動機なぞも推察せられる。猶太人はその忠誠の精神を二つにすると言つて氏は反對するが、如何にもさういふ事はあり得るし、實際またある事だ。卽ちおのれの居住せる國に忠誠を盡くすよりも、おのが民族に對する義務に重きを置くことは、往々にして事實だ。しかし之と同樣な事が英國では或他の一派の人々に就いては否定すべからざる實際ではないか――卽ちベロック氏その人と同一宗門の人たちがそれだ。羅馬加特力教の人たちは英國史上に於て、猶太人よりも遙かに多く厄介の市民であつたのだ。

日本で羅馬教の法王至上主義だと言つてゐた同じ點を捉へて　この僧正は猛烈にベロックを皮肉つたものである。

十一

人間到るところ靑山ありと口には立派な事を言ひながら、祖先の墳墓の番人をしてかぢり附いてゐるやうな人種と、全く趣を異にしたものが猶太人である。世界に國土なき放浪の猶太民族、その優秀なるものは優秀なる國に行き、劣等なる者は劣小の國に移る。右に引用したイング僧正の文中にもあ

る如く、英國には猶太人中の比較的優秀なる者が集まると云ふので、"Every country gets the Jews that it deserves"とは、西洋での通語になつてゐるのだから面白い。ガリシアやウクライナあたりに居る猶太人と、英佛獨諸國のそれとを較べれば、殆ど月鼈の差があるのを見ても知られるだらう。

差別待遇も極端なのを見ると、失笑を禁ぜざらしむる程に滑稽なものだ。米國の南部では黒人を擯斥して、停車場の待合室から電車の箱に至るまで、『黒人入るべからず』と書いて、白人用のとは區別がしてある。以前は輕井澤の避暑地で、米國の宣敎師どもが自分たちの運動場に立札をして『日本人入るべからず』とやつたのは馬鹿々々しかつた。しかし西洋でこの猶太人に對する差別待遇に就いて、夏のさかり場などに出る掲示として洒落に傳へられてゐる文句がある。曰く、『肺病人と犬と猶太人と入る可からず。』

思へば思ふほど猶太人は不思議な民族である。國土は持たないが、國語は持つてゐる。それだけでも確かに歴史上の奇蹟だ。かれらの存在そのものが、——また國語の獨立それ自らが、基督敎國民に對する痛快なる抗議ではないか。もとのヒイブルウ語が、民族漂浪の間にさらに他の諸國の語と相交つて變化し、今日では Yiddish と呼ばれる彼等の國語が儼存する。もと〳〵彼等は學藝を重んじ文才にも長けてゐる。從つて最近五六十年間にこのイッディシュの語によつて書かれた立派な文學さへも有するに至つた。東歐諸國や倫敦や亞米利加に居住せる猶太人間に廣く讀まれるイッディシュの作

品は、殊に戯曲に於て秀拔の作が多い。その戯曲集が一冊英譯も出來てゐるが、更にそれを日本語に誰かが重譯した本の廣告を、こないだも新聞紙上で私は見たかのやうに記憶してゐる。

考へて見ると、今まで全然沒交渉であつた猶太人の問題を遂に日本までが氣にするやうになつた事は、たしかに日本が世界的になつたためであらう。喜ぶべきだ、心配するにも及ばないだらう。佛蘭西のルウル占領が忽ちにして日本の鐵や染料の相場に影響する今の時節に於て、それは寧ろ當然の事かも知れない。日本にもこれからは、極めて怪しげなるアンティ・セミテイズムの聲をそこいらに聞く事であらう。何と云つても何と騷いでも、世界はその動くところに向つて動いて行く。

東西の自然詩觀

一

この大きな問題をかかげてこれを精論細敍することは、二十枚や三十枚の原稿で盡くされ得べき事ではない。また私としても十分に考を纒めて見たわけでもないから、ただ平素から感じてゐる事を必ずしも理路を辿らずに思出した儘書きつけて責を塞ぐ事にする。

宇宙人生の一切の現象はそれが詩眼に映ずる時、すべて皆文藝の題材（サブゼクト・マタア）となり得る事はいふまでもない。わたくしは考察の便宜のため假にこの廣汎な題材を、(1)人事、(2)自然、(3)超自然の三つに分けて考へる。第一の人事は別に說明を要しないが、第二の自然とは、普通は天地山川花鳥風月といふ意味での自然、また第三の超自然とは宗教上の神佛はいふまでもなく、俗說巷談に見える一切の妖怪靈異の現象をも包含する。この三種の題材が如何に詩人によつて取扱はれたか、又その相互關係は如何なるものであるかを考へることは、詩文の研究者に取つて最も重要な、そして興味ある問題である。私が今第二のものに就いて東西詩觀の比較を述べるとき、自分は矢張りこの便宜上の分類を土臺にして置く。

二

先づ十八世紀以前に就いて考へて見る。

歐洲文化の源泉である希臘の思想は、人間本位であつた。人間を中心としてすべてを見たのである。アポロの神殿に揭げられた『なんぢ自らを知れ』といふ言葉は、色々の解釋から見て此思潮の根柢であつた。だから自然に對してもその態度は常に人間本位のもので、自然を人間と引き離して見て居る傾向が著しい。假に名づけて主我的とでも言はうか。昔からの東洋人のやうに沒我的忘我的の心境に入つて、自己を自然のなかに沒入し、その懷に抱き込まれ溶け込んで了つてゐるやうな風が殆ど見られない。東洋人のは全く自我感情を離れて了つて、自然と人間とが一つになつて、そこから出來た文學である。希臘のは飽くまで人間本位で、自然をこれに對して從屬の地位に置いてゐる。ホオマアの大詩篇からして既に、その中には古今に絕した雄麗な自然描寫があるに拘はらず、以上の點に於て和漢の文學とは著しき差があると思ふ。

歐洲思想の他の一大源泉は希伯來の思潮であるが、これはまた神本位で、超自然といふものを最も重く見てゐる。自然は單に神意の顯現に過ぎないと見るのだ。人間の一切を捧げて神に奉仕し、快樂美感を斥けた禁慾主義の中世の高僧は、瑞西を旅するとき強ひて美しい自然の景色に目をそむけたといふ。のち文藝復興期に入つてからも、あの古文學に通じ十分の教養（カルチュア）のあつたエラズマスほどの人で

さへ、アルプスの山越えに何を見、何に心を惹かれたかといへば、それは唯いぶせき宿屋の惡臭、酸つぱい葡萄酒等であつたことを書翰に書いてゐる。瑞西から伊太利へ出るあたり萬古の雪をいただける山嶽美は少しも彼の心を動かさなかつたのだ。さういふ心持はわれわれ東洋人の殆ど理解する能はざるところで、わざ〳〵人里遠き山間に庵を結んで風月を友とした西行や芭蕉の心境とは、殆ど正反對の極端に在るものだといつて差支ない。近代思想の淵源たる文藝復興期も、詩文の題材から云へば『超自然』の興味が『人間』に對する興味に移つたに過ぎない。換言すれば古學の復興に促されて、再び昔の人間の興味が復活されたに過ぎなかつた。歐洲人が眞に東洋人と同じ程に自然美に目ざめたのは、更にこれよりもずつと後の時代の事である。

三

西洋の詩人が眞にわれわれと同じやうに自然を重く見るやうになつたのは近く十八世紀浪漫主義（ロマンティシズム）勃興以後の事である。先づざつと最近僅かに百五十年間位の事だと見て可い。固よりそれ以前の文學にも自然に對する興味のあつた事はいふまでもない。しかしそれは多く目錄的の敍述か說明に過ぎなかつた。observation や description であつて、まだ reflection とが interpretation の域までは進んでゐなかつた。或は人事や超自然を主題として、單にその背景として或ひは象徴として用ゐられたのであつた。かの田園の自然美を描いた昔からの牧歌體でも、或はまた沙翁劇とか、ダンテの『神曲』

とか、ミルトンの『失樂園』のやうな大作を見ても、之を東洋の詩文と比較すれば、自然を取扱ふ態度に於て、よそ〳〵しいところがある、奥行きが淺い。人間とか神とか惡魔とかいふものをいつも自然と對立せしめ、或ひはそれに從屬せしめてゐる傾向が、和漢の抒情詩人などとは根本的に趣を異にしてゐる。

都會生活の人工美を離れて眞に田園の自然美をなつかしむ心持が西人の心に强く起つたのはルソオの『自然に歸れ』の說に促された事も多からうが、近世浪漫主義の此方面に特に著しき貢献を爲したものは英吉利の文學であつた。元來英吉利人殊に蘇蘭土人などは、大陸の人よりも昔から自然美に對して遙かに鋭い感覺を有つてゐたので、庭園でも、幾何學的の線で出來た佛蘭西式に對して英吉利風と呼ばれるものは、矢張り支那日本のやうに自然の山河その儘の美を寫すに近いものであつた。文學の方では普通に、十八世紀のジェイムズ・トムソンが古への牧歌體から換骨脫胎して四季折々のながめを詠じた『春夏秋冬(ザ・シイズンス)』の作を以て、此思想傾向の源流だと見なしてゐる。單に英吉利ばかりでなく、佛蘭西や獨逸の浪漫派にも此作の影響感化が及んで、近代の歐洲文學には、東洋趣味と同じやうな love of nature for its own sake が盛んに起つたのであつた。後のコオルリッヂやワアズワスの出てから以後の事は今更ここに說くまでもなからう。

ブランデス氏が『十九世紀文學主潮』の第四卷に說いたやうな自然讃美の文學が漸次に發達して、

それが遂に今日二十世紀の佛蘭西に歐洲最大の自然詩人と仰がれるフランシス・ジャアムの如き人を出すまでの間に、西洋人の自然詩觀が變遷して、われわれ東洋人のそれと漸々接近した來たのであるとわたくしは見てゐる。

若し西人がよくいふやうに文藝復興期を以て『人間』を發見した時代だとするならば、十八世紀の浪漫主義勃興は、その一面に於てたしかに『自然』の發見であつたと言へるだらう。

これは繪畫に於ても同様で、眞の山水畫、風景畫が歐洲に出たのは矢張りこの十八世紀以後の事である。文藝復興期の天才で最もよく自然を透觀したレオナルドでも、風景は單にその大作の背景たる過ぎなかつた、ラファエルの多くのマドンナの像に、山水はやはり點景として用ゐられてゐる。和蘭派の畫家でも皆同じことだ。それが十八世紀になつて英吉利のヰルソンとなり、ゲインズボロオとなり、またコンスタブルやタアナアを出すに及んで、東洋の山水畫と同じ意味での風景畫が出來たのだ。人物を從として自然を主題とした多くの作は、十九世紀に入つて歐洲繪畫の最も重要なる位置を占めるに至つた。遂には佛蘭西のコロオを生み、フォンテエヌブロオ派となり、ミレエから印象主義の外光派に入つて、そこに純然たる自然美を摑まうとする藝術が近代に大成せられたのである。

日本の文學には『超自然』を取扱つた宗教文學の大作もなく、『人間』を描いて極致に達した沙翁劇のやうな大戲曲も出なかつた。そはやがてまた日本の文學が『自然』の眞髓を摑み深くその美を味

得した、多くの和歌俳句の抒情詩人を出だした所以ではなからうか。

四

外國から儒佛の思想を輸入するよりも前の日本人は、やはり希臘人のやうに人間味を中心にした文學を有つてゐた。上古はもとよりのこと、萬葉集の諸詩人にも人事を歌つた人が多かつた。かの山上憶良の如き多く花鳥風月を詩材とせずして、今日謂ふところの社會問題ともいふべき『貧窮問答歌』の如きを得意とした作者が多かつた。ところが後の古今集となれば歌の數量から見ても四季は六卷、戀が五卷となつて自然が最も重要な題材となつてゐる。元來日本は希臘のやうに氣候もよく、風光明媚の國であるため、自然美に親しみそれに慣れて、さほどに心を動かさなかつたといふ點もあらう。ところが自然を讃嘆する事の多い支那文學の感化を受けるやうになつて後、それまでは比較的冷淡であつた自然の美に對して眞に目ざめるに至つたのだといふ説に、私は一理あると思ふ。

萬葉以後の日本詩人が支那文學に刺戟され啓發されて、自然美を歌ふやうになつてからは、文學も亦支那の文人畫に見るやうに、漁夫とか仙人とかがいつも山水畫中の點景に用ゐられてゐると同じく、自然を主とし人間を從とする有樣になつた。しかし日本の自然は支那の如く大陸的の雄大な險奇なものでなく、むしろ溫雅にして瀟洒なる、晴やかな愛すべく親しむべきもので、人をして恐怖せしめ陰鬱ならしめるやうな景色が甚だ少い。殊に平安朝文學などは宮廷臺閣の貴公子――所謂櫻かざし

て今日も暮らしつといふ大宮人の文學であるだけに、如何にも呑氣で、悲痛深刻の調がなく、自然に對してただその美にあこがれ、これを讃嘆しこれを謳歌するといふ傾向をのみ旺にした。後にそれが更に支那傳來の仙人趣味となり、鎌倉時代に入つて宗教的な禪味といふ分子を加へて、所謂雅趣俳味風流などといふ西洋人の殆ど理解し得なかつた詩情を、山川草木花鳥風月の世界に見出すに至つたのだ。現代の殺風景沒趣味なる日本人が、今日なほ不思議にも雪見酒、苔むした庭石、月下の蟲の聲のやうな、西人の鑑賞力の及び得ない exquisite な自然味を解し得るのは、全く右に述べたやうな歴史的關係からだと見るほかはないと思ふ。

五

西洋人といふ者は自然に對してゐながらも、行往坐臥造次顚沛も『人間』といふものの忘れられない人種である。彼等は庭を造るにも木を植ゑるにも、そこに强ひて人工を現はし『人間』といふものを出して見せなければ承知が出來ないのである。幾何學的の線で通路や芝生や花畠を仕切り、散髮屋が丁稚の頭を刈り込むやうに植木の手入れをしなければ、成つてゐないと心得てゐる。枝を矯め葉を刈つても、わざ〳〵『人間』を隱して忠實に自然の姿態を學ばうとする東洋風とは全く正反對の行き方だ。日本の生け花と西洋の花束とを較べても同じ感がある。

東洋人は自然に對するとき、そこに人間味の强く出てゐる事を『俗』なりとして斥けた。仙骨を尊

ひた支那の詩人のなかに、白樂天を見出してその詩を俗なりと評する者は東洋の批評家である。嘗てラフカディオ・ヘルン先生の英文學の講筵に侍したころ、先生がオルドリッチの作『紅葉』と題する四行詩（クワトレイン）を引用し、

October turned my maple's leaves to gold.
The most are gone now, here and there one lingers:
Soon these will slip from out the twig's weak hold,
Like coins between a dying miser's fingers.

この技巧を激賞せられた事がある。しかしどうしても私には感服できなかつた。梢に一枚の木の葉が散り殘つたのを、死にかけた慾深爺の指の尖に貨幣を持つてゐるやうだといつたこの句は、表現法として如何にも巧妙には相違ない。しかし私ども東洋人の目にはこの四行詩が詩にならないほど俗な物だと思はれる。東洋人は人間を離るる事益々遠く、自然の中に沒入すること益々深ければ深きほどそこにまことの『詩』が見出されるのだと感ずるからだ。

東洋の厭生詩人は人間を棄てても自然を棄てようとはしない。宗教生活に入つて超自然に親んでも、自然に對する愛を否定する事は決してなかつた。否な否定しないのみかその愛は益々深くなるばかりであつた。西洋の中世の高僧がわざわざ瑞西の絶景に目をそむけて通つたやうな例は、東洋に於

ては絶無である。『人間』を厭離して『自然』の懐に抱かれ、そこに宗教味が加はつて東洋の自然趣味が成立したとさへも考へられる。西洋では人間を厭ふのあまり自然を懐かしむに至つたバイロンのやうな厭生詩人が出たのは、矢張り浪漫主義勃興以後の事で最近僅かに百年位の例ではないか。世を厭ひ妻子を棄てても、西行法師はなほ自然を愛し風月を友として『花のもとにてわれ死なん』と歌つたのである。

裸體美術の問題

二十年來殆ど日本藝苑の年中行事の一つのやうに、今年も亦文部省展覽會での朝倉氏の裸體像が問題になつた。美しい彫像を幽閉したり、その一部を布片で蔽ふやうな殘忍な行りかたが、藝術の權威を認めない幼稚な考から出てゐる事は今更言ふまでもない。藝術品を春畫や淫賣婦と同樣に扱ふ事を藝術の立場から彼此と論ずるのは、今更之を言ふべく餘りに陳腐である。ただ社會の風教或は趣味養成の問題として、私はこの陳腐な年中行事に就いてただ茲に一言するの自由を得たい。

古代の希臘人が考へたやうに美と善とが果して一致するものなりや否やは別問題としても、美しきものを公衆に示す事が、趣味の向上によつて世の風教を益する事は言ふまでもない。文展そのものの存在の理由も亦一つは茲に在るのだらう。ところが世人の藝術鑑賞の眼が低くて、未だ美しきものを美しと見る域に達しないから、裸體彫像は引込めろと言ふ。これは明らかに矛盾撞着である。然らずんば甚だしく卑怯な態度だと言つて可い。

少年時代に讀んだマコオレイ卿の『ミルトン論』のなかに、今もなほ自分には忘れ難い、そして時時思出す事を餘儀なくさせられる一節がある。ざつと譯せばかうだ、『民衆が自由を用ゐるに適する

までは自由を與へるべきではない。之を信じて自明の理だと思つてゐる多くの爲政者があるが、それは昔話にある泳げるまでは水に這入らないと決心した愚人(フウル)の言ひ草だ。人間が奴隷的境遇に在つて而も賢良となるまで自由を待たねばならぬものとすれば、恐らく自由を享有し得るの日は永遠に無いであらう。』

子供に水泳はさせたいが水に這入る事は危險だとして禁じてゐる。さりとて疊の上の水練ではものにならないから、何時まで經つても泳げはしない。況や泳がせるためにとて水練場を設けて置きながら、その最も重要な、また最も稽古し易い一部分に出入を禁ずる者ありとすれば、それは大なる矛盾ではないか、怯懦ではないか。

言ふまでもなく人體の美は神樣の造つた凡ての物の中で最も優れた物である、最も形の整(とと)のつた物である。人體美の研究が美術製作者の研究に大切であると同じく、鑑賞者の修業にも、大切なばかりか、それは寧ろ初歩の階段に屬すべきものだ。形や線の美に對する一般公衆の鑑賞力を養ふためには、裸體藝術を飽くほど見せることが最も賢明なる行りかたである。これは水練場の最も淺い所で、泳ぎの稽古には一番初等の大切な部分に屬すべきものだ。裸體像の美をすらも解し得ざる程の者に、衣物(きもの)を着せた人體の美が解ると思ふならば、それは寧ろ滑稽である。その證據に、美人畫なぞを見る多數の者は、藝妓の顔でも眺めると同じ心持か、然らずんば子供にでもある色彩感(カラア・センス)に訴へるか、或はまた模

樣圖案の美として見てゐるだけで少しも藝術品としては鑑賞されず、その結果、文展の繪畫は年ごとに益々俗化し墮落して行くのみではないか。

今から二十年ほども前に、九鬼氏がこの裸體禁止の問題に就いて當局の蒙を啓かうとしてから、今日に至るまで猶裸體美術に殘酷な束縛と制裁とを加へる必要があるほどに、公衆の美術鑑賞眼が進歩しなかつたとすれば、それは全く二十年以來禁止束縛して來た罪であると思ふ。水練場の初等な大切な部分をいつまでもいつまでも閉鎖してゐたからである。

藝術鑑賞の眼なき公衆に對して、劣情挑發の憂ありとして裸體像をさへ禁止するならば、衣物を着た女の繪も撤去し禁止するか、或はすべて別室に置くのが至當である。その有害無益である事に於て少しも異なるところは無いからだ。そして展覽會と言へば靜物畫か或は風景畫のほかは斷じて許さない事に定めたら如何だ。これは藝術鑑賞者としての日本の公衆が、全く病身な子供のやうに水練の稽古など思ひも寄らぬといふと同樣、或は親が臆病で將來は泳げる子供にも水に這入る事を一切許さないのと同樣、極めて老人じみた卑怯な態度ではないか。これでは何時まで經つても公衆の趣味と美術眼とは改善されず、泳ぐ事の出來ないために、この陳腐な問題が長へに年々繰返されることであらう。

小說などには實際如何はしい物のあるのは事實だ。これらに對して嚴重なる取締をする必要は無論ある。しかし既に專門家たる審査員が認めて優秀なりとした藝術作品に對しては、十分寛大な措置を

執る事が至當だと思ふ。殊に世間にも藝術批評家といふ專門の水練の師匠が、絶えずその意見を公にして世を指導してゐるのではないか。いつまでも小供を病人扱ひにして弱い者に仕上げるよりは、一層思ひ切つて水練の稽古をさせたら如何だ。

見せぬといへば土左衛門でも見たがるのが人情だ。小説のなかに○○があると、そこばかりを穿鑿して讀む人さへもあるさうだ。裸體像の一局部に布片を纏ふ如きは、美を破壞するは別問題としても、それが却つて強い一種の暗示作用（サゼスチョン）となつて有害の結果を招く事も考へて見ねばなるまい。まことに失禮な申分ではあるが、警官は裸體像を見て自ら劣情を挑發されたる自己の經驗に徴して、他を忖度するのかは知らないが、それなれば御心配には及ぶまい。教育の進んだ今日、一般公衆の多數は警官の多數よりも遙かに高い審美眼を具へてゐる。御安心あつて然るべきだ。

歐米では公衆が古來裸體美術に慣れてゐるから寛大な取扱をするのだといふ説も、取るには足らない。西洋人は元來日本人よりも強く肉感的であるだけに、少數は矢張り劣情を挑發されてゐるので、その極端なる者に至つては偶像姦などといふ色情狂さへ珍らしくない。しかしこれらは水練の時に溺死する子供のあると同樣、何とも致方がない。藝術品としての裸體は歐洲でも許し、米國の如きは此點に於て全く放任主義である。紐育ボオルティモアあたりでは、酒店（バー）の額には必ず一枚位は裸體畫を見るのみか、なかには藝術上の價値の頗る疑はしいものをさへ見るのである。況んや博物館や展覽會

の美術品に對して干渉がましい事をした例は、未だ嘗て耳にした事がない。日本は梅毒痳病の廣告を電信柱や新聞紙に公然と掲げる事を許しながら、藝術に對しては風俗呼ばりをする國である。單に社會の風紀と言ふ上から言へば、裸體美術以上に有害なものが日本には非常に多いに拘はらず、それ等を默許して置きながら、いつも文學や藝術をのみ罪ありとする理由は、私共の解するには苦しむところである。

裸體彫像の幽閉は藝術の權威を認めざると共に、多數の公衆を色情狂者と見做して侮蔑したものである。斯くの如きは實に文明國としての國辱ではないか。

女學校では何々すべからずと言ふ十箇條を作つたとかいふ話を嘗て聞いた。日本の行り方は凡べてがこの『べからず十條』主義の消極的態度だ。新進氣鋭の國民らしい大膽なる積極進取の態度が少しもなく、如何にも保守退嬰の老人風である。米國の如き極端なる積極主義の國に較べると、特に此感が深い。危い事をすべからずと禁ずるよりは、良い事をせよと何故勵まさないのであるか。一方に今日の如き沒趣味の教育をして置きながら、小説を讀むなと禁ずるよりは、寧ろ進んで趣味教育感情敎育に何故十分の力を致さないのであるか。西洋文明史の或時代にはビサンシュウムの偶像破壊者や、サヷナロオラやまた淸敎徒の一派の如き、人體美に極力反對した者も多かつたが、今日裸體美術を淫賣婦扱ひにして居る國は、苟も文明國には無いのである。

外國と對比して考へる場合、國際的利害を超越したからいふ問題に關しては、外人の言をも注意して見る價値があると思ふ。十月二十四日の英字新聞『ジャパン・アドヴタイザア』は、その社說欄に朝倉氏の彫刻問題を論じて下のやうに言つた。

『朝倉氏の作品が出品中の他の多くの裸體像と異なる唯一の點は、それが遙かに美しく、遙かに優秀な彫刻だといふ點にある。警官が特に此作を選んで不可なりとした理由も恐らく爰にあるだらう。どうも左樣としきや思はれない。この場合警官の行り方は藝術に對する明白なる打擊で、日本の眞面目な高潔な藝術家に對する無遠慮な妨害だ。』

在留の外人からかかる論評を下される事は果して日本の名譽であらうか。此言葉は野蠻行爲たる藝術破壞主義を婉曲に言つたものだとも、見れば見られるでは無いか。これを、問題の彫刻の製作者たる朝倉氏自らが新聞紙上に公にせられた文中、

『此膚淺な解釋を今更喋々非難すべくもないが、全くこれでは大變な誤解の仕方であつて、非常に困つたことと言はなければならん。「彫刻藝術」といふものから「人體美」を滅き去つたら、そこに何が殘るか。それは眞に零ではないか。彫刻はそれこそ藻脫の殼と同じではないか。こんなことを大聲を發して繰り返すだに我々は情なく感ずる。……』

の語と併せ考へて、私は日本現代の文明の何處かに大きな缺陷がある事を示されたやうな氣がした。

いくら軍備は整つても、成金は出來ても、これではまだどこかに國民として大きな缺點がある事を感ずると共に、此方面に於ける今後青年の努力が必要だといふ事を特に痛切に感じた。

西班牙劇壇の將星

——ハシント・ベナヴェンテ——

一 浪漫的

二葉亭の作『その面影』の英譯を讀んで彼國の或評家は、日本にも近代生活の苦惱があるのかと言つて驚いてゐた。英米人は今も猶日本を華魁(おいらん)と武士道との國だとでも思つてるらしい。ちやうどそれと同じやうに、私どもは西班牙を歐羅巴で唯一の『古い』國だと思つてゐる。大戰爭の渦中にも投ぜず世界改造の大浪にも洗はれないで、今なほ美しい浪漫的(ロマンテイツク)な夢路を辿つてゐる別世界であるかのやうに心得てゐた。西班牙の人は、日本人が裸相撲を喜ぶ如くに今なほ殘忍野蠻な鬪牛の技に狂奔し、舞妓(おしやく)の人形姿を愛するやうに色彩の濃艶な西班牙特有の舞姿を賞し、また婦人を蔑視し幽閉してゐる事も日本と大差なき狀態にあるからだ。

浪漫主義(ロマンテイシズム)は南歐羅甸系の國の特有物である。中歐北歐の諸國が、ずつと早く古い浪漫的(ロマンテイツク)な夢から醒めて了つた今日、その生活に、その藝術に、今なほ昔の如きロマンスを夢みてゐるものは西班牙ばかりではない、伊太利もさうだ。手近な例が、ダンヌンチオのフユウメエ問題における行動のごとき、

ちよと一部の頑冥な日本人などを感服させてゐるやうだが、實は極めて舊弊な時勢後れの思想から來てゐるので、一顧に値しない舊浪漫主義に他ならないのである。さう考へて見るとダンヌンチオの藝術そのものも『死の勝利』でも『焔』でも『快樂兒』でも、殊に又彼の抒情詩の如きでも、皆甚だしく浪漫的な作物ばかりである、實行の世界に現れる時フユウメエの騷ぎの如き下らない形になつて現はれる浪漫主義が、長へに新な長へに華やかな永遠の生命を有する『藝術』の衣を纏うて表現せらるる時にのみ、なほ優に現代の人心を動かすに足る魅力を持つてゐるのだ。だからわれわれが彼の藝術上の作品に敬服するのは、われわれが今なほ古くさいユゴオの浪漫主義に動かされ『噫無常』や『ノオトル・ダアム』を讀んで涙を流す場合と全く同じだ。舊時代の武士道に何の興味も有たない者でも、劇化された忠臣藏の芝居は矢張り面白いと思ふ。そこに藝術表現の永遠性があり、不朽性があるのだ。つまり飛行機で騷ぎ廻はつたダンヌンチオの態度は、ミソロンギで客死したバイロンの浪漫主義に他ならぬと見れば可い。しかし今わたくしは伊太利を論ずるのが主意ではなかつた。

二　西班牙劇

西班牙は何といつてもカルメンの國だ。西班牙趣味には、あくどい濃艶な色彩がある。中世騎士時代の面影が潜む。昔のカルデロン以來の意氣とか名譽とかいふ理想主義が、つい近頃まであの國には附纏つてゐた。せち辛い『近代』の風潮をよそにして、勞働問題、宗教問題、婦人問題などに人心

を擾き亂される事が極めて少かつた。

しかし桃源のやうな生活はいつまでも續くものではない。外來思想なぞとよそ事のやうに思つてゐると、足もとからも鼻先からも火は燃えあがる。現實の多くの『問題』は遠慮會釋なく焦眉の急に迫り來るのである。西班牙に於ては、かくのごとき浪漫主義(ロマンテイシズム)から現實主義(リアリズム)へ向ふ思想の推移が、文藝のうちでも最も多く民衆藝術の性質を有する演劇の上に極めて鮮やかに現はれた。殊にまた外國人の目から見る西班牙文學では、カルデロンの昔からして戯曲が一番重要な地位を占めてゐる事は爭はれない事實だ。

前世紀以來、西班牙最大の戯曲家であつたホオセ・エエチエエガアライは恐らく、ほろび行く浪漫主義(ロマンティシズム)が殘した最後の閃光であつたらう。彼と雖も明らかにイブセンの問題劇の影響は受けてゐた。しかしイブセンの『幽靈』に最も近似した、遺傳といふ題材を取つた傑作『ドオン・ホワアンの子』でさへ明らかに浪漫的(ロマンティック)なもので、『マリアナ』や『ガレオト』の如きに至つては、內容外形ともに近代的傾向を距ること甚だ遠きものであつた。かれは五年前すでに世を去つた。

しかし此エエチエエガアライの脈を引いた新人ホアキン・ディセンタの戯曲は、同じく浪漫的(ロマンティック)でありながらも、その同情は既に無產者階級に移り、彼の最も有名な作である『ホワアン・ホオセ』(一八九五年作)には階級鬪爭、勞資衝突が背景として描かれてゐる。劇の主人公ホワアン・ホオセが自分

の情婦を奪つた傭主パコを殺すといふ慘劇は、既に尋常一様の戀愛悲劇とは趣を異にしてゐる。しかし近代劇としてなほ餘りに多く歌舞伎風の古い浪漫的（ロマンテイツク）分子を含んでゐるために、とても社會劇問題劇などと考へらるべき性質の物ではない。

三　ハシント・ベナヹンテ

しかし今この國で最大の戲曲家として歐羅巴全體に知られてゐるのは ハシント・ベナヹンテ (Jacinto Benavente) で、彼こそは純然たる現實主義者、また新機運の代表者である、浪漫主義（ロマンテイシズム）の破壞者としての彼の地位は、まさに英文學に於けるバアナド・シヨオに比すべきものだらう。いやにお上品ぶつて旦那風を吹かしながら、實は無知で遊惰で不眞面目である西班牙上流社會の面皮を心地よくもひんめくつた彼の滑稽劇には、一種輕妙な面白味があつて、皮肉で痛快な北歐の作品とはおのづから趣を異にしてゐる。殊に虛僞の多い女性の生活にその得意の鋭いメスを向けるとなると、腕の冴えは一段と目ざましい。

ベナヹンテは有名な醫者の子である。千八百六十六年八月十二日の生れだから今は五十五歲である。マドリツドの大學で法律を修めたが、詰らないので遂に文筆の業に身を捧げ、はじめ抒情詩集や小說に筆を染め、詩集としてもすぐれたものがあると聞いてゐる。千八百九十三年以後は全く劇壇の人となつたが、劇作家として立つまでには俳優として舞臺に出たこともあつた。今日でも時々自作脚

本なんかの或役は自分で演るのださうだ。その處女作『他人の巣にて』といふのが、マドリッドの喜劇座で上演せられたのは千八百九十四年であつた。しかし飽くまで現實主義の立場から時代を描かうとした彼の近代的作風は、最初の間は隨分ひどく世間、殊に舊思想家から迫害もせられ冷遇もせられた。然し新思潮の大勢は遂に彼をして今日歐洲文藝界の第一人者として立つに至らしめた。最初名を成したのは戯曲『知られたる人々』(一八九六年作)『野獸の食物』(一八九八年作)などで、共に西班牙上流社會に對する諷罵であつた。殊に前者は或貴族の貧乏な可憐な娘を中心人物として、之に對照してその周圍に在る幾多の姦惡な利己的人物を描き、貴族社會の內幕を描いたもので、彼が傑作の一つとして知られてゐる。

ベナヱンテの劇は言ふまでもなく社會批評である。しかしイブセンやシヨオやブリユウやエルヰユウなどの問題劇とは稍趣を異にして、何等宣傳者らしい臭みが無い。飽くまで現實をその儘に描いてそこに問題を暗示し、人をして考へさせ反省させようといふ自然な行きかただ。同じく寫實劇と言つても、此人の作品には如何にも西班牙らしい花やかな『詩』があり情熱がある。最近また轉じて象徴劇とも言ふべき作にも成功してゐた。

かれの作すべて二十卷、最近には全集の上梓に着手したと聞く。脚本の數八十、また創作のほか飜譯にも筆を染めて、沙翁の『から騷ぎ』『十二夜』等をも西班牙譯したと聞く。最近十年名聲益々高

く、その作物數種は羅甸亞米利加諸國と最も關係の深い米國に於て、近頃英譯が出版せられた。その作中、客觀的描寫として最も成功したと言はれる『知事の妻』『土曜の夜』、レオナルドの名畫ジヨコンダの千古不可解の謎の微笑に新解釋を與へた『モナ・リサのほほゑみ』、また美しいお伽噺のやうな『書物から總べてを學び得た王子』のごとき傑作は、今ではこれらの英譯本によつて、西班牙語を讀み得ない私どもにも味はれ得べきものとなつた。英譯になつてゐる諸作中、『ラ・マリケリダ』は米國で實演せられて最も多く成功した傑作として知られてゐる。

最近數年間大戰爭のためにさびれ果てた歐洲文學のうち、獨り戰亂の巷をよそにして藝術創作に力を注ぐを得た西班牙の文壇には秀拔な作品が尠からずある。小說家としていま歐洲最大の作家の一人であるペレス・ガルドスはまた戲曲にも筆を染めて成功し、クインテロ兄弟、マルクイナ、リヴアス等の新作家が續々輩出して劇壇を賑はしてゐる。殊に小說に於て近頃最もひろく歐羅巴諸國で讀まれたものは、矢張りこの國の作家ブラスコ・イバニェズが歐洲戰爭の慘劇を材料にした『默示錄の騎士四人』(死と戰と疫病と飢餓)であつた。西班牙のゾラだと言はれる程までに寫實的なこの作家の描寫にさへ、なほ浪漫的(ロマンティック)の色彩が甚だしく濃厚であるのは、同じ人の『伽藍の影』の如き作と併せ讀む者の誰しも氣づく所であらう。

戲曲の梗概を聞くことは、御馳走の噂だけを聞かされるよりも面白からぬものである。ただ私はベナヹンテの作風を紹介せんがために、かれの名作二篇を採つて敢へてこの面白からぬ藝當を演ずる。

ベナヹンテの傑作のうちには、農民の生活や地方小都會の上流の内幕を材料にしたものが多い。わたくしは今この部類に屬する作の代表的なものとして、『ラ・マルケリダ』（一九一三年作）と『寡婦の夫』（一九〇八年上演）の二篇に就いて簡單に述べよう。

『ラ・マルケリダ』は昔から西班牙固有の名物ともいはるべき、血なまぐさい殺人悲劇である。百姓の寡婦のライムンダは二度目の若い亭主エステバンと暮らしてゐるが、前の夫との間に出來た娘にアカシアといふ女がある。ライムンダは此娘に好い婿を得させようとし、また言ひ寄る男も多いのであつたが、娘は相手にしようともしない。それもその筈、娘はひそかに母の現在の夫であるエステバンと戀に落ちてゐるので、周圍の者はそれを知つてゐるに拘はらず、母のライムンダは全く氣附かずにゐる。遂に最後の第三幕のところで、ライムンダは娘に向つて、自分の亭主のエステバンを父と呼ばせようとする。娘はエステバンにキスして、どうしても父とは呼ばない。母はここに始めて事の眞相を知つて烈しくそれを咎めると、娘の熱烈な返答が意外である。

ライムンダ『お前は、エステバンをお父さんといはないんだね。氣絶したんだらうか。あら、唇と唇と。そして腕に女を抱いてるんだね。お放しよ、お父さんといはない理由(わけ)がこれでいよ〳〵解つ

―。全くお前の罪だな、いま〳〵しい。
アカシア『さうですとも。だから私をお殺しなさい。眞實(ほんとう)ですとも〳〵。今まで私が戀しと思つたのは此人だけなんです。

娘は飽くまでも西班牙風の熱情の女である。この熱情の女の熱烈な言葉は悲劇の最後をなして、今は既に野獸の如く父もなければ母もなく娘もない、ただ焰の如き戀があるばかりだ。エステバンは遂にライムンダを銃殺する。

表題の『マルケリダ』は英語のパッション・フラワア（熱情の花）、即ち西蕃蓮(とけいさう)の事である。この劇の第二幕に『水車場ちかく住む女を戀する人は禍の日の戀をする。自分が戀する戀もて戀をするゆゑ、その女を情の花(パッション・フラワア)と呼ぶ』といふ意味の歌がある。ライムンダはこの歌を聞いて、

『水車場ちかく住むものといへば私たちの事だ、皆がさう呼んでゐる。この家の事だ。して水車場のそばに住む女といふのは、娘のアカシアに相違ない。誰でも皆この歌を歌つてゐる……。娘のことを情の花といつてゐるのか。さうださうだ。しかし禍の日に戀する男とは誰の事であらう?』

誰の事だかライムンダは知らないのであつた。知らないから先に述べたこの悲劇の大團圓が出來たのである。作者はその伏線として此歌を第二幕に出し、また此戲曲の表題ともしたのである。

『寡婦の夫』は純粹の喜劇(ファアス)である。極めて寫實的な風俗劇の常として、例のお上品屋からは隨分非難

攻撃を受けたさうだが、社會一般からは歡迎せられた芝居であつた。女主人公のカロリイナは國務大臣で一世の重望を負うた政治家の未亡人である。それが今は先夫の同志の友であつたフロレンシオと夫婦になつてゐる。明日はいよ〳〵先夫の銅像の除幕式だと云ふ、その前の日の出來事だ。

カロリイナは現在の夫フロレンシオと相携へて共に先夫の銅像除幕式に列席する事を苦にして、しきりに世間の思はくを氣にしてゐる。また銅像建設委員の方でもこの像と一緒に『眞理』、『商業』、『工業』といふ三つの女神の裸體像を据ゑる事に就いて、色々と反對があつたりして紛議する。

そこへ、女主人公カロリイナに對して好感を持つてゐない先夫の妹たちは、明日の除幕式を當て込んで今度新しく出版された先夫の評傳の書を示す。その本の二百十四頁のところを開けて見ると、故人の驚くべき書翰が出てゐる。それは故人が嘗てこの書の編者カサロンガに寄せて自分の身の上を喞ち、將來を悲觀した述懷の手紙であつた。その文面には、

『人生は悲しい。自分は生れてからただ一度戀をした。ひとりの女しきや戀した覺えはない。それはわが妻である。また唯一人の友をしきや信じた事はない。それは友人フロレンシオである。この妻とこの友と、自分が生命を捧げてまでと思ひ込んだ此二人が……嗚呼どうして自分はそれを告白しよう、どうも我ながらに受取れない事のやうに思ふが、實はこの二人は戀をしてゐる。內證で兩方から氣も狂ほしい戀をしてゐるんだ。』

この政治家の死んだ後いま夫婦になつてゐる、未亡人カロリイナと、親友であつたフロレンシオの二人は、實は彼の生前から既にかうした不義の戀に落ちてゐた事が、此書翰によつて今素破拔(すつぱぬ)かれたのだ。フロレンシオは此手紙の僞造である事を主張し誹毀の告訴をしようとし、カサロンガに向つて決鬪を申込まうとまで敦圉(いきま)く。

そこへ意外にもこの評傳の編者カサロンガが面會を求めて來る。彼は常て相應に名を成した文士であつたが、多年失意の境に居て遂に田舍廻はりの活辯とまで成下がり（西洋でも西班牙あたりでは日本と同じく活動寫眞に辯士がゐる）、今では金のためなら何でも書くといふ男である。彼は言葉巧みにフロレンシオの材幹を賞揚しなどして、その反對に故人の愚物であつた事など語り、いつの間にかフロレンシオと妥協して了ふ。あの手紙は眞赤な僞物である事をも世に發表しようといふ事になる。結局は金を貰つて事濟になるのだが、肝腎の書物は既に世間に撒布されてゐやしないかと思ふと、それはまだ少しも賣れて居ないのだといふ話。そこでフロレンシオは二千圓を出して初版全部を買收して、事は落着する。その間に一方ではまたあの裸體像が問題になつて、婦人連は除幕式に參列を拒絕するといふやうなわけで、肝腎の除幕式の方も延期になり、この一場の喜劇は了るのである。

意外に次ぐに意外を以てして、最初緊張させて置いた讀者の心持を急に弛めて了ふところに此喜劇は成立する。ベナヴェンテの喜劇は概してかういふ輕妙な特色を生命としてゐるもので、時代風俗に對

する諷罵としてはさまで痛烈なものとは思はれない。わたくしなどは矢張り、彼の悲劇の方に見られる熱情味と深刻味とに於て、彼が歐洲の劇壇に於ける地位を認め、また如何にも西班牙らしい特色をも見出すのである。

ゴルスワアジイの劇

——菊池寛氏の新譯「法律の轍」の序——

イブセン以後の歐洲で、思想家として最もすぐれた劇作家を誰々かと問ふ人あらば、私は言下に答へよう、先づ英吉利の文學ではゴルスワアジイであると。そして私は獨逸あたりの批評家が何と言はうとも、かの世界で一番の皮肉屋バアナド・ショオを、藝術家としては彼よりも下位に置く事に躊躇しないのである。ところが此ゴルスワアジイの最大傑作として世に定評ある『法律の轍』が、わが日本の現代作家のうち、人間心理の暗黒面を抉る事に於て最も鋭く最も力强い筆を持つてゐる菊池寛君によつて譯せられ、それが單行本として世に出ることを聞いて、私は心から嬉しく思つた。嬉しく思つたのには色々のわけがあるが、その主なる理由の一つは『法律の轍』が、日本の社會問題研究者を始めとして一般の思想家や文藝家に何等かの刺戟感動を與へ、また一種の暗示となるべきを期待するからである。

『法律の轍』の原作がはじめて世に出たのは、今から僅かに十一年前である。しかし何事にも保守的な一面があつて改良といふ事をしない英吉利の國では、その頃まだ監獄制度に多くの不備があつたの

だらう。ゴルスワアジイの此悲劇が忽ち世の視聽を欹てると共に、英國の司法省は急に監獄改良の事業を進ませた。一篇の戲曲が司法次官の目を醒ましてやつたからとて、それは別に藝術品としての此作の價値を上下するにも足らないが、當時如何に强く英國の社會民心を動かしたかが、此一事によつても知られるではないか。わたくしは嘗て監獄改良家留岡幸助氏への書信の端にも、この作が邦語に譯される日の近からん事を望むと言つた事があつた。今それが偶然にも友人菊池寛君によつて譯されたのは、この上もない喜びである。

私は嘗て留學中に、紐育のキャンドラ座で此悲劇を觀た。主人公フォルダアを演つたのは名優ジョン・バリモアで、殆ど三ケ月ばかり打ち續けて非常な評判であつた。いくら紐育の大都でも、純藝術的な而も觀てゐて喉を締められるやうに苦しくなる此種の社會劇を、十週間以上に亘る長興行(ロングラン)で打ち續けた事はまことに稀有の例であつた。殊にだんまりで筋を運ぶ獄中の場の如きは、名優の所作と作者の技巧と相俟つて、凄愴陰森の氣は舞臺の全面を蔽ひ、それが强くも觀客の胸に迫るのであつた。わたくしは五年後の今日、なほ此作を讀んで當時の印象の胸奧に新なるを覺ゆるのである。

ゴルスワアジイが嘗て『隔週評論(フォオトナイトリ・レヴュ)』の誌上に公にし、今は自己の文集に收めてゐる有名な戲曲論(『劇に關する平凡語』と題するもの)に於て自ら述べてゐる通り、彼は强ひて時流に反して人生觀道德觀を、戲曲を借りて公衆に押賣りするやうな事は決してしない。バアカアでもショオでもブリュウ

でも、否な、或程度に於てイブセンですらも、問題劇思想劇といふ物はとかくこの弊に陥り易い。無理に捩ぢ曲げたやうな moral を押賣りしようとはせずに、唯自然の儘に現實を描いて或問題を讀者觀客に提示するといふ態度で、ゴルスワアジイの戯曲は出來てゐる。作者自らは極めて冷靜に構へて居て、作中の人物も事件も、社會の或缺陷のために遂にその落つべき所に落ちて行くといふ徑路を現はして、そこには何等無理に拵へたと言ふ痕跡が見られない。極めて巧妙な對話、人物の配合、劇的境遇(ドラマテイク・シテュエイシヨン)、舞臺裝置等によつて、少しも無理のない、自然の儘な、生きた現實を吾々に見せて吳れる。多辯饒舌の宣傳者(プロパガンディスト)であるショオのやうに、無教育な女の口から、堂々たる社會問題の論議を聞かせるやうな馬鹿々々しい眞似は、ゴルスワアジイの斷じて爲さざる所である。思想上から言へば、彼は明らかにギクトオリア朝以來の社會制度に對する强烈なる反抗者ではあるが、それが戯曲に於て露骨に不自然に現はされてゐるのではない。唯自然の儘な現實描寫のかげに、或は現實描寫を通して暗示せられてゐるのである。ただ暗示であるが故に、そこに思想劇問題劇としての力も籠れば强みも出來る。すべて家庭悲劇でも勞働問題でも法律問題でも、彼は如何なる問題を取扱つても、此筆法で讀者觀客に迫つて來る。だから彼の劇を觀たり讀んだりしてゐると、ちやうど希臘の運命劇を近代化したのを見るやうに、現代社會の缺陷に根ざした强い動かし難い、そして避くべからざる必然性ある大きい力が、人物事件を終極の所まで運んで行つて了ふ。觀てゐる方では苦しくて堪らない。そ

のくせ、話の筋などは極めて簡單なので、作者が無理に骨折つて拵へ上げたやうには少しも見えないのである。

わたくしは菊池寛君が將棊の名人(?)だと聞いて言ふのではないが、ゴルスワアジイの作劇の態度には全く將棊の名人を想はせるものがある。かの浪漫派の詩人のやうに熱するのではなく、極めて冷靜に沈着に構へてゐて、心にくきまで落着き拂つてゐる。じり〳〵と敵に詰め寄せて寸毫の隙間もあらせず、巧妙な王手をいくつでも喰はせる。相手をふう〳〵言はせて置いて、揚句の果てには敵を雪隱詰か何かにして置きながら、そつぽを向いて知らぬ顏をしてゐる。ちやうどさう言つた風が劇作家としてのゴルスワアジイにはあると思ふ。

『法律の轍』に取扱はれてゐる題目は詐欺と殺人とで、話こそちがへ、ドストイエフスキイの傑作の表題である『罪と罰』との關係である。近代社會に於ける大きい缺陷のために、卽ち生存の必要に迫られ、人間性の中心である『愛』に絆されて、惡人でもない者が誤つて罪惡を犯す。そこへ一たび法律と云ふ機械の車輪のやうなものが働きかけると、この法律あるがために一個の善人は遂に獄窓の憂き目を見、はては身の破滅を招くに至るのである。弱き者、爾が名は女のみかは、男も亦人間性を持つてゐる限り弱い者である。フォルダアといふ青年は弱かつたばかりに、また自分と戀女との生存のためばかりに手形變造の罪を犯した。また一方に英吉利の結婚法では、夫が殘酷な仕打をするからと

て女は正式に離婚を要求する權利はない事になつてゐる。そこにも法律の不備があつたのだ。人妻である女に同情と愛戀とを寄せた此青年は、手形の９の字のあとに０を附けて90にするだけの罪を犯した。それを發端にして此可憐の一青年は、ちやうど一度料理人の手に掛つた魚が、フライ鍋から飛び出してはまた火の中に落ちて死ぬと同じやうに、悲劇の最後の所まで落ち込んで行くのである。

ゴルスワアジイが此作に於て狙つたのは、言ふまでもなく正義の不正である。羅馬のキケロが千古の名言として傳へられる『最高の正義は最大の不正なり』Summum jus, summa injuria の意に他ならない。しかも此一曲に於て作者は何等の解決を示して居ないところが、リアリストのリアリストたる所以だから面白い。世には不正の犧牲となる者の多いと同じく、正義の犧牲となる者も亦甚だ多いのである。現代生活の缺陷から來るこの大きい嚴肅な人生の事實を、讀者觀客の前に投げ出して置いて、そらこの通りだぞと言つた切り、作者はそつぽを向いて多くを語らないでゐる。而も作者の此冷靜は無頓着のそれではなかつた、實は涙の結晶から出來た冷靜であつたのだ。私たちが脚本の卷を閉ぢ、また劇場を出てから後、ぢつと考へて見ると、そこには人道(ヒユマニテイ)のために叫べる作者も聲も聞かれる、社會の缺陷に對する悲憤の熱涙も見られるのである。同情溢るるが如き人道主義者(ヒユマニタリンア)である眞のゴルスワアジイは、戲曲そのものに於てまた舞臺に於て、行間(ビトヰン・ザ・ラインズ)にかくれ、背後に潛んで居たのであつた。この熱涙あるに非ずんば此冷靜は出來なかつた事に、私たちははじめて氣附く。

冷靜であるが故に、作者の態度はまた極めて公平無私である。特に青年フォルダアを庇つて、法の不備を難じたやうな痕は少しも無い。惡人らしくも書かない代り、强ひて善人にも見せようとはしない。罪人は罪人として描かれ、法律家は法律家として描かれてゐる。獄吏の如きをも强ひて囚人を苦しめる殘忍の人として寫さず、寧ろフォルダァに同情を寄せてゐる。そこへ一人の可憐な女性を點出したのだから、人物が皆充分に活躍してゐる。作者の思想宣傳の道具に使はれるやうな形跡は微塵もない。近代劇で、同じく法律の不備を主題とした佛蘭西のブリュウの作『赤き衣』などよりも、遙かに自然なだけに藝術品としては立ち優つて見られるのだ。

千九百十五年以後のゴルスワアジイの戲曲には、その以前の冴え渡つた鋭さがなく、いやに甘いものになつたやうな觀があるのを、私たちは心ひそかに遺憾なりとしてゐた。ところが昨年の新作で、最近倫敦の公演に嘖々たる好評を得たと聞く『策略勝負』を讀んで見ると、この作では舊家對成金の葛藤を主題として、社會劇作家としてのゴルスワアジイ未だ老いざるの手腕を示してゐるから賴母しい。譯者菊池寛君も亦『眞珠夫人』のみに全力を蕩盡せずして、本年一月の『蘭學事始』の如き佳作の出た事を、我が文壇のために喜ぶべきだと思ふ。かくて私は原作者のためにも譯者のためにも、なほ藝術家としての將來の偉大なるべきを祈り、また期待してゐるのである。

―― 大正十年五月 ――

ダンセイニの邦譯と新作

——松村夫人譯『ダンセイニ戲曲全集』に就いて——

一

ダンセイニ卿の作品は、先年わたくしが彼地に留學中に非常な評判になつて居たので、その劇と短篇集に就いては既に一たび紹介した事があつた。(拙著『印象記』(本全集第四卷)のうち、「愛蘭文學の新星」參照)。そののち歐洲の戰亂もをさまり、人々がまた再び平和のうちに藝術鑑賞の餘裕を得るに至つて、その作の聲價は益々高い。最近に倫敦の大使座(アンバサダア)で上演せられた新作『若しも』"If"の如き、例のダンセイニ一流の夢幻劇(ファンタジイ)として立派な成功であつたと傳へられてゐる。

ダンセイニは二十世紀の新しい浪漫家(ロマンティシスト)である。前世紀以來、劇といはず小說といはず、すべての文藝作品から『詩』と『夢』とが消え去らうとする現代に於て、彼は珍らしい浪漫家(ロマンティシスト)の一人——否な、恐らくはその最大なる者の一人であらう。その作品にはたしかに思想もある、哲學(フイロソフイ)もある、また問題(プロブレム)も無いではない。しかしそれが他の戲曲家のとは全く趣を異にした取扱ひ方である點に於て、この愛蘭貴族の戲曲も、散文物語も、現代文學には一種の特異な地位を占めてゐると見らる可きである。

そは如何なる點に於て？　と問ふ人あらば、私は答へよう。彼はロマンスの世界に在りながら、最も強くまた銳く現實を凝視し批評して、時には心にくきばかりの皮肉を浴せて見たり反語(アイロニイ)を加へたりしてゐる。鈍感な者にでもこれは堪らぬと思はせる所がある、成程と肯かせる場面も多い。單にこの世の外なる幻影をばかり追うてゐる浪漫的の人ではなく、人間以上の或は人間以外の、たとへば神樣の如き者の目から若し現代人の生活を見たならば、こんなにも見えようかと思ふやうな描き方である。現實よりも更に一歩高く踏み出して、その高い所から地上の功利唯物の生活を見下ろしてゐると言つたやうな態度と傾向とが、他の多くの作家に見られない特色である。だから趣向などはみな荒唐無稽なものでありながら、それが少しも不自然でなく、概念的にもならずして強い現實性を持つてゐる。作物の性質からいへばマアテルリンクなどと同一系統に屬するものではあるが、ダンセイニ卿の描く人物は、マアテルリンクの作に見るやうな幽靈式の力のないものが動いてゐるのではない。その戲曲は夢幻劇であると共にまた現實劇である。短篇中の傑作などに至つては、銳く現實の裏まで見すかして了つた詩人の夢物語とでも云つた風がある。英語で ironic imagination（皮肉の想像）といふ言葉は、最もよく此作家の本質を示してゐる。今人の醜惡と虛僞と貪慾と痴愚と、すべてが彼の作中には反語を以て嘲笑されてゐるからである。

二

物語でも戯曲でも、彼の作は皆短い。少しも無駄がなくて實に手際が好い。殊にその戯曲が奇想天外からおちるやうな舞臺面を巧みに造つて、舞臺技巧に如何にすぐれてゐるかは、日本の全く素人の學生が、語學練習のため之を演じてさへ、可なりに成功するのを見ても知られる。たとへば私が聞いてゐるだけでも、最近に東京商科大學、小樽高等商業學校、山口高等商業學校などで、松村女史の譯本中にある『山の神々』『おき忘れた帽子』『旅宿の一夜』などを原語で演出して、それ〴〵みな相當の效果を收め得たさうだ。極めて簡單な言葉と所作との中に、複雜なものを暗示し得るダンセイニ獨得の詩的表現の力が、之を爲さしめたのだらうと私は思つてゐる。

ダンセイニ卿の作は、短篇の物語(テイルズ)ばかりでなく戯曲の方でも、單に机上の讀物として非常に面白い。松村みね子夫人が嘗てシヨオを譯された時、わたくしはそれを原文と對比して見て、譯文が極めて正確なばかりでなく、よく原作が消化せられ砕かれてゐるその手際に尠からず感服した事があつた。今度のダンセイニの戯曲集の譯も、私はその數十頁を仔細に英文と對照して見て、殆ど誤譯と目すべきものを一つも發見しなかつた。聞くところによれば、近頃日本に行はれる或種の飜譯文學は、原作の味はひはおろか、譯者に精密な語學の素養の缺乏せるためか或は大急ぎや不注意のためか、いづれの頁を見ても必ず一つや二つは怪しい所があるといふ話をさへ耳にした。松村夫人のこの飜譯は、もとよりその儘では舞臺の臺本には適しないが、單に机上の讀み物として、――所謂讀體戯(レエゼ・ドラ)

曲として見ても、それが極めて正確な信頼すべき好飜譯であるために、そしてまたよく原作の心持を呑みこんで譯されてゐるために、飜譯物にありがちな晦澁生硬の嫌ひなき好個の讀物として推奬するに足ると思ふ。殊に初歩の語學のためにこの種の作物を讀み習はうとする人たちは、

Five Plays. By Lord Dunsany
(Boston, Little Brown & Co. 1914.)

Plays of Gods and Men. By Lord Dunsany.
(London, T. Fisher Unwin. 1917.)

にある原文と對照して見られるならば、得るところがあるだらうと信ずる。

三

ダンセイニ卿が今日までに公にした戲曲は、皆で九篇右の二卷のうちに盡くされてゐる。(普通の散文のエッセイや物語の方は、最初の『夢物語』A Dreamer's Tales. 1910. をはじめ、一番新しい『三つの半球』Tales of Three Hemispheres. 1920. に至るまで、七八冊あると記憶する)。松村夫人の譯せられた『戲曲全集』(警醒社出版)は、この九つの珠玉を完全に日本語に移して、裝釘もまた原本に似た瀟洒な一卷のうちに收めたものである。

ところが最近にまた一つ新曲が出た。それはさきに言つた『イフ』と題した九場(シインズ)の夢幻劇である。

（註一）

ダンセイニは愛蘭の他の作家のやうに、自分の故國の傳說や農民生活を得意の題材として居ない事は、嘗て私が述べた通りである。作風から言つても材料から言つても、空靈縹緲たる愛蘭文學の特色は勿論著しく現はれてゐるが、イエイツやグレゴリ夫人のやうに、ケルト傳說そのものを描かうとするのではない。やはり亞剌比亞夜語（アレビアン・ナイツ）や希臘神話などから思ひついたものらしく、殊に聖書の感化は措辭文體の上にさへも歴然として見えてゐる。そしてまた倫敦生活を材料にしてゐるところなど、どうしても彼の觀照の半面にあるリアリズムを想はせられる。作中の人名地名にも、波斯、亞剌比亞など東邦の奇怪な發音のが甚だ多い。今度の新作『イフ』に於ても、話の舞臺がやはり波斯と倫敦とになつてゐるから面白い。

この新作の荒筋を言へば、――

倫敦の或商人（名はジョン・ビイル John Beal）が波斯人と心易くなつて、その波斯人から魔法の水晶を一つ貰つた。この水晶を持つてゐると、自分が何でも過去に於てあの時に若しかうであつたらと思ふ事があると、望み次第すぐその十年前に歸る事が出來るのだ。

今この男は既う幸福な結婚生活をしてゐる。十年前の事を考へて見ても、別にあの時若しかうだつたらばなぞと思ふ事のない幸福（しあはせ）な身の上である。ところがふと十年前、まだ獨身であつた頃に倫敦行

の汽車に乘るとき、驛夫が戸を閉めて了つたため自分が其汽車に乘れなかつた事のあつたのを思出した。それがいまだに癪に障つてならない。あの時若し汽車に乘れたならばと思つて見る。

すると舞臺は忽ち暗くなつて、こんど幕が上がると、その時の停車場の場面になる。驛夫の所を無事に通過して汽車に乘つて了ふ。それだけで既う十分氣が濟んだのである。即ち倫敦まで行つてから、また女房の居る郊外の自宅へ歸れたら、もうそれで好いのだと思ふ。ところが汽車に乘れたといふ此事からして思ひもかけぬ大變な結果になるのである。その同じ箱のなかに若い美人のミラルダ・クレメント Miss Miralda Clement といふ女が居た。その女の叔父が、波斯で或山道の通行税を擔保にして出資した十萬磅（ポンド）の遺産がある。しかし横着な酋長どもが支拂ひをしないため、それから一文の金もこの女の手に取れないのだといふ話を聞いて、ジョンはすつかり此美人に同情して了つて、助けてやらうと云ふ話にまでなつた。

次の場面は波斯に移る。男は今波斯で成功してその若い美人と同棲してゐる。ミラルダは恐ろしい女になつた。男をそそのかして先づ波斯の酋長を殺させた。ジョンは今王侯のやうな勢威を揮つてゐる。唯しかし自分は既婚者だといふ事がどうしても潛在意識を離れないために、女を正妻とはせずに、東洋流の妾として關係してゐるのである。が、その女の方では固より之に慊らず、遂にはジョンを殺さうと謀る。そこに土人の一人の忠僕があつて、男は漸く死を免れる。

最後の場で舞臺はまた倫敦に歸る。男は乞食になつて倫敦へ歸つて來て自分の家に入り、女中のなさけで僅かに食事にありつくのである。そのお禮にといふので男は例の魔法の水晶をこの女中に與る。しかし此水晶の力で十年前の自分に歸つたものの、自分は少しも幸福ではなく、却つて禍を招いたのだといふ話を聞かすと、女中はたうとうこの水晶の護符（タリスマン）を粉碎して了ふ。舞臺面はまた眞暗になつて、今度明るくなると、男はまた十年前に歸つて長椅子に坐つて、目をこすりながら夢から醒めるところへ、細君が夜食を持つて來るので了る。

實演の時にはこの九場の話を四幕に演じたさうだ。

（一）"If" A Play in Four Acts. By Lord Dunsany. London, Putnams. 1921.

四

なほ以上の他、一昨年あたり米國の雜誌『アトランティク・マンスリ』誌上に掲載せられた二篇の諷刺劇があるが、まだ書物にはなつて出ないやうだ。卽ち『聲譽と詩人』"Fame and the Poet" と『沙翁にして若し今日に在らば』"If Shakespeare Lived To-day" とである。前者はダンセイニが自分の來歷に就いての感慨を洩らしたものと見るべきで、現代のやうな時勢に於て名聲を得た事は、要するに詰らないといふ意味の寓意である。後者は歷史上の沙翁は今旣に世の評價が定まつてゐるから可いが、今日若し突如としてあんな浪漫的な天才が出て來たならば、文壇は誰も相手にしないだらう

といふ意味を書いて、現代文學の風潮に向つて皮肉を浴せたものである。

なほダンセイニ卿の戯曲で米國あたりで上演されて、而も脚本としてはまだ公にされない『人ごろし』"The Murderers" 以下の數篇がある。もとより最大の傑作としては、世に定評ある『山の神神』をはじめ、詩的な『光の門』『金文字の宣告』などの名篇が皆既に松村夫人の飜譯集に出てゐるから、この上を望む必要も無いかも知れないが、私は更に本當の全集として、さきの『アトランティク・マンスリ』所載の二篇をはじめ、將來出る他の諸篇と共に、今度の邦譯『ダンセイニ戯曲全集』の續篇が出版せらるべき事を切に祈るものである。

（附記） 此稿を草してのち、またダンセイニ卿の戯曲集が出版せられた。

Plasys of Near and Far. By Lord Dunsany. London, Putnams. 1922.

このなかには "The Compromise of the King," "The Flight of the Queen," "Cheeso" "A Good Bargain," "Fame and the Poet," "If Shakespeare Lived To-day" の諸篇が收められてゐる。

作家の外遊

すべての藝術家は、自然人生の種々相を捉へ來つて己が魂の自畫像を造る人である。心の姿はやがてまた顏のすがたである。だから作家その人を見てまたその作品に接するとき、二つの間にはしばしば共通した同じものを見出す。よく繪畫の展覽會などで或人の作を見なれて居て、今度なにかの折に其畫家に出會ふことがあると、果して其人は繪と同じやうな顏の持主である。少くともさうした感じを與へる顏つきや物言ひや動作を見ることが多い。昔の詩人とか外國の作家などで、時代や國の異なれるために其人に遇ふことの決して無い場合でも、その作を通じて作者の風貌から、身のこなしまでも想はせられるやうなことは珍らしくない。また更に藝術を最も廣義に解して、生活そのものを創造創作なりと見るとき、政治家などに就いても同じことが云はれる。那破翁(ナポレオン)の肖像畫を見ると如何にも那破翁らしく、虞翁(グラッドストン)の寫眞には如何にも虞翁らしいあるものを見出し得るやうな氣がする。況や文藝のやうに個性の表現を以てその唯一最大の生命としてゐる人間活動に於て、作品が作者の自畫像であることは怪しむに足らない。

しかし創作の心理には、時としてまた二重人格の作用がある。即ち日常生活に於ては抑壓せられ

て、深い無意識心理の蔭にかくれてゐた別の人格が、その人の魂の絶對解放である藝術創作の場合に於てのみ著しく現はれ出でる。いつもは柔和な人が激烈な調子の作品を造つたり、陰氣くさい男が快活な文章を書いたりすることのあるのは、恐らくかくの如き心理作用の結果だと見るべきだらう。滑稽作家などには、外觀からのみ見るならば人と作とまるで別物のやうなのが珍らしくない。夏目さんの沈欝な顔附を見て、『吾輩は猫である』を想像することは難いかも知れない。ジョナサン・スヰフトも陰氣臭い男であつたと言はれ、十返舍一九も、最近の研究では生眞面目な面白くもない人物で、とても『膝栗毛』の作者とは思はれなかつたと言はれてゐる。

けれどもかくの如きは寧ろ除外例の方で、多くの場合、作品とその作者のおもかげとは同じものである。わたくしは此事を特に著しくK君の小説に於て見る。毫も小手先の技巧などを用ゐないで、生一本の、そして強い太い線でぐいぐいと押し通して行くところが、その人の風貌にも作品にも際だつて見えるのを頼母しいと思ふ。人の心の暗い影を貫いて、人間生活の隱れた或斷面をゑぐり出さうとする時、この作家の筆は今の日本の他の作者に見られない鋭さを持つてゐる。唯その鋭さは利刃のそれではなくて、力強さが與へる強さであらう。深謀遠慮をめぐらす智將のおもかげではなく、馬を躍らして一氣に敵の牙城を突く猛將の力と熱とは、今のところ此作家が有する最も貴い特色である。

いろいろの事からK君と共に私の聯想に浮ぶ作家は、A君である。こなひだから新聞紙上でA君の

支那紀行を讀みながら、いつもながらのその才筆に、尠からず興味をそそられてゐる私は、今またK君と共にA君を想ふ。共にすぐれた天分を持つたこの二人の少壯作家は、一たび會つて顔を見ただけでも直ぐ感じられるやうに、創作家としても全く異なつた傾向性情を有する人だらう。A君は慧敏の才人だ。才人だと言はれる事は君みづからの喜ばないところかも知れないが、藝術家として好い意味に於ての才人である。才人は常にその驚くべき才藻を以て讀者を魅了せずんば止まない。K君とはちがつて太いごつ〳〵した線を決して使はない。纖細な鋭敏な感受性から出た隙のない描き方が、いつも讀者の心を引き附けるのである。さういふ著しい對照(コントラスト)が、このふたりの人のおもかげにも作にも見られるやうだ。顔かたちの事など言ふのは失敬だから、よしておく。

昨年であつたか、私は帝劇でK君の作『屋上の狂人』の上演せられたのを見た。その時は道具の方も、たいへん面白く出來てゐたために、今も私の記憶を去らないのだが、主人公の兄を演じたのは勘彌氏で、弟の方は猿之助氏が演つた。巧緻纖細な勘彌氏の藝風と、純眞な力と熱とで行く猿之助氏のそれとは其時も、ふと私をしてA、K兩君の著しき對照(コントラスト)を聯想せしめたのであつた。

しかし今わたくしはこんな事を書く積りではなかつた。K君が近く外遊の程(てい)に上る由を聞いて、思ひついた事を二つ三つ書かうと思ふのである。

純粹創造、自己表現を天職とする藝術家にとつて外國旅行は、外の職業に從事する人たちの場合と

異なつた意義を持つてゐる。特に今日の日本の文藝家に就いて私は之を言ひたい。
今の世に『詩』を忘れ『美』を失つたのは日本人の生活ばかりではないから、わたくしはそれを言ふのではない。ただ、今の日本の社會のやうに窮屈でせせこましくてこせこせとした、自由もなければ落着きもない社會は、斷じて創造創作の生活に都合よきものではない。うかうか感激したり憧憬したりして居れば、突き飛ばされ蹈み殺されるかも知れない。形式や機械の化物になつて働かなければ忽ちにして餓死して了ふ。たとひ蹈み殺されず飢ゑ死はせずとも、色々な辛い目に遇ふ位は覺悟をせねばならぬ。周圍から押し寄せる害物に對して內なる自己を守つて行くだけでも、かなり骨の折れる生活であらう。自己を表現せんがために先づ自己を養ひ、內生活の充實を謀らねばならぬ藝術家にとつては、相當に生き苦しい社會である。少くとも藝術家をはぐくみ、培ひ養つて行くのに都合のよい環境だとは、如何に慾目から見ても思はれない。もつと文化の進んだ國は勿論のこと、もつと野蠻な國にでも、も少し人間らしいのんびりした、そして藝術的な雰圍氣が見出だされる所はあると思ふ。しかしさう言つたつて、吾等日本を愛する日本人としては、ただこの自分の國、自分の居る此社會を少したりとも、よりよきものにして行かうと努力する外に道は無いわけである。
たとへば米國の如きは、詩美の生活に最も緣の遠い國だ。しかしあの國には宗教に源を發した强大な理想主義があり、自由思想が動いてゐる。精神的には一面から言へば沙漠のやうに殺風景ではある

が、その代りまた沙漠のやうに大きくて廣くて自由だ、こせ〳〵いら〳〵して居ない。そして一方には烈しい豐富な黄金力が、外部の方からすべての物を擴充し充實して力あらしめてゐる。また米國は別としても、支那にせよ、印度にせよ、或はK君が行かうとする歐洲諸國は勿論のこと、さういふ他國の社會に一年でも二年でも日を送るといふ事は、創作家にとつて喜ぶべき事である。

畫家でも文學者でも、すべての藝術家のために私が外遊を勸めるには、色々な理由がある。第一に、吾々は日本を離れてはじめて日本の自然や生活を明らかに觀照し得るので、山に入つては山を見ず、一歩離れてはじめて山の姿を確かに見極め得るからである。國土を一歩離れたとき最も痛切に明確に、吾等は日本人の生活を反省する事が出來る。別の言葉で言へば、最も深刻に自分が日本人である事を痛感し得られる。同文同種の支那へ行つて見ただけでも此感がある、と云つた人があつた。

外遊はまた放浪慾(ワンデルルスト)の滿足のためにも願はしい。極り切つた窮屈な生活から、しばしたりとも身を脫して、行方さだめぬ旅の假寢に、自由生活のうまみを心ゆくばかり味はふ事は、創作家にとつて何よりも貴い事だ。新奇な生活にあこがれ、まだ見ぬ國土を慕ふ放浪慾(ワンデルルスト)の滿足が、近代の文藝に於て如何に重大な要素をなしてゐるかは茲に說くまでもない。それは內的生活の自由解放を求める一つの手段であるからだ。

創作家にとつてはまた、一時おのれの環境を變化して見る事は非常に意味が深い。それは新しい白

己を發見するがためである。たとへば一つの果物をいつまで鹽に漬けて置いても、それから出る味はひは唯一つである。またその一つの味でさへも、長くなれば追々に失はれて行く。それを更に他の砂糖とか酢とかアルコオルとかに浸す事によつて、今まで鹽の中では見出されなかつた新しい或物を同じ果物から得る事が出來よう。作家が自己といふものを深く掘り下げて行くとき、多くは常に唯一つの鑛脈をのみ掘つて進む。しかし如何に豐かな鑛山でも、唯一つの鑛脈をだけ掘つて行くのでは、いつかはそれの盡きる日があるだらう。廢坑になる時が無いとは言へない。環境の變化によつて、自己を轉換し革新することによつて、今まで掘り當てなかつた或新しい自己を發見するとき、そこから更に第二期の躍進の第一歩を踏み出す事は、作家が最も完全に自己の全生命を表現し得る道であらねばならぬ。これは創作家にとつて、俗な言葉で言へば若返り法であり、不老長生の術であるかも知れない。

　しばらく異なれる環境に身を置いて自己を更新し、自分といふもののなかに新しい鑛脈を發見し掘り當てるためには、必ずしも仕事をする事が望ましい事ではない。實際わたくしなどの貧しい經驗から考へても、旅心地のあひだに會心の著作などが出來るものではない。天外萬里、放浪の孤客となつて、宿の一室にしばらくじつと落着いて考へ込む事も、公園の芝生に腰を卸して、西人が所謂「甘き無爲（ドルチエ・ファル・ニエンテ）」を貪ることも、藝術家にとつては深い意味のある事だ。實業家の視察でもなく、學者の調査

でもない。また普通多くの人がするやうな名所見物も無用の勞であらう。白國のそれとは全く異なれる自然を背景とした人事を見、生活を觀照することは、必ずしも慌ただしい東奔西走の勞を要しないのだ。豫定の日數や行路などが狂つたつて、財布が最後の相談相手だと思つて居れば間違ひはない。
今よりもつと交通の不便であつた時代に、歐洲諸邦の詩人がみな南歐伊太利の清明の空にあこがれ、ミニオンの歌に謂はゆるチトロオネンの花咲く國へと杖を曳いた頃、その意味こそは異なれ、今の日本の藝術家が、西歐の諸國に赴く人の多いのにも似てゐた。ゲエテやハイネの伊太利旅行が世界文學に貢獻したものは、その中での著しい例であつた。また英吉利といふ國は、人の言ふやうに國民性が實際的で常識的で純藝術の氣分が乏しいといふ嫌ひあるにも拘はらず、あれだけの立派な文學を持つてゐるのは、南歐の影響極めて著しきものがあつたからだ。その影響は決して書物や飜譯を通して得られたのではなかつた。詩祖チョオサアからして既に身みづから伊太利に旅した事が、どれだけ多く彼の天才をはぐくんだか知れない。近世のシェリイやキイツやブラウニングから伊太利生活を引き去れば、その作の最もよきものは失はれるであらう。もとより私は昔の詩人の例を以て、直ちに現代の作家に擬するものではない、しかし異郷の、より多く藝術的な空氣のある社會に國土に、しばしたりとも身を置く事が、作家としての素養に新しき何ものかを加へ得る場合の多い事だけは、疑を容れないと思ふ。

日本の作家が作家としての壽命の短いことは、誰しも不思議におもひ、また遺憾に思ふ事である。二十年三十年にわたつてその作品の發表を續けてゐる人は極めて稀だ。現存の諸家に就いて見ても、さういふ人の數は僅かに五指を屈するに過ぎない。なかには彗星の如くに現はれて、彗星の如くに影を沒し去る人さへ多い。これはなぜであらうといふ疑問に對して多くの人は、世間が珍らし物好きで飽き易いからだと言ふ。なるほど、御輿かつぎか胴上げのやうに一時は盛んに持ち上げて置いて、あとは抛り出して見向きもしないといつた風があるのは勿論だらうが、その原因を更にもつと深く考へて見ると、それは作家の方での素養とか餘裕とか努力とかいふことが問題になるだらうと思ふ。必ずしも世間をのみ咎むべきではない。

文藝の作品を書くことは、言ふまでもなく純粋創造だ、自己表現だ。しかし內から迫る欲求にのみ驅られ、內に溢れるものを外に現はさねば心臟が張り切れさうだから書いてゐるといふやうな作家は、今の世智辛い世の中には、どこの國にだつて滅多に居はしない。いよ〳〵筆を執つたとなれば、世評や讀者の氣受けなどを顧慮しないで、僞らざる眞の自己を表現する人でなければ、すぐれた作品は決して出來ないゝが然しまた、この創作に機會を與へ動機を與ふるものは、多くは外部的な種々の事情である。出版業者や雜誌編輯者の依賴とか、金錢關係とかいふ詰らない事が、その折々の動因になつてゐる。かのドストイエフスキイほどの作家でも、彼が自らしるした回想錄によれば、或時は貧

苦に迫られて原稿料の前借のため已むなく續き物を書いたり、それも一回分づつ郵便車發着の時間を氣にしながら筆を執つたのであつた。二十世紀の今日猶世界を動かしつつある彼の偉大な作品も、實はその折々の僅かな稿料のために書かせられたものであつた。昔の抒情詩人のやうに、ただ鳥が歌ふ如くに、自然な純粹な內的欲求にのみ動かされて出來たのではなかつたのだ。固より既に一たび原稿紙に向つた以上、それは眞劍な自己表現ではあつたらうが、そこに到るまでには、いろ〳〵外部的な事情が强く作家を促してゐる事は言ふまでもない。

それどころではない。ただ此外的事情にのみ驅られて、だら〳〵した娛樂本位の、講談みたやうなものばかりを書いてゐる作家さへ世には多い。それは貴き自己を切賣する事である。たとへば人生の最も美しい純粹創造の生活である戀を賣物にする賤業婦のやうに、淺ましい事だと思ふ。わたくしは流行の日本畫家などのうちに、ただ書畫屋といふ營利商人にのみ左右せられて無闇に濫作をする人などを見ると、自分の血と肉とを分けた娘を女郎に賣る人のやうに氣の毒だと思ふ。それは自分の魂を市井の惡魔に賣ることだ、自己を破壞することだ。

英雄が失敗をするのは常にその功名の盛時にある事を想うて、一代の藝苑に流行兒となつた人たちは深く自ら戒めなければなるまい。その時、運命の黑い手（ブラック・ハンド）は何處からともなく迫り來つて、遂には自分の藝術を自分で滅ぼさせる悲運の種を播くのである。なほ暢びられるものが暢び得なかつたり、進

み得られるものが進み得なかつたりする。新境を拓くべき道を阻止せられるからだ。いつも自分の胸のなかの一つの鑛脈をばかり掘續ける事を餘儀なくせられて、反省と靜思と素養とを積む餘裕を、すべて外から迫る黒手に奪はれつつ、やがては廢坑となり、生ける屍となるのは、藝術家に取つてこれよりも慘な事はない。勿論文學者といへども霞を吸つて生きてゐる仙人ではない。だからパンのために筆を執ると云ふ事は、立派な事業であり神聖な勞働である。殊に賴まれるとか、餘儀なくされるとかの外的事情がなければ、とかく疎懶に流れ易いのが人の常だ。これを思ふと外部からの强制は、呪ふべきものではなくて寧ろ感謝すべきかも知れない。ただ自己を守り自己を養ふ用意の足らない場合に於て、この外的事情の强制力は屢作家を虐げて遂にその命を絶つに至らしめる。今も昔も文藝の野にかくの如き死屍の累々たるを見ては、文筆の業に携はる人たちは誰しも慄然たらざるを得ないであらう。

今の世は恐ろしい世だ。詩でも戀でも美でも藝術でも個性でも何でもかでも、遠慮會釋なくコンマシャリズムといふ地獄の鎔爐に投げ込んで了ふ。一切の創造創作の生活を、資本主義の機械の齒車にかけて捻ぢ切つてしまふのだから堪らない。

創作家として此悲運を免れる最良の法は、作家としての自分の歷史の中に幾頁かの白紙（ブランク）を造る事だ。新しき鑛脈に掘り當てるために、自己を新にするために、しばらく仕事の筆を休める事である。

日本に居り自分の家に居れば、それはなか〳〵に難い事だ。この意味からして、たとひ一年でも二年でも外國旅行をする事によつて、ブランク・ペイヂズを作つてのちに、更に生活の新しい章(チヤプタア)から筆を起す事が出來るならば、それは作家が内なる自己を守り、自己を培ふための一つの賢明な方法ではなからうか。それは必ずしも外遊とのみは限るまい。しかし外遊はこの白紙を造るための一つの便法だと私は言ふのである。嘗て島崎藤村氏が歸朝後の第一作『新生』を讀んだ時、日本には珍らしいほど長い過去の歴史を持つた此作家に、みづ〳〵した筆の力と冴えとが現はれるのを見て、外遊によつて得られた休養の徒爲でなかつたことを、わたくしは考へた。

希臘神話のピグメイリオンは、象牙の女人像ガレイシアを造つた。その像は生きてゐた。作者は遂に自分の手で造り上げた此女人がガレイシアに戀をしたといふ。昔から色々に潤飾された此物語は、よく藝術創造の眞諦を語つてゐる。自分の個性を客觀界に放射して出來あがつた生命の藝術は、作者みづからにとつての生きた戀人であらねばならぬ。それほどまでに魂を打込んだ作でなければ、眞の藝術品には成らないのである。藝術創作を賃銀奴隷の手間仕事にまで墮落せしめる事は、戀なくして操を捧げる奴隷婦人のやうに淺ましい悲しむべき事である。

畫工といひ文士といひ役者といふ時、いまもなほ輕侮の心持を失はずに居る日本の社會は、藝術家を遇するに極めて酷なるものがある。コンマシャリズムの齒車で捻ぢ切る事を毫も意として居ないの

が世間だ。また捻ぢ切られるまでは平氣で居る作家さへも多い。
　西洋ではよく『人(マン)、自然(ネイチュア)、そして(アンド)書物(ブックス)』と言ふ。如何にもこの三つのものは、文學者にとつて自己を培ふための最良の營養だ。感性を鋭敏にし靈智を深からしめる事によつて、常にこの三つの物から營養を吸取する努力を怠るならば、日ならずして內なる自己は涸渇するであらう。書物は自分の書齋でも讀まれる。しかし異なれる人と自然とに接する事は、外遊に越した事はない。身邊に絡みつく色色の困難を排しても、作家が外遊の程(てい)に上る事は深く喜ぶべきだ。私は畫家や作家であるどの友人にでも、行き給へ〳〵と言つて勸める。あわただしい南船北馬の旅の容で、無理やりに仕事はしなくても好い。唯ぶらんと旅行してくるだけでも、藝術家にとつて、それは新聞も讀めない技師や役人の海外視察よりは、遙かに意味の深いものだと思ふ。殊に一度外國旅行をしたからとて、急に人間が變つたり偉くなつたり、忽ち大作が出來たりするわけのものでないのは、十日や二十日湯治に行つたからとて忽ち健康體になるとは限らないのも同然だ。機械ですらも時には休ませて、掃除をしたり磨いたりする必要がある。私が生活史の中のブランク・ペイヂズをつくれと言ふのは、作家が『自己』の洗濯をするための餘裕をいふのである。
　西洋のすぐれた作家は、處女作から晩期の作に至るまでの間の年數が非常に長い、四十年五十年に亘つた例さへ珍らしくない。日本の小說家の流星の輝きの如き短さとは比較にならないと思ふ。だか

ら文學史家等は、いつもその作品の年代次序を考へて、第一期から第四期あたりまでを數へてゐる。チヨオサアとかダンテとか沙翁とかゲエテとかいふ昔の大者の場合は言ふまでもないが、近代のイブセンでもトルストイでも、それ以下の多くの戯曲家でも小說家でも、處女作時代のものと晩期の作品とは、殆ど同一人の筆でないと怪しまれる程にまで變化してゐる。イブセンが學生時代の試作『カテイリナ』と、最後の作『われら死より目醒むる時』との間には、驚くべきかな半世紀の時の流が横たはる。もつと間を短く切つて前後を比較して見ても、かれの『ヘルゲランドの海豪』と『ヘッダ・ガブラア』や『建築師』とでは、その題目といひ觀照の態度といひ寔に千里の差があるではないか。いくら他方面なヴアサテイリテイを有つた天才でも、短い年月の間でかくの如き變化のあとを辿る事は不可能なのである。イブセンのやうな絶代の天才の場合はしばらく論外としても、西洋の作家には私どもが既う忘れて了つてゐた時分に、また傑作を出して世を騷がしてゐる人が多い。つい此頃も感じた事だが、ビアトリス・ハラデン女史の一番名高い作『夜過ぎゆく船』で肺病女の戀物語を讀んだのは、私がまだ漸く英文小說を繙き始めた頃の事で、今は筋さへよくは記憶して居ない位だ。それでも近年に至るまでその名聲は少しも墜ちないで、たとへば近作『寶の在る所』などは非常な好評を博してゐた。考へて見ると『夜過ぎ行く船』は實に二十年前の作で、今では作風から構想から全く變化して了つた。同名異人の作かと怪しまれるほどまでに、その間いくたびか轉廻し變化したのであつた。

それは要するに同一人が、自己胸奥の異なれる色々の鑛脈に鶴嘴を入れたからであつた。歐洲の作家は、キイツやシェリイのやうに三十歳ならずして世を去つた短命の人に非ざる限り、作家としての長い生涯には、いくつものランドマアクスが見られる。日本の作家にはただ第一期だけで、それをただ比較的長く引張つてゐるといふやうなのか、然らずんば早くその一期だけで光輝を失つて了ふ人も珍らしくない。これは必ずしも社會の罪だとばかりは言へないと思ふ。

何も私は外遊といふ事をのみ言ふのではない。さきにも言つたやうに人と自然との外に讀書といふ營養の缺くべからざるは勿論である。日本の多くの作家は沙翁や近松を馬鹿にして顧みないやうだが、古人の書は果してそれほどまでに無價値な物であるだらうか。ヴルガ河畔に放浪の生活を送つてゐたゴルキィのやうな男でさへ、閑を偸んでは沙翁劇やディッケンズの小說まで讀み耽つた事を、彼みづからの筆で書きしるしてゐるではないか。もとより創作家にとつて、勉强とか努力とかいふ事は讀書ではない。それは寧ろぢつと考へ込むことであり、凝視ることである。しかしその思索と觀照とが、讀書によつて助けられ補はれねばならぬ事は、また言ふまでもない。

また更に思ふ。餘裕に乏しくて無理の多い今日の世の中では、誰しも皆狹苦しい『專門家』といふものになつて生きなければならない。文學者は政治にも經濟にも學藝にも全く沒交涉になつて生きなければならぬ。それは人として確かに不幸な事だ。人間として人間らしく、所謂『全的に生きる』事

が出來ないで、唯自分といふ者の或特殊な一部分だけで生きてゐるのだ。そこで技師の視察でもなく學者の研究でもなく、何等の使命をも持たずに異邦觀光の程に上るといふ事は、一年でも二年でも、一個の自由人として、のび〱と全的に生きるための便法である。これは作家が先づ『人』としての自己を養ひ、大きくするために最も喜ぶべき事だ。必ずしもアウトルックを大きくするといふ意味からばかりではない。

わたくしは筆に任せて餘計な事をまで書いた。ただ作家の生活に就いて思ふところを述べて世の人人の反省を乞ひたいからである。必ずしもK君に就いて之を言ふのではない。否な既に自ら外遊を思ひ立つた君にとつて、これら千言萬語といへども恐らくは釋迦に說法の無用の辯であらう。

おもへば人生は永遠の巡禮だ。向上精進の一路を辿り行く人の心はまた、いつも旅の心であらねばならぬ。それはまた、かの敬虔な雄々しい巡禮の心であるだらう。殊にいま文字どほり一つの旅に發たうとする文藝作家にとつて、その門出は更に長い〱藝術行脚の途上に、一つ際だつて見えるマイルストオンである、また新しい一個のランドマアクを建てる事にもなるのであらう。『生は短く藝は長い。』私はK君の外遊の首途に、ボン・ヴアヤアヂュを言ふとともに、更に輝かしい光榮あるその未來を祈つてゐる。

宗教と迷信

こなひだ、それはある日曜日の午後であつた。前晩から面倒な調べ物ですつかり疲れ切つた頭を、私は散歩にまぎらさうと思つて、ふと戸外に出た。何ごとぞ、街上をぞろりぞろりと幾百となく幾千となき老若男女が、みな用事あるが如く無きが如く、間抜けたるが如く間抜けたらざるが如く、また慾深きが如く慾深からざるが如き奇怪至極な顔附をして、絡繹として行く。十臺二十臺の電車はこの奇怪なる顔面の所有者を滿載し呑吐して、停留場は人間の黑山を築いた。ふと見ると、人々は手に怪しげな黄いろの紙片を持つて安心顏なるものもあれば、騎士(ナイト)の帽子の羽もかくやと、白色のお札やうの物を中折帽子に挿して意氣頗る昂れるも多い。なるほど其日は年越のお詣といふのであつた。厄除け、方よけ、無病息災、開運出世、すべて愚民を喜ばしさうな出放題な名目を附して、神主と稱する一種の宗教業者が、人々をその神の殿堂に誘ひつつある日だ。

惡魔の毒手に動かされ易き可憐の民よ、ああこの迷信國の愚民……と、そんな言葉をまで思ひ浮べた私は、堪へがたき不快の感を抱いて、そのまま家に歸つて了つた。野蠻と貪慾と迷信とのペイジェントは、これを見るに忍びなかつたからだ。

しかし惠方詣の人たちを目して愚民などとは以ての外である。商賣をさせると生き馬の目を拔くほどに機敏であり、所有權の主張のためには法律論など爲かねまじき顏附きのも居る。否なそれ程ではなくとも、目先が利いたり、巧みな駈引をしたりするところは、私のやうな愚物の及びもつかぬ利巧者が多いのである。この利巧者を巧みに誘ひ來つて、あの迷信行列の喜劇的壯觀を演出せしめる宗教業者の偉力も亦驚くべきかな。

科學者に言はせると、地球の年代はまだ極めて若いものである。從つて此地上に住む人類の尻尾が取れてから、日は尙淺く、世界の各人種は今なほその進化の道程の極めて幼稚な階段にある。すべてが迷信野蠻の域を脫しないのは當然の事であらう。比較的に文明の進んだといふ歐洲諸國――また自ら新進氣銳を誇れる米國の如きにすら、多くの馬鹿々々しい迷信は行はれてゐる。西洋でも殊にかの加特力敎國となれば、むかし贖罪符（インダルゼンス）のお札を賣り步いたパアドナアの僧が遂にルウテルの宗教改革を激發せしめた本家であるだけに、今もなほ蒙昧の迷信は特に甚だしい。然し、いづれの文明國を見ても、日本ほどまでにそれが烈しいのは今日殆ど他に類例を見ないといつて可い。私は必ずしも御祈禱や惠方詣や厄拂ひや狐憑きなぞの馬鹿々々しき類をのみ指すのではない。日本人の政治生活、社會生活、經濟生活の根柢に、如何に多くの惠方詣式、お札式の迷信が伏在せるかを思へ。かの普通選擧だの政黨改造だの勞働運動だのと、聲ばかり徒らに大きくして實績の少しも擧らないのには、固より他

に多くの原因ありとはいへ、千年二千年の長き歴史を經て、日本人の頭腦の中心細胞に、痼疾の如くこびり附いた種々雜多な大迷信小迷信が禍をなしてゐることは、否定すべからざる事實ではないか。そしてこの迷信の多くが、宗教の假面をかぶり、宗教業者の魔手によつて、極めて巧妙に維持せられつつある事實を誰か否定し得るものぞ。

外國のことを言つて聞かせれば、すぐに彼の長を取り我が短を補ふなぞと聞いた風な口を利くものがある。いま政治社會組織の變革に熱中せる歐洲某國の政府は、何よりも先づ一切の迷信に向つて極端に苛烈なる制裁を加へてこれを取締つて居ると聞く。なるほど過激思想なぞは蛇蝎視すべきものだらう。別に法案を作つてこれを取締るの可否も私は知らない。しかしそれを取締ると共に、迷信に向つては今少しく嚴正な制裁を加へることは、たとひそれが外國のことでありとはいへ『かの長を取つて』といふならば、少し位は學ぶところあつて然るべきではなからうか。わが日本の現狀では、所謂宗教家なる者の爲すところ、どこまでが信仰であり、どこまでが迷信であるのか全く分らなくなつてゐる。否な分らなくして居るのだと言はれても、宗教業者に辯解の辭があるだらうか。

『自由と正義の光に輝く新文化新生活建設のためには、まづ何よりもさきに、大小雜多の迷信に對して猛然たる排擊を加ふる外に斷じて道はない。そんなことは私のやうな者が、今さら物珍らしげに、聲を大いにして言はなくても、解り切つた話だ。しかも今の宗教家はいふまでもなく、ある場合には

官憲や教育者さへも、多くの軍閥國家的、資本主義的、奴隷道德的迷信を助長はして居ても、排撃すべき何事をもして居ないではないか。

かつて、戀愛は阿片の如しと言つて、私の所説を罵つた者があつた。迷信こそ阿片の如しとなぜ言はないのだ。

迷信、それは弱き心の宗教であると、古人は言ふ。この弱き心に光と力とを與へて、光明の樂土に導くべきものが宗教家の任であるにも拘はらず、却つて之を迷信といふ暗黑界にのみ誘惑しつつある惡魔の毒手こそ呪はるべきかな。

本願寺の僧侶某なるもの、さきに私の『惡魔の宗教』に關して、ある集會の席上何事をか陳辯したりとか。その內容に就いて私は全く聞くところはないが、試みに問はう。爾等の或者が現に爲しつつあり又說きつつあるところには、民衆を誘うて迷信行列の喜劇的壯觀を演出せしめたる多くの事實なしと言ふのか。宗教界の實際なりとして私が指摘し列擧したるところを以て、すべて誣妄なりと强辯せんと欲するのか。爾等にして敢へていくたびか自らの愚と非とを蔽はんがために、此種の陳辯をなして俗衆を欺かんとするの勇あらば、われも亦再び筆を新にして之に酬ゆるの勞を辭するものではない。私の悲憤と憤慨とは前に倍して、あの拙い一篇よりは少しはすぐれた文章を書かせて吳れるであらう。

いつもかも同じやうな常識程度の陳腐平凡語を、講演にもし新聞雑誌にも書いて卑しい内職をかせぎ、私の『近代の戀愛觀』なぞに對して、役にも立たぬ攻撃をしてゐる男があつた。『人の振り見て、わが振り直せ』。あのやうな卑しい眞似だけは、たとひ數ならぬ自分なりとも、斷じてしたくはないものだと常に心がけてゐる。苟も筆を執る以上、陳腐平凡語を羅列して、貴重の紙幅と讀者の時間とを無意味に奪ふやうな事は斷じてしたくないと私は思ふ。さう思ひながら今さら世の迷信者に對して事新しげにかくのごとき陳腐平凡の一篇を草したのは、まのあたり惠方詣の迷信行列なぞを見せられたからばかりではない。つい昨年一二月ごろの事であつた、羅馬法王ベネディクト十五世の大袈裟な葬式に次いで、ミランの大僧正ラッティが位に即き、新しく今のピウス十一世となる傳燈式で、あの教會特有の馬鹿々々しき儀禮の記事を、いやといふほどいくつかの外國雑誌で見せつけられ、しかも最近にはまた、この法王廳への使節派遣の問題でみづから盛んに反對運動をした或宗派の佛教僧侶——それが如何に德たかく行ひ淨き聖僧であつたか、なかつたか私は知らない——の葬式にまたしても洛中洛外を騒がせた喜劇的壯觀の新聞記事を讀ませられ、私は痛憤のあまり筆を呵してこの一篇を作つた。

冷嘲熱罵

○『日本一』題して冷嘲冷罵號といふ。わたくしは寧ろ冷嘲熱罵と言ひたい。熱罵は暑苦しくて夏向きでないなどと、野暮を言ふべからず。

○嘲るといへば先づ溫度に冷を想ひ、顏色に蒼白を聯想する。所謂冷かしであり、皮肉である、冷やかなれば冷やかなるほど益々皮肉味と痛快味とは加はるだらう。罵るといへばこれとは正反對に、先づ溫度に熱を想ふと共に、また怒髮天をつき滿面朱を濺げる熱性熱血の人を聯想する。熱高きこと遂に沸騰點を越ゆるに至つて、そこに痛罵の痛快味は現はれ熱烈味は加はるのである。

○前者には理智の冷靜があり、綽々たる餘裕がある。而もその半面には氣障があり厭味が伴ふ。後者に至つては卽ち熱烈の感情性より來れるが故に、生一本の無邪氣さ正直さは見られるが、同時にまた取亂した狂態や不謹愼をも免れないだらう。前者は水の如く氷の如く、また利刃の如く、後者は火の如く焰の如く、また鐵槌の如しとでも言はうか、前者に古典(クラシック)味の妙趣があれば、後者に浪漫趣味の長所があると見るも可からう。

○冷嘲と熱罵と、思へばとり〲に面白味がある。そこには共に『詩』があるからだ。そして惡むべ

く厭ふべきは、かの八面玲瓏圓轉滑脱の瓢簞鯰式、にこぽん流、また八方美人の機會均等主義である。見よ世渡り上手の醜惡なる俗漢に至つては、棺桶に足を突込むまで遂に冷嘲熱罵の眞味を解し得ずして終るのである。憐れむべきかな、彼等。

○このあひだ岩野泡鳴氏が亡くなつてから、色々の雜誌で諸家の批評を讀み、氏の人となりの一斑を知る事を得た。いかにも無邪氣な、率直な、そして虚僞の少い性格の人であつた事を知つて、ゆかしいとも懷かしいとも思つた。岩野氏の生前に私は少しの面識もなかつたが、二三度は新聞や雜誌の上で罵倒される光榮を有したやうに記憶えてゐる。火のやうになつて眞向から怒鳴りつける氏の態度が如何にも心地よかつた。それは實際あのやうな無邪氣な率直な正直な性格から出た貴いものであつたからだ。いやに小利巧な小狡猾い、また取澄ましたやうな變な奴ばかりの多い今の世に、岩野氏のやうな型の人の罵倒が聞かれた事は、たしかに愉快であつた。わたくしは藝術家としての岩野氏には共鳴し得ないのであるが、あの如何にも子供のやうに無邪氣な性格から出た罵倒ばかりは、たしかに文壇の珍であつたと思ふ。罵られたものにも決して惡い氣持はしない。

○世には隨分と卑劣な人間もあるもので、新聞雜誌の上で匿名を用ゐて他人を罵倒してゐる惡徳漢が今なほ絶えない。顏を見られるのが恐ろしいから風呂敷をかぶつて文句を附けてゐるといふ流儀、そしてそんな手合ひに限つて、言つてゐる事に確固たる根據もなければ筋道も立つてゐない。所謂漫罵

と稱する罵倒中の最下等最劣悪なる種類に屬するものである。罵られる相手の人の名を擧げて置きながら、罵る自分の名を匿してゐるなぞは、人一人前の責任を回避してゐる點から見て、到底人格の所有者だとは認められない怪物だらう。人間以外の動物だと見做して差支なきものである。覆面の漫罵を敢へてせるものよ。爾が名は畜生である。

○俗物の道德では、人を罵るといふ事が一種の惡事のやうに考へられてゐる。甲が盛んに乙を罵つてゐる時、傍觀の第三者は必ず甲を惡んで乙に同情する。甲に罵るだけの言ひ分があり、乙が例の惡むべき虛僞の人である場合に於てすらも、世人は甲を斥けて乙を庇はうとする。世渡り上手の人間が決して罵倒熱罵を敢へてしない所以は全くここに在る。罵倒しない事が自制や謹愼から出てゐるなぞと買被つたら大間違である。少數者が多數者に對して、また弱者が强者に對して罵倒を浴びせる場合、そこには一種の悲壯美がある。それを惡德などと見るのは以ての外の心得違だ。

○皮肉や冷嘲でも、アナトオル・フランスのやうに上品で、渾然たる藝術品となつたものには、厭味もなく氣障もなく、如何にも典雅な冷靜味がある。何といつても矢張り傳統ある羅甸文化の所產だといふ感じがする。カアライル一流の熱罵を湯の立つ燒芋だと見れば、アナトオル・フランスには氷菓子(アイスクリーム)やシャヤベットの旨味があるとも言へよう。カアライルがあんなに氣短で、いら／＼した罵倒をしたのは、本來が正直者の上に、その持病であつた慢性の胃病の結果であつたのだ。胃病も人をあのや

うにするかと思へば全く貴い有難いものである。世の俗物輩に此難有味は解るまいが。

○下品な事でも卑猥な事でもお構ひ無しに列べ立てて盛んに世を罵つたものに、英吉利の十八世紀にジョナサン・スヰフトがあり、日本の徳川文學に平賀源内がある。二人ともに冷嘲と熱罵との中間を行つたものである。これも面白い。滑稽味を作つてゐる所も兩方は似てゐる。

○冷嘲は都會式であり、熱罵は田舍式である。どちらでも徹底したのには面白味がある。

○口を極めて罵り、言ふだけの事を言ひ放つてけろりとしてゐるのは、青天の霹靂と共に驟雨一過する夕立式で最も心地よい。ぐず／＼じめ／＼した霖雨連日にわたれる梅雨式の陰險に比して、優れること數等の男振である。

○冷嘲、冷罵、冷評、嘲笑、これらに對して、熱罵、痛罵、罵殺、罵詈、罵倒、とかう兩方をならべて見ると、前者の方がどうしても夏向きである。しかし私は自らの性情の然らしむるところか、たとひ九夏三伏の候と雖も矢張り後者の熱烈熱憤をよろこぶ、それはちやうど夕立を歡迎するやうに。

○他人の面前で罵倒するだけの勇氣の無いものが、陰ではなか／＼盛んに罵倒もやれば熱罵もやつてゐる。陰でさへ罵倒し得ない意氣地なしが心の中では獨りで、口にも出せないほど口ぎたない罵倒をしてゐる。心のうちで他人を罵つてゐる輩、これが日本人には最も多い型だ。巧言令色の句も古臭いだ、常に心の中で他を罵つてゐるやうな連中に限つて、いつもにこ／＼を粧うて、溫厚の君子人など

として世間に通用してゐる。名づけて狸爺と言ふ。

○世の中に熱罵ほど拙い幼稚な戰術はなからう。しかしまた、これほど美しくて屑い戰術もないのである。

○にやく、皮肉な冷笑をたたへて綽々たる餘裕を示しながら、自分は一段と高い所から見下してゐると言つたやうな態度で冷嘲する事、戰術としては恐らくこれほど巧妙なものはなからう。同時にまたこれほど惡むべく厭ふべき卑怯な戰術もないのである。

○酒に醉つた時にのみ罵詈を敢へてし得る人間がある。『酩酊して居りましたから……』といふ辯解は何にもならない。羅馬時代からの有名な諺に『酒の中に眞あり』In vino veritas といふのがあるが、酒の上での罵詈雜言などは、實は其人の眞意眞情を僞りなく最もよく言ひ現はしてゐるのである。實は平生が虛僞で、酩酊の時の方が眞なのである。卽ち人間の精神作用には興奮性と、これを制する防遏性との二面がある。素面の時にはこの兩方がうまく釣合つて調和してゐるから、そこに自制作用があつて本當の腹の中を口に言はせないやうに喰ひ止めてゐる。最近科學者の說く所によれば、酒は決して興奮作用を加へるものではなく、誰この防遏の方の作用を痲痺させるのださうだ。一見興奮せるが如くに見えるのは、實は制動機の力が少くなつただけのことである。平生は利害關係や周圍を顧慮していぢけてゐた罵倒慾が、酩酊に際して僅かに制遏を免れ、猛然として頭を擡げたのであ

る。平素は課長や重役から睨まれて特別賞與をばかり氣にしてゐる會社員が、酒宴の席で重役を罵詈するのは、罵詈してゐる方が其男の眞面目なのである。賃銀奴隷の悲しさ、平生は制遏作用を加へて、山猿の干物みたやうな重役輩の頤使にでも甘んじてゐたのだ。翌日になつてまた御苦勞千萬にも制遏作用を加へてから、重役の私宅へ詫びに行く位なら、はじめから盃など手にしないが可い。

○利害の問題を離れて本質的に考へるとき、罵倒と云ふ事は、俗流の道德で言ふほどに、實際それほどの惡德だと言へるだらうか。この點には十分なほ考察の餘地があるだらうと思ふ。

○このごろ『讀賣』の紙上に連載せられてゐる內田魯庵氏の『獏の舌』には、皮肉もあり冷嘲もあり熱罵もあつて非常に面白い讀物だと思つた。獨りよがりの短篇小說などよりは、から云ふ物の方が遙かに多く讀者を啓發し、感動し、省察せしめる力があると思ふ。

○冷嘲冷罵といへば、現代作家のうちで最もよく此特色を發輝した者はバアナアド・ショオであらう。いやに取繕つて澄ましこみ上品振つてゐる英國の習俗を、完膚なきまでに嘲つた手際は偉いものである。だから一代の文豪として彼が世界的名聲を博した後でも、英人のうちにはショオのことを好く言はないものが多かつた。實際かれが最初に眞價を認められたのは、英國に於てよりは寧ろ大陸諸國に於てであつた。

○日本の明治文學には、冷嘲冷罵に於て齋藤緑雨があつた。大正の文壇で緑雨に相當する筆を持つた

人は誰であらうか。人間が皆小利巧になると嘲世罵俗の文字などは流行らなくなるだらうか。

婦人と讀書

近頃女子の高等教育といふ事に世人の注意が向けられてゐる事は、言ふまでもなく慶すべき現象だ。たとひ男子の高等教育機關がいくら擴張せられても、女子の方のが今までのやうに全く顧みられない狀態では、一國の文化の發達はどれだけ阻害せられるか知れない。文化生活に於けると男と女との關係は、ちやうど二人三脚の競技に於けるやうに、一方ばかりがすぐれてゐても他の一人がよく走れないやうでは、到底物にならないからだ。

しかし女子の高等教育機關の擴張といつても、それには經費や設備の難問題があつて、男子の方のでさへも議會での政治問題とまでなつて騷がれた位だ。女子のための專門學校や大學を造るといつては、尙さら一朝一夕には出來ない相談である。

しかしさういふ困難もなく、そしてまた婦人の向上進歩のためには學校での高等教育などよりもずつと大切なのは婦人の讀書といふ事である。

女が專門學者になるとか、或は經濟上の獨立をするための職業教育を授かるとかいふ特殊の場合を除いて、單に『人』として自己を立派なものにしようといふためならば、讀書は學校教育などよりも

遙かに大切な、そしてずつと手近な方法である。すべて自分の向上發達を學校にのみ依賴しようとするのは、男女を通じて日本の青年の極めて惡い癖だと思ふ。知識すらも自分で掴み取るべきもので、單に受働的に他人から受けたり授かつたりしたのでは、自分の血となり肉となるまでには消化せられないと言はれてゐる。高等教育に於ては師は單に指導者たるに過ぎないといふほどにならなければ、知識ですらも完全には得られないのである。況や自分の見識を高くするとか、事物に對する理解判斷の力を養ふとか、或は女として最も貴ぶべき審美性感受性を鋭くして生活內容を豐富にするとかいふ事になれば、自分が書物を讀んで自分が考へるといふ事をしないで、どうしてそれが出來よう。いくら程度の高い完全な教育機關があつても、此目的をば達し得られないと思ふ。

だから一國の文化發達の程度は、その國人の讀書の如何によつて判じ得られると言つても、あながち過言ではないかも知れぬ。日本人は男女ともに讀書癖が少く、そして一方には學校萬能を夢想する事が餘りに甚だしい。教科書を讀み筆記帳を棒暗記にしてゐさへすれば、自分が偉くなれるとでも思つてるのだらう。いくら女子のために高等專門の學校を拵へても、卒業してから女が今日の如くに讀書を怠つてゐては五年十年の後には高等教育を全く受けない婦人と大差なき程度までに退化し逆轉して行く外はあるまい。

わたくしは嘗て舊著『北米印象記』に於て、米國婦人の地位と、その國の社會運動政治運動に於け

る彼等の勢力を説いた。米國といふ新進國の文化活動が、なかば婦人の手によつて爲されてゐる事をも論じた、ところが其米國の婦人ぐらゐ多く讀書をするものは、他の文明國に於ても多く例を見ない程である。米國に於ける公開圖書館の閲覽者の大半が婦人である事は、明らかに此事實を證してゐるではないか。

日本では讀書をする事を勉強すると言ふ、勉めたり強ゐたりしなければ讀書が出來ないとは、たしかに人生に於けるこの最大の快樂の一つを享け得ない不幸な人と言ふべきであらう。書物は之に親しむ習慣が附けば、何もそんなに仇あつかひすべきものでないのみならず、これほど親しむべく愛すべき師友はないのである。實際他人と話をしてゐれば腹の立つ事もあれば不快な事もある。しかし書物を相手にしてゐればその不快だけでも助かるわけだ。慰められる事はあつても腹は立たない。況や書物を通しては、時代を隔てた古人とも、處を異にした外國の思想家とも、膝つき合はして語りかはす機會が得られるのである。

日本では一般に人が讀書に冷淡であるのみならず、男子の場合などは學校での詰込教育の惡影響として、高等教育を受けた人間の方が却つて書物を仇敵視してゐる者が多いといふ珍現象さへ見られる。

教育ある日本の紳士の家にでも藏書といふものは氣の毒なほど少い。否な怪しげな骨董品を床の間

に飾り立てる事を忘れない人たちでも、わが家に圖書室を設けようとする人は滅多にないので、ひどいのになると亭主か細君かが昔學校で使つた古い教科書のほかには、大きな家ぢゆうに一册も書物らしい書物の備へて無い家さへある。これは、中産階級以上は勿論、はるかそれ以下の家にでも書物棚の三つや四つは必ずある他の文明國の家庭とは、大きな相異である。近ごろは主人の書齋なぞと奥さんたちがよく言はれるが、その所謂書齋と稱せらるるものには書物のない書齋があるのだから不思議だ。それから日本では大英百科辭書などを飾におくことが流行るが、讀むべき書物でない辭書類などは、ラムが所謂『書にあらざる書(ビブリア・アビブリア)』の類で、それは一種の道具である。そんな物ばかりを列べて置いたつて詰らないではないか。

書物を精讀しないで唯『積んどく』ことをわるく言ふ人があるが、美術の鑑賞眼もない人が僞物の骨董を列べておくよりは、讀まない書物をつんどく方がどんなに床しいか知れない。書物は手近にありさへすればいつかは讀むからである。或は自分が讀まなくても、家の者にもよその者にも讀むべき機會を與へ得るからである。富豪が立派な別莊を建てながら圖書室を設けてゐないなぞは、たしかに日本人の文化生活の程度を示してゐるものである。

骨董或は裝身具に較べれば、書物は價に於ても遙かに低廉なものである事は言ふまでもない。いくら奥服物が暴落したつて錦紗お召一反の代價で、立派な新刊書が五册や十册は買へるだらうと思ふ。

また讀書力といふ點から言へば、日本文の書物であれば今日の女學校卒業程度の學力で十分に讀まれ得る筈である。それ以上は讀書に慣れさへすれば、おのづから理解力は進んで行く。また婦人には時間がないとか、家政にかまけて本が讀めないと言ふ人があるが、一日に一時間を讀書のために割く事は、普通人にとつて決して不可能事ではないのである。一日一時間として一年に三百六十五時間は、學校で一學科毎週三四時間の講義を一學年間聽くのに比して、それが自發的であるだけ效果は勝るとも決して劣る事はないのである。

わたくしは都會の郊外住宅地などにでも、婦人がたの盡力で小圖書館とか巡廻文庫とかが設けられたり、或は同好の小數者が集まつて讀書會のやうな會合をつくられる事を極めて手近な方法として推奬したい。そして集まつて銘々が讀後の感想を語り合ふとか、或は自分が讀んで好著と思つたものは知人にも勸めるとか、或はお互に內容を紹介するとかいふ事は、極めて容易に實行せられ得べき事であらうと思ふ。

わたくしは必ずしも學術上の著述を言ふのではない。詩歌小說の類は言ふまでもなく、旅行記傳記、その他思想問題に關する書物なぞは婦人の讀書に最も適當だと思ふ。

贈答品に書物を用ゐる事も日本では餘り流行らない事だが、正月とか盆とか或は餞別などの贈物に、詩歌集や旅行記などは貰つた方でどれ程うれしいものだらう。酒や煙草や菓子などの不健康物、

或は消耗品に比して、遙かに贈物として上品でもあればまた理窟にもかなつてゐる。西洋では降誕祭（クリスマス）近くなれば、書籍店は勿論、三越、白木屋といつたやうな百貨店の一隅には、贈答品として特に婦人向きに美しく飾られた裝幀の詩集などが必ず賣出される。英米の知識階級では、書籍はかかる場合に最も普通な贈答品の一つである。殊に雜誌社が年末號に翌一ケ年分の其雜誌の豫約券を刷り込んで、代金と贈られるべき先方の住所氏名をさへ示してやれば、翌年毎月其人からの贈物として先方が之を受け得るやうな仕組みにしてゐる婦人雜誌や演藝雜誌のある事も、面白い方法だと思ふのである。

最後になほ一言したいのは、讀書をする時、出來得べくば鉛筆とかペンとかを必ず持つてゐて、書中に要所をしるししたり、或は自分の感想を書き入れたりする事が大切である。またもつと願はしい事は別にノオト・ブックを用意して自分の所見を記入し或は拔萃抄錄を怠らない事である。かういふ事は單に後日の參考や撿索に便するばかりでなく、また自分がペンを働かす事によつて、知らず識らず其書物を理解し玩味し討究する上に深さと確かさとを增すからである。これは敎室での筆記なぞよりも、寧ろ有效な結果を齎す場合が多いと思ふのである。

服裝の墮落

實際生活は俗なもの、詩や藝術は風流韻事だとかう定めて了つて、二つを全く切り離して居るのが當り前だとなつてゐる。しかしわれわれは既う、さうした枯淡な生活には長く堪へられなくなつた。實生活と藝術と、二つのものが兩方から歩み寄つて、一方に文藝が實生活に切實なものになると共に、更に他方では日常生活を詩や藝術の方に、一尺でも一寸でも一分でも近づけたいと思ふ。それでなければわれわれは一日でも人間らしく生きる事が出來ないからだ。

わたくしは近づけたいと言つた。實生活と詩歌藝術とを一點に會せしめ、二つのものが二にして一、一にして二となりそこに毫も分裂のない全的統一ある生活は、何よりも望ましいに相違ない。しかしそれは今のやうな經濟組織社會制度のもとに於ては、到底不可能な事である。理想として望み得べき事であつても、實現することは容易に期待し難い。ただ近づけるといふ事だけで私たちは滿足しなければならぬ。詩のうちに生活があり、生活のうちに『詩』がある日は、嘗て人類の歴史の原始時代に於て之を見た。將來に於て再び之を見るのは何時の事だらう。

近松の戲曲で馴染であつた曾根崎や蜆川に、今は既う元祿のおもかげは無い。舊都とは名ばかりの

今の京都に鴨川や東山はあつても、櫻かざして春の日の短きをかこつた王朝のながめもなく、祇園のほとりの路ばたに大雅堂が繪筆を揮つた後の世の姿さへ、今は美しい過去の日の夢である。東京の日本橋あたり、大阪の北濱邊に怪しげな亞米利加風のビルディングが立ちならび、これのみは昔の儘な泥だか道路だか判らぬ町には、安つぽいフォオドの自動車が走る。日本の大帝都はいま殖民地のやうな凄まじいものに變化しつつある。

三都がこれだ、他の小都會は固より論外である。自然に惠まれた美しい名所とか溫泉地とか言ふものさへ、今では二度と行つて見ようといふ愛着を持てない地となつた。

かういふ風に考へて見て、さて先づ手近な衣食住の狀態を顧みるがいい。まるで成つて居ないのだから。

古い一切のものを壞すのは結構だ。新しい美しいものを創造する事を忘れてはならない。まに合はせの胡魔化しの實用一片のその日ぐらしに安んずるのは、眞に生きんとするの努力が足らないからだ。さういふ要求を切實に感じて居ない程に、生活內容が貧弱なからだ。

わたくしは、こころやすい染織業者から賴まれて此一文を草する。だから今はただ服裝に就いてのみ語らう。

蓬頭垢面の人が油じみた淺黃の勞働服に、その逞ましい筋肉を包んでゐるのはたしかに立派だ、た

しかに美しい。生命の力が溢れてゐるからだ、徹底してゐるからだ。その姿には、血と肉とで造られた貴い藝術があり『詩』があるからだ。なまじつかぺらしやらした出來合ひの絹物をつけて、田紳風の惡趣味を發揮したり、沒趣味の資本家製造家によつて押賣りされた、製産過剩の結果である粗製品の半襟や帶地で胡魔化してゐる女たちよりも、はるかに美しく、はるかに立派なからだ。

藝術とか『詩』とかいふことは、洒落でもなければ風流でもない。深くして純な生命の表現そのものである。暇や金の問題とのみは言はれない。

ぐにや〳〵の、吹けば飛ばんとする如き怪しげな絹物よりは、ごつ〳〵の手織木綿の方がどれだけか貴いだらう。世界で男子の服裝の標準となる英吉利で、今もなほホオム・スパンの服地が貴ばれるのもこれがためだ。愛蘭や蘇格蘭の片田舍で出來る手織物には、都會の資本主義から出來た製品に見られない貴い味はひがある。

日本の近年の服裝の墮落は、先づセルの行燈袴から始まつた。古渡り（こわた）の唐棧や仙臺平、絽平、お召と行かなければ、嘉平治だつて惡くはなからう。金が無いなら、なぜ立派な小倉の袴を穿かないのだ。ごり〳〵した小倉袴には、襞のなくなつたセルの行燈袴に見られない趣致がある。人の家に行つてふわと行燈に風を孕ませて坐り込む客を見ると、それだけでもう其人の腹の底から裏までが見え透くやうな氣がする。文字通りに、淺ましいとは、あの事だ。

女學校で、家事裁縫とか理化博物とかだけに力を入れて教育された今の若い婦人に、色彩美感を問ふのは或は無理かも知れないが、半襟と羽織と帶と着物と、さういふ物の色彩の調和、模樣の配合などを考へて居るものは殆ど無いではないか。隨分高い代價を拂つて居ながら、色といひ縞柄といひ、その服裝はまるで蜥蜴の化物だ。金錢と時間とに餘裕なしとあらば、田舍おとめの飾なき姿こそ寧ろゆかしきものであらう。

田舍じやれ、わる洒落、やす物の胡魔化し、それらは皆、すさみ果て荒らし盡くされた今の大阪や東京の町と同じやうに、殺風景な自分の心の姿を外に現はして居るのである。些事ではあるが、服裝の墮落が心の墮落を語つてゐる。

服裝を財布の看板に使ふ馬鹿がある。裏から心の貧弱が見え透くのに氣附かないのだらう。かういふ馬鹿は女ばかりか、男にも極めて多い。

しみつたれた眞似だけは、よしてもらひたい。一例を言ふと、冬には女の足にカバアといふものが流行る。熊の足みたやうな奇怪至極な物を、奥さんもお孃さんも小間使も藝者も女學生も、皆が穿いてゐる。歌麿や豐國の描いた美人は、あの美しい白魚のやうな五本の指に爪磨き(マニキュア)の化粧までした素足を、女の感覺美の表象にして居た。カヷアを穿くと暖いからといふのだらうが、何も日本の冬が、元祿とか或は文化文政の頃よりも溫度が下つて、大正年間には寒くなつたといふ譯でもあるま

い。それを着ける人間の心の方が荒廢し墮落したのである。但し紫とか小紋とかの色足袋は、昔を今に復活しても矢張り好いものであらう。このごろ何處かの呉服店が賣出したドロオン・ワアクの透し入りの白足袋も、いづれ西洋の女の靴下から思ひ附いたのだらうが、それも新時代の新意匠として決して惡いものではない。唯あのカヴァに至つては……。

羽二重の白足袋を洗濯して、つぎを當てて穿いてゐる女がある。そんなしみつたれた眞似をするなら、なぜ最初から金巾か木綿かの足袋を穿かないのだ。それが胡魔化しであり不徹底である。人間の內的生活の問題は、かうして足の爪先にまで現はれる。

このごろ男子の服裝に、亞米利加風の模倣が日一日と烈しくなるのは、これも堪へられない事の一つである。阪神地方とか、東京の京橋日本橋あたり、また京濱電車內などで見る洋裝の若い『紳士』とかいふ者の服裝は、あれは一體何といふ有様だらう。

男子の服裝は英吉利、女の流行は巴里と、もう世界では相場のきまつたものだ。美的教養といふ點から言へば、米國は世界の田舍であり、文明の野蠻國である。この事は私の舊著『北米印象記』の中にも精しく書いたから、今さら繰返さないが、エディソンの發明の電氣應用の機械類や、その他タイプライタアとかディクタフォンとかいふ便利な事務機械と共に、黃金崇拜（オールマイティダラア）の熱や廣告萬能の病を輸入し、なほそれでも飽き足らずに、あの俗惡醜劣な米國式の服裝を模倣するに至つては全く沙汰の限

りである。

忙しい勞働をする人たちにとつて、腕時計（リスト・ワッチ）は必要物だから結構だ。しかしぞべらんとした服裝をして女の尻を追廻はしてゐる暇人（ひまじん）が、何の必要あつてあの俗惡なリスト・ヲッチを、さながら囚人の手枷のやうに腕に卷き附けて居たいのか。ちよと時間を見るのに、扼腕といふ事をやつて氣取つて見せるなぞは少し考へものだ。切齒扼腕と言ふ熟語があるが、資本家の走狗になつてゐる會社員銀行員は、別に切齒して悲憤した覺えなぞはあるまい。何も自分で自分の時計を見るのに扼腕なぞしなくても濟みさうなものだ。あれなぞも最初は忙しい米國あたりで拵へて、世界中に撒きちらした惡趣味であらう。

髮の毛を長くして前から後へ梳き上げたオオルバック（音が「オオル馬鹿」と似てゐるのをいふのではない）ソフト・カラア、爪尖（つまさき）の無闇に大きくふくれた靴、派手な俗惡の模樣の襟飾……數へ立てれば際限もないが、これらは皆もとを尋ねると米國といふ、教養もなく眞の『文化』もない國から起つて、東西に傳播し波及した下劣な趣味である。はいからに行かうといふなら、何も好んで米國風のやうな田舍洒落を眞似なくても濟まうではないか。

英佛では服裝のやかましい人たちが、今日の洋服そのものにすら不滿を感じてゐる。中には昔の十八世紀の典雅な風俗にあこがれてゐる人さへ尠くはない。佛蘭西は路易王朝の趣味を民衆化して、今

の共和政のもとに立派に活かしてゐる國だ。洋裝を眞似ようといふならば、何を苦しんで米國、それも西部の田舍者なぞを模倣するのだらうか。
あたまはオォル・バックで、セルの行燈袴に腕時計。まあさういつたところが、よく今の日本人の生活を現はしてゐる。それで談話のなかに英語のかたことでも交へれば、今の日本人の內生活の貧弱と墮落とを、最も雄辯に語るものが見られる。
衣帽の末にまで心を配つてゐる暇と金の餘裕が無いといふ人が多いのは、今日の社會狀態が惡いのだから、それは無論已むを得ない。現に私たちも其方の仲間だから何とも言へないが、相當にお洒落をしたり、あたまを蜻蛉のやうに光らして化粧品屋に御奉公をする人たちが、何等知識なきために、また何等美的教養なきために、奇怪至極な惡趣味を模倣しまた之を傳播するのは、坐視するに堪へない事である。しかし今日の資本主義では、製造業者の方で勝手なものを造り出して、それが一世の趣味や流行を支配する結果になるのだから、製造業者の方でも少しは考へて貰ひたいのである。あながち顧客の方をのみ責めるわけには行かない。
日本では嘗て婦人の服裝が花柳界によつて支配せられた。その花柳界が全く井底の蛙で、日一日と時勢に後れ、あたまが働かないために漸次勢力を失つて行くと共に、今日は女學生あがりの奧樣やお孃樣の風俗が之に代つた。ところが其奧樣やお孃樣なる者が、甚だ失禮ながら、今日の女子教育では

歌舞演劇の類をすら無視し蔑視してゐる状態だから、まるで藝術的訓練なぞを受けたものではないのだ。洗練に洗煉を重ねて磨き上げた往年の花柳界に代るだけの資格の無いものである。そこで日本婦人の服装なるものは、今日遂に無標準となつて、渾沌たる無政府状態(アナアキズム)に陥つた揚句、蜥蜴もあれば三毛猫もあり斑馬(しまうま)もあるといふ奇々怪々な服飾を見るに至つたのは、痛嘆に値する。

服装のこの渾沌たる亂脈状態が、道徳や宗教や藝術などの問題と同じく、やはり日本人の內生活の貧弱と堕落と無反省と無批判とから出てゐる事を考へねばならぬ。

繰返し言ふが、服装の如何は必ずしも金錢の問題ではない。絹物の代りに木綿を、羽二重縮緬の代りにモスリンを、お召の代りに銘仙を用ゐても、そこには立派な澁味も出れば、あでやかさも出る。要するに人間のあたま、その內生活の如何に歸着する事である。平たく言へば、『心』の問題である。

小泉先生の舊居を訪ふ

松江名所はかずかずあれど、千鳥お城に嫁が島。
花は城山、紅葉は春日、月は愛宕に、津田の雪。
出雲名の出た宍道湖見やれ、浮いた嫁島、波のはな。
晴れて添ふ日を松江の湖水、たまの大橋たのしみに。

—安來節—

山陰の古都松江は、今もなほ出雲神話をおもはせる夢の都である。さうだ、眠るが如き夢の都である。宍道湖畔の水郷に、土地の人は茶ばかり飲んでうつらうつらと夢の國を辿つてゐる。臨水亭といふ旅館の欄に倚つて松江大橋、嫁が島、どこを眺めて見ても、思ひ切つて呑氣なものである。すべてがいゝ、どんよりした沈靜な薄暮の氣に包まれて、いま光明の國から消え去らうとする影を見るやうだ。

そんな事を考へながらぼんやりしてゐる私を、突如として驚かしたものがある。まるで大地の底から今飛び出した怪獸が吼ゆるにも似た、凄まじい聲が鼓膜を突く。叫ぶが如く、呪ふが如く、又唸るが如く、とても形容も何もしようのない奇怪至極な聲である。しばらく呆氣に取られて聞いてゐた私は、聲の止むのを待つて、あれは何ですと傍人に訊いた。午砲の代りに午後の七時を報ずる警笛ださ

うである。途方もない事をやつたものかな。これもたしかに松江名所――ではなく、名物の一つであらうか。

どこでも普通は正午にする事を、夜の七時にやつて平氣でゐる松江は、さすがに夢と影との都だ。時間と共に時代をも超脱したロマンスの郷土である。いつたい、どこからどうすると、あんな奇怪千萬な聲が出るのだと訊くと、何でも市役所とか電燈會社とかの仕業ださうだ。なるほど二十世紀だ、松江にもそんなものがあるのかな、と私ははじめて夢を破られた。松江の人たちは日に一度づゝあの怪物の聲によつて、夢の都の夢の生活から無理遣りに現代に引き戻されてゐるのであらう。しかも引戻す其聲からして既に、素盞嗚尊の神話に出る八岐の大蛇の呻きのやうなのだから面白いと思つた。見れば松江大橋にも電燈がともつてゐた。

夢と神話の出雲の國の郷土から生れた民衆藝術である安來節に、『松江名所はかず〳〵あれど』と數へた千鳥お城よりも、嫁が島よりも、更に遙かに意義の深い名所がほかに、も一つある。それは殆ど世界的に有名な名所であつて、しかも日本人が殆ど顧みない名所だ。否な、松江の人すら多くは知らない名所だ。言ふまでもなく、それは小泉八雲先生――ラフカディオ・ヘルン氏の舊居である。

日本を見物に來る西洋人のうちには、日本人の全く知らない名所を、やつとの事で尋ね當てて、あの不愉快な山陰線の汽車に乘つて見に行く人が、殊に近頃は多い。それどころか、はる〴〵太平洋の

かなたから先生の遺跡を訪はんがためにのみ日本に來遊する外人もあるのだ。現にこのたび米國で先生の全集刊行の擧あるに際して、松江時代の舊居の寫眞を撮らんがため、かの國からわざ〳〵出かけて來た人さへあるではないか。

あの稀世の名文を以て日本を世界に紹介せられた先生の遺跡を保護しようともせず、先生の功に報ゆるに殆ど何事をも盡くしてゐない日本人の無知と忘恩とを見て、怏からず思つてゐる西洋人の多いのは、まことに無理のない事だと思ふ。先生にはあの十數卷の名著がある。英語の滅びざる限り『ラフカディオ・ヘルン』の文名は世界に不朽なのだから、その遺跡なぞを保護しようがしまいが、今は世になき先生のために寸毫の利するところはあるまい。ただ日本人として果してそれで濟むものだらうか。文藝の尊威を解せざるその無知とその忘恩とを世界に廣告して、恥だとも思はないだらうか。軍人と富豪と貴族と政治屋とをのみ尊崇する事を知れる無知卑俗の徒は、たとへば近松巢林子の如き自國の文豪に對してすら、その偉業を追慕すべく最近に新聞社が手を下すまでは、殆ど何一つ爲て居なかつたではないか。關白とか將軍とかいふものを神さま扱ひにして、神社に祭り上げて拜んでゐる日本人は、嘗て一たびでも詩人のために、藝術家のために、神社らしい神社を建てた事があるだらうか。私は神社などを問題とするのではない。何を貴び何を拜むべきかを知らないその無知と蒙昧とを恥づべしとなすのである。

中央政府は過激法案の取調べをしたり、浪花節の奬勵をしたり、その他青年團の組織などにもさぞ忙しい事であらうから、內務省などに言つたつて始まらない。名跡の保存、國寶の保護などに就いては先づ地方行政の任にある者が少しく考へて見るが可い。ヘルン先生の歿後すでに二十年に近いが、その間松江に居た知事とか市長とか云ふ者は何をしてゐたのだ。私は敢へて彼等に曠職の咎ありとは言はない。むしろ俗漢と俗吏の無知を憤るのである。刀筆の吏、恐らくはラフカディオ・ヘルンの世界的文名をすらも知らなかつたのだらう。

午後の七時になつてから、あんな怪獸の吼ゆるが如き音響を工夫してゐるあひだに、松江の人たちは少しはヘルン先生の偉業を考へて見たら可いだらう。せめて『松江名所は』と問はれて、小泉先生の舊居を旅の人に語り得るだけに、注意してゐる位の事はあつて欲しい。ある觀光客は之を縣廳に訊いても、また市役所に問ひ合はせても、遂に要領を得なかつたさうだ。

城址の美しい靑葉を照らす午後の日ざしが傾くころ、靜かな濠ばたの或家の門に私の車はとまつた。それは如何にもさむらひの敗殘凋落のあとを想はせるやうな家中屋敷の一つであつた。古びた門構へといひ、正面の玄關といひ、見るからに封建時代その儘のものであつた。正面の玄關の左手に四疊があつて、それは南の方の小さい庭に面してゐる。苔むした石燈籠や庭石もかつては先生が飽かず眺められたものであつた。殊に緣側に近いところにある百日紅だの、珍らしい老木の大木蓮だのは、

先生の殊のほかなる愛樹であつたと聞くさへ懐かしい。樹木の精ハマドライアッドの神話を語つた古代の希臘人のやうに、先生もまた草木に宿る生命に強い愛惜の念を持たれた。後年東京に移られてからも、或寺院の老木を一握の黄金に代へて惜しげも無う伐りたふさうとした俗僧を見て、ひどく怒られたと言ふ話がある。先生はその深い愛の生活、強大な感情生活のうちに、自然と人生と超自然のすべてを抱擁して居られた人であつた。

その次の間の十疊は、先生が新婚の樂しい日を送られた茶の間であつた。洋風の椅子なぞを用ゐないで座蒲團に坐り、日本の煙管で日本の刻煙草を吸ひながら、奥さんや來客と打解けて語られたのは此室であつた。此家の持主であり現在の主人である根岸さんは、私を此部屋に通して色々の話をせられた。

日本に於ける先生の舊居の地としては、この松江の他に、熊本時代のもあれば、また現在未亡人の住まつて居られる東京の大久保の邸もある。しかしこの出雲の地は日本に歸化せられた先生にとつては特殊の意味がある。天外萬里漂浪の孤客として、その頃はまだよく内情を世界に知られなかつた遠い〳〵日本の、しかもまた山陰の片ほとり、夢と影との神話の都に來て、そこで舊藩士の女小泉氏を娶られた。英米の社會からは全く踏晦し去つて、突如として此地から、あの最大の名著『日本瞥見錄』二卷を公にせられたのだ。作者は果して何處にある如何なる人ぞ、とかなたの文壇の驚異となり、はて

は『ラフカディオ・ヘルン』その人の實在をすらも疑はれた時があつた。先生と同じく近世散文の巨匠であるロバト・ルイス・スティヴンソンも、故國蘇格蘭を出てからは足跡天下にあまねく、米國の桑港で結婚してのち、太平洋をさまよひ、はてはサモアの島に世を終るまで後の研究者はその足跡(トレイル)を辿るのに沒頭してゐる。わたくしは松江に於ける先生のこの舊居の地が、南洋のサモアに於けるスティヴンソン終焉の地の如くに、今後は益々多くの文學巡禮者(リテラリ・ピルグリムス)の驚嘆と好奇の念を惹くことであらうと思ふ。先生みづからに於ても、その樂しいゆかしい思出と愛惜とが、特に松江の此家から離れなかつたものと見えて、後年熊本から東京帝國大學へ轉任せられる途中――まだ全く山陰地方に汽車の便の無い頃――わざ〳〵廻はり道をしてこの第二の故郷を訪はれ、『わが家に歸つた』と言つて喜ばれたさうである。この茶の間に接した北向きの六疊の一室が先生の書齋であつたといふ。すべてが閑寂な古びた、いかにも士族屋敷らしい空氣に滿ちた部屋である。障子を開けて縁側に出ると、そこの庭には小さな池があつて、まんなかに一本の松を植ゑた小島がある。裏手の方は以前しばらく模樣變へしてあつたのを、近ごろ根岸さんがまた先生在住の頃の舊態に復せられたのださうだ。庭の左の方にある土藏を指しながら、根岸さんは色々の話を聞かされた。

『この池の中には隨分澤山蛙がゐたさうですが、それを捕らうとて藏の後の方から蛇だの鼬だの出て來たもんださうです。時々蛙が捕られるとあはれな悲鳴を擧げるので、その時は先生の一家が皆飛び

出して來て大騷ぎをした、と奥さんが話されました。それで先生は時々食べ殘りの肉を皿に入れて石段に置き、蛇や鵄に與へられました。私が御馳走をしてやるから蛙を捕る事だけは、よして呉れよ、と先生はいつも言はれたさうです。』

さういふ事を根岸さんは話された。裏の籬を越えて右手に見えるのが赤山の杜で、それから聞える鳩ぽつぽ、杜鵑の聲に耳を澄ましながら、先生はこの書齋に引籠つて瞑想もし讀書もし創作もせられたのであつた。また正面はるか向うの方に、樹間を洩れて見える山が山中鹿之助の城址だらうである。

ゆつくり話を聞いてゐる間に、日は暮れさうになつた。再び部屋に歸つて座に就くと、もう人の顏がぼんやりする程にほの暗かつた。私はこの夢の國に來て夢の家をたづね得た事を喜びながら、暫くして辭し去つた。門前の濠の水は深く濁つて、靑葉のゆふべの影を宿してゐた。

翌日わたくしは京に歸る前、記念のために、松江の本屋で、獨逸のタウヒニッツ廉價版の『たなばた物語』"The Romance of the Milky Way" 一部を求めた。これは先生が雜誌などに載せられたただけで遂に未定稿のまま、まだ一冊の本には纏めずして世を去られた數篇を、歿後に出版した物である。松江名物の大きなあはび貝を五つと先生のこの遺著とを家づとにして、わたくしは夢と影との松江を去つた。

文豪ラフカディオ・ヘルン先生に就いては數年前、私は拙著『小泉先生そのほか』（本全集第四卷）の卷頭に述べたから、今は多くを語らない事にした。

詩人クロオデル

このあひだ國際通信の電報はよろこぶべき報知を齎した。それは、いま歐洲の新詩壇に盛名かくれなき宗教詩人ポオル・クロウデル氏が、近く東京駐紮の佛蘭西大使として來朝するといふのであつた。

詩人であると共に評論の筆も執り、また神祕劇の作者でもある此クロオデル氏に就いては、數年前わたくしの舊著『文藝思潮論』の末尾に、佛蘭西の生命派（レコオル・ド・ラ・ヴイ）の文學を說いた時に述べておいた（同書二一〇頁――二一四頁（本全集第二卷））。いま氏が大使としての來朝を耳にし、この機會に於て更にそれ以後の作品と共に簡單な一篇の紹介を書くことは、獨りわが文壇のためのみではなからうと思ふ。

胴上げでもするやうに一時は持上げる事も早い代りに、投げすてる事も極めて早い日本の文壇とちがつて、西洋のは一たび眞價を世に認められたならば見棄てられる事のない代りには『聲譽の堂』に上るまでに二十年三十年の歲月と努力とを要した作家は珍らしくない。なかには絕えず制作を發表して居ながら終世世に顧みられず、死後に至つてはじめて世の視聽を聳てた例（ためし）さへ尠からずある。佛蘭西では殊にさうだ。自然派小說の神樣のやうに言はれてゐるかのフロオベエルの如きでさへ、現にこ

の例に洩れなかつたのだ。クロオデル氏なぞも前世紀末から既に作品を公にし、早くからミルボオやバレスやジイド、ジヤム、モウクレエルなどが之を紹介し推賞して居たにも拘はらず、世間では相手にしなかつたさうだ。詩壇と劇作界とに第一人者としての盛名を得るまでには、かれこれ二十年の歳月を要したのであつた。然しそれにはまた別に理由があつた。第一、クロオデル氏の作は戯曲でも詩篇でも随分難解なものであるのと、第二には、外交官の常として故國に在る事少く、いつも東洋諸國や南米あたりに領事として在勤し、萬里の異境に居たために文界の人たちと交も少かつたからだ。しかし官吏たる職務の上から、また極めて強い宗教信念の上から作家として名を出す事を好まなかつたのも一原因であつた、と或批評家は言つてゐる。とにかく氏が初期の作を匿名で而も部數を限つて出版してゐたのは事實である。わたくしが先年『文藝思潮論』の最後の章にこの新詩人を論じた頃は、その作が漸く佛蘭西の公衆に認められ、また獨逸でも飜譯せられ、英米の讀書界にすら廣く持囃されるに至つた初期であつた。

氏がはじめて佛蘭西文壇に名を成したのは、千九百〇七年に散文の著『東邦所見（コネサアンス・ト・レスト）』を公にしてからだ。これは非常に美しい文章で印度支那日本あたりの印象を、二三頁づつの斷片に書いた文集である。東京の日本橋通や日光廟の觀察なども面白いが、特に文章としてすぐれたのは錫崙の風物を叙した冒頭の一篇、支那で孔子廟に詣づるの記など、神祕思想を東洋特有の風物に織り交ぜて描いた諸篇

がラフカディオ・ヘルン先生の文を更に一層絢爛ならしめたやうな趣がある。讀者は「塔(パゴド)」「夜の都(ポル・ラ・ニュイ)」「海上のおもひ(パンセ・アン・メエル)」「意識の寺(タアンプル・ドウ・ラ・コンシヤンス)」「夢(レエヴ)」「河の降りて(ラ・テツサアント)」「鬱憂の水(トリステス・ドウ・ロウ)」「松(ル・パン)」「燈と鐘(ラ・テアンプ・エ・ラ・クロシユ)」など、殆ど散文詩集に見るごとき表題によつてでも、內容を想像し得られるであらう。試にその一節を引用して見よう。月明の夜の星影をながめて、

『夜半の祈禱のために起き出でた僧のやうに、わたくしはこの不可思議の鏡を見ようとて床を出て來た。太陽の光は生の力、創造の力だ。吾等はその力を分與されてゐる。併し、月の壯麗はまさに思索(パンセ)の默想に似てゐる。音なく熱なく、獨り月に對して私は沈思する。一切萬有はその光の下に黑くゑがかれる。嚴かな饗宴だ。朝になるずつと前に、私は世界の姿を冥想する。あそこの喬木が既う花咲いた。すつくとただ一本、まるで白い大きなリラのやうに。それは夜の新妻、光明を浴びて震へてゐる。

夜半過ぎての太陽よ。私が女王として選ぶのは天空の高きに輝く北斗星でもなく、金牛星の赤い火でもなく、またかなたの暗い木の間に光る黃玉のやうに、木の葉のそよぎに見えがくれするあの遊星でもない。それらよりも遙かに高く、無窮の光に隱れた一番遠い星だ。見る私の目と心とは合致して星が見えるとき、それは星かげの消える時である。(同書百十一頁『月の壯麗』)

また『椰子樹(ル・ココテイエ)』と題した卷頭の一章の書き出しには、

わが故國の木は皆人間のやうに直立して、而も動かない。深く地中に根ざして腕を擴げてゐる。が、此國の靈樹ばにやんは一本立ちに立つのではない。澤山の絲をつり下げて地の胸を撫でさぐり、自分で築き上げたお寺のやうに生ひ立つ。

そしてその結末には、錫崙を讃美した名高い一節がある。

忘れがたきは爾錫崙よ、なんぢの木の葉よ、爾の木の實よ。檬果(マング)の肉色した街道筋を裸で通つて行く柔和しい眼つきの爾の民よ。憂き惱みに涙ぐましう、私は曇りがちな空の下を肉桂の葉を噛みながら車に揺られて行く。その時、車夫が私の膝の上に載せてくれた長い薔薇いろの花よ、それも忘れ難い。

殆ど抒情詩を讀むやうなこの美しい原文は、近代の佛蘭西散文で雙(ならび)なきものだと言はれてゐる。之れをシャトオブリアン以來の名文だと激賞した評家もある。

ほぼ二十世紀の初年を境目として、佛蘭西の思想界には著しい變動があつた。ずつと以前の自然派が行詰つて、それが神祕說となり象徵主義となり、更に轉じて一時は人生派と呼ばれた新傾向を、思想や文藝の上に見るに至つた。卽ち懷疑厭生の世界觀を棄てて、人生そのものを肯定し謳歌し愛慕して、實行生活の努力に强い信念を置くやうになつた。政治軍備經濟學藝などの當面の問題は言ふまでもなく、はては體育競技や航空術の如きに至るまで、人生のあらゆる活動(アクション)に對する燃ゆるが如き熱愛

と享樂の態度が明らかに見られるに至つた。この理想主義の新傾向は更に加特力教信仰の復活と結び附いて、王朝以來の古い佛蘭西の傳統主義が、思想界にも藝術界にも現はれ出でた（この新思潮に就いては、拙著『文藝思潮論』の結論（エピロゲ）「現代文學の新潮」に說いたから、今玆に繰返す事を避ける）。歐洲戰爭に於ける佛蘭西の最後の勝利とあの勇猛な態度との背後には、かういふ强大な思想の力が動いて居た事を何人も否定するわけには行かないだらう。實行活動が宗教信念と相結ばれた時ほど力强いものはないからである。前世紀後半の佛蘭西を思ひ、之と比較して更に今度の戰亂中の佛蘭西の活躍を見て、今更のやうに驚いた人たちは『二つの佛蘭西あり（ラ・ドウ・フランス）』と思ひ、「第三の佛蘭西（レ・トロアジエム・フランス）」の活現だとも思つたやうだが、これは誤だ。よく考へて見ると實は佛蘭西は矢張り一つしきや無いので、その昔、中世の『ロオランの歌（シャンソン）』からジャン・ダルクを過ぎて、今度のマルヌの激戰にいたるまで、そこに大きい傳統のある佛蘭西精神唯だ一つ過去現在を一貫して牢乎として儼存して居たのであつた。

　かくして新世紀の佛蘭西では、宗教にも文藝にも實生活にも、否な社會主義にすらも濃厚な理想主義の色彩が現はれた。ルナンやアナトオル・フランスの懷疑論に耳傾けてゐた民衆が、今度はまた加特力教の熱烈な信仰に歸つて來た。

　一般の思想界から言へば、佛蘭西新世紀の中心人物と目せらるべき人は、ベルグソンの外に、戰時中、世を去つたシャルル・ペギイ、レミ・ドウ・グウルモンの二大文豪を加へた三人者であらう。そ

しで自由な律動的な生命の讃美者であり、また虚僞の感情を排して眞に現實の眞を見つめた多くの藝術家が、この三人の天才を圍繞して生命のリズムの交響樂(シムフオニー)を奏し始めた。なかで詩歌の方面に就いて見れば、田園の生活に海と花と鳥とを友としてゐる自然詩人フランシス・ジヤムと、ここに說くクロオデル氏とがその最大なる者であることは、今日既に多くの批評家の一致する所である。ペギイとジヤンムと、そしてクロオデルと、三詩人は皆等しく神祕思想の人であり、熱心な加特力教の信者である。

元來加特力教は、レミ・ドウ・グウルモンが言つたやうに『異教化された基督教である。神祕的なと共に感覺的な宗教である。だから人生の二つの根本的な而も相背馳せる傾向を滿足させ得るし、また長いあひだ滿足させて來た』のである。(拙著『文藝思潮論』(本全集第二卷)參照)この宗教の感覺的な一面が近代人の鋭敏な官能をそそり易いと共に、またその濃厚な神祕的特色が近頃の新異教主義(ニオ・ペイガニズム)とぴつたり一致してゐる。詩人としてのクロオデル氏は、かかる意味に於て新時代の加特力教詩人である。『理解しようとする事はわが任ではない。私は熱愛と戰慄とのなかに祈らうとするのだ。主イエス樣、願はくは爾の再臨の日に、涙あふるる眼もて爾を見る事を得させ給へ』と彼は言ひ、また『人類の救の主、十字架に死し給へるイエスのおん前に懺悔しつつ、われは父祖が信じたる事を何一つ疑ふることなく信ずるのである』と、クロオデル氏は歌つた。

その宗教信仰を歌つた詩では、氏が往年南米のリオ・デ・ジャネイロに領事として在勤してゐた頃の作『彼國にての彌撒（メス・ラバ）』が最も名高い。身は故國を距つて遠く萬里の異郷に在る時、憂愁の思は、おのづから詩人を導いて禮拜の堂に赴かしめた。

鐘は響き、司祭かしこに在り。生は遠し。こは彌撒なり。

『われは赴かん神の祭壇に、わが青春を慰めし神をさして。』

と歌ひ、また

おもむろにその感覺と思想とを俗世の事物より離す人は、

おのが力に統一を得て、神のおん前に到らん。

と言つた此宗教詩人にとつて色相界の萬象は、それを通して神の國へと赴く巡禮の道に他ならないのである。

氏をして一躍歐洲の詩壇に名を成さしめた作は『新世紀を祝する五大頌歌（サン・グランド・ソド）』（一九〇九年）であつた。この詩篇には、藝術と人生に對する極めて壯烈な大膽な獅子吼が聞かれる。

ああ我が精神よ、何等の成案に諾ること勿れ。ああ粗野なるわが精神よ、自由なれ、常に身構へせよ。さながら聲なき秋の招きの響くとき、碎け易き燕の大群の飛ぶが如くなれ。ああわが氣早なる精神よ、何の智巧もなき大鷲の如くなれ。或詩を制作せんため、われらは如何にかすべき。おのが

巣を營むすべさへ知らざる大鷲の如くに。わが詩は何者にも屈從することなし。されどかの海の大鷲が、突如として大魚を拉し去るとき、人は輝ける翼の旋風と波の、とばしりとを見るのみならずや。

何の智巧をも弄することなく、ただ天空を行く大鷲の自由な飛翔をさながらに、生命の律動そのものを制作の中心動機としたのが此新詩派の特色だ。その詩形も亦從つて極めて自由な、何の拘束もない散文に近いものである。

信念に燃え、法悅に浸つてゐる此詩人は、ヴルテエル、ルナン以下、近代の懷疑思想家を顧み憤然として痛烈なる罵倒を敢へてした。曰く、

われと共に在らせ給へ、主なる神よ、夕べは近づきたれば。また我を捨て給ふ勿れ。

多くのヴルテエルやルナンやミシュレエやユゴオや、そのほか總べての醜漢と共に、我をも見すて給ふな。

彼等の靈は死せる野犬と共に、また彼等の書は畜生の床に在り。

彼等は死して、死後その名さへ毒素となり腐肉となれり。

クロオデル氏が最近歐洲戰爭の間に公にした詩篇は、他の多くの詩人の戰爭詩と同じく、決して作者の名を重からしむるに足るものではなかつた。『戰爭詩三篇(トロア・ポエム・ドウ・ゲエル)』のうち『共和國軍隊の死者に寄す(オオ・モルオ・デ・サルメ・ド・ラ・レピュブリク)』と題

したものは、地下の戰死者を呼びかへして生存者と共に勝利の光榮に與からしめよと歌つたものである。また別の一卷『戰時中の他の詩篇』に收められた諸作も、すべてみな加特力教の信仰を土臺にした敬虔な宗教詩人が、戰亂に際して神と人とに訴ふる聲であつた。

　クロオデル氏の劇は、やはりマアテルリンクなどと同じ系統に屬する神祕劇であり思想劇である。從つて純然たる象徴的なものであるが、マアテルリンクの作に比すると場面も人物もはるかに多く現實性を持つてゐる。題材から言つても、史劇があると共に、また現代社會を描いたのもある。舞臺の約束などは大膽に無視したもので、この點は詩歌の方で從來の形式を破り、散文でもなく自由詩でもなく、さりとて在來の詩形とも異なつた新體 Verset を獨創したのと同じ行き方である。

　氏はその初期の戲曲集を『樹木』(一九〇一年)と題した。地の底から吸ひ上げた水分に養はれ、高く天空に聳えて光明を仰ぐ樹枝となつて擴がり、そして根幹枝葉のすべてが一つの統一を保てる樹木を以て、自分の思想劇に擬したのである。その木は卽ち生命の木である。收むるところ『黄金頭』(一八八九年)『都城』(一八九〇年)『わかき女ヺレイヌ』(一八九二年)以下數篇、これらは皆、氏がまだ今日の盛名を成さない以前の作である。その後、佛蘭西の國立劇場のほか、獨逸に於ける氏の崇拜者によつても上演せられた『マリヤの受けし告知』(一九一三年)や『人質』(一九一四年)等の新詩劇によつて戲曲家として氏の名聲は定まるに至つた。

氏の同情が王黨に傾き、反動家（レアクショネエル）の色彩を帶びてゐる事は、此戲曲『人質』などにも現はれてゐる。
此劇は那破翁時代に材料を取つた象徴的の史劇である。祖先を尋ぬれば十字軍時代よりも古い名家であるコウフォンテイヌの伯爵ジョルヂとその從妹のシニュとは、封建時代の舊思想を代表せる最後の遺物で、はじめ那破翁が法王を虜にしてコウフォンテイヌの城に幽閉したとき、伯爵は竊に法王を救つたものである。ところがジャコビン黨員で、嘗てジョルヂュとシニュ等の兩親をぎろちいんで殺した男爵テュルリュウルは、伯爵のこの陰謀を知つてそれを脅喝の種にする。卽ちシニュを妻に呉れればよし、それでなければ法王をもジョルジュをも告發するといふのである。そこでシニュは自分の貴い家名のために、老法王のために、また宗門の信仰のために色々と苦慮した揚句、遂に自ら犧牲となつて兩親の仇である男爵の妻となつた。後段に至つてテュルリュウウル（その時は巴里の知事になつてゐる）は那破翁にそむき、首府を路易十八世に引渡さうとし、それにはジョルヂュ伯爵家の家督をシニュの腹に出來た男子に讓る事を條件とする。つまり佛蘭西に於ける新舊思想の衝突を描いたもので、ジョルヂュとシニュが廢れ行く王朝の舊信仰に執着するに對して、テュルリュウルは過去の一切を破壞せんとする舊信仰蹂躙者として描かれてゐる。勿論史實に據つたものでない事は言ふまでもないが、思想衝突の悲劇の中心人物であるシニュといふ女性が、傳統的王朝的氣分の權化として描かれてゐるところは、何だか日本の舊劇を新裝させたやうな觀がある。

以上の如き創作のほかクロオデル氏には、飜譯として希臘のヱスキロスの『アガメムノン』の佛譯があるほかに、また別に論文集一卷の著がある。『時に於ける認識』(コネサアンス・オオ・タン)『世界と自己との認識』(コネサアンス・オオ・モオンド・エ・ドウ・ソアイエム)及び『敎會の發達』(デエロプマン・ド・レグリイズ)の三篇を收め、哲學宗敎藝術に對する自己の學說を纏めたもので、題して『詩論』(アアル・ポエティク)と云ふ。思想家として氏の理論的方面はこの論集によつて知るべきであらうが、それは私などにとつて甚だしく難解なものである。

普通にクロオデル氏の作品は、マラルメ等の象徵派の系統から出たものだと謂はれてゐる。或はこれをマアテルリンク一流の神祕劇に比する人も多い。大體の傾向から言へば確かにそれに相違なからうが、クロオデル氏の戲曲には象徵派神祕派の作品に於けるよりも遙かに强い現實性がある。空靈縹渺たる神仙國の人間が動いてゐるのではなくて、物質的な現世的な場面や人物が活躍してゐるのである。先づ最初の『黃金頭』(テエト・ドル)だけは時代も場所も明示せられてゐない幻想的神話的なものであるが、『マリヤの受けし告知』にはかすかながらにも史的背景もあればまた地方色も出てゐる。『都城』(ラ・ヸル)や『交易』(レ・ジャアンジュ)の如きは極めて寫實的なもので、リアリズムの作品に神祕象徵の新意義を與へたところに氏の特色がある。殊に『交易』(レ・シャアンジュ)の如きは匆忙繁劇な米國の大都會を舞臺としてゐる。最初は米國の田舍にゐて森林山野の生活にのみ慣れてゐた者が、自分の內部衝動の已み難き要求から、遂にあの摩天樓(スカイ・スクレパア)の聳える都會生活に入つてそこに糜爛した放逸の生を送り、遂に身を亡ぼすに至る悲劇である。やはりヱル

ハアレンの詩集にある『觸手ある都會』の誘惑の魔力を描いたものである。が、此作には、かの『東邦所見』に見られると同じ驚くべく美しい自然描寫に、作者はその獨得の才藻を發輝した。氏の天分が戯曲家であるよりもより以上に抒情詩人である事が、ここにも明示されてゐる。

氏は先年領事として支那滯在中に『七日目の安息』（ル・ルポ・デュ・セプティエエム・ジュウル）を作つた。支那の或天子が、死者の惡靈によつて衆庶の惱まされるを見るに忍びず、遂に自ら夜見の國へと降りて行つてその原因をさぐり、のち天下に令して毎週必ず一日の安息を取るべき事を制定したといふ話を材料に用ゐたのである。また『東邦所見』の終の方にも、わが天照皇太神の天之窟屋の神話を、戯曲めいた散文で書いた美しい短篇がある。いま再び大使として東海に來らんとする氏は、今度は果して如何なる收穫を西歐の文壇に齎すであらうか。そのエグゾティスムに大なる期待を爲すものは、獨り佛蘭西の詩界のみではないのである。かの最も有名な『五大頌歌』の傑作も亦、氏が天津山海關に在勤の頃の作だと聞いてゐる。氏が今大使として駐劄せる丁抹の首都コオペンハアゲンよりは日本の東京の方が、更により多くの詩料を氏に供給し得ん事は、私どもが切に願ふところである。

この簡單な一篇の文を草するに當つて、わたしは自分の手許にある氏の著書數卷の外に、多くの材料を持たなかつた。從來屢佛蘭西の『メルキュウル・ドゥ・フランス』や『評論（ラ・ルヴュ）』、或は英吉利の『隔週評論（フオオトナイトリ・リュウ）』（私は特に此雜誌の千九百十四年十二月號に於けるチェタアトン・ヒル氏の紹介を一般の讀者に薦める）等で讀んだ數篇の外、私の備忘錄を除いて

他に據るべき資料が乏しかつた。一昨年自分の研究室に佛蘭西から求め得た、單行本のクロオデル評傳の小冊子がいま手許にないため、氏の生年月をさへも茲に明記する事が出來ないのは遺憾である。しかし色々の點から考へて、氏は今年五十三四歳であらうかと思ふ。現代人名辭書の類は全く氏の名をさへ掲げてゐない。ただ前揭の『隔週評論』の記載によつて確かに知られるのは、氏は最初米國、支那に領事として在勤して後、千九百〇八年歐洲に歸り、プラアグの領事、フランクフルトの總領事に歷任し、千九百十四年漢堡の總領事に轉じ、のち丁抹公使として今日に及んだ事である。また鄕里を出て巴里に遊學して居たのは、千八百八十五年から以後八年間、それはちやうど象徵派の盛期で、當時わかき政治科の學生であつたクロオデル氏はステファヌ・マラルメとも相知るに至り、ヹルレニスと共に忘れ難いランボオの詩集をも愛讀したさうだ（最初氏を加特力敎信仰に導いた者はランボオであつた、と云ふ記載を私は何か他の所で讀んだ記憶がある）。

マアテルリンクやイエイツやダヌンチオは猶健在ではあるが、文藝に於ては旣にその使命を果してしまつた過去の人である。クロオデル氏が歐洲の文壇に名を成したのは、最近まだ十數年のことだ。從つて氏には更に大いなる未來があらねばならぬ。單に外交官としてではなく、藝術家としていま佛蘭西の『智的新人（ジュネス・アンテレクテュエル）』の第一人者たる氏は、日本に於て果して何を見出すであらうか。

（絶筆）

人間讃美

動物園

もう頭の禿げた、よい歳をしやがつてと、またしても人さまから笑はれる事であらうが、わたくしは子供の手を引いて動物園へ行くことが好きだ。實は子供よりも此おやぢの方が動物に見とれてゐるのである。孤高狷介の高士を想はせるやうな淨らかな白鷺や、惡口屋のやうに嘴ばかり無闇に大きく發達したペリカンのやうな鳥類も面白いが、殊に猛獸が好い。獅子のたてがみ、豹の斑點の美しさは言ふまでもないとして、あの不恰好な顏を左右に振り、大きな爪をがさ〳〵いはしてゐる羆なぞも可愛いものである。ぢつと見入つてゐると、昔ピサネルロや、近代のエドキン・ランドシア、ロオザ・ボノヨルのやうな畫家が、一生特に好んで動物を描き、日本でも鷄をかいた若沖、猿ばかりかいてゐた狙仙のやうな畫家の心持なぞもよく解ると思ふ。われも亦ブレイクと共に猛虎を讃美し、バイロンと共に『獅子のごとく我は獨りだ』と歌つて見たくもなる。

人間讃美と題して置きながら、それでは動物讃美ではないかと咎める人もあらう。私は言ふ、文章

の表題といふものは人の顔のやうなものだ。そのものの全體を現はしてゐるにきまつたものではない。論文と稱するぎごちなきものを書いて『何とか何とかとの關係を論じて何とかに及ぶ』なぞと題してゐる人達は、美しい顏にわざ〳〵臍やら肛門までも陳列して置かないと氣の濟まぬ人であらう。筆がすべつて履本題を離れるダイグレッションの妙味は、近世文學に於て『エッセイ』の始祖だと見られてゐるモンテェニュの名作以來、此種の作品には特有の旨味である。但しわたしのはまづいのだから、書き續けて居るうち、どこへ飛んで行くのか自分にもわからない。但し陳腐平凡語と氣まぐれ論なぞは斷じて書かない。

百獸の王、獅子が居る。あれは獅子だ。たしかに獅子ではあるが、鐵柵で嚴重に圍まれた檻のなかにゐる。

しかしまた、よく考へ直して見るとあれは獅子ではない。獅子性を失つてただ獅子の形をしてゐる或他の動物だ。あれを獅子だと思つて觀るのは、美はしい豊かな人間性を失つて了つた今日の人間を、眞の人間であると思つてゐるのと同じ誤だ。皮相を見てゐるからだ。

大抵の動物園の獅子は、自分ばかりでなく父祖の代から此檻のなかに生れて檻のなかに育てられた。獅子の獅子らしさを失ひ、純眞な獅子性を忘れてゐるのも無理はない。彼等は先づ第一に自由を失つた。その代り山野に餌をあさつて飢餓と戰はなくても濟むやうになつた。尾を振つて飼主の鼻息

を窺つてさへ居れば、番人の手から食物が貰へる事を知つてゐる。本當の獅子が夢にだも知らない色色の利巧な事を澤山に心得てゐる。熱國の夜、月に向つて巖頭に嘯くの自由は無い代りに、牛肉だの牛乳だのの美味が與へられる。冬になると暖房の設備までしてあるから、あれが文化生活とか云ふのであらう。既う自分が獅子である事をさへ忘れて了つて、滅多にそれを思出さうともしない。なあに獅子の生活とは元來こんなものだ位に、今では思つてゐるやうに見える。

今の世の人間は幾代もまへ父祖の代からこの『文明』といふ檻の中にゐる。そして人間性を有つ人間である事を忘れさうになつた。第一に金錢といふ便利なやうで不都合千萬な道具をこしらへ、また色々の規則や道徳を考案した。その結果今日では餘り住心地のよくない窮屈な檻が出來て了つたのだ。しかし又その代りには、原始時代の人間が夢想だも及ばない遙かに上等な衣食住を得た。汽車があつたり、電氣があつたり、製造機械があつたりする。十九世紀以來、ことにそれが盛んだ。今日では、金錢を離れ規則や因襲の檻を外にして、率直に自然の儘に自己といふものを省察することさへ出來なくなつた人も多い。たとへば私が嚢に新道徳としての『近代の戀愛觀』を語つたとき、多くの人人は之にさへも反對した。言ふまでもなく戀愛は、純眞なる人間味と人間性とが最もゆたかに最も美しく、また最も力づよく咲き出でたところに見られる現象だ。之を目して人間味と人間性の至上至高至純の發露なりと稱するに何の不都合があるか。しかも多くの反對者の言を聽くと、それはみな財産

や規則や因襲にこびり附いての考へ方である。甚だしきに至つては封建時代の家族制といふ、まるで動物園長が拵へた『檻』の鐵柵みたやうな物を是認して、婦人の自由を奪はうとする迷妄の論議に他ならなかつた。本當の雌雄淘汰によつて、卽ち選擇の自由を基礎として出來た結合(ユニオン)ではなく、愛しもせず惚れても居ない兩性が一つの檻の中で生殖作用を營み、京都の動物園のライオンのやうに子孫を繁殖させる事を、正しい人間道なりと考へる者も多かつた。わたくしは彼等の攻擊論を聽かされるとき、またしても動物園の畜生かなあと思つてゐた。動物園にはよく鐵柵の外に札が掛かつてゐて、學名のほかに動物學で使ふ雌雄の符號をつけ、各の產地生年月などが書かれてゐる。試に思へ、戀愛なき結婚によつて『家』といふ檻のなかに幽閉された所謂『家族』の戶籍謄本を取つて、あの掛札と比較せよ。學名『ホモ・サピエンス』(人間)、男、產地日本京都。女、產地日本何々、生年月云々と列べたとき、そこに檻の中の動物とどれだけの差別ありと自惚れるのか。人間性の美と自由とが奪はれたとき、淺ましや吾等は此世ながらの畜生道にまで墮するのである。省みてなほ赧然たらざる者ありと言ふならば、わたくしは彼等を呼んで人非人なりと言ふの非禮を敢へてするであらう。

京都の動物園では夕涼みを兼ねて夏には夜間開場をする。電燈の光まばゆい所で夜間までも見せ物になるのだから、檻のなかの動物には過勞ではないかと氣遣はれる。自由を奪はれ、このいき苦しい窮屈な生活を保持せんがために、强制勞働と繁劇な生活とによつて過度の精力消耗を餘儀なくされ

つつある現代の人々が、たとひ程度の差こそあれ、すべてみな神經衰弱風の病的傾向を帶ぶるに至つた事も、現代の『檻の生活』の强制過勞がその唯一最大の原因であると同じだ。

しかし動物園の獅子にでも、その腹の奥の奥の方には、むかし山野を放浪してゐた頃の純眞な獅子性は深くも潛む、ふと生血の一滴をでも味はつた時とか、或はまたあの固苦しい檻の中で夜半の夢まどかならぬ折など、思ひがけなく猛獸の野性は突如として身内に甦つて身を焦がすであらう。天外萬里の雲漠々たる阿弗利加の曠野――自分の、或は幾代か前の父祖の故郷を夢みては、はかない想望思慕の情をも禁じ得ないことであらう。ちやうど今日の都會人が田園の土の香をなつかしみ、虐げられたる弱者が思ひ出したやうに堪りかねて自由を叫ぶと同じく、或は僞善の道德の檻の中でいつもは取澄ましてゐる人たちの胸の奥に、突如として込み上げて來る『不良性』の抑へんとして抑へ難きが如くに、それはみな魂の故鄕に對する切なる望鄕の苦悶である。

京都岡崎の私の家から動物園まではわづか二三丁の距離だ。人の寢靜まつた深更などに獨り書齋で仕事をしてゐると、しばしばかの獅子の互吼を聽く。萬籟寂として音なきとき、大地の闇をゆるがすあの力强い聲は、讀んでゐる書物などよりも更に幾倍かの强さと深さとを以て私の胸に迫る。しかし思へばあの聲は、むかし山野に傲嘯して百獸を慴伏してゐた頃の獸王の聲ではない、幾年かまた幾代か鐵檻のうちに閉ぢ込められた幽囚の身が、自由にあこがれ自然境を懷かしむ鄕愁の悲調とこそ聞く

べきであらう。それは忘れんとして忘れがたき野性の叫び聲、ルソオが『自然に歸れ』と叫んでよりこのかた、人々をして人間性の純眞に目ざめしめた、多くの近代思想家の雄たけびを想はせる。

強く人間性にめざめ自我を擴大した人々にとつて、古い檻はあまりに小さく餘りに窮屈になつた。天に跼まり地に蹐して生きんよりは、寧ろ死をこそ選べと思ふが當然だらう。猛然たる獅子吼と共に、めりめりといふ音を立てて古びた檻は今や破られようとする。

あの猛獅の咆吼のためには隣の檻に入れてある虎までが神經衰弱になる、といふ話を聞いた。誰も彼も多くは皆おなじやうな檻の中の生活をしてゐる人間でありながら、同じく檻のなかにゐる思想家の聲に怯える如くに、とても虎とまでも行かない狸や猿や豚のやうなのが、あの獅子吼を聞いては色色に氣を惱ましてゐる。取締だ、制裁だ、危險だ、過激法案だと騷ぎ立てて、もうだいぶ神經衰弱になつたのもあるらしい。お氣の毒である。

獅子のやうに大きくて強いものが虐げられるのは、狸や猿や豚のやうなのが虐げられてゐるのよりも更に痛ましく更に悲壯だ。狸や豚なぞは幽閉されてゐても獅子ほどに苦しまないのであらう。否な苦しまないどころか、番人に尾を振つて芋のへたをでも貰つてる間に、自分が檻の中に在る事をさへ忘れてゐるのはお芽出たい。今日一簞の食、一握の黄金のために、いつやら既う自分がたふとき人間性の所有者である事をも忘れ果てた人間のごとく憐れだ。

いかに私の戀愛論を攻擊するやうな程度の人でも、世界の人類が今お互にみな苦しい檻の中の生活をしてゐる事實を否定する事は出來まい。その性的生活經濟生活道德生活に於て、吾等は極めて不完全に造られたる檻の中に五十年の生を貪るのだ。然らば動物園長は誰だ、吾等を投じて此檻の中に幽閉した動物園長は誰だ、それは果して何者なりやと問ふ時、吾等は更に不思議な現象に思ひ當る。この問に對して、そは强者の暴力の支配なりと或人たちは言下に答へるであらう。しからば强者とは誰だ。强者も亦人間ではないのか。强者にのみは超自然力があつたとは信じられまい。又その强者の前に嘗て、死を賭して戰はんよりは寧ろ七重の膝を八重に折つても、好んで自ら屈從した利巧者は誰であつたか。換言すれば、屈從する方が生活に利あり便ありと考へた者は、果して人間ではなかつたのか。

詩人バイロン卿は劇詩『ケイン』に於て、基督教の神エホバを以て暴力の支配者なりと痛罵した。美しき木の實をささげたケインの祭壇を喜び給はず、弱き羊を殺した殘虐な血みどろの生贄を嘉納したまへるエホバの神を、ルウシフアと共に彼は痛烈に罵倒した。わたくしは玆で宗敎論などを始める積りは毛頭ないが、普通にエホバの神は人類の創造者であると共に、めぐみと愛との全智全能の神であると考へられてゐる。それは何方にした所が、要するに人間がその理想我の絕對性、永遠無窮性を一つの人格に歸（アトリビュウト）したものが神なのである。神樣も惡魔も、それは共に人間が考へて造つたもので

ある。神によつて神の御姿に人間が造られたのではなく、實は人間の姿に人間が神といふものを藝術的に創造し創作したのである。もし人間がなければ、神もなく惡魔もないのだ。

そこで暴力が神であるにせよ、ないにせよ、とにかく今日の法則も道德も因襲も、すべて人間の人間味人間性を束縛しつつある例の動物園式の檻は、結局それは決して人間以外のものが造つたのではなく、人間みづからが造つて今では人間みづからが窮屈な思をして惱んでゐるのである。檻は人間を苦しめてはゐるが、それはまた人間みづからの已みがたき內心の要求から生れたものに他ならない。自分が求め自分が造つたもので自分自身が苦しむ。そこに人間生活の深刻なる矛盾があり、驚嘆すべき不思議がある。

或西人の書にかういふ意味の語があつた。結婚生活は檻のやうなものだ。この檻の外に居るものは中に這入らうとするし、內に居る者は檻の外に出ようとすると。しかしそれは單に結婚ばかりではない、すべての制度や道德や法則に就いても同じ事が言はれ得る。少しも檻らしい檻を有たない原始野蠻の狀態に、人は決して長く滿足し得るものではなく、色々に思を凝らし力を盡くしてまでも、わざわざ『文明』の檻を造り、やがてまた此檻のために苦しめられては、その埒外に飛び出さうと焦るのだ。

人間は檻なくしては生活し得ない不思議な動物だ。檻が無ければ自分で無理にでもそれを造らうと

する。かの山野の自然境に放浪して永久に林中の洞穴(デン)だけで滿足してゐる獅子を、人間といふ外物が無理やりに拉し來つて動物園の鐵柵に投じ、その自由を奪つたのとは根本的に本質的にその趣を異にしてゐる事を思はねばならぬ。而も自分の要求で自分が拵へ上げた檻のために、いま人類のすべては苦しんでゐる。どうかして此檻の外に出たいと焦る。

　人間はいつも、自分みづからの切なる要求によつて得た物のために遂には苦しむのである。財産が欲しいからといつて夜を日についで焦り、結局はまた得た財産によつて苦しめられる、ああ無一物の昔の方が氣樂であつたと喞つ。それ位なら最初から私有財産など持たなければいいのだ。戀ひこがれた女を、やつとのことで自分の物にする。すると今度は、其女のために苦勞の種は十倍し百倍する。人間は獅子などよりも遙かに厄介な動物に出來てゐる。

　外國旅行をするとつくづく荷物がいやになる。税關の檢査は言ふまでもない、汽車汽船の上り降りから赤帽への注意まで、堪へがたき煩はしさだ。もうスウトケイスの一二個ぐらゐは棄てて了はうかとも思ふ。而もそれはもともと旅行の必要のために或は享樂のために、自分が自分で家から持ち出したり、途中で買込んだりした品物ばかりである。一層のこと皆海中へでも投り込んで了へば、身輕になつてこれよりも氣樂な事はないのだが、矢張りぶつくさ言ひながらも結局また長の旅路の終まで此荷物を携帶に及ぶ。わたくしは多くの制度や道徳や因襲を以て、人生五十年の旅路の可なり厄介な手

荷物だと言はう。それは人生の行路に於ける必要品でありまた便利重寶品であるからだ。唯かの徒らに煩瑣の法則にのみなづみ、無用の財を積んでは資本主義の害毒を大いならしめ、形式道徳に囚はれて遂に身動きもならぬ人々を見るとき、あれは矢鱈に重い大革鞄を持ち廻はれる旅行者と同じく、あまり賢明な遣り方ではあるまいかとも思ふのである。

しかし私の譬喩は窮極に於て當つては居ない。動物園の檻、旅行者の手荷物、少しは氣が利いた積りで書いては見たが、みな駄目だ。肝腎の一點に於て狙ひが外れてゐる。

動物のは、自己内心の要求で自分が造つた檻ではないのだから、彼自らはそれを建て直すことを知らない。旅行革鞄は途中で不便を感じたらば、直ちに新しいのと買ひ替へれば濟む。何を苦しんで五十年の長旅の終、墓穴に葬られる時まで、同じ古革鞄を後生大事と持ちまはる必要があらうぞ、理由があらうぞ。幾十年幾百年、否な幾千年を經て、今すでに半ば朽ちなんとせる古い古い檻の中に、何者の酔興漢ぞ、苦しい〳〵と呻きながらも、なほ祖先傳來を有難がつてゐるのは。擴大せられたる自我は今既に、もつと大きい、もつと寛いだ檻をこそ要求してゐるではないか。舊制度の破壞と新制度の建設、紙屑道徳の破棄と新道徳の樹立、それは今日に於て洵に避け難い痛切なる要求となつた。そこに改造の眞の意義がある。刻々休むことなき大生命の活動變轉に伴うて、われらの生活を擴充すべく、また深化すべく美化すべく――換言すれば、人間性の大いなる自由展開と飛躍とのために、檻と

革鞄との改造は已みがたき人心の要求として起るのだ。そこに變革あり更新あつて、人類の生活が進轉しつつある事實を見よと私は言ふ。

わたしは嘗に新しき性的道德の提唱のために、拙き『近代の戀愛觀』を公にした。之を目して流行思想なりと言つた者がある。笑ふべきかな。戀愛が流行などしてたまるものか。お友達が戀愛をなすつたから、私も一寸眞似してよと言ふ女學生が何處かに在るだらうか。若し戀愛を流行なりと言ふならば、人類創生以來の流行だ。日本で言ふならば神代からの大流行である。たとひ流行にしても、五六千年はおろか、二萬年三萬年、否な未來永劫の流行ならば、斷じて常識者流の容喙を許さゞる偉大なる流行だ。人間性の眞實に深くも根ざしたる驚嘆すべき讃美すべき大流行であることを知らないのか。封建時代の家族制が造り上げた古い檻あるがために、性的生活に於ける今人の惱みは極度に烈しくまた痛ましい。生殖を單なる義務行爲か職業のやうにして行つてゐる醜狀をさへ、いま眼前に歷歷として見るではないか。かくの如き時、一代の人心には期せずして檻と革鞄との改造の要求は起る。自由解放を呼ぶの聲は頻りだ。之を目して半襟や髮飾の流行と同一視する者の如き、そも〳〵思想問題に喙を容るるの資格なき淺慮短見の迷妄漢なりと知れ。わたくしの戀愛至上說は、拙いながらにも嚴肅なる新道德の一暗示として提出せられたのであつた。

かう書くと何だかあのいやな自家吹聽に見えさうだから、此邊で筆を改めて出直さう。

人間性の美と自由とを奪ふさま〲の檻を自ら造つて、みづから苦しみ自ら悶へてゐる人間生活そのものぐらゐ、多くの矛盾に滿ちたものはない。しかしこの矛盾あればこそ、この苦悶があればこそ、人生には生き甲斐があり『生きんとするの意志（ウキレ・ツム・レエベン）』も亦いよ〱强められるのだ。善と惡と、眞と僞と、理想と現實との境に身を置きながら、永劫の苦しみを繰返しつつも、そこには宇宙の生命現象のうち最も派手やかに最も變化多き人生の萬花鏡が展開せられる。瞬時といへども休みなく凝滯することなき流動變化の生命の力を内に藏し、さながら多くの岩や石にせかれつつも流れて止まない谷川の水が、時には碧潭をたたへ激湍をつくり飛沫を散らして躍進するが如くに、人間は地上に生く。その生活の種々相は、山を轟かして走る激流の眺めよりも尚美しく、更に壯烈にしてまた複雜多彩である事は言ふまでもない。

と、こんな風に私は如何にも達觀したやうに言つて了ひたいのだが、そんな概括論へ飛んで行く前に、もつと實際的に先づ手近な自分たちの生活から考へて見なければならない。

人間としての物質的欲望を滿たさんがために、原始人は先づ道具といふ物を造つた。これは決して他の動物のしない事で、人間の顯著な特色の一つだと學者は言つてゐる。ところが、この特色なるも

のが近世に於てはひどく增長して遂に產業革命を促し、機械文明資本主義萬能の時代をさへ現出した。中世の名工が半世の心血を注いで造り上げた人間味ゆたかな作品よりも、蒸氣か電氣でがら〳〵と車を廻はして一分間に幾百となく幾千となく產出される殺風景な製品の方が、遙かに好都合な時代が來た。人間がろくに有りもしない智惠を絞り出しては色々の機械を發明し、之を使ふやうになつた。さうだ、人間がまだ機械を使つてゐる間はよかつたのだが、今度は更に恐るべき時期が來た。卽ち人間があべこべに機械のために使役せられ、之によつて苦しめられ虐げられるに至つた。人間性の美と自由とを奪ふ資本主義の害惡も、實は前世紀に於て機械文明の勃興と共に起つたものだ。つまり機械が人間を虐げ始めたのである。

その結果は面白い。單に製造機械や交通機關の類ばかりでなく、世の中の一切萬事が、今では能率だの速力だの馬力だのでのみ計られる機械になつて了つた。人間の世界はオオガニズムではなく、寧ろメカニズムでのみ動くと見るが如き奇觀をさへ呈するに至つた。

人間性の純眞を傷つけんとする多くの紙屑道德や、全く機械的にのみ働かうとする形式や法律や規則によつて、七重八重に縛り上げられた人間は、更に此機械文明の力に强壓せられて、みづからの貴き人間性をさへ忘れはじめる。甘んじて機械に頤使せられ得んがためには、人間が人間的(ヒユウマン)であつては駄目だ。先づ人間そのものが機械の化物になる必要をさへ生じた。朝は七時ごろから出勤して午後は

何時とかまで、これが運轉時間だ。正午になると辨當といふ油をさす。食料品が高いので餘りうまい油もさせず、さりとて發動機の油が切れては運轉が出來ないから、誰もが皆苦しい生活難を叫ぶ。少しく運轉が過ぎると過勞のために馬力は切れて、機械の化けものは忽ち病魔に襲はれて破損する。何でも先づエネルギイの強いもの、換言すれば運轉する馬力の強い人間が、勝を制するといつたやうな馬鹿々々しい結果になる。必ずしも天才なぞを要しない、能率が上り馬力が強く、その上また圓轉滑脱に廻轉する機械でありさへすれば結構なのだ。會社や役所の馘首沙汰にも、老朽物は別として先づ第一に人間性の豐かな者が、眞先に淘汰の憂目を見る。彼等は個性を重んじ自由をたふとび、また動もすれば『檻』を破らうとする反逆者である事が多いからだ。圓轉自在の運轉機械たるべく、餘りに多く人間的である事が禍をなすのだ。

人間でありながら、生きた計算機械やタイプライタアのやうなのがある。權利義務を論じて人間性を顧みない法律機械や、學生でありながら少しも本當の學問に愛着を持たない點取機械、顯微鏡と數字とでアルバイトとかを製造する研究機械、葬式の道具としての外は餘り用の無くなつた宗教機械(但し耶蘇の方は婚禮の時にも運轉する)、力なげな聲で蓄音機のやうに忠君愛國を說ける教育機械、そのほか種類は千差萬別だ。以上は主として男子であるが、婦人はと見れば、先づ第一に賣淫機械——即ち人間性の至上至高の發露である愛(ラブ)なくして性交を行ふもの、——また子供製造機械、哺乳

機、はては料理の仕事までも兼務する極めて重寶なシンガア・ミシンなど……、この方は男子に比して種類も少く、馬力も亦遙かに弱い。從つて虐げられることも更に甚だしい。

機械文明は、最初人間が自分の欲求のために造つた機械によつて今度はあべこべに征服せられた揚句、みづからも亦その美しき豐かな人間性を忘却して機械にまで墮落した時の現象である。ところが人は決してさうは考へて居ない。これを以て人類の偉大なる進歩とのみ心得て、澄ましてゐるどころか得意揚々たる有樣である。身は現代生活の苦患にあへぎながらも、その病源が人間性の忘却にあり放棄にある事を少しも氣附かずに居る。人間性を輕んじて却つて法則や形式や機械をのみ尊重し讃美しつつあるのが、今の世の實際ではないか。

下等な動物になると、蝿取草のやうな植物との區別が少くなり、人間でも野蠻人になると、猿との差別は甚だ不明瞭だ。文明人と稱する者が、その人間性を稀薄ならしめて機械の化け物となることは、進化かも知れないがまた退化かも知れない。キプリングの作には機關車を人間と同じやうに見て歌つたのがあるが、精巧な機械を見てゐると、確かに人間以上の感がある。自由とか個性とか情熱とか感激とか憧憬とか創造性とか、自發性とか享樂慾とか、すべて斯ういふものを全く論外に置いて、ただ實利實用一點ばりで考へるならば、人間は機械と差別なきのみか、その能率や速度に於ては機械に及ばざること甚だ遠き一種の化物たるに過ぎない。如何に速力の鈍い機關車でも、ヘルメスや韋駄

天のやうな神様よりも遙かに高速度を出してゐるではないか。工場主や資本家などが、立派な人間樣である勞働者よりも一臺の機械の方を遙かに大切にして居るのは、實利實用のほか眼中一物なき彼等としては寧ろ當然の事かも知れない。

法則と人間

世に一定不變の法則といふものはあり得ない、法則はすべて便宜のために存在する、といふ事は必ずしもジェムズ等のプラグマティズムの哲學を俟たずして明らかだ。遠い昔の希臘の哲人も亦萬有流轉（パンタ・レイ）を說いた。

根本は生命の飛躍である。斷えざる流動變化をつづけてゐる吾等の人間の生命が、時に應じ所に處して法則を立てて行く。それは人生のために、人間その者のために飛躍に便するところの都合よき法則であらねばならぬ。法則そのものが時間と空間との關係に於て變轉すべきであつて、時空を超絶したる絶對性の法則といふが如きものは存在し得ないのであらう。固定し凝滯する事を許さざる生命現象の世界に於ては、時と處とに合せざる法則は、瞬時の躊躇もなく破棄せらるべきものだ。すべての道德も形式も法律も、かくの如き根本的な生命の要求を拒むものであつてはならない。單にこの點からのみ言ふならば、すべての法則は守らるべきがために存するにあらずして、破らるべきがためにこ

そ存するのだといふパラドクスも亦成立するであらう。
ある民族の生命の表現である國語があつて後に、文法はあるのだ。文法あつて後に國語があるのではない。文法の法則は守られつつ、また同時にそれは毎日のやうに破棄せられてゐる。文獻學者がヒストオリカル・グランマアの研究によつてその破壞の跡を辿つて見ると、それは革命の連續であることが一目にして知られる。レヺリユウションあつてイヺリユウションがある。前者は、後者の或時期に於て起るべき際立つた大きな變轉期に他ならない。流るる水が巖に激した時だ。巖に激した水はまた悠久のかなたに向つて流れ行く。
中學生が外國語を學ぶ時のやうに、文法の規則にばかり屈託して居ては、言葉を一口もしやべれなくなる。最も完全なる生命の表現である言語の藝術に於て最もすぐれた創造性を有する或詩人や文學者が出れば、前代の文法の規則は忽ちにして一蹴し去られる。その法則を一定不變のものだとのみ心得て後生大事に守つてゐるのでは、自己の生命は言語によつて表現し得られなくなる。規矩準繩の煩はしさといひ、杓子定規といふのは卽ちそれだ。生命の飛躍に便せんがために設けられたる法則は、ここに到つて遂に生命の飛躍そのものを妨げんとする有害物として現はれる。よく世間の俗物なぞが、規則は運用の如何にあるなぞと利いた風の事を言ふのは正しい言葉だ。しかしかういふことを口にする者に限つて、また一方都合のよい時には矢鱈に規則ばかりを振り廻してゐるから可笑しい。し

かし元來規則といふものはそんな者であり、人間といふものが亦そんな風に出來てゐるのだから仕方がない。そこに面白味があり、變幻極まりなき人間性の發露がある。人間が人間であつて機械でない所以だ。枯死したる、生命なき概念の化物ではない所以だ。派手やかな、そして複雜紛糾極まりなき人生の萬花鏡は、この大いなる矛盾を土臺として展開する。

機械的と私が言ふのは、何も蒸氣や電氣の機械に人間がこき使はれてゐる狀態をのみ指すのではない。人間性そのものを傷つけ虐げんとする凡ての現象を意味してゐるのである。

むかしは美德として賞揚された仇討が今では立派な殺人の罪惡であり、こなひだまで讃稱せられた富國强兵とかいふ事がやがては一種の罪惡と見られる日も遠くはあるまい。時の變遷が法則や道德の變化を致す位は誰でも知つて居ようが、たとひ時を同じうしてもまた所を異にすれば、全く反對の事が立派に行はれてゐるのは、珍らしくもない事實だ。ビュウカナンが釀造するキスキイは、遠い日本の津々浦々にまでも賣り擴められた世界の名物だ。英國政府は先年この釀造王を叙爵して、その功を表彰した。そのとき少し前に、大西洋の彼岸の米國では禁酒法を布いて、酒類の釀造者は國禁を以て問はれる事になつた。新に叙爵されたビュウカナンは、これが若し米國なら罪人として獄に投ぜらるべき人だ。

法則に不變性なきがために、いつも人の世を騷がすものは保守と進步との爭である。兩方ともに理

箱があるからだ。思潮の變遷目まぐるしき現代に於て、當然この爭の烈しかるべきは怪しむに足りない。しかしそれは、兩方ともに立派な見識ある人たちの場合だ。わが日本の現狀の如きには、眞の保守と進歩との爭は殆ど無いと言つて可い。何となれば一方にはただ古き過去にのみ泥まんとする頑冥者流と、他方にはわけ解らずに現狀を破壞せんとして焦りつつある亂暴ものと、この二つが無意味なる鬪爭の喜劇を演じつつあるに過ぎないからだ。

禁酒で思出したのだが、私はこの『禁』といふ字が何よりも嫌ひだ。酒は飮まない方が善いにはきまつてゐる。飮酒奬勵をするやうな馬鹿者は今日恐らく文明國には居ないであらう。しかし人間の常として、又特に近代人の心理には、何でも逆に行かうとする、英語ならば Perverseness と云ふ性質が甚だしく强い。禁ずれば無理にでも飮んで違らうといふ厄介な氣風だ。米國では禁酒法を實施してから、今まで酒を飮まなかつた婦人までが、こつそりと酒盃を口にする者を生じたさうだ。禁ずることが屢奬勵するの結果をさへ招く。殊にまた今日の不合理な社會組織に於て、弱者として虐げられつつある多くの無産者が、一日の勞働の苦しさを僅に一合二合の酒によつて忘れようとするのは、たとひ多年の惡癖なりとは云へ、或は亂醉に陷るの弊ありとはいへ、これは許されなければなるまい。寧ろ根本に溯ぼつて、酒によつて果敢ない慰藉を買はなければ生き苦しくて居られないやうな、今日の不合理な社會組織や因襲をこそ、根本的に革新すべきではなからうか。また殊に官憲や法律などの力を

借つて酒を『禁』じなくても、人間が進歩するに從つてその自由なる自律性によつて、飲酒の惡習の如き、次第に減少しつつあるのが實際ではないか。

發賣禁止、禁酒、禁煙、禁慾、禁斷、禁壓、いかなる場合にもこの『禁』といふ文字は、人間性の發露や欲求を、何等かの意味に於て阻止し抑壓せんとする消極的な生活態度を示すが故に、私は好まないのである。殊に多くの場合、人々の自律性による事なく、官憲や因襲や法則などの外力によつてこれを強制せんとするが故に不快なのだ。

私は電車のなかで喫煙をしようとはしない。しかしそこに『禁煙』といふ掲示板を見る事は、たしかに一種の侮辱を感ずる。私は酒を飲まない。しかし禁酒が法律によつて強制せられるとき、上戸のみでなく、下戸の私の如き者もまた言ふべからざる不快を覺えるであらう。或は飲めもしない酒が飲みたくなるかも知れないと思ふ。それは動物園風の檻の天井が低くなるのと同じだ。自分の頭さへつかへなければ痛痒を感じないわけだが、たとひ身を容るるに足るとは云へ、檻の小さい事は堪へがたき不快であり苦痛である。悠然と手足を延ばして欠伸の一つも出來ない、汽車の寢臺に起臥すると同じ生活は堪へられない。

行儀の惡い乘客の前に、しかしながら『禁煙』の札が必要であるやうに、眞の自由の何たるやを解せず、自律自制を缺ける今の民衆の前には、幾百幾千の『禁制』の札が掛けられて、人生の旅を行く

者に限りなき不快を與へてゐるのだ。（未完）

『十字街頭を往く』終

跋に代へて

關東地方未曾有の震災は、無慘にも白村君を文壇から奪ひ去つた。もつと完成したい研究や、發表したい編著や、主張したい論議をも果さずして永き眠に入つたことは、眞に遺憾の極みであるのは言ふまでもない。今その遺稿を整理するに當つて先づ、故人が存生中已に刊行の計畫を立てゝ、題號までも豫め定めておいたのだけを、とりあへず纏めたのが本書である。

附錄の『人間讃美』は『週刊朝日』に連載するために起稿したもので、未完のまゝではあるが絶筆として收錄することにした。又卷首の序文は、生前斷片的に紙ぎれの端に書き殘したのを、私が綴り合はせたもので、文意の徹底し難い所もあらうが、その責は私にある。その他題目の配列や體裁についての不備な點があつて、故人の意に悖る所ありとすれば、主として編輯の事に當つた私の疎漏として、慙謝の語を知らない。

本書の編輯刊行に關しては、故人の門弟矢野禾積、山本修二の兩氏及び福永書店主の助力に負ふ所が少くない。記して深厚なる謝意を表する。

最後に本書の刊行を機として、竹馬の友たる白村厨川辰夫君に對する私の追憶を附記することを許されたい。

噫竹馬の友、辰夫君は永眠した。私はこの夏東京滯在中、「世を忍ぶわび住居ゆゑ、他人に言はずに君だけで來てくれたまへ。鎌倉は東京に比較するとだいぶ涼しい。まあゆつくりするつもりで來たまへ。必ず待つてゐるから」といふ手紙を受取つたので、かねての約を果すために　八月二十七の朝、鎌倉の住居を訪うた。午餐を共にしてから「キャツプといふ馬車がこの田舍に殘つてゐる。珍らし物好きの君だから、ひとつ乘せてやらう」と言つて、半時ばかりドライブしたり、夕食前涼風の吹く海岸を散歩して、富士の巓を遙かに望む砂丘に腰をおろしながら、風に逆らつて烟草に火をつける競爭をしたり、夜も時のたつのを忘れていろ〳〵の閑談に耽つて、十二時頃漸く寢に就いたほど、愉快な一日を送つたが、翌日は三高一高野球戰の當日なので「もつとゆつくりして行け」と止めてくれたのを辭して、朝早く東京に引きかへしたのであつた。

辰夫君は近年一層からだを酷使した傾があり、殊に昨夏の渡鮮以來ひどく健康を害してから、またしても「僕の餘命も長くはないやうだ」と口癖の如くに言つてゐたが、この日も「加藤首相もとう〳〵だめだつたね。僕も同じ病氣だからいよ〳〵先が短さうに感じられる」とも言つた。又「僕が死んだら君等が告別式といふやうな事をやるだらうが、宗教的儀式などは絶對に避けたい」と言つたから、私も「そんなら骨は燒いて粉にして虛空へ撒き散らすんだね」と笑ひ話をした。さうして晩餐の時に夫人や私たちが、食後の菓子を食べてゐるのを見て、「僕も食ひたいが、どうも餡けのものを食ふとあとがよくないので」と羨ましさうに言つてゐたから、私も串戲に「君が死んだら鶴山――小豆を砂糖で煮かためたもので、よく京都のあけぼのといふしるこ屋へいつしよに食べに行つた――をどつさり靈前へ供へてやらう」と約束した。それが僅に中四日で事實となつたとは、眞に夢に夢見る心地がする。「都合がついた

ら、歸りにもう一度寄り給へ」と勸めてくれた聲は、今でも耳に殘つて居るのに。

回顧すれば辰夫君と私との親交は、三十年に餘つてゐる。學級や專攻學科はちがふが、大阪府立第一中學校に學んだ頃から（中頃かれは京都府立第一中學校に轉じた）三高を經て東大の文學科を卒業するまで、殆ど同じ土地で學生時代を送り、その後三年間は熊本と東京とに分れ住んだが、同じ年に三高教授の職に就いて以來、再び同じ京都の地に居を占めて今に及んだ。中學時代の辰夫君は非常な腕白者で、學校の歸り途にかばんを引張つて、無理に迂路をさせて私を泣かせもした。又當時まだ目新しい運動としての野球などをもやつて、相當の運動家であつた。かれは中學の課程の中に不得手な學科もあつて、忌憚なく言ふと成績はあまり良い方でなかつたが、三高へ入學してからは好きな學問に向つたために、よほど勉強したので成績も良くなり、且その少年時代に萠え出した文藝趣味の芽生は、なみなみならぬ努力によつて培養せられて、急遽に生長して來た。二年生の時に三高嶽水會雜誌に寄稿した「文藝の教化」といふ論文や、三年生の時の短歌の評などは、その片鱗を現はしたものであらう。かれは暇を偸んで文學書を耽讀したが、その愛讀書は專門の英文學に關するものは勿論、實人生の活寫に長じた巣林子の作品や、個性の描寫にすぐれた平安朝の物語類や、眞率の抒情詩に滿ちた萬葉集など、國文學の方面にも亙つてゐる。加之明星派の歌をも愛誦し六峰會同人として萬葉調の歌をも詠んだ。泊村といふ號で嶽水會雜誌に二十首ほど載せてゐる詠草の中で

千早振八百の神々酒をして
　　たわけせすとも民なわすらせ

信濃つゞき遠つあふみのむら山を

ゆりとゞろかし天龍走る

〔以上二首、明治三十三年作〕

比叡颪い吹きもとほり八衢の

ちまたの溝は薄氷せり（氷）

丈夫となりたる我をあきたらず

嬰兒さびて思ほすらしも（母）

夕風に飛ぶ星の尾のさ長尾の

長き思ひを君知るらんか（星）

〔以上三首、明治三十四年作〕

などは比較的佳作と思はれる。尤も當時の六峰會同人は、或人から（同誌の批評欄で）、「萬葉の氣韻を學び得ずして、徒にその短所を傚ひて自ら誇れる」擬古派と難じられたが、また「此一派の作は、萬葉の摸倣す可らざる點を學べると共に、又明に其高潔自然なる趣味の幾分をも傳へ得たり。否少くとも之を傳へんと努むるの跡、歴然たるは疑ふ可らず。殊に㴑村元々の二氏が、萬葉に向つて日に精緻の研究を積みつゝ、創作に於て近日著しき進境を見るは、深く吾人の敬重と賞讃とを値す」と褒められもした。かれは又同誌上で短歌の評をした中に

人に自分の歌を批評せらるゝは、其批評の當不當にかゝはらず自分の爲になるものなり。世に自分の歌の缺點を指摘さるれば、自分の歌を始め、其批評の當不當迄も棚に上げおき、其評者を失敬な奴なりといひて怒る人あり。

又之に反して優婉華麗、情緒纏綿、細婉なる、巧みなる、艶麗なる等、ぼんやりとしたる批評を受けて嬉しがる人もあるべし。何れも氣の毒なる人といふべし。されば中には又譯の分らぬ爲に他人の歌の批評を爲し得ぬ外に、人に怒らるゝを恐れ、他人の歌の評をなさぬもあり。人の歌の評も爲し得ずして自己の歌の良否分る筈無ければ、かかる人は到底進歩の見込なき人にして、これも誠に氣の毒なる人といふべし。凡そ吾等は他人の歌を評しもし、又他人にも評せられて自己の歌の進歩を見るものなり。然らずんば普通の人は、いつ迄も歌作に不親切なる境遇を脱するを得ず。而して百萬の駄作天下に充滿するに至る。

と言つてゐるが、他人の褒貶を意とせず、敢て自分の信ずる所を發表するといふこの態度は、かれの全生涯を通じて變らなかつた。

尤もかうして思ふ事を無遠慮に言つてのけた辰夫君は、生れつきの癇癖や、胃弱の氣むつかしさ等もてつだつて、皮肉や毒舌を連發したために、一方に痛快がられもしたが、また誤解を被つて蔭口や論難の的となつたことも尠くない。然し神經質で聞かぬ氣のかれは、周到な用意と不撓の努力とを以て、常に世評の妄を辨じ蒙を啓くことを怠らず、相手を叩きつけずにはおかなかつた。特にこの强い負けじ魂は、卽ちかれをして名を成さしめた所以であつて、不自由な隻脚の身で無事に外遊を了へたばかりでなく、歸朝後も羸弱の體を顧みずして、研究や著述に沒頭し、その間日常の瑣事にもかなり煩はされつゝ、精勵奮闘これ日も足らぬ有樣であつた。從つて健康を氣づかはれた夫人の心盡しで、家族の人たちと共に郊遊に連れ出されるか、古本屋をあさるために京の街を街を逍遙したついでに、甘い菓子や珍らしい料理を試食するか、藝術味の豐かな美術展覽會とか演藝とかを鑑賞しに出かける等の外には、別に娛樂

といふものを求めようとは爲なかつた。但しもとから禪寺のやうな閑寂な境涯に憧憬したかれは、最近に於てこの繁忙な生活を厭ふ口吻を洩したことが屢あつた。鎌倉に寓居を設けたのもこの地で靜養するのが目的であると聞いた。かれは閑菲謠曲を老人の皺延ばしだと常に皮肉つた。然し兩親が寶生流の謠曲を嗜まれ、幼時から觀能にも伴なはれたかれは、決して謠曲能樂の趣味を解しないのではなく、現にかれの藏書中にある和田萬吉氏の謠曲物語は、夫人に讀ませるために購つたものだといふ位で、たゞ學事にいそしむ身に、さういふ餘暇を勿體ないと考へたあまりの、諷刺から出たのであると信ずる。

　これなどはほんの一些事に過ぎないが、辰夫君はかういふ調子で、藥弗暝眩厥疾弗瘳といふ論法を用ゐたから、彼は一面に、質實雄渾の氣の溢れた奈良朝、情趣に生き文藝の匂に滿ちた平安朝の古に、人並ならぬあこがれを懷きつつ、「日本は嫌ひだ」と極言したのなども、强ひて感情を矯抑し個性を滅却した封建時代の、不自然褊狹な道義觀に依然として束縛さるゝ現代社會を覺醒せしめて、一日も早くその改造を實現せんがための熱心から出たと考へられる。私がこの夏の初、南座へ猿之助の春秋座興行を見に行つた時に、後の桝に居た國粹論者らしい人――俊寛などが現代語を使ふのを、時代錯誤と罵つてゐた劇通――が「白村は荻生徂徠のやうな人物だ」、と同伴者に氣焰を吐いて居たのを計らず聞いたので、鎌倉で茶話の時に告げて笑つたが、かういふ風に、內外本末の辨を誤つたといはれる夷人物茂卿を聯想されるのも、もとよりかれの覺悟した所である。

　かく一方には、傍若無人とでも言はれるほどの痛言激語を敢てする勇氣と共に、他方には、感受性の鋭い細心な氣質があらゆる方面に現はれてゐる。その讀者を引きつける達意の文章の如きも、豐富な文藻に由來するのみでなく、

常に表現法に苦心し綿密な用意の下に推敲を重ねた結果であつて、字句の末に至るまでも決して忽せにしなかつた。或東都の雑誌に投稿した文中に、すみくだといふ關西の方言を用ゐたのを、校正刷にすみつこと改めて來た時に、「これでは自分の心持がよく現はれない。すみくだといふので始めてむさくろしい、いぢけた感じがするのだが」とこぼしてゐたのなどは、やゝ過ぎたる嫌ひも無いではないが、語感に對する鋭敏な注意の一端を窺ふに足るであらう。又現代の文章に、簡易な文法を誤る者の多いことを攻撃する私に向つて、「日本の文法家なんてつまらない煩雑な事をやかましく言ふものだな」と毒づきながら、新聞社の植字工がしようをしやうと勝手に直して來て困るなどゝ始終氣にかけてゐた。

かうして日々に洗練せられて來た豊麗な才筆と、創造力に富んだ痛快な評論とによつて、思想家として世道人心を導かんとし、文學者として後進を提撕するに寧日もなかつた白村博士を失つたことは、文壇にとつて遺憾の極みであるのは言ふまでもないが、その方面では指導を被つた後進の中で衣鉢を傳ふる人たちもあらう、とあきらめられないでもない。然し莫逆の友として三十餘年の親交を續けた辰夫君に先立たれた私にとつては、永遠にあきらめられない痛恨事である。噫。

大正十二年十一月二十日、埋骨式後一箇月目に

京都神樂岡の麓にて

阪倉篤太郎

（兩角製本）

昭和四年二月二十六日印刷
昭和四年二月二十八日發行

厨川白村全集 第三卷

著者 厨川白村

發行者 山本三生
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

株式會社秀英舍印刷